

坂井南

山梨県韋崎市坂井南遺跡発掘調査報告書

1988

韋崎市教育委員会

東京エレクトロン株式会社

坂井南

山梨県韋崎市坂井南遺跡発掘調査報告書

1988

韋崎市教育委員会

東京エレクトロン株式会社

序

坂井南遺跡の第Ⅰ次調査が行われてから早いもので、足かけ6年の歳月が流れようとしています。この間、第Ⅱ次、第Ⅲ次の2回にわたり、東京エレクトロン株式会社の工場新設に伴い、埋蔵文化財の発掘調査が実施されました。

第Ⅰ・Ⅱ次調査の報告は、昭和59年の夏に『坂井南遺跡』として公表されました。その後昭和60年度に行われた発掘調査の報告は、当該年度内に報告書が刊行されず、今日に至ってしまいました。

今回の調査では、古墳時代前期と中世の遺構と遺物が発見されたが、第Ⅰ・Ⅱ次調査と同時期の古墳時代住居址とその出土遺物は、質量ともに貴重な資料と言えます。第Ⅰ・Ⅱ次調査の成果と合わせて、古墳時代前期の集落として、当時の人々の生活様式を知る上での重要な史料となり、今後の研究に役立つものと期待しております。

最後に、調査及び報告書作成に関して、御理解と御協力をいただいた、会社の方々、調査関係者、関係機関各位の皆様方に、心から深甚なる感謝を申し上げます。

昭和63年3月31日

姫崎市教育委員会

教育長 功刀幸丸

例　　言

1. 本書は山梨県韮崎市藤井町北下条字大原2283番地外に所在する坂井南遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、東京エレクトロン株式会社の工場新設及び駐車場整備の造成工事にともない行われた。
3. 遺跡の名称は、昭和57・58年度に行われた東京エレクトロン株式会社の工場新設にともない発掘調査された坂井南遺跡による。また、著名な坂井遺跡の南側に所在することから、「坂井南」を遺跡名とした。
4. 発掘調査は東京エレクトロン株式会社からの委託をうけ韮崎市教育委員会が実施した。調査組織は別に示すとおりである。
5. 本書の編集並びに執筆は、山下孝司が行った。
6. 本書作成に関わる業務は山下の総括のもと、榎本勝・堤直子・土橋きよみ・小田切玲子・金子昭悟・松田三枝・山寺保子・平野修・梶本宏・馬場一・砂長完郎・高橋佳子・雨宮実・小池和仁・平賀久二男・三井健二・斎藤きよ・今福美由紀・内藤ちまり・小林巧・箭本太・深沢真知子・藤巻郁子・石原ひろみ・三井加代子・元木由美子が行った。
7. 写真撮影は山下が行った。
8. 遺構の実測は、シン航空写真株式会社に委託した。
9. 花粉分析・材同定・重鉱物分析・種子同定等の自然科学的分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
10. 石器の石材同定は、財団法人山梨文化財研究所河西学氏にお願いした。また、編石についての原稿執筆もしていただいた。
11. 凡例
①縮尺は各挿図ごとに示した。②遺構断面図の水糸の高さは標高を表す。③平面図中破線は推定線。④炉址断面図網点は焼土を表す。⑤主軸・長軸方向は直交する柱穴線間から得た長軸と磁北との角度を示す。
12. 発掘調査、遺物等の整理及び報告書の作成にあたり、以下の方々の御指導助言をいただいた。記して謝意を表する次第である。
新津健・米田明訓（山梨県教育庁文化課）、田代孝・末木健・坂本美夫・小野正文・八巻与志夫・保坂康夫・中山誠二（山梨県埋蔵文化財センター）、平野修・櫛原功一（財団法人山梨文化財研究所）、山路恭之助・深沢裕三（須玉町教育委員会）、雨宮正樹（高根町教育委員会）
13. 発掘調査、整理によって作成された資料及び出土遺物は韮崎市教育委員会において保管している。

目 次

序

例 言

目 次

挿図目次

図版目次

第I章 発掘調査 経緯と概要	1
第1節 発掘調査に至る経緯.....	1
第2節 発掘調査の概要.....	1
調査組織.....	2
第II章 遺跡概観	3
第1節 遺跡の環境と立地.....	3
第2節 周辺の遺跡.....	4
第III章 遺構 遺物	9
第1節 古墳時代の遺構と遺物.....	9
第2節 中世以降の遺構と遺物	145
第IV章 まとめ	149
第1節 古墳時代	149
1. 古墳時代前期の土器編年	149
2. 住居址について	159
3. 坂井南遺跡出土の編石について	176
第2節 中世以降	182
おわりに	183
図 版	
附章 坂井南遺跡試料 花粉分析 材同定 重鉱物分析 粒度分布及び種子同定報告	
1 花粉分析.....	1
2 重鉱物分析・粒度分布.....	3
3 炭化材同定.....	8
4 種子同定.....	18
図 版	

挿図目次

第1図	坂井南遺跡周辺図	5	第36図	15号住居址出土遺物	41
第2図	坂井南遺跡位置図	7	第37図	16号住居址平・断面図	42
第3図	坂井南遺跡全体図	8	第38図	16号住居址出土遺物	43
第4図	1号住居址平・断面図	9	第39図	17号住居址平・断面図	45
第5図	1号住居址出土遺物	10	第40図	17号住居址出土遺物	45
第6図	2号住居址平・断面図	10	第41図	18号住居址平・断面図	46
第7図	2号住居址出土遺物	11	第42図	18号住居址出土遺物	47
第8図	3号住居址平・断面図	12	第43図	19号住居址平・断面図	48
第9図	3号住居址出土遺物	14	第44図	19号住居址出土遺物	50
第10図	4号住居址平・断面図	15	第45図	20号住居址平面図	51
第11図	4号住居址出土遺物	16	第46図	20号住居址出土遺物	52
第12図	5号住居址平・断面図	17	第47図	21号住居址平・断面図	53
第13図	5号住居址炉	16	第48図	21号住居址出土遺物	53
第14図	5号住居址出土遺物	18	第49図	22号住居址平面図	54
第15図	6号住居址平・断面図	19	第50図	22号住居址出土遺物	55
第16図	6号住居址出土遺物	20	第51図	23号住居址平・断面図	56
第17図	6号住居址出土遺物	23	第52図	23号住居址出土遺物	57
第18図	6号住居址出土遺物	24	第53図	24号住居址平・断面図	57
第19図	7号住居址平・断面図	25	第54図	25号住居址平・断面図	58
第20図	7号住居址出土遺物	27	第55図	26号住居址平・断面図	60
第21図	8号住居址平・断面図	29	第56図	26号住居址出土遺物	60
第22図	8号住居址出土遺物	30	第57図	27号住居址平・断面図	62
第23図	9号住居址平・断面図	31	第58図	27号住居址出土遺物	63
第24図	9号住居址出土遺物	31	第59図	28号住居址平・断面図	65
第25図	10号住居址平・断面図	33	第60図	28号住居址出土遺物	67
第26図	10号住居址出土遺物	35	第61図	28号住居址出土遺物	68
第27図	11号住居址平面図	36	第62図	28号住居址出土遺物	69
第28図	11号住居址出土遺物	36	第63図	28号住居址出土遺物	70
第29図	12号住居址平面図	37	第64図	28号住居址出土遺物	71
第30図	12号住居址出土遺物	37	第65図	29号住居址平・断面図	73
第31図	13号住居址平・断面図	38	第66図	29号住居址出土遺物	75
第32図	13号住居址出土遺物	39	第67図	30号住居址平・断面図	76
第33図	14号住居址平・断面図	40	第68図	30号住居址出土遺物	77
第34図	14号住居址出土遺物	40	第69図	31号住居址平・断面図	79
第35図	15号住居址平・断面図	41	第70図	31号住居址出土遺物	80

第71図	32号住居址平・断面図	81
第72図	32号住居址出土遺物	83
第73図	33号住居址平・断面図	84
第74図	33号住居址炭化材等出土状態	85
第75図	33号住居址出土遺物	86
第76図	34号住居址平・断面図	87
第77図	35号住居址平・断面図	88
第78図	35号住居址遺物出土状態	89
第79図	35号住居址出土遺物	91
第80図	35号住居址出土遺物	92
第81図	36号住居址平・断面図	93
第82図	36号住居址出土遺物	93
第83図	37号住居址平・断面図	95
第84図	37号住居址出土遺物	96
第85図	38号住居址平・断面図	97
第86図	39号住居址平・断面図	98
第87図	39号住居址出土遺物	99
第88図	40号住居址平・断面図	101
第89図	40号住居址出土遺物	101
第90図	41号住居址遺物出土状態	102
第91図	41号住居址平・断面図	103
第92図	41号住居址出土遺物	104
第93図	41号住居址出土遺物	105
第94図	42号住居址平・断面図	109
第95図	42号住居址出土遺物	109
第96図	43号住居址平・断面図	110
第97図	43号住居址出土遺物	111
第98図	44号住居址平・断面図	112
第99図	44号住居址出土遺物	113
第100図	45号住居址平・断面図	115
第101図	45号住居址出土遺物	116
第102図	46号住居址平・断面図	117
第103図	46号住居址出土遺物	118
第104図	47号住居址平・断面図	119
第105図	47号住居址出土遺物	120
第106図	48号住居址平・断面図	121
第107図	48号住居址出土遺物	121
第108図	49号住居址平面図	122
第109図	50号住居址平面図	123
第110図	50号住居址出土遺物	124
第111図	51号住居址平・断面図	125
第112図	51号住居址出土遺物	126
第113図	52号住居址平・断面図	127
第114図	53号住居址平・断面図	128
第115図	54号住居址平・断面図	129
第116図	54号住居址出土遺物	130
第117図	55号住居址平・断面図	131
第118図	55号住居址出土遺物	133
第119図	56号住居址平・断面図	135
第120図	56号住居址出土遺物	136
第121図	57号住居址平・断面図	137
第122図	57号住居址出土遺物	138
第123図	58号住居址平・断面図	140
第124図	58号住居址出土遺物	140
第125図	1号土壙平・断面図	140
第126図	2号土壙平・断面図	141
第127図	遺構出土石器	142
第128図	遺構出土石器	143
第129図	遺構出土石器	144
第130図	1号集石土壙	146
第131図	1号集石土壙出土遺物	147
第132図	2号集石土壙	148
第133図	2号集石土壙出土遺物	147
第134図	土器分類図1	152
第135図	土器分類図2	153
	坂井南遺跡土器編年試案図表(1-1)	160
	坂井南遺跡土器編年試案図表(1-2)	162
	坂井南遺跡土器編年試案図表(1-3)	164
	坂井南遺跡土器編年試案図表(1-4)	166
	坂井南遺跡土器編年試案図表(2-1)	168
	坂井南遺跡土器編年試案図表(2-2)	170
	坂井南遺跡土器編年試案図表(2-3)	172
	坂井南遺跡土器編年試案図表(2-4)	174
第136図	坂井南遺跡第I~III次調査全体図	182

図版目次

- 第1図版 坂井南遺跡全景（上空より） 遺構近景 遺構検出状況
- 第2図版 第1号住居址 第1号住居址出土遺物 第2号住居址 第2号住居址出土遺物
- 第3図版 第3号住居址 第3号住居址出土遺物
- 第4図版 第4号住居址 第4号住居址出土遺物 第5号住居址 第5号住居址出土遺物
- 第5図版 第6号住居址 第6号住居址出土遺物(1)
- 第6図版 第6号住居址出土遺物(2)
- 第7図版 第7号住居址及び出土遺物
- 第8図版 第8号住居址及び出土遺物 第12号住居址
- 第9図版 第10号住居址及び出土遺物
- 第10図版 第11号住居址及び出土遺物 第13号住居址及び出土遺物
- 第11図版 第14号住居址及び出土遺物 第15号住居址 第16号住居址及び出土遺物
- 第12図版 第17号住居址及び出土遺物 第18号住居址及び出土遺物 第19号住居址及び出土遺物
- 第13図版 第20号住居址及び出土遺物 第21号住居址 第23号住居址
- 第14図版 第22号住居址出土遺物 第26号住居址及び出土遺物
- 第15図版 第27号住居址及び出土遺物
- 第16図版 第28号住居址 石器出土状態
- 第17図版 第29号住居址及び出土遺物
- 第18図版 第31号住居址及び出土遺物 第30号住居址及び第32号住居址
- 第19図版 第33号住居址及び出土遺物 第34号住居址
- 第20図版 第35号住居址及び出土遺物(1)
- 第21図版 第35号住居址及び出土遺物(2)
- 第22図版 第37号住居址及び出土遺物 第39号住居址及び出土遺物
- 第23図版 第40号住居址及び出土遺物 第41号住居址及び出土遺物
- 第24図版 第41号住居址及び出土遺物
- 第25図版 第42号住居址 第43号住居址 第44号住居址及び出土遺物
- 第26図版 第45号住居址及び出土遺物 第47号住居址及び出土遺物
- 第27図版 第48号住居址及び出土遺物 第49号住居址 第50号住居址及び出土遺物
- 第28図版 第51号住居址及び出土遺物 第52号住居址
- 第29図版 第53号住居址 第54号住居址 第55号住居址及び遺物出土状態
- 第30図版 第55号住居址出土遺物
- 第31図版 第56号住居址及び出土遺物
- 第32図版 第57号住居址及び出土遺物 第58号住居址
- 第33図版 第1号集石土壙及び出土遺物 第2号集石土壙及び出土遺物
- 第34図版 第1号溝検出状態 第1号溝

第Ⅰ章 発掘調査 経緯と概要

第1節 発掘調査に至る経緯

昭和59年11月に東京エレクトロン株式会社から、韮崎市藤井町北下条字大原地内の約20,000m²の地域に関して、工場新設と駐車場整備のため開発申請がなされた。当該地域は、昭和57年10月から12月にかけて第1次調査が行われた坂井南遺跡の東側に隣接しており、当然埋蔵文化財の包蔵地として推定されるため、韮崎市教育委員会社会教育課、東京エレクトロン株式会社山梨事業所、二者で協議のうえ、事前に遺跡の有無及び範囲確認のための発掘調査を行うこととなり、昭和60年2月に市教育委員会が調査を行い、遺構の存在を確認し遺跡であることが明らかとなった。この調査結果をもとに、再度市教育委員会社会教育課、東京エレクトロン株式会社山梨事業所、二者で協議検討の結果、文化財保護法に基づき遺跡発掘調査を実施することとなった。

市教育委員会では、東京エレクトロン株式会社の依頼を受け、昭和60年3月から約半年間の予定で発掘調査を実施していくこととなった。発掘調査は順調に進み、予定通り完了した。遺物整理等の作業は、調査と平行して行った分もあるが、調査完了後引き続き実施していく予定であったが、公共事業に係る埋蔵文化財調査が目白押しとなり、思うように進まず調査終了から報告書作成まで約3年間を要した。

第2節 発掘調査の概要

発掘調査期間 昭和60年3月5日～8月16日

遺物整理・報告書作成期間 昭和60年4月22日～昭和63年3月31日

調査区域は排土場所の都合により3回に分割し、調査時点では便宜的にA・B・C区として発掘調査を行った。グリッドの設定は、地形等を考慮し任意に行った。略東西方向に西から東へA～Oの15文字、略南北方向に北から南へ0～22の23文字で50m四方の方眼を設定した。グリッドの区画表現は、「1-A」というふうにされる。A区は9～22-A～F、B区は9～19-G～O、C地区は0～8-G～Oの各グリッドにあたる。

調査区域は、バラスを敷いた簡易な社員駐車場となっており、発掘調査に際してはまず厚さ約45cmのバラス層を排除し、次に厚さ約20～40cmの耕作土を重機により排土し、以下の層を人力により遺構確認作業と掘り下げを行っていった。

A区の遺構調査の開始は3月8日からで、終了は4月20日であった。古墳時代前期の竪穴式住居址22軒、土壙1基、時期不明の溝状遺構が検出された。

B区の遺構調査の開始は4月25日からで、終了は6月14日であった。古墳時代前期の竪穴式

住居址14軒、A区から続く溝状遺構が検出された。

C区の遺構調査の開始は7月3日からで、終了は8月16日であった。古墳時代前期の竪穴式住居址22軒、土壙1基、中世の集石土壙2基が検出された。

なお、A・B・C区は発掘現場において便宜的につけたものであり、報告書中では使用しなかった。

調査組織

1. 調査主体 垂崎市教育委員会

2. 調査担当 山下孝司（市教委社会教育課）

調査員 榎本 勝

3. 調査参加者

岡本嘉一、小田切まさ子、小田切絹枝、志村寿子、志村冴子、乙黒きくゑ、小沢久江、小沢千代子、小沢春代、鈴木きく江、小沢みやの、岡本保枝、長島昌子、保坂愛子、五味ゆき子、猪股まさ子、猪股花代、名取克正、野口和仁、堤直子、志村よし子、小沢栄子、小沢高恵、梶本宏、馬場一、砂長完郎、三井健二、高橋佳子、小池和仁、古屋勝、平賀久二男、秋山健二、雨宮実

4. 遺物整理参加者

平井仁志、浅川英三、浅川よし子、浅川洋子、浅川久代、細田絹代、堤直子、土橋きよみ

5. 事務局 垂崎市教育委員会社会教育課

教育長 岩下俊男（前任者） 功刀幸丸、課長 雨宮高、係長 真壁静夫 雨宮勝己、主任 円道芳美 下村貞俊 秋山繁、野沢可祝

第II章 遺跡の概観

第1節 遺跡の環境と立地

坂井南遺跡は、山梨県韮崎市藤井町北下条字大原地内に所在し、七里岩台地上の南部西側の標高約448mに位置する。

韮崎市は、三角形状を呈する甲府盆地の北西の頂点部を占め、七里岩台地は楔のようにこの頂点にむかっている。「本市のはるか北方には雄大な八ヶ岳（2899m）がそびえ、その火砕流は遠く本市の中央部に及び、その西側は釜無川に削られて、いわゆる『七里岩』の断崖をなし、東側も塩川に削られて急斜面にはなっているが、七里岩ほど急ではなく、植物も密生していて『片山』と称している。このように西側が削られて細長く鋭くとがって韮の葉のようになっているその先にあるので『韮崎』の地名が生じた。一旦観音山で切れているが再び南部に船山（河床から約20m）を起こし、その先端も釜無川、塩川の両河川によって断たれているが、さらに西部山麓台地にも及び、その先端の竜岡台地ならびに登美台地の高岩（赤岩）にまで及んでいる。この台地は八ヶ岳に起因する火砕流から成っていて『韮崎火砕流』と称せられている。七里岩台地の上には小円頂丘が多く生じ、その間に低い凹地ができていて、これを茅ヶ岳山麓と同様に久保（窪）または沢と称している。釜無川は北西方にある釜無山の東部から源を発し、机付近で逆の方向をとり、濁川（今は神宮川と改名）・大武川・小武川など南アルプス東半の水を集め、水量多く、上流信州落合村神代集落、標高755m辺から韮崎市南北の塩川合流点325mまで水平距離7km余、高低差430m、1000分の15のゆるい勾配で東南に向かって流下し、発電や灌漑には重要な役割を務めている。特に上円井地内から取り入れている徳島堰の恩恵は偉大なもので、現在は国営の釜無川右岸土地改良事業として大きく取り上げられている。釜無川は谷が広いのと流れが緩やかなので、祖母石の辺からは網目状の流れ（荒れ川の特色）をして平野の川という感じを与えている。しかし、この平穏の川も一度豪雨があるとたちまち増水し、殊に支流である大武川・小武川などの上流は風化しやすい花崗岩から成り、御所山・甘利山などのもろい凝灰岩質の岩石（第三紀中新統）や、その麓にある石英閃緑岩の山やまは花崗岩と同様に崩壊しやすいので、多量の土石流となって押し出し、川の本流は漸次東方七里岩の根を洗うようになり、また、時に不慮の大水害を起こすこともしばしばである。この本流の東寄りの原因にはもう一つ、地盤の傾動運動ということもあるかもしれない。一方、塩川は金峰山から流出する本谷川と、釜瀬川が須玉町塩川地区で合流し、ここから塩川と名付けて南西の方向をとって流下し、須玉町桐ノ木で八ヶ岳山麓から来る須玉川を合わせ、この河川の水勢により方向を急に南東に変え、絵見堂の東方で岩壁に突き当たり、再び方向を変えて南流し、韮崎市に向かって流下するので古来水害も多かったようである。とにかく、この川のはんらんによって広くかつ肥沃な

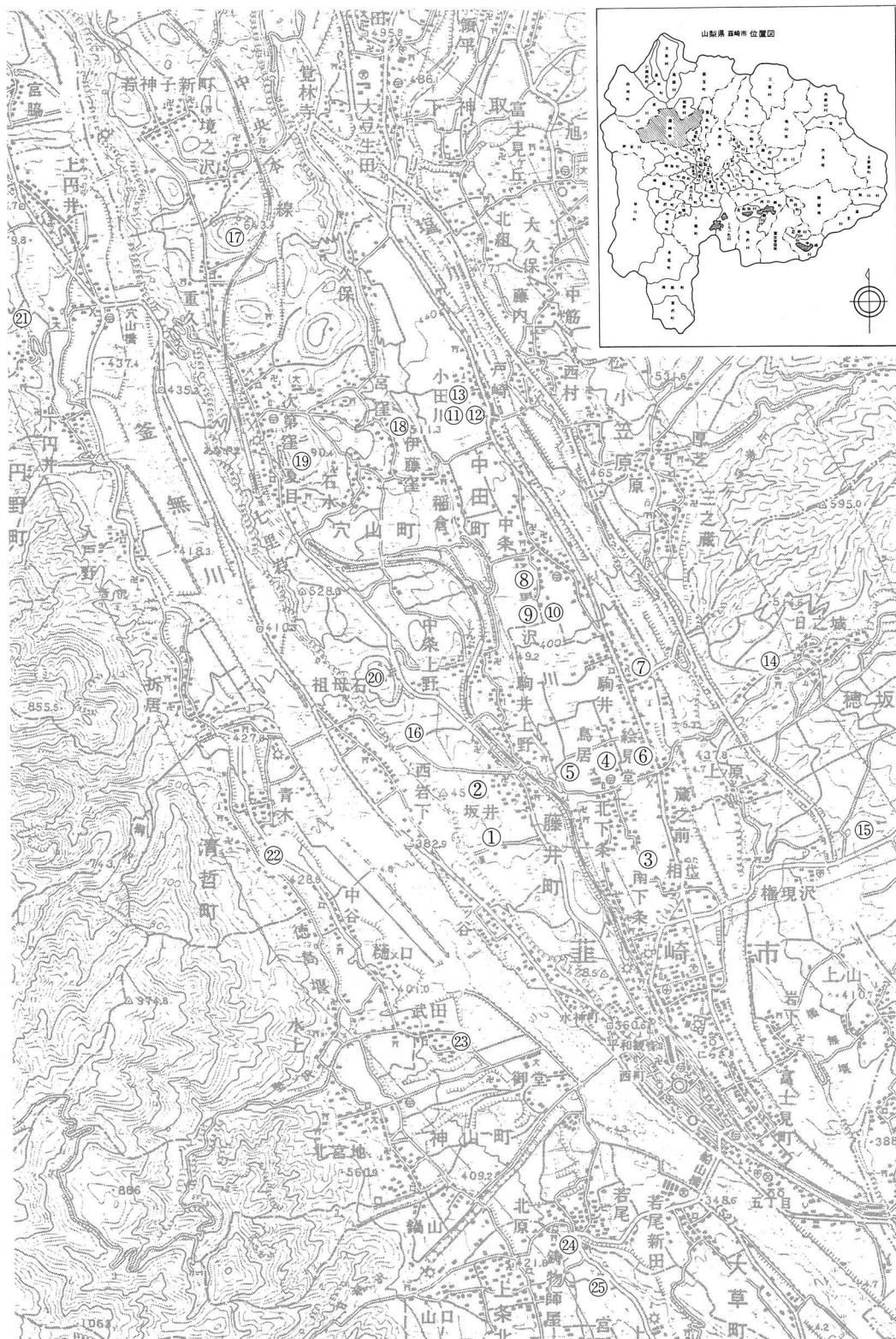
藤井平ができたのである。塩川は標高855mの塩川地区から韮崎市南方釜無川合流点標高325mまで、水平距離5.5km、高低差530mで、1000分の25という急勾配になり、発電や灌漑に利用されつつ流下している。特に水の乏しい茅ヶ岳山麓台地に対して、朝穂堰・樋無堰などによって多年にわたり用水を供給してきたことは特筆に値することである。『藤井五千石』と称せられる藤井平の米どころもこの川から取り入れた藤井堰と、支流須玉川から取り入れた亀石堰によって灌漑されているのである。」(『韮崎市誌』上巻「第一章 韮崎市の自然環境」昭和53年)

『山梨県地質誌』(山梨県地質図編纂委員会 1970山梨県発行)によれば、七里岩は、「八ヶ岳火山の山体崩壊期の韮崎火碎流の活動によって形成されたもので、国境橋より釜無川沿いに韮崎にいたる左岸では、高さ70-80m、延長30km以上におよぶ急崖をなしており、また塩川の右岸で若神子以南にも数10mの急崖をなしている。いずれも河川の浸食によるもので、二つの河川の間には韮崎火碎流による台地が形成され、この上部には数10個の小円頂丘状の流れ山地形が見られ、特に穴山付近に顕著である。また、韮崎火碎流の台地上にはローム層および浮石層が厚く分布している。」と説明されている。坂井南遺跡は、この七里岩台地上の微高地に位置する。遺跡の西側は七里岩の急崖、北側は深い沢となり坂井の集落となり、東側へは漸次傾斜し、南側は新興住宅地となり約150mで沢となる。小円頂丘とまでも言えないが、周囲よりも高く孤立丘となっている。ここは日当たりがよく、周囲は桑園と果樹園の多い田園地帯となっており、坂井の集落には湧水地があり古代には生活に適した地であったであろうことが窺える。

第2節 周辺の遺跡

本遺跡の周辺には、縄文時代から中世にかけての遺跡が数多く発見されている。

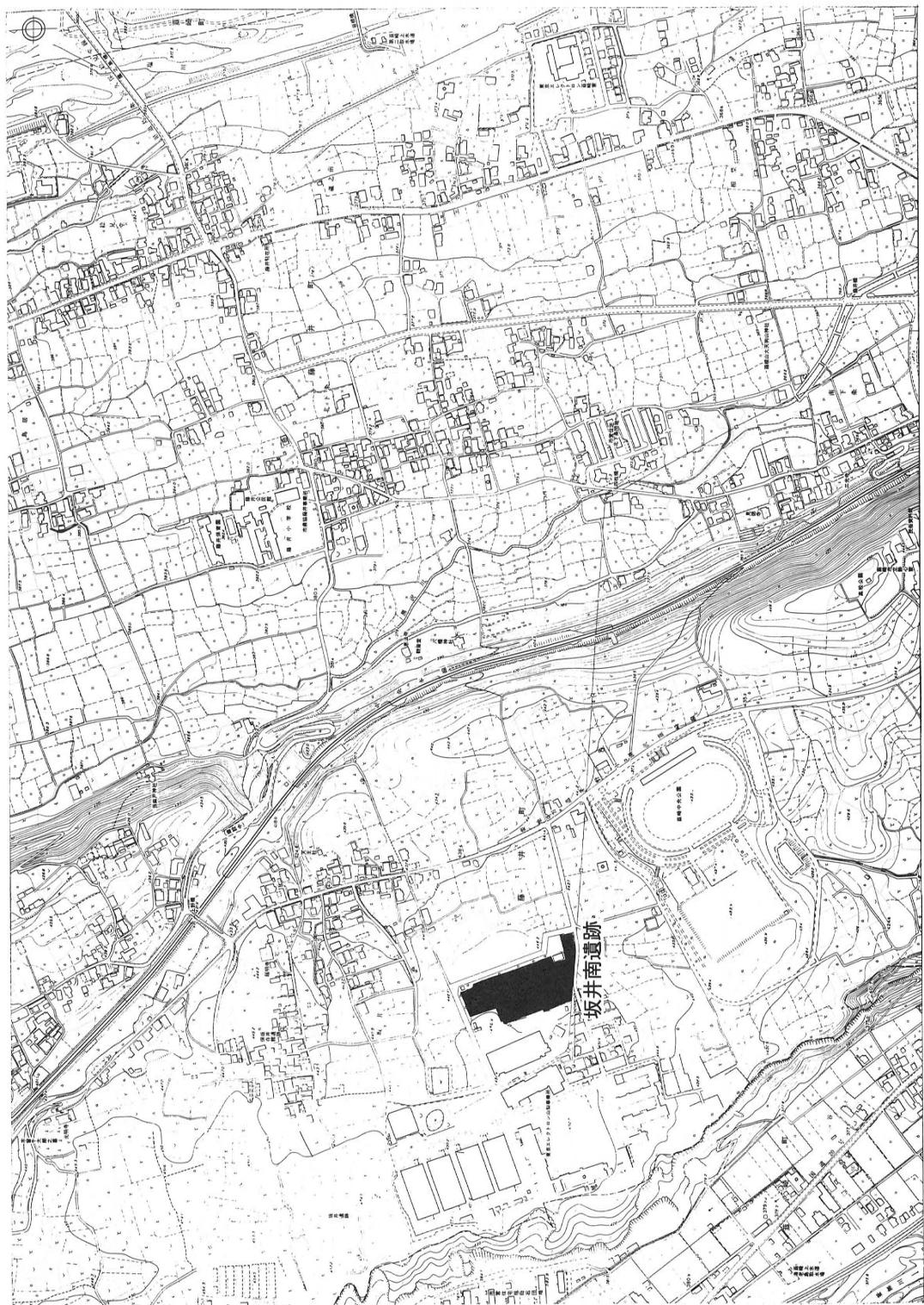
番号	遺跡名	時代区分	備考
①	坂井南	古墳前期	昭和60年度 韮崎市教育委員会第三次調査
②	坂井	縄文前期～晚期	志村滝藏「坂井」 地方書院 昭和40年
③	北下条	弥生～平安	昭和57年度 韮崎市教育委員会調査
④	堂の前	縄文・平安	昭和61年度 韮崎市教育委員会調査
⑤	後田	縄文・弥生	
⑥	宮の前	縄文・平安	
⑦	駒井	奈良・平安	昭和60年度 山梨県埋蔵文化財センター調査



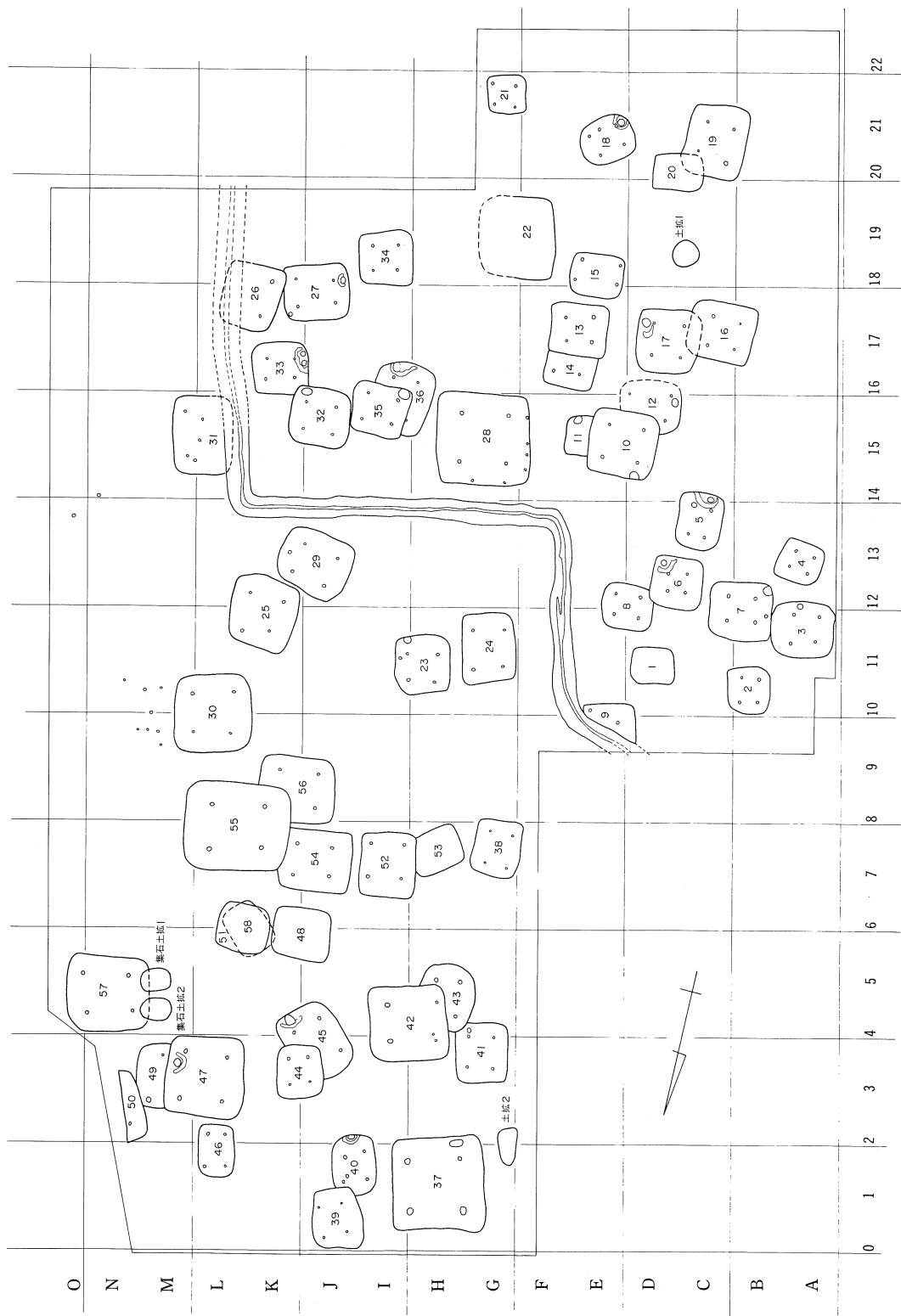
第1図 坂井南遺跡周辺図 (1 : 50000)

番号	遺跡名	時代区分	備考
⑧	中田小学校	縄文・弥生・奈良・平安	昭和59年度 韮崎市教育委員会調査
⑨	金 山	中世～近世	昭和60年度 韮崎市教育委員会調査
⑩	前 田	奈良・平安	昭和62年度 韮崎市教育委員会調査
⑪	中 道	縄文晩期・平安	昭和60年度 韮崎市教育委員会調査
⑫	下 木 戸	平安	昭和60年度 韮崎市教育委員会調査
⑬	中 本 田	縄 文	昭和61年度 韮崎市教育委員会調査
⑭	宮 ノ 下	縄 文	
⑮	女 夫 石	縄 文	
⑯	天 神 前	縄文前期	
⑰	重久の烽火台	中世	
⑱	堂ヶ坂の砦	中世	
⑲	能 見 城	中世	
⑳	新府城跡	中世	国指定史跡
㉑	宇波円井	縄文早期～後期	
㉒	小 山	縄 文	
㉓	武田信義館跡	中世	
㉔	金 山	縄文・弥生	
㉕	久保屋敷	縄文・弥生・古墳	昭和58年度 山梨県埋蔵文化財センター調査

第2図 坂井南遺跡位置図 (10000分の1)



第3図 坂井南遺跡全体図 (1 : 600)



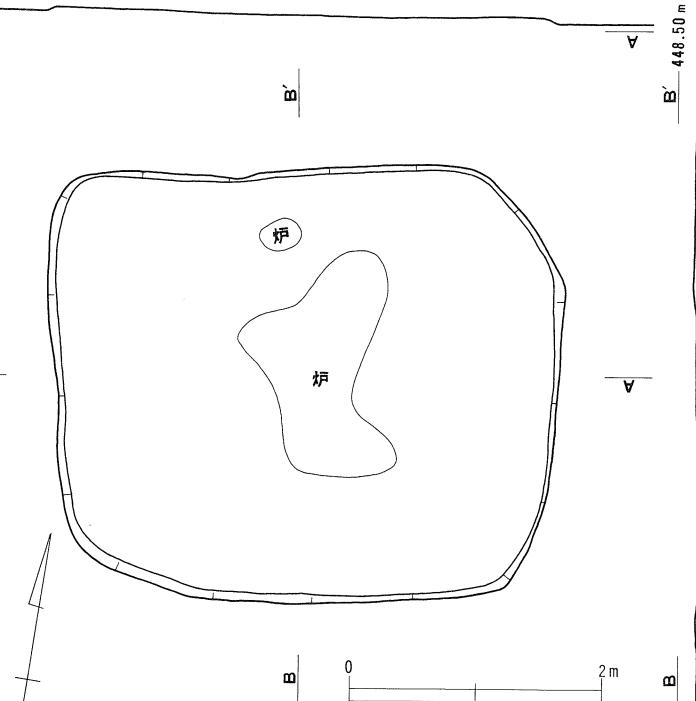
第III章 遺構 遺物

第1節 古墳時代の遺構と遺物

発掘調査の結果、古墳時代前期を主体とした竪穴式住居址が58軒検出され、他に2基の土壙が確認された。以下、住居址から遺構と遺物についてみていく。

〈1号住居址〉(第4・5図)

〔遺構〕
調査区西半部北端の
10-D・11-D域に位置
する。遺構確認作業に際
して、床面が検出された
住居址である。耕作等に
による削平が著しく、壁の
遺存状況は極めて悪く、
高い所でも6cmを測るの
みであった。規模は東西
約3.9m、南北約3.5mで、
平面形は隅円長方形を呈
する。床面は黄褐色土で
堅く、平坦である。柱穴
はない。床面中央部及び
北辺が焼けており、平面



第4図 1号住居址平・断面図 (1/60)

図では炉としたが、定かではない。長軸の方向はN-100°-W (N-10°-E)。

〔遺物〕

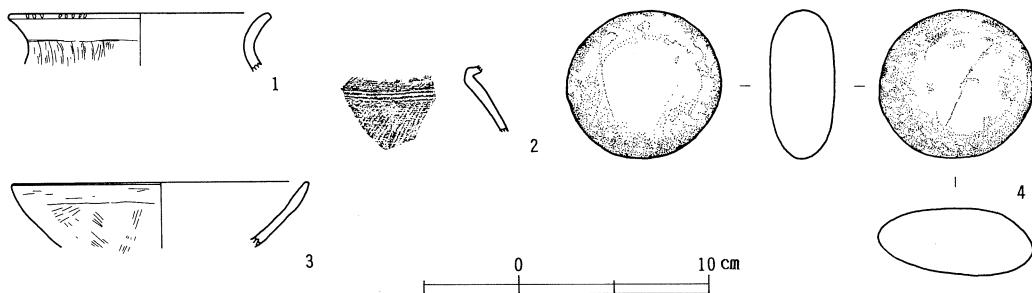
竪穴の遺存状態が悪く、埋没土中よりの遺物の出土は極僅かであった。

出土遺物一覧

(単位: cm)

番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調
		整形・特徴・その他
1	甕	甕形土器の口縁部資料／白色小粒子、雲母片等の砂粒を含む／赤褐色 頸部に細かい刷毛目痕がある。口縁部は横撫でされ、刻目が連続する。 器面は磨滅によりザラつく。
2	台付甕	S字状口縁台付甕の破片資料／白色小粒子、雲母片を含む／外面肌色、内面橙褐色 外面は横位と斜位の刷毛目、内面は指頭圧痕がかすかにみられる。 器面は磨滅によりザラつく。

番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調
		整形・特徴・その他
3	鉢	鉢形土器の口縁部資料／白色小粒子、雲母片を含む／白褐色 外面は刷毛目痕がみられる。内面は磨きがかけられている。
4	石器 磨石	直径約8.0 厚さ約3.5／石材は、中粒砂岩／ 円盤状に圓くなっている。



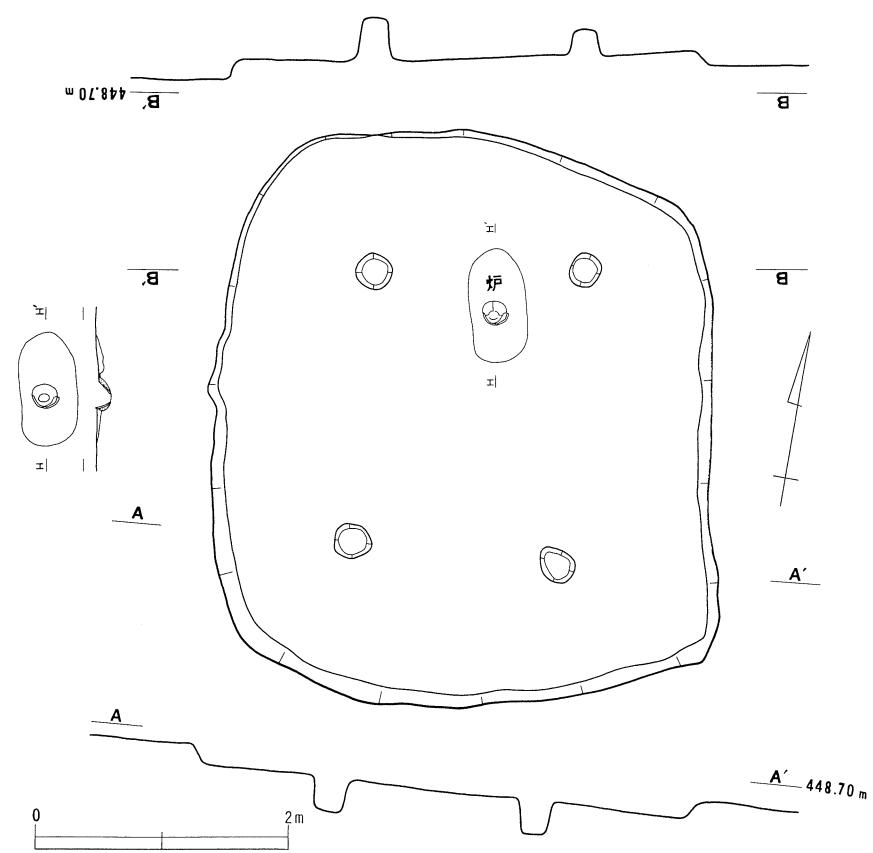
第5図 1号住居址出土遺物 (1/4)

〈2号住居址〉(第6・7図)

[遺構]

調査区西
半部北端の
10-B域に
位置する。

試掘に際し
て、検出さ
れた住居址
である。耕
作等による
削平のため
か浅い竪穴
となってい
る。壁高は
15cm前後を
測る。規模
は東西約4
m、南北約
4.5mで、平



第6図 2号住居址平・断面図 (1/60)

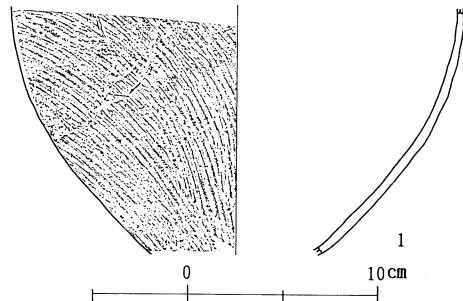
面形は隅円長方形を呈する。床面は黄褐色土で堅く、比較的平坦である。柱穴は、4本を長方形に配し、床面からの深さ30cm前後を測る。炉は、北側2本の柱穴を結ぶ線よりも内側に、土器を埋設して作ってあり、土器の周囲90×45cmの楕円形に床面のない炭化物・焼土などを混入した部分があり、その内側に土器をとり囲むように焼土がみられた。長軸方向は、N-6°-W。

〔遺物〕

形状の推定できる遺物の出土はなく、唯一埋甕
炉に使用された土器のみで、他に炭化材片がある。

甕形土器

1. 台付甕と思われるが、肩部～口縁部及び底部を欠いて炉として使用されており、詳細は不明。
胎土には砂粒を含み、色調は赤褐色を呈する。
外面には斜位の粗い刷毛目が施される。残存胴部上端は煤けている。



第7図 2号住居址出土遺物 (1/4)

〈3号住居址〉(第8・9図)

〔遺構〕

調査区西端の11-A域に位置する。黄褐色土中に暗黄褐色土の落ち込みを発見し、発掘する。規模は東西約5.8m、南北約5.2mで、平面形は隅円長方形を呈する。壁はローム層を掘り込んでおり良好な立ち上がりをみせるが、東壁の一部は7号住居址と境を接しておりあまり良好ではなかった。壁高は、西壁は駐車場下で高くなっているが、他は25cm前後を測る。床面は堅く平坦である。柱穴は略方形に配した4本主柱穴があり、深さは床面から27cm前後を測るが、南東の一つは約40cmと他の3本よりも深くなっている。他に大小3個の穴があり、南壁際のものは径60cm前後の大きなもので、床面からの深さ30cm前後を測る。炉は、床面中央から北へ片寄った所にあり、その北端は北側の2本の主柱穴の中心を結んだ線上にかかっている。直径70~80cmの不整円形に床面のない窪んだ部分で、焼土を混入する暗褐色土が厚さ8cmでレンズ状に堆積しているが、明瞭には焼土層が形成されていなかった。長軸の方向は、N-83°-E。

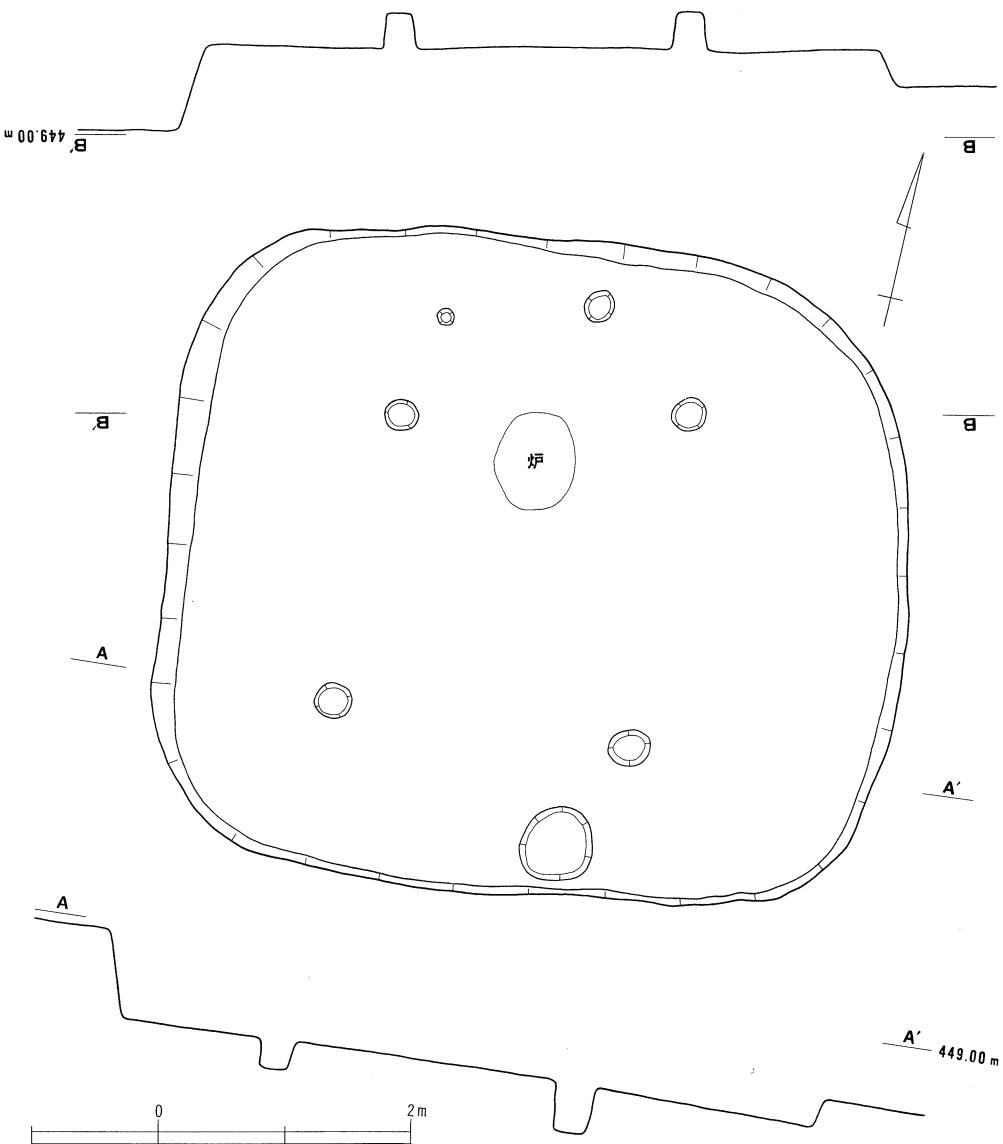
〔遺物〕

床面直上からの遺物の出土はみられなかつたが、埋没土中より何点か土器が出土している。土器の出土状況は、4本主柱穴で囲まれた内側よりも外側——壁際に近い場所に偏っており、しかも散存的であった。他に粘土が出土した。

出土遺物一覧

(単位: cm)

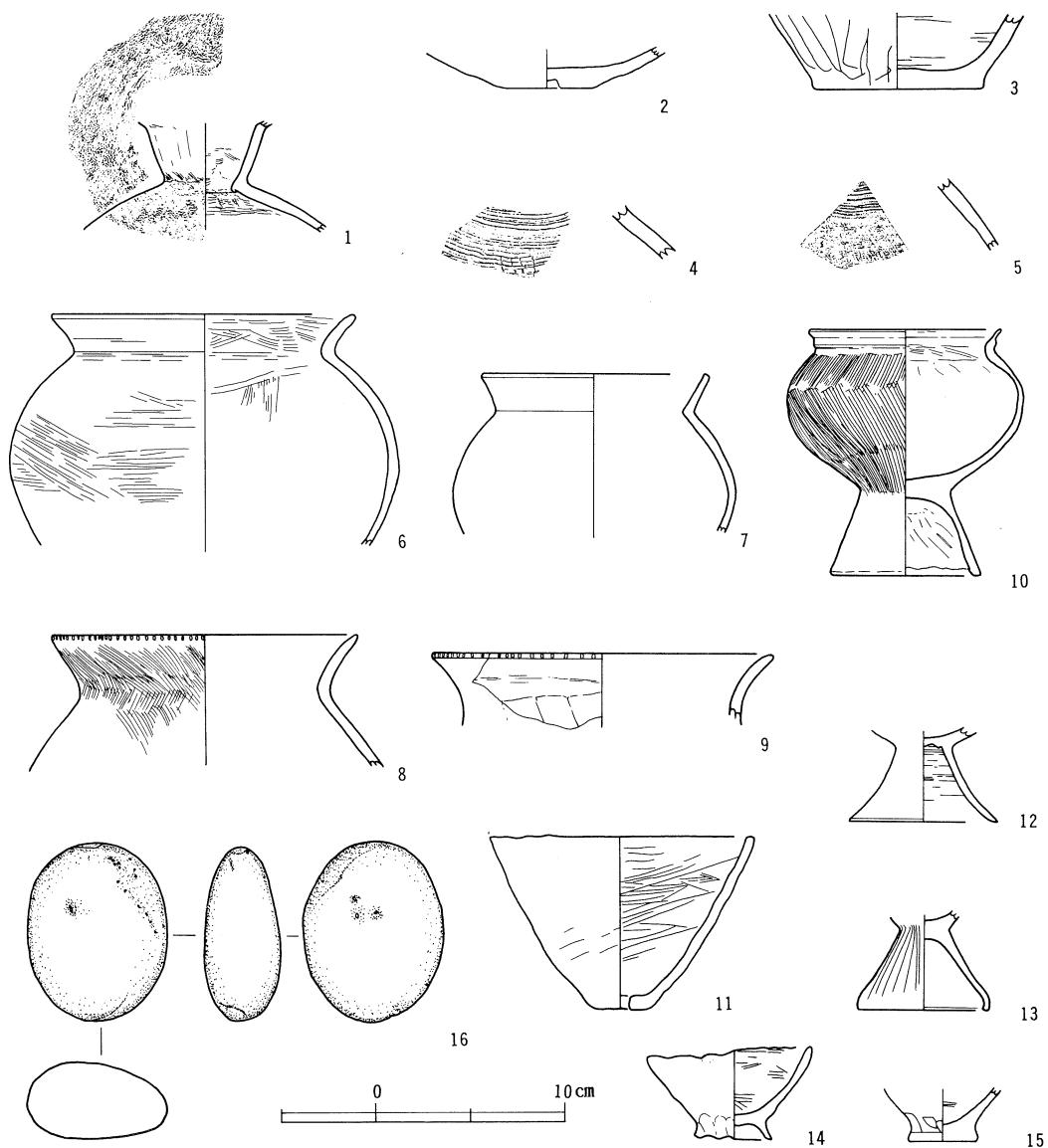
番号	器種	法量等 / 胎土 /			色調	
		整形	・	特徴	・	その他
1	壺	肩部～頸部・口縁部の破片 / 微砂粒を含む / 外面褪赤褐色、内面白褐色		頸部屈折部以下に櫛描波状文が施される。口縁部外面は刷毛整形の後、縦方向の鎧磨きがなされる。内面には刷毛目痕が認められる。		



第8図 3号住居址平・断面図 (1/60)

番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調	
		整形・特徴	その他
2	壺	底部破片資料／白色小粒子、赤褐色粒子を含む／外面白褐色、内面褪赤褐色	
		内面は箆磨き。丸底に粘土紐を輪にしてつけ、中央に凹をつくり高台風な底部をつくりだしている。接合部は粗い箆削り。	
3	壺	底部破片資料／小白色粒子、赤褐色粒子などを含む／外面褪肌色、内面暗褐色	
		外面縦方向の箆削りか？	

番 号	器 種	法 量 等 / 胎 土 / 色 調
		整 形 ・ 特 徴 ・ そ の 他
4	壺	—／小白色粒子、小金色粒子、小黒色粒子等を含む／外面明肌色、内面暗色
		壺形土器の頸部以下の破片で、櫛描文が施されている。
5	壺	—／小白色粒子、小黒色粒子等を含む／白褐色
		壺形土器の胴部破片で、櫛描文、刷毛目がみられる。
6	甕	口径16 口縁部～胴部の破片／赤褐色粒子等の砂粒を含む／暗褐色
		口縁部横撫で、内面は刷毛目痕あり。外面頸部～胴部中位横位刷毛目、以下箇削り。内面は磨きにより器面を密にしてある。外面は磨滅がはげしい。
7	甕	口径12 口縁部～胴部の破片／砂粒を含む／外面暗褐色、内面赤褐色
		口縁部外面は刷毛整形の後横撫で。胴部外面は粗い箇削りが施されるが、剥落が著しい。内面は全体に丁寧な箇磨きが施される。
8	甕	口径16 口縁部～胴部の破片／砂粒を含む／褪黄褐色
		外面は、口縁部～胴部斜位の刷毛目。内面は磨きがかけられている。口縁端に刻目が連続する。
9	甕	口径18 口縁部破片／小黒色粒子等を含む／外面赤褐色、内面暗褐色
		口縁部横撫で。内面は横位、外面は縦位の細かい刷毛目がみられる。 口縁端に刻目が連続する。
10	台付甕	口径10 底径8 器高約13 微砂粒を含む／赤褐色
		S字状口縁部付甕。口縁部横撫で。頸部内面には刷毛目痕がみられる。 胴部外面刷毛目は上から左下り、右下りの順に施されている。脚台部端は折り返し。
11	瓶	口径14 底径3 器高約9 1/5欠損／砂粒を含む／赤褐色
		内面は、横位の細かい箇磨き。外面は箇削りの後、磨きがかけられたと思われるが、磨滅により定かではない。外面下半に黒斑あり。
12	高 坯	脚部径7.8／密、小白色粒子を含む／脚部内面白肌色、外面丹彩される。
		細かい刷毛目による整形。
13	高 坯	脚部径7／小白色粒子、若干の赤褐色粒子を含む／暗褐色
		磨きあるいは、撫でによって器面を密にしてある。小型の台付甕の脚台部かもしれない。
14	鉢	口径8.5 底径4 器高4.8／砂粒を含む／淡白褐色
		内外面ともに箇磨きが施される。底部は指による摘み出しによって高台風の高まりをつくりだしている。
15	鉢	底径3.7 鉢の底部破片資料／砂粒を含む／白褐色
		器面は、磨きがかけられる。
16	石 器 凹石？	石材は、安山岩
		挙大の偏平な丸い石で、縁上下に敲打痕あり。

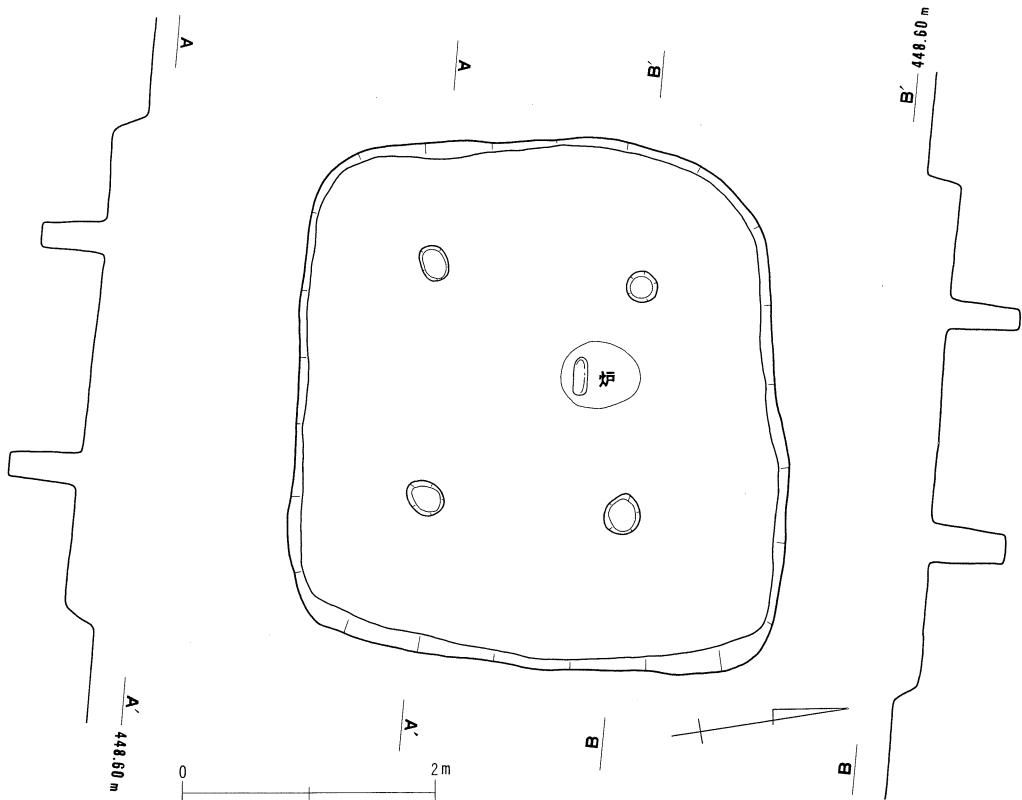


第9図 3号住居址出土遺物 (1/4)

〈4号住居址〉(第10・11図)

〔遺構〕

調査区西端3号住居址の南、12-A・13-A域に位置する。規模は一辺約4mで、平面形は隅円方形を呈する。壁はローム層を掘り込んでおり、外傾し良好な立ち上がりをみせる。壁高は25cm前後を測る。床面は、南側へ僅かに傾斜している。柱穴としては方形に配された4本の穴が検出され、その深さは床面より55cm前後を測る。炉は、床面中央より北東寄りで柱穴間を結ぶ線よりも内側にあり、焼土・炭化物の部分が長径63cm短径53cmで卵形の平面形を呈している。炉内の南辺には、31×11×14cmの炉石が据えてあった。深さは深い所で15cm程であるが、



第10図 4号住居址平・断面図 (1/60)

直接に火を受けた焼土層はみられなかった。長軸方向はN-77°-W。

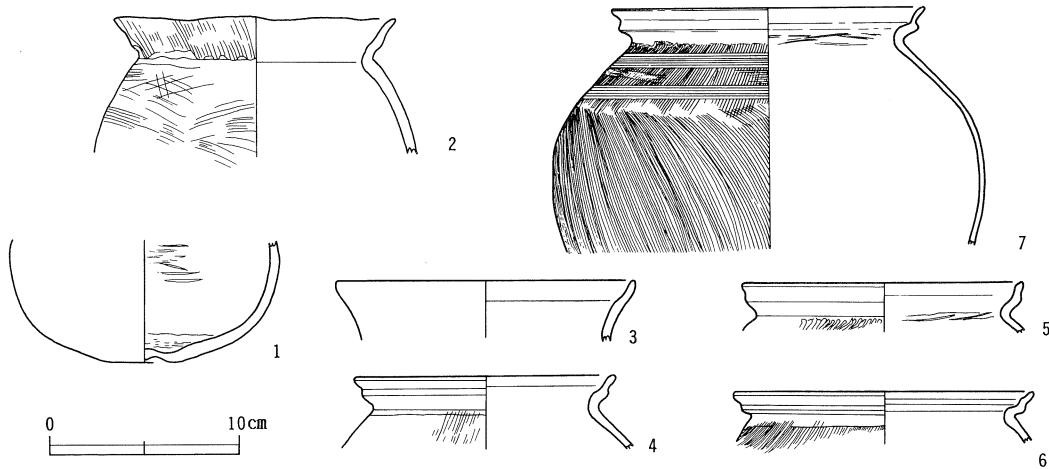
[遺物]

比較的遺存のよい竪穴であるが、遺物の出土は少なかった。形状の推定できる破片を図化した。

出土遺物一覧

(単位: cm)

番 号	器 種	法 量 等 / 胎 土 / 色 調
		整 形 • 特 徴 • そ の 他
1	壺	底径約3 胴部下半の破片／白色粒子等の砂粒、赤褐色粒子を含む／白褐色 下ぶくれの胴部をもつ小型壺。底部は丸底状で凹む。外面は鏡面磨き、内面は刷毛目上を範状工具による削り、乃至、磨きが施される。
2	甕	口径14.5 口縁部～胴部破片／小白色粒子等の砂粒を含む／白褐色～淡褐色 口縁部・胴部とも内面は撫でにより丁寧に仕上げられている。外面口縁部は刷毛目上を横撫で、胴部外面は横位の刷毛目。外面口縁部に粘土をめぐらし、ふくらみをもたしている。煤けた所がある。
3	甕	推定口径14.7 口縁部破片／砂粒を含む／暗褐色 頸部から外反した口縁が先端部で内湾し、受け口状口縁を呈する資料
4	台付甕	口径13.8 口縁部破片／砂粒を含む／褪赤褐色、外面煤付着 S字状口縁台付甕の資料。口縁部の外傾が弱く、胴部外面は細かい刷毛目。



第11図 4号住居址出土遺物 (1/4)

番号	器種	法量等 /		胎土 /		色調	
		整	形	・	特徴	・	その他
5	台付甕	口径14.7	口縁部破片	/	砂粒を含む	/	白褐色
		S字状口縁台付甕の資料。	内部に刷毛目がみられる。				
6	台付甕	口径15.6	口縁部破片	/	砂粒を含む	/	暗褐色
		S字状口縁台付甕の資料。	口唇内側に浅い窪みがめぐる。				
7	台付甕	口径16.4	胴部下半欠損	/	白色粒子、金色粒子等の砂粒を含む	/	暗赤褐色、黒斑あり
		口縁部内外面は横撫で。	胴部内面に刷毛目痕あり。		外面胴部より左下り次いで右下り		
		の刷毛目が施され、肩部に平行に2本刷毛目が横走する。					

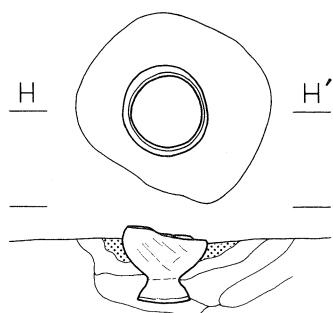
〈5号住居址〉(第12・13・14図)

[遺構]

調査区西半部北側の13-C域に位置する。規模は東西約4m、南北約5.2mで、平面形は隅円長方形を呈する。壁はローム層を掘り込んでおり、良好な立ち上がりをみせる。壁高は約40cmを測り、高い所では50cmもある。床面は、中央部が周囲よりもやや低いが、ほぼ平坦である。柱穴は、壁に平行するように長方形に配された4本が検出された。それらは床面から約60cmの深さを測る。南壁際西寄りの所に、壁から15cm程離れて、床面からの深さ約57cmの長径約63cm短径約53cmの不整円形をした、土手がめぐる小穴がある。

炉は、床面中央より北の北側2本の柱穴間を結ぶ線上よりやや内側に50×40cmの不整円形に床面のない炭化物などを含む部分があり、その中に胴部下半を欠いた壺形土器が口縁部を下に埋設してつくってあった。土器周囲に厚さ8cm前後で焼土があり、そのまわりを炭化物・焼土などを混入する土層が覆っている。

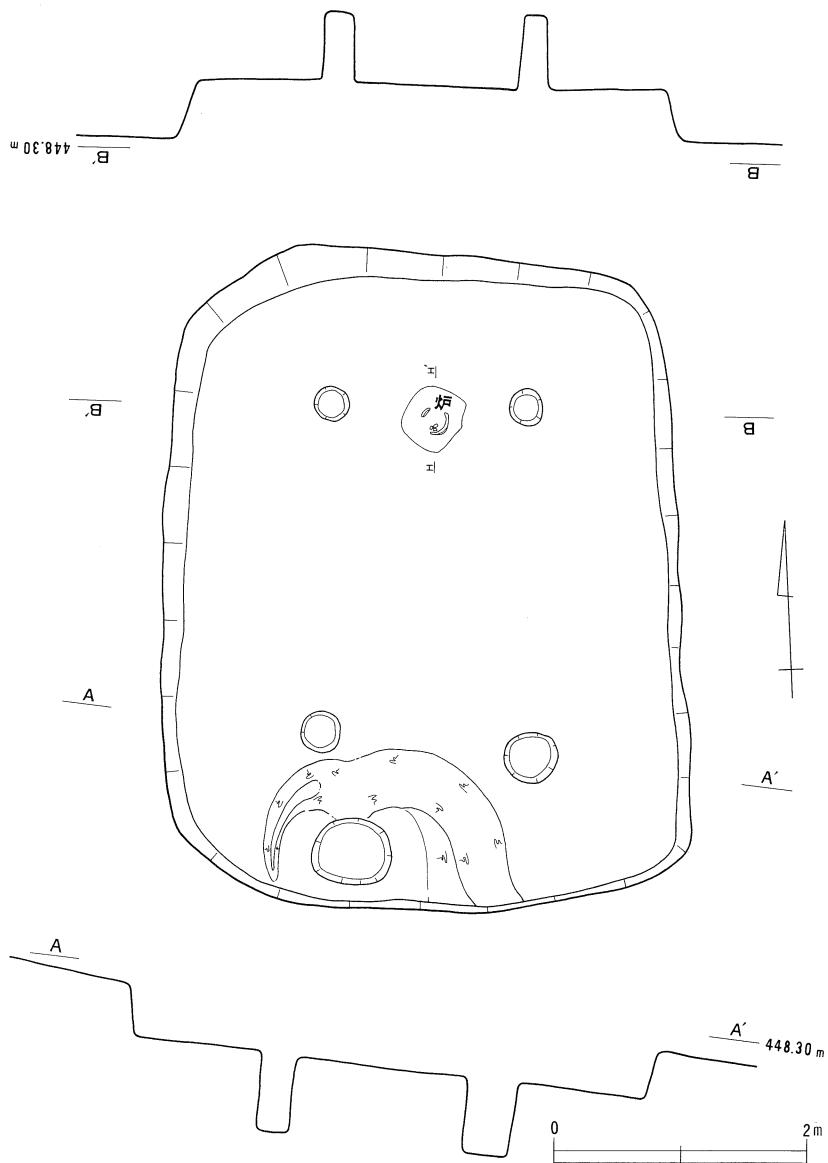
他に内部施設はない。長軸の方向はN-5°-E。



第13図 5号住居址炉 (1/20)

[遺物]

遺存状況のよい深い豊穴ではあるが、遺物の出土は少なく土器のみである。炉に使用された土器を除くと、めぼしいものは甕と高壺であり、南西壁隅際より出土している。他は埋没土中の出土である。甕及び高壺は床面より若干上位の出土ではあるが、炉に使用された土器とともに本住居址に伴うものと見做してよいであろう。他のものは住居廃絶後に廃棄乃至混入されたものととらえることができるが、資料として図化をしておいた。



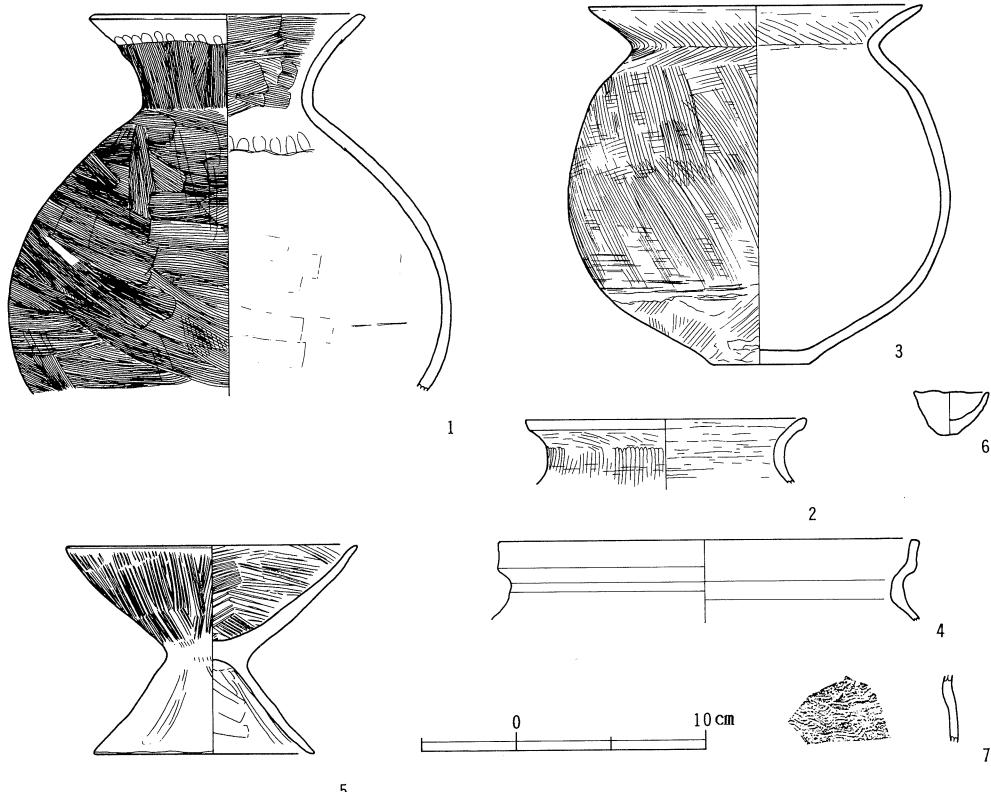
第12図 5号住居址平・断面図 (1/60)

出土遺物一覧

(単位: cm)

番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調	
		整形・特徴	その他
1	壺	口径14.5 底部欠損/白色小粒子、微砂粒を含む/胴部下半内、外面赤褐色、他暗褐色 胴部外面刷毛目顕著。口縁部は横撫でされ、折り返し口縁下端に圧痕が連続する。 頸部～口縁部外面は縦位、内面は横位の刷毛目。胴部内面には幅広の工具による撫でのよう整形が加えられている。頸部下内面指頭圧痕あり。	
2	甕	口径14.7 口縁部破片/砂粒を含む/白褐色 刷毛整形の後、横撫で	

番号	器種	法量等／胎土／色調
		整形・特徴・その他
3	甕	口径17.5 底径5 器高18.9 1/5欠損／砂粒を含む／暗赤褐色
		胴部外面下端～口縁部内面に刷毛目が顯著である。口縁部横撫で。胴部最大径が中位よりやや下にある。胴部外面中位に火を受け煤けた部分が帯状にめぐる。
4	甕(?)	口径22 口縁部の破片資料／比較的大粒の砂粒を含む／白褐色
		口縁部横撫で。
5	高坏	口径15.5 底径11.7 器高11 略完形／白色粒、雲母を含む／褐色
		坏部外面縦位、内面横位～斜位の刷毛目、脚台部外面は磨き、内面は削りと磨きが施される。
6	小型手捏ね土器	口径4 底径1.2 器高2.3 略完形／赤褐色粒、砂粒を含む／明褐色
		小型手捏ね土器。指で整形した後簡単な撫でが施される。
7		—／微砂粒を含む／赤褐色
		外面は櫛描波状文、内面は篦磨きが施される。弥生時代後期の所産か。

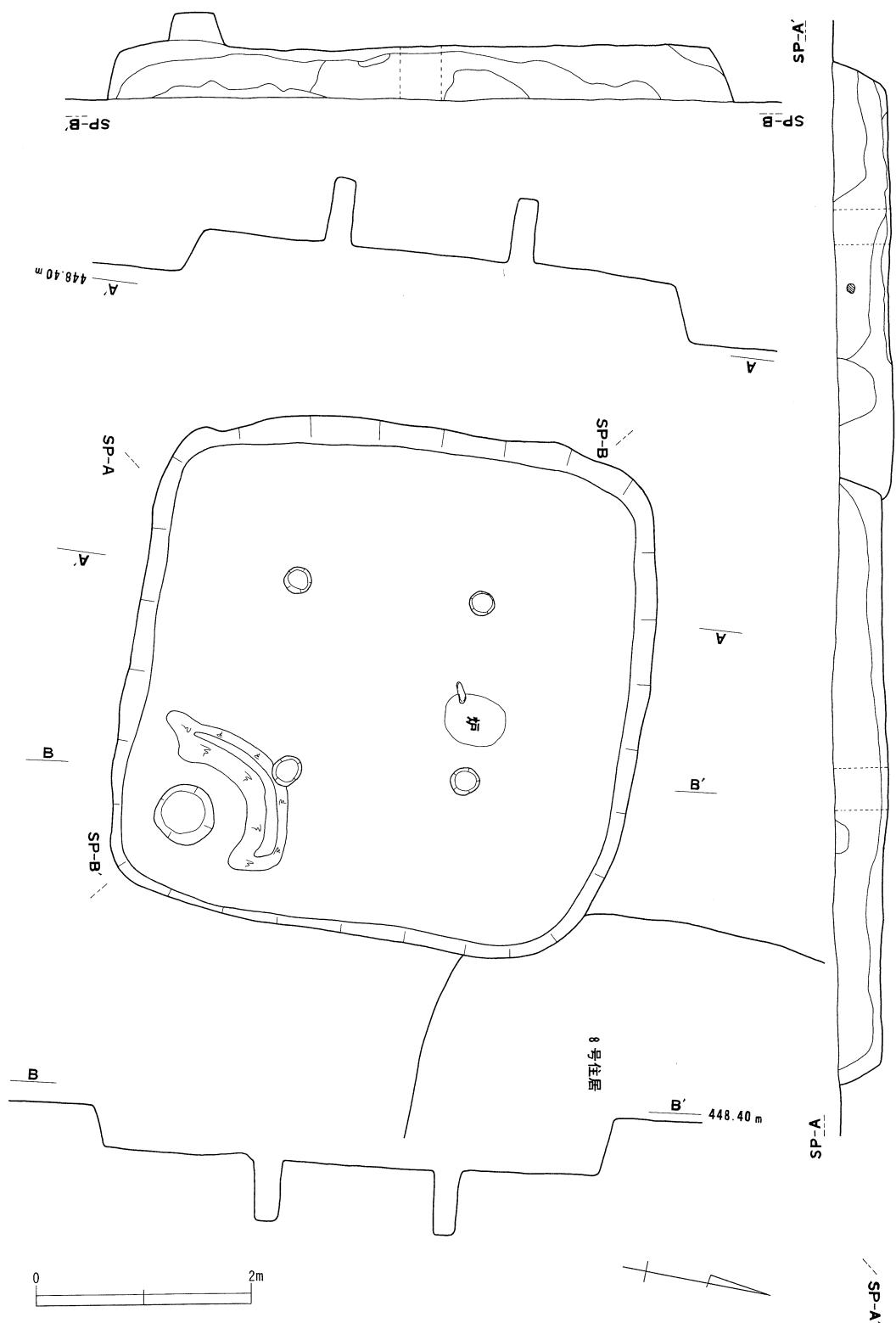


第14図 5号住居址出土遺物 (1/4)

〈6号住居址〉(第15・16・17・18図)

[遺構]

調査区西半部、5号住居址の北側の12-C・12-D域に位置する。黄褐色土中に暗い黄褐色土の落ち込みを発見し発掘を行う。北東隅が8号住居址と接している為、住居址の対角線上に

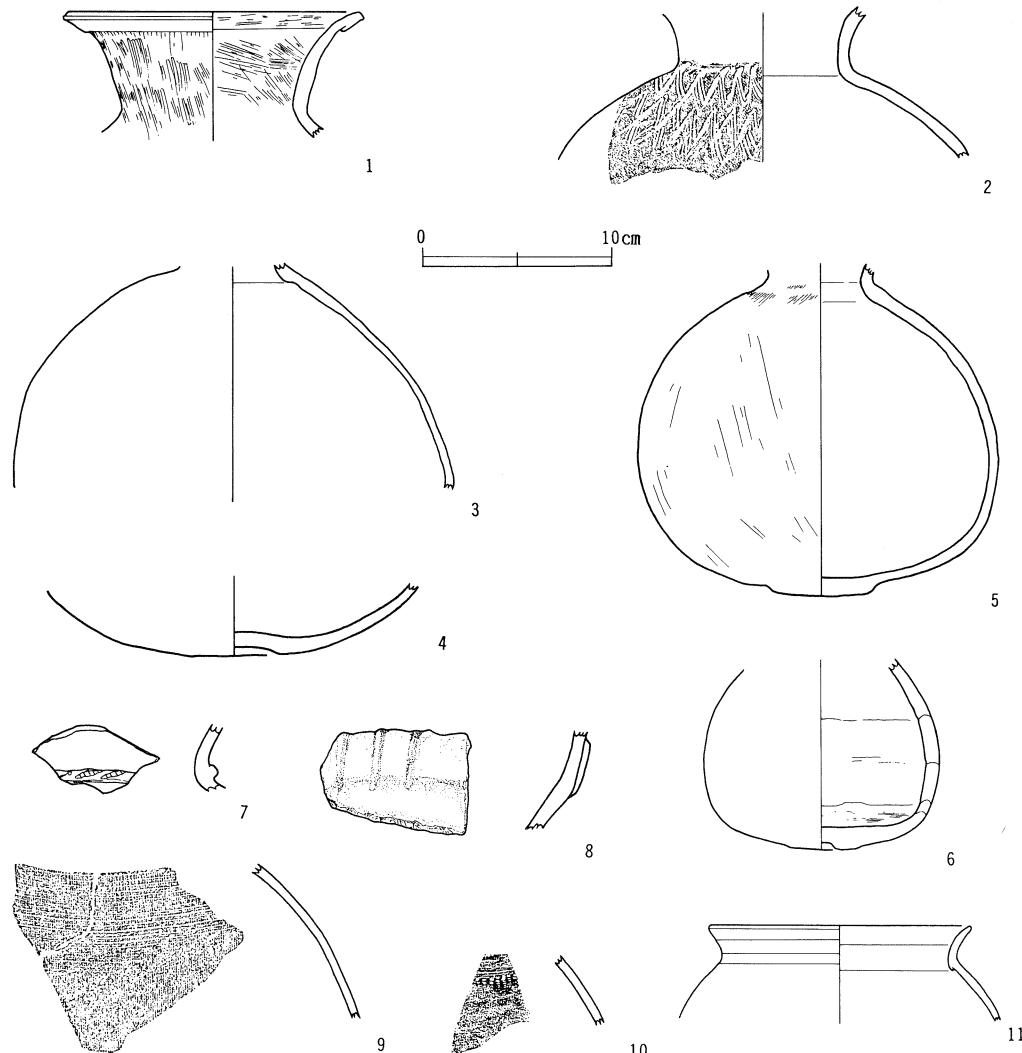


第15図 6号住居址平・断面図 (1/60)

土層観察用の土手を残し掘り下げた。埋没土は、おおむね3層に分かれ、上から灰黄褐色土・黄褐色土・暗黄褐色土の順に堆積している。竪穴はローム層を掘り込んでおり、壁は外傾しながら良好な立ち上がりをみせる。しかし、北東隅は8号住居址を切っており、土層観察により立ち上がりを検出した。壁高は50cm前後を測る。床面は平坦で、良好である。規模は約4.8mで、平面形は隅円方形を呈する。柱穴は、最寄りの壁より約1.4m離れ、方形に配された4本が検出され、床面からの深さは約60cmを測る。炉としては、北側2本の柱穴間を結ぶ線上東寄りに長径55cm短径47cmの不整円形に浅く窪んだ部分があり、厚さ5cmで焼土層が形成され、長さ20cm程の枕石が据えてあった。南西隅には土手に囲まれた小穴がある。主軸の方向は、N-6°-W。

〔遺物〕

遺存状態のよい竪穴であり、遺物の出土も多い。出土の状況は、暗黄褐色土中からの出土がほ



第16図 6号住居址出土遺物 (1/4)

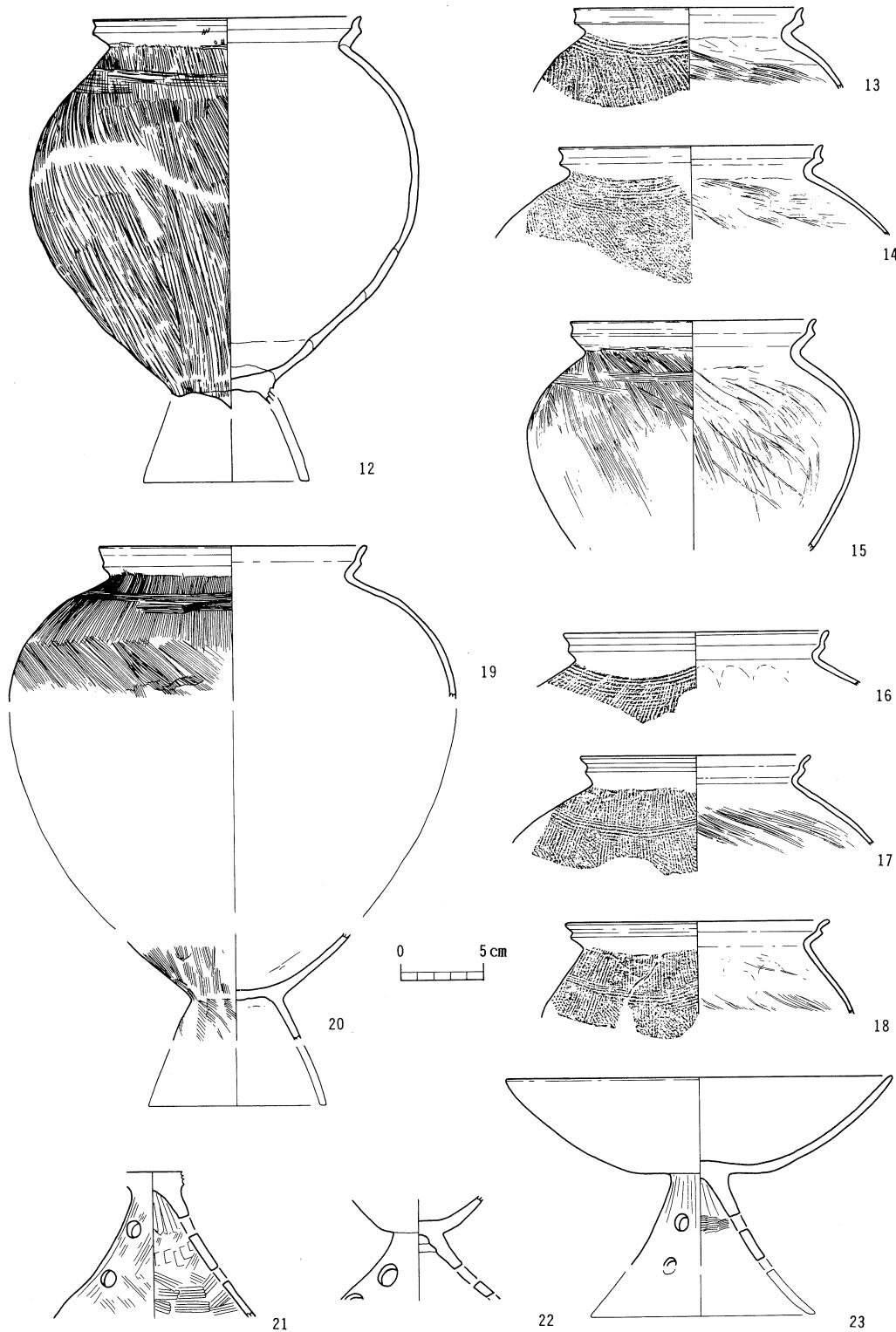
とんどであり、炉より東側の床面直上からの土器の出土が目立った。土器以外では、ガラス玉が床面中央から、石鏃がやや南東寄りに床面直上から出土し、種子も一点確認された。

出土遺物一覧

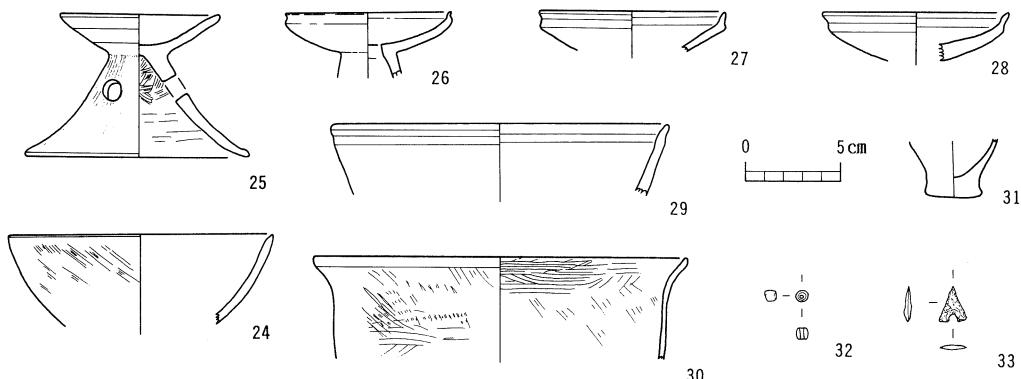
(単位: cm)

番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調
		整形・特徴・その他
1	壺	口径15.5 口縁部破片／砂粒、赤褐色粒子を含む／褐色 折り返し口縁横撫で。口縁部～頸部内面は、横位の細かい刷毛目の後粗い箇磨きが施され、外面は縦位の刷毛目整形の後、比較的丁寧な縦位箇磨きが施される。
2	壺	頸部付近の破片資料／白色粒子、砂粒、赤褐色粒子を含む／明褐色 頸部外面は縦位、内面は横位箇磨きが施される。胴上部内面は、箇削りされる。 胴上部（肩部）外面には、櫛歯状工具による鋸歯状文が施文される。
3	壺	胴部の破片資料／砂粒の他赤褐色粒子を多く含む／外面褪赤褐色、内面淡褐色 内面は刷毛目整形であるが磨滅が著しい。外面も磨滅が顕著である。
4	壺	底部の破片資料／砂粒の他赤褐色粒子を多く含む／外面褪赤褐色、内面淡褐色 内面は刷毛目整形であるが、外面とともに磨滅が顕著である。3・4は同一個体であろう。底は窪む。
5	壺	底径5.5 口縁部欠損／砂粒を含む／白褐色 胴部外面は、刷毛目整形の後磨き、内面は箇削りが施される。磨滅により器面はザラつく。
6	壺	底径3.4 口縁部欠損／比較的大粒の砂粒を含む／外面赤褐色、内面暗褐色 胴部が下ぶくれの小型壺。外面は丁寧な磨きがかけられる。底部内面は細かい刷毛目。底は窪む。
7	壺	——／赤褐色粒子を多く含む／赤褐色 頸部に凸帯をめぐらし、その上に櫛歯状工具による刺突が連続する。
8	壺	——／砂粒を含む／褪赤褐色 口縁部に棒状浮文を貼付した複合口縁の資料。
9	壺	——／砂粒を含む／赤褐色 櫛描による縦方向と横線文が施される。壺形土器の胴部破片。
10	壺	——／砂粒を含む／外面白褐色、内面黒色 櫛歯状工具による刺突が連続する。外面に丹彩の痕跡がある。
11	甕	口径13.7 口縁部付近破片／砂粒赤褐色粒子を含む／赤褐色 口縁部は横撫でされるが内面に若干横位刷毛目がのこる。器面は磨かれ、丹彩されていたと思われるが、磨滅が顕著で定かでない。頸部内面は折り返されたように段をもつ。
12	甕	口径16 脚台部欠損／砂粒を含む／暗褐色 S字状口縁部横撫で。胴部内面は磨きがかけられる。胴部外面は上から順次右下りの刷毛目が施され、肩部付近に横方向に刷毛目が走る。

番号	器種	法量等／胎土／色調
		整形・特徴・その他
13	台付甕	口径13.8 口縁部付近破片／砂粒赤褐色粒子を含む／外面暗褐色、内面褐色
		S字状口縁部横撫で。頸部下胴部内面には横方向の細かい刷毛目が施される。胴部外面は、斜位の刷毛目で、頸部下には刷毛目が横走する。
14	台付甕	口径16 口縁部付近破片／破粒を含む／外面暗褐色、内面褐色
		S字状口縁部横撫で。内面胴部には斜位の細かい刷毛目が施される。胴部外面は、斜位の刷毛目で、頸部下には刷毛目が横走する。
15	台付甕	口径14.8 胴部下半欠損／赤褐色粒子、白色粒子を含む／肌色に近い
		S字状口縁部横撫で。内面胴部には棒状工具(?)による斜位の削りが施され、一部刷毛目がみられる。胴部外面は順次右下りの刷毛目がなされるが磨滅によりあまり明瞭ではない。肩部付近に刷毛目が横走する。
16	台付甕	口径16 口縁部付近破片／砂粒を含む／褪赤褐色
		S字状口縁部横撫で。頸部下内面は指頭圧痕。外面は横走する刷毛目と、斜位の刷毛目が交差している。
17	台付甕	口径14 口縁部付近破片／砂粒を含む／外面暗褐色、内面淡褐色
		S字状口縁部横撫で。内面胴部には、斜位の刷毛目痕あり。外面頸部下より縦位の刷毛目、以下斜位の刷毛目が施され、肩部付近に刷毛目が横走する。
18	台付甕	口径16 口縁部付近破片／砂粒を含む／暗褐色
		S字状口縁部横撫で。頸部下内面にわずかに指頭圧痕がみられる。内面胴部には刷毛目痕あり。胴部外面は縦位～斜位の刷毛目と順次なっており、肩部に刷毛目が横走。
19	台付甕	口径16.2 口縁部～胴部破片／砂粒を含む／褐色
		S字状口縁部横撫で。胴部内面は刷毛整形の後磨きがかけられる。肩部付近は、縦位の刷毛目が施され、刷毛目が横走する。以下胴部は斜位の刷毛目。
20	台付甕	S字状口縁部台付甕脚台部破片／砂粒を含む／褐色
		甕底部内面磨き。外面には刷毛目がみられる。
21	高坏	脚部破片／砂粒、赤褐色粒子を含む／淡褐色
		外面刷毛整形の後磨き。内面上部箇削り、下部横位刷毛目。
22	高坏	坏部～脚部破片／微砂粒を含む／褪赤褐色
		磨滅激しく、整形は不詳。脚部は上下二段に円孔があく。
23	高坏	口径23.3 脚部下半欠損／砂粒を含む／白褐色
		坏部及び脚部外面は刷毛整形の後、比較的丁寧な磨きがかけられる。口縁部横撫で。
24	高坏(?)	口径14 口縁部破片／砂粒、赤褐色粒子を含む／
		口縁部横撫で。内面は丁寧な磨きがかけられる。外面刷毛目痕あり。
25	器台	口径8.4 底径11.8 器高7.6 1/3欠損／砂粒黒色小粒を含む／赤褐色
		器受部～脚部内面下半は箇磨き。脚部内面上半は箇削りされる。脚部は3孔があく。



第17図 6号住居址出土遺物 (1/4)



第18図 6号住居址出土遺物 (1/4)

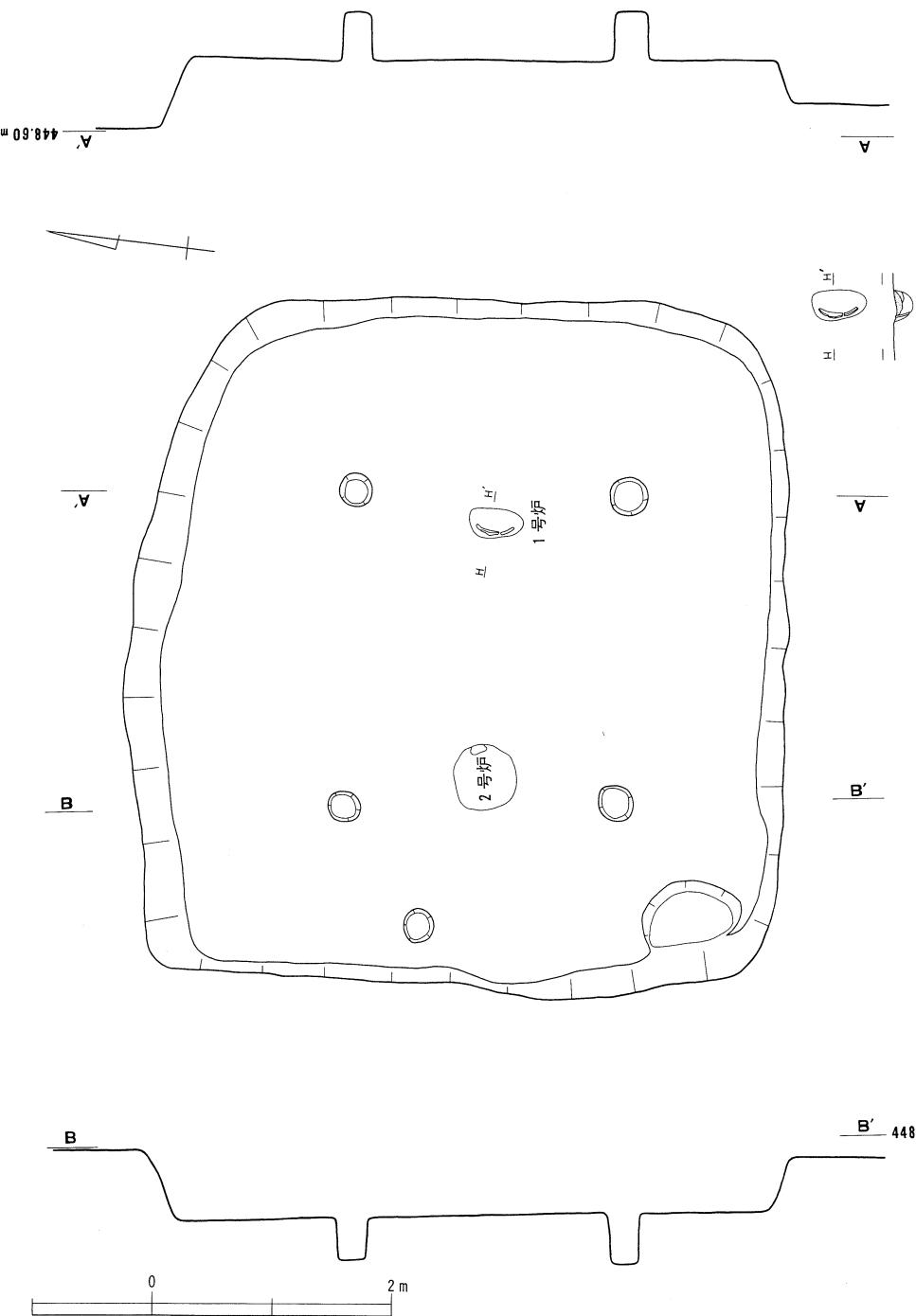
番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調
		整形 / 特徴 / その他
26	器台	口径8.7 脚部欠損 / 砂粒を含む / 褐色 磨滅により整形は不詳。器受部底部に単孔があく。
27	器台	口径9.9 器受部破片 / 砂粒、赤褐色粒子を含む / 淡褐色 磨滅により器面ザラつき、整形不詳。
28	器台	口径9.8 器受部破片 / 砂粒、赤褐色粒を含む / 赤褐色 磨滅が激しく整形は不詳。
29	不詳	口径17.8 口縁部破片 / 若干の赤褐色粒子、砂粒を含む / 明黄土色 撫でと磨きによる仕上げ。鉢形土器の資料か?
30	不詳	口径19.7 口縁部破片 / 砂粒を含む / 白褐色 刷毛整形の後、粗い箒磨きによって仕上げ。鉢形土器の資料か?
31	小型土器	底径3 口縁部欠損 / 砂粒を含む / 白褐色、黒斑あり。 箒削り、指頭により仕上げられたと思われるが、磨滅により詳細は不明。手捏ねか?
32	玉	厚さ0.65 外径0.7 孔径0.2 / ————— / 青 ガラス小玉
33	石鏃	長さ1.9 幅1.5 厚さ0.35 / 石材 黒耀石 / 黒

〈7号住居址〉(第19・20図)

〔遺構〕

調査区西半部北側、3号住居址と6号住居址の間に位置する。黄褐色土中に暗黄褐色土の落ち込みを発見し、発掘する。埋没土はほぼ暗黄褐色土一層で、本住居址は極短期間に埋没したと考えられる。規模は東西約5.8m、南北約5.5mで、平面形は隅円長方形を呈する。壁は外傾しながら良好な立ち上がりをみせるが、西壁北側上半は3号住居址と重複しておりあまり良好ではなかった。壁高は、北壁が高く60cm前後を測り、他は40~45cm程度を測る。床面は平坦で、良好である。住居址内に規則的に長方形に配された4本の小穴が主柱穴となり、別に西壁寄りに1本小穴がある。5本とも径はほぼ等しく、床面からの深さも35~40cmを測る。炉は、床面中央部を境に東西に2基、4本主柱穴を囲む線よりも内側に検出された。東側の1号炉は、30×

45cmの南北に長い長楕円形で、西半部に土器を埋設しており、焼土の厚さは約6cmであった。
2号炉は、直径約55cmの床面のない円形に窪んだ中に、直径約40cmの範囲で焼土が形成されており、東端に長さ約17cmの枕石を一個伴っている。長軸の方向は、N-83°-E。



第19図 7号住居址平・断面図 (1/60)

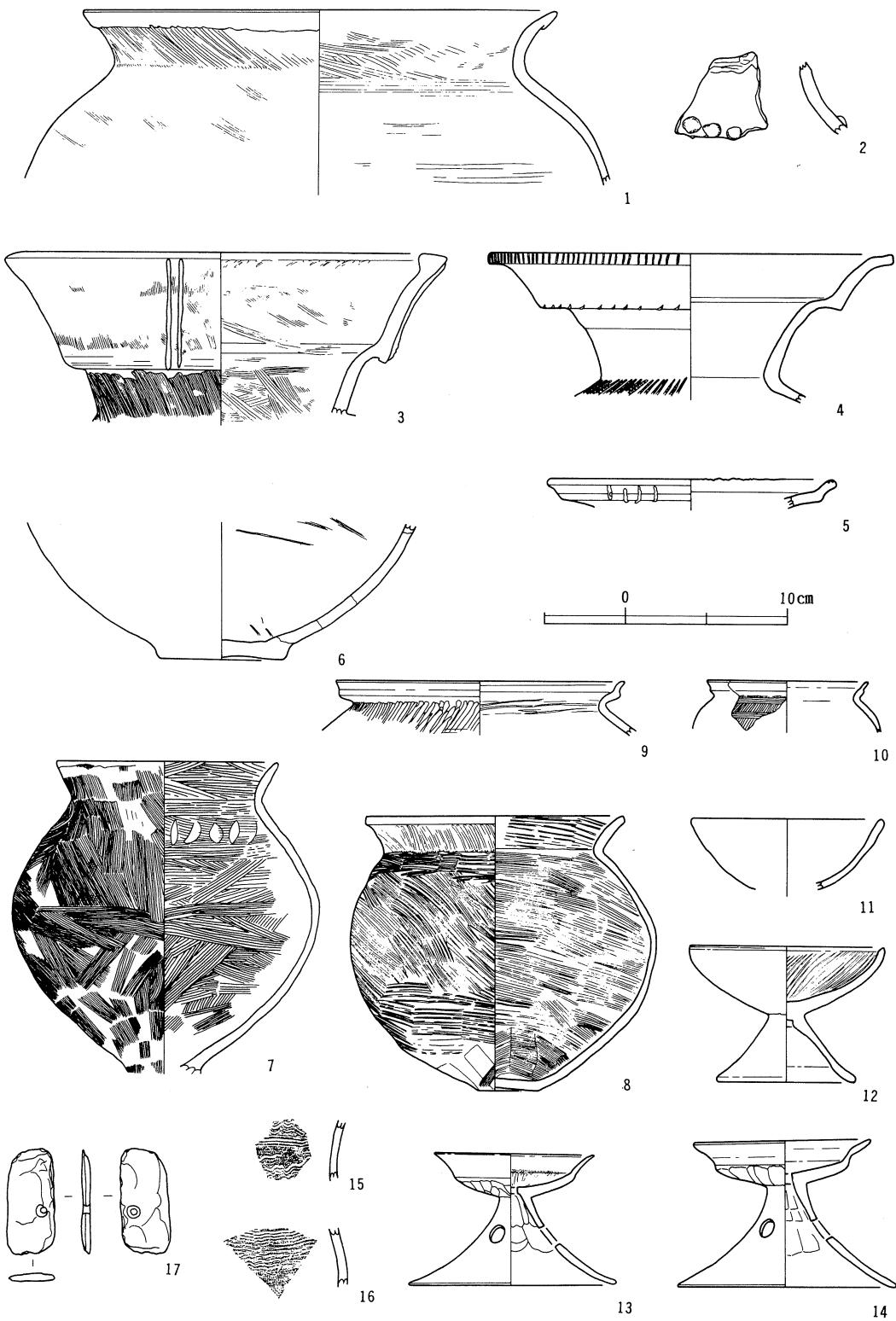
[遺物]

豎穴の遺存状態がよいので、比較的土器の出土が多い。傾向としては、住居址内の4本主柱穴を結ぶ線よりも外側に多くの土器が出土した。北側西半部からは、壺形土器の複合口縁部・高坏・器台が、北側東半部北東隅では、広口壺の口縁部・甕などが、東側～南東では壺の底部・甕などが出土している。これらはほぼ床面直上からの出土であるが、壺の複合口縁・高坏・器台などは壁際から斜めに連なった様な状態で出土した。他の遺物としては、遺構の中で述べなかったが、住居址内南西隅に壁に接し床面からの深さ約12cmを測る、60×75cmの不整円形の穴の底より石包丁が出土している。北西側には炭化材も出土している。

出土遺物一覧

(単位: cm)

番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調
		整形・特徴・その他
1	広口甕	口径19 脊部下半損／砂粒を含む／褐色
		折り返し口縁部横撫で。内面は箒磨きが施されるが、刷毛目が残る。外面折り返し口縁下～頸部に刷毛目。外面は剥落が顕著である。
2	壺	頸部付近の破片／砂粒を含む／白褐色
		円形貼付文のある壺形土器の資料。
3	壺	口径27.3 脊部を欠損／砂粒、赤褐色粒を含む／褪赤褐色
		刷毛整形の後磨きにより仕上げてあるが、所々に刷毛目が残っている。複合口縁部外側に2本1単位の棒状浮文が5カ所に付けられていたと思われる。複合口縁部内面下段～頸部にかけ煤けている。
4	壺	口径25 脊部を欠損／砂粒を含む／明橙褐色
		器面は丁寧な磨きにより仕上げられているが、磨滅により、器面特に内面はザラザラしている。断面方形の口縁部外側、口縁有段部外側及び外面頸部下に櫛歯状工具による刺突が連続する。
5	壺	口径17.8 口縁部破片／砂粒、赤褐色粒子を含む／肌色っぽい
		撫でが施された後、外面に4本1単位の棒状浮文が付けられ、口唇には櫛歯状工具による刺突が連続している。
6	壺	底径8 脊部上半欠損／砂粒を含む／外面褐色、内面暗褐色
		内面は、磨きがかけられる。外面は磨滅によりザラつく。底部は箒削り。
7	台付甕	口径13.7 脚台部欠損／砂粒を含む／暗褐色
		内・外面ともに刷毛目が顕著である。脊部下半は明い色となり、磨滅がみられる。内面頸部下に圧痕がある。外面脊部中位に煤の付着が目立つ。
8	甕	口径16 底径3.8 器高17.1 完形／白色粒、雲母多量に含む／外面暗褐色、内面褐色
		内面は細かい刷毛目。外面は幅広で深い刷毛目で、脊部下端には削りもまじる。内外面に煤の付着が看取される。



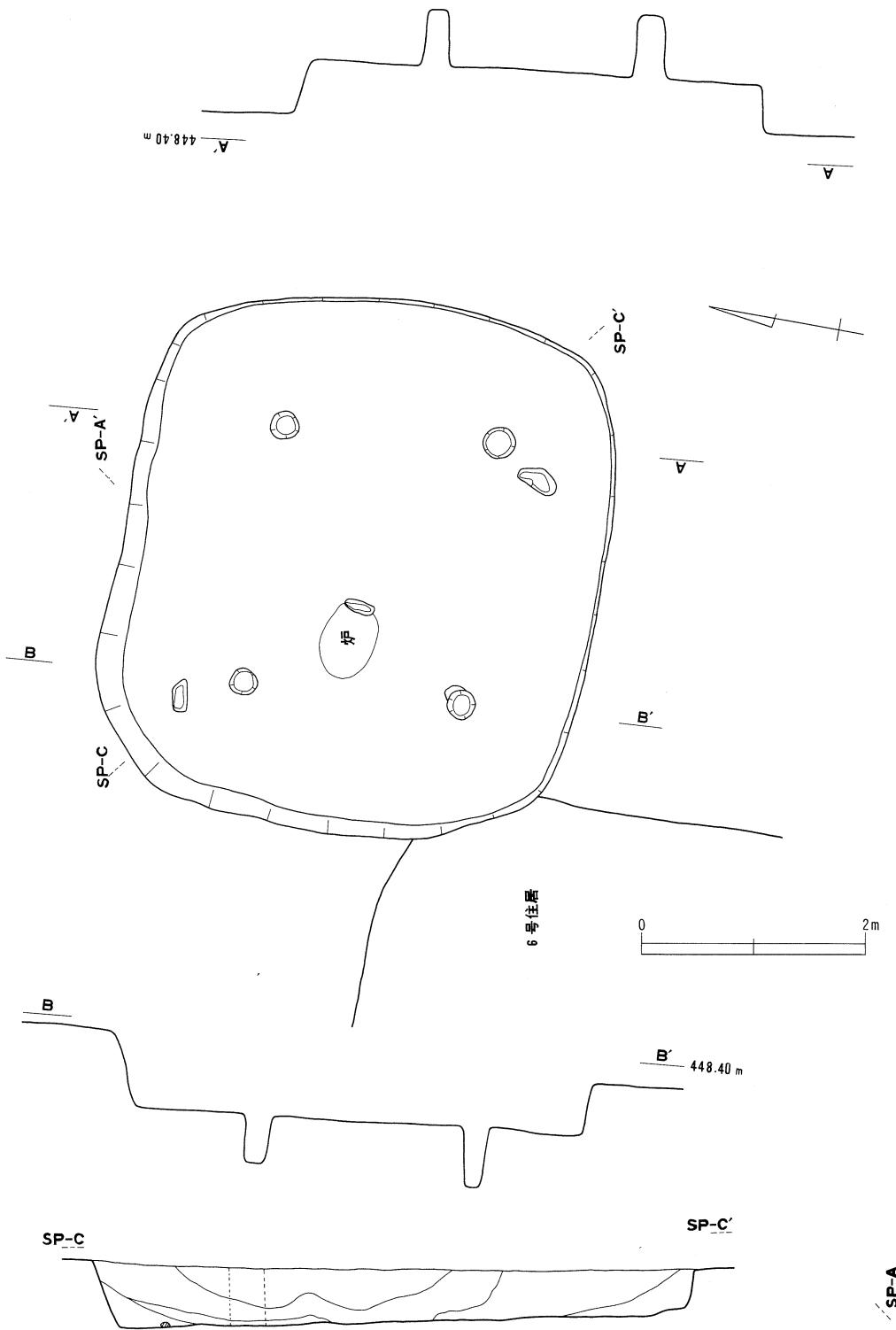
第20図 7号住居址出土遺物 (1/4)

番 号	器 種	法 量 等 / 胎 土 / 色 調
		整 形 ・ 特 徴 ・ そ の 他
9	台付甕	口径17.7 口縁部破片／砂粒を含む／淡褐色
		頸部内面に刷毛目がみられる。口縁部横撫で。外面は幅広の深い刷毛目。S字状口縁台付甕の資料。
10	台付甕	口径 9.8 口縁部破片／微砂粒を含む／肌色
		肩部付近に斜位と横走する刷毛目のあるS字状口縁台付甕の資料。
11	高 坯	口径12 坯部破片／砂粒、赤褐色粒子を含む／漂赤褐色
		口縁部横撫で。磨滅により器面はザラつく。2号炉より出土している。
12	高 坯	口径12 底径 8.5 器高 8.3 略完形／精製／赤褐色
		口縁部横撫で。坯部内面は斜方向の放射状箇磨きが施され、外面は箇削りされる。脚部外及び内面下端は磨き、他は削り。全体に丁寧な仕上げである。
13	器 台	口径 9.8 底径12.8 器高 8.2 完形／精製／赤褐色
		口縁部横撫で。器受部内面は放射状箇磨きされ、外面は箇削り痕がある。脚据部内外面横撫で。脚部は外面箇磨き、内面上半箇削りされ、3孔があく。器受部底部にも単孔があく。
14	器 台	口径10.8 底径13.5 器高 9 完形／精製／褪赤褐色
		整形方法等は13に同じであるが磨滅により器面がザラザラしている。
15	甕	——／砂粒を含む／黒色
		櫛描文が施される土器の資料。内面は磨きがかけられる。
16	甕	——／砂粒、赤褐色粒子を含む／暗褐色
		櫛描文が施される土器の資料。内外面に刷毛目がみられる。
17	石包丁	長さ 6.5 幅 3.0 厚さ 0.6 ／石材は、頁岩／
		本来台形を呈すると思う。紐穴は一孔で両側から抉り穿たれている。背部付近は剝離が粗雑である。刀部は研磨される。

〈8号住居址〉(第21・22図)

〔遺構〕

調査区西半部北側、6号住居址北東に位置する。黄褐色土中に暗褐色土の落ち込みを発見し発掘を行う。南西隅が6号住居址と重複しており、土層観察用土手をはすに残し掘り下げた。土層は、壁際に暗黄褐色土があり、次いで黄褐色土があり、順次粘性のある暗褐色土・ロームブロックを含む暗黄褐色土・暗褐色土が自然堆積している。竪穴はローム層を掘り込んでおり、壁は良好な立ち上がりをみせる。南西隅の壁の一部は6号住居址に切られている。壁高は南壁が低く40cm前後、北壁は高く50~60cm位を測る。床面は良好。平面形は、東西がややふくらむ隅円長方形を呈する。規模は東西約4.8m、南北約4.4mを測る。柱穴は長方形に配された4本があり、床面からの深さ50cm前後を測る。炉は、住居址中央部よりも西側にあり、約48×65cmの長楕円形に炭化物を含む部分で、東端に長さ約30cmの石をともなっていた。焼土は石寄りに



第21図 8号住居址平・断面図 (1/60)

検出された。長軸の方向は、N-88°-E。

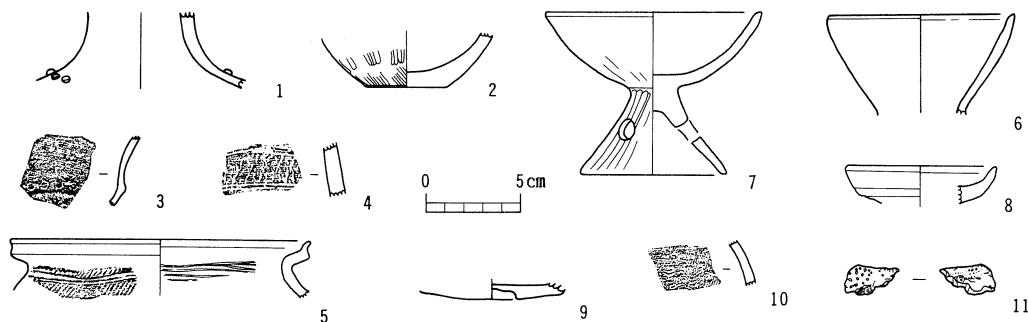
〔遺物〕

竪穴の遺存はよいが、出土遺物は少なかった。

出土遺物一覧

(単位: cm)

番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調
		整形・特徴・その他
1	壺	壺形土器 頸部付近破片／微砂粒、赤褐色粒子を含む／赤褐色 内面にかすかに刷毛目がみらる。外面に円形貼付文がつく。磨滅がはげしい。
2	壺	底径4 底部破片／砂粒、赤褐色粒子を含む／白褐色 内・外面ともに磨き、外面には刷毛目が残る。
3	壺	複合口縁部破片／砂粒を含む／白褐色 内面は磨き。外面には円形の刺突が連続する。
4	壺	壺形土器の破片／砂粒、黄褐色粒子を含む／灰褐色 沈線文の間に撫紐による圧痕が施される。
5	台付甕	口径15.8 口縁部破片／砂粒を含む／暗褐色 S字状口縁台付甕の資料。口縁部横撫で。外面頸部下に斜位と横走する刷毛目が施される。頸部内面に刷毛目がみられる。
6	壺	口径10 口縁部破片／砂粒を含む／白褐色 口縁部横撫で。内外面ともに丁寧な箒磨きがかけられる。
7	高坏	口径11.3 底径7.7 器高8.6 1/3欠損／砂粒を含む／白褐色 口縁部横撫で。坏部内面は丁寧な箒磨き、他外面は、粗い箒磨きが施される。脚部には3孔があく。
8	器台	口径8 器受部破片／砂粒、赤褐色粒子を含む／褪橙褐色 磨滅が著しく、器面がザラザラしている。
9	不詳	——／砂粒を含む／白褐色 削り、磨き、刷毛目がみられる。円盤状で、何かの底部と思われる。
10	甕	——／砂粒を含む／黒褐色 櫛描波状文の施される甕形土器の破片資料
11		——／砂粒、赤褐色粒子を含む／褪赤褐色 両面に刺突による文様(?)がある。一体何だろう。

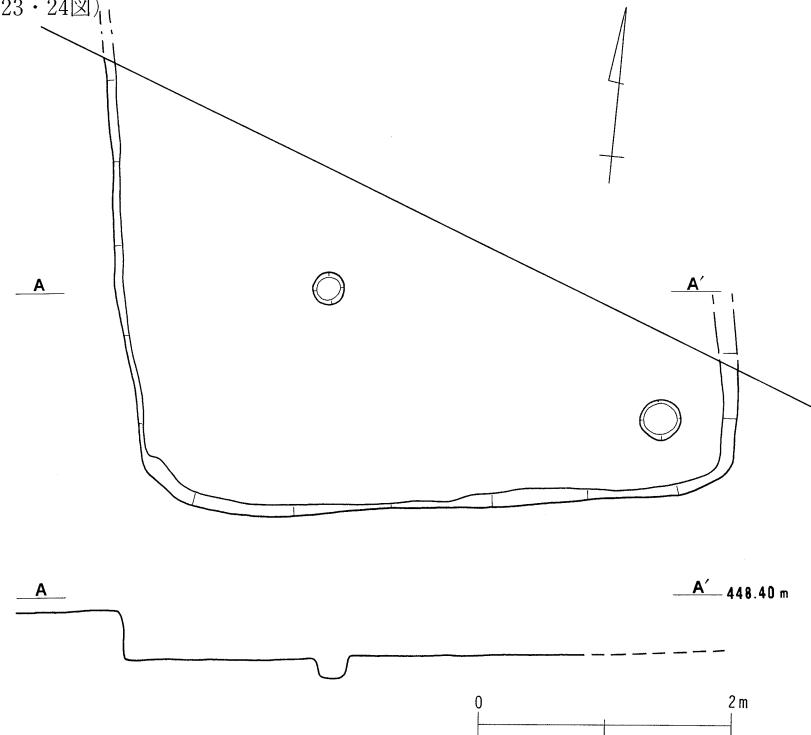


第22図 8号住居址出土遺物 (1/4)

〈9号住居址〉(第23・24図)

〔遺構〕

調査区西半部北端に位置する。北側は溝状遺構に切れ離れていない。規模は南壁で東西約4.7mを測る。平面形は定かでない。床面は比較的良好であった。壁高は35cm前後を測る。炉は遺存部にはない。柱穴の判断は難しいが、浅い小穴が2本確認された。



第23図 9号住居址平・断面図 (1/60)

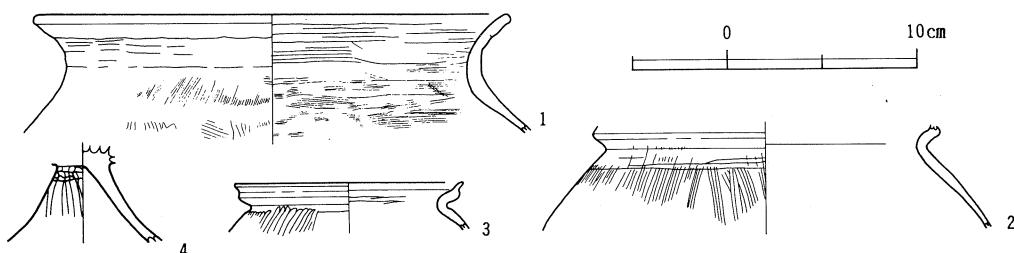
〔遺物〕

遺物の出土は少ない。埋没土中より、モモの種子が出土している。

出土遺物一覧

(単位: cm)

番号	器種	法量等 / 胎土 /		色調	
		整形	・特徴	・	その他
1	甕	口径25	口縁部破片 / 砂粒、赤褐色粒子を含む / 褐色		
		口縁部横撫で。胴部内外面刷毛目、口縁部内面は籠磨きがかけられる。			
2	台付甕	口縁部～肩部破片	/ 砂粒、赤褐色粒子を含む / 暗褐色		
		口縁部横撫で。口唇部欠損。外面頸部下には、斜位と横走する刷毛目。			
3	台付甕	口径12	口縁部破片 / 砂粒を含む / 外面暗褐色、内面白褐色		
		S字状口縁部付甕の資料。外面、頸部内面に刷毛目あり。			
4	高坏	坏部、据部欠損 / 微砂粒を含む	/ 暗褐色		
		外面は籠磨きによって仕上げられる。内面は削り。3孔があくと思われる。			



第24図 9号住居址出土遺物 (1/4)

〈10号住居址〉(第25・26図)

〔遺構〕

調査区西半部中央付近に位置する。規模は一辺約6.2mを測り、隅円方形の平面形を呈する。南～東壁側の削平が著しく、遺構確認面の北壁側との差は約45cmとなっている。壁高は最も高い所で50cm、最も低い所で23cmを測る。床面は北西～南東へ緩傾斜している。柱穴は最寄りの壁より1.5m乃至1.4m離れて方形に配された4本が検出された。柱穴の床面からの深さは、最も深いもので1.1m、最も浅いもので53cmを測り、不揃いである。北壁西側に壁に接し、床面からの深さ約23cmの、65～78cmの不整円形の穴がある。炉は、床面中央から北西寄りの65×80cmの楕円形に浅く窪んだ炭化物等を含む部分で、南側に6×13cmと6×20cmの大きさの枕石を据えてある。焼土は、枕石より北、床面から5cmの深さの所に、直径約20cm、厚さ約2cmで形成されていた。本住居址は、11号住居址・12号住居址を切って構築されている。主軸の方向は、略N-0°-W。

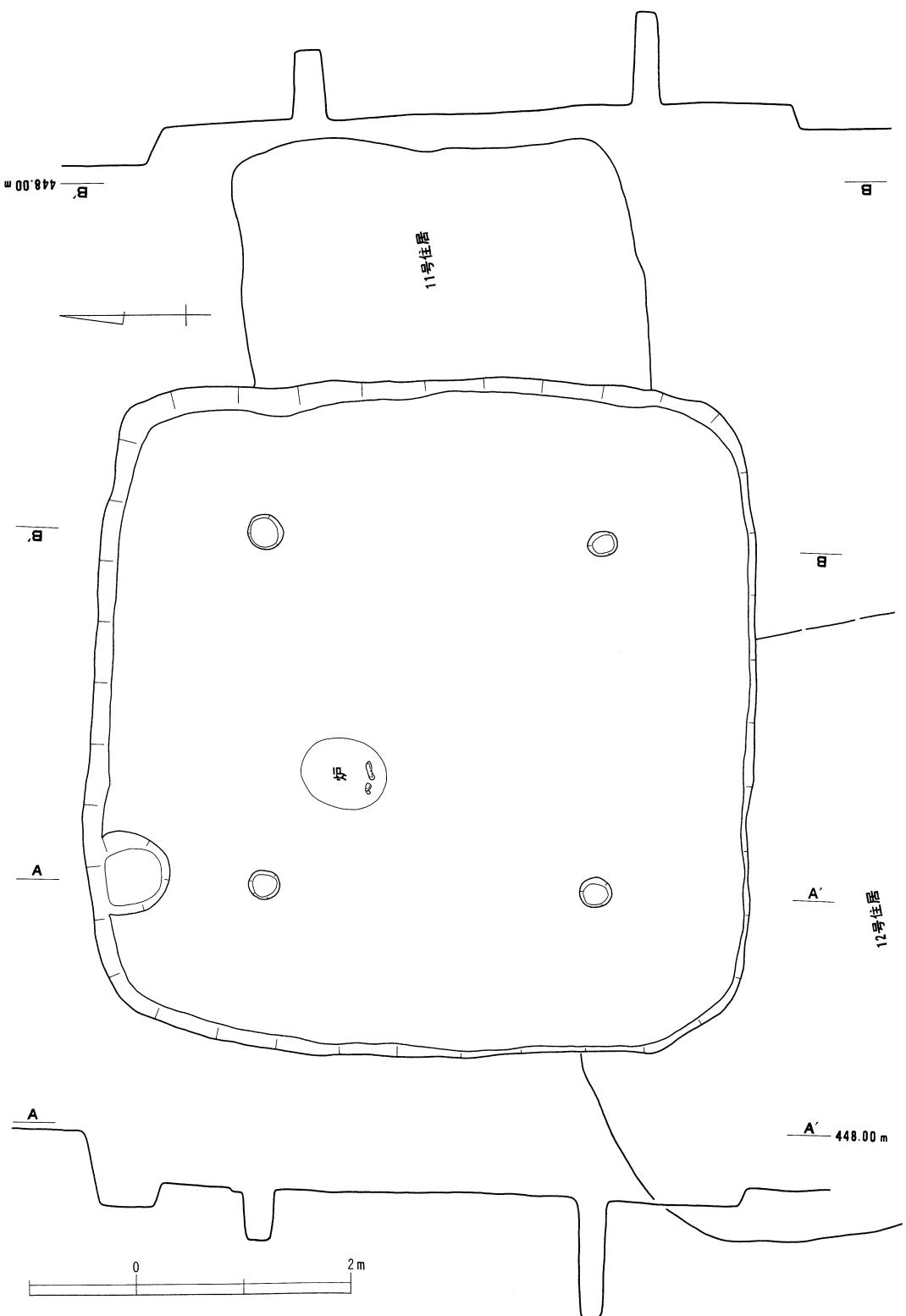
〔遺物〕

比較的大型の竪穴で、遺物の出土も多く、特に北側の北壁際小穴周辺からは目立った。土器の他に、軽石と種子が北西隅から出土している。

出土遺物一覧

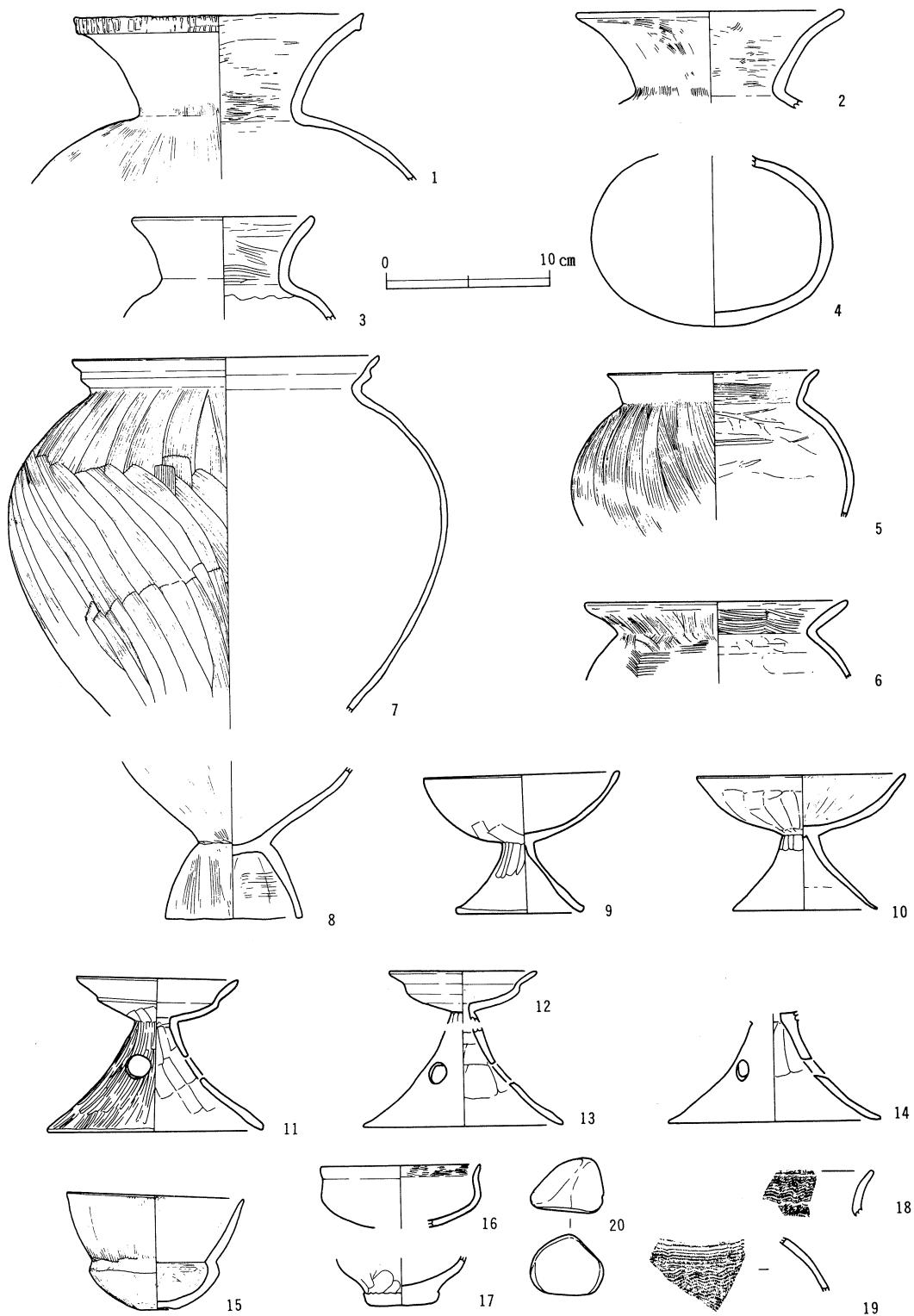
(単位: cm)

番 号	器 種	法 量 等 / 胎 土 / 色 調
		整 形 • 特 徴 • そ の 他
1	壺	口径17.8 口縁部～胴部の破片／砂粒を含む／明白褐色
		外面は縦方向、内面は横方向の範磨きが施される。頸部外面に刷毛目痕あり。 口縁部端は面取りされ、櫛歯状工具による圧痕が連続する。
2	壺	口径16.3 口縁部～頸部の破片／砂粒を含む／暗赤褐色
		外面は、縦位刷毛目の後範磨き、内面は横位刷毛目の後範磨きが施される。頸部外面には刷毛目痕がみられる。
3	壺	口径11.1 口縁部～胴部の破片／砂粒・赤褐色粒を含む／肌色っぽい
		器面は、刷毛目の後、磨きで仕上げられ、口縁部は横撫でされるが、磨滅が顕著で、ザラつき、判別しにくい。
4	壺	頸部～口縁部を欠損／微砂粒、赤褐色粒子を含む／淡褐色
		外面は、丁寧に磨かれていたと思われるが、磨滅によりザラつく。 小型丸底壺
5	台付甕(?)	口径13 脇部下半欠損／砂粒を含む／赤褐色
		口縁部横撫で、内面は刷毛目痕あり。脇部外面は斜位の刷毛目が施される。 脇部内面は粗い範磨きが施される。



第25図 10号住居址平・断面図 (1/60)

番号	器種	法量等／胎土／色調
		整形・特徴・その他
6	甕	口径16 口縁部～胴部の破片／砂粒、赤褐色粒を含む／暗褐色
		口縁部は横撫でされ、内面下半、外面下半はそれぞれ横位、縦位の刷毛目痕がある。胴部外面は横位刷毛目、内面は箆削りされる。
7	台付甕	口径18.7 胴部下半欠損／砂粒を含む／明褐色
		口縁部は横撫で。胴部外面は上から左下り、次いで右下りの刷毛目が順次続く。
8	台付甕	底径8.4 胴部上半欠損／砂粒を含む／外面暗褐色、内面黒色
		胴部内面は磨き、外面は箆削りされる。脚台部外面は縦位の刷毛目、内面は刷毛状工具による削りがみられる。
9	高坏	口径12.1 底径7.9 器高8.5 1/5欠損／精選されている／暗赤褐色
		坏部内面は箆磨き、外面は横撫でされる。脚部外面上半は磨きと削りが施され、下半は横撫でされる。
10	高坏	口径12.7 底径8.8 器高8.3 1/3欠損／精製／褐色
		坏部内面は箆磨き、外面は箆削り、口縁部外面横撫でされる。脚部上半は、削りと磨きが施される。据部は横撫で、脚部内面上半は箆削りされる。
11	器台	口径10 底径13.3 器高9.7 脚部1/3欠損／精選されている／赤褐色
		器受部の口縁部は横撫で、外面下半は箆削りされる。脚部外面は磨き、内面は削りと横撫でが施される。脚部には3孔、器受部底部には単孔があく。
12	器台	口径9 脚部及び1/2欠損／精選されている／暗赤褐色
		口縁部は横撫で、内面は箆磨きがかけられる。
13	器台	底径12.2 器受部欠損／精製／赤褐色
		3孔があく、器受部との接合部に単孔があく。外面は箆磨き、内面は箆削り、横撫でが施される。器面は磨滅によりザラつく。
14	器台	底径13 器受部欠損／精製／赤褐色
		3孔があく、器受部との接合部に単孔があく。外面は箆磨き、内面は箆削り、横撫でが施される。器面は磨滅によりザラつく。
15	鉢	口径10.8 底径2.3 器高7 略完形／精選されている／明橙褐色
		内外面ともに箆磨きされる。頸部外面に刷毛目痕がみられる。
16	鉢	口径9.8 1/3欠損／砂粒を含む／明白褐色
		直立気味の口縁部内面に刷毛目がみられる。器面は磨きがかけられるが磨滅によりザラつく。
17	不詳	底径4.3 底部破片／砂粒を含む／暗褐色
		削りにより仕上げてある。鉢か坏か、それとも蓋か、不明である。



第26図 10号住居址出土遺物 (1/4)

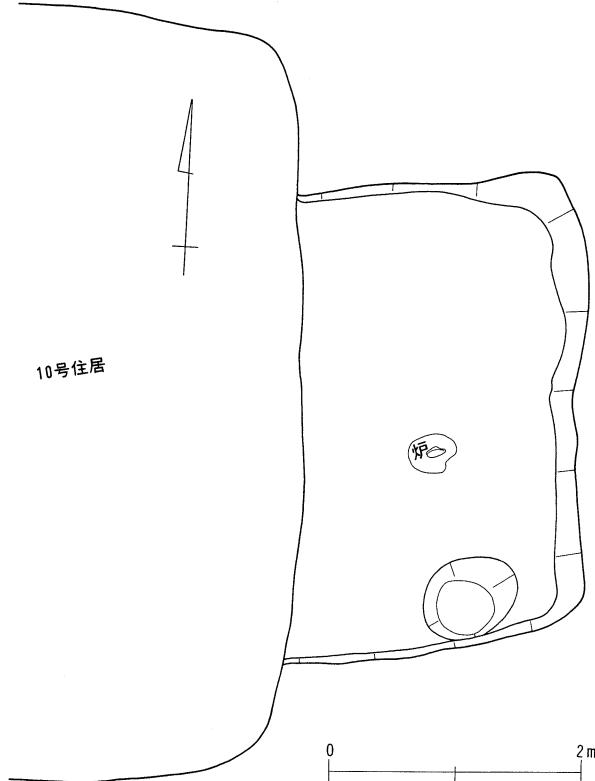
番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調
		整形・特徴
18	甕	—— / 砂粒を含む / 明白黄褐色 内面は刷毛目、外面は、櫛歯状工具による横線文と波状文が施される。
19	甕	口縁部破片 / 砂粒を含む / 外面暗褐色、内面サンドカラー 内面は磨き、外面は櫛描波状文が施される。
20	石器	—— / ——— 全面に擦痕あり。軽石

〈11号住居址〉(第27・28図)

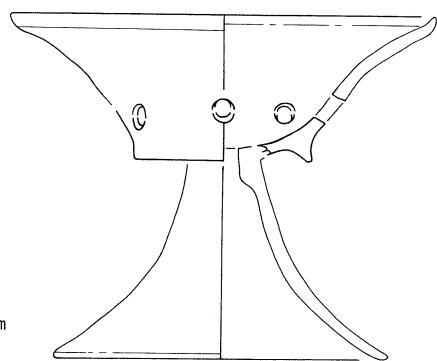
〔遺構〕

調査区西半部中央付近、10号住居址の東に位置する。住居の西半部は、10号住居址に切られ、遺存していない。東壁は、南北約3.5mを測る。壁高は10cm前後で浅い。柱穴はなく、南壁東側に接して、63×77cmの卵形に小穴がある。炉は地床炉で、焼土の厚さ約7cm、

10号住居



第27図 11号住居址平面図 (1/60)



第28図 11号住居址出土遺物 (1/4)

32×40cmの楕円形をし、5×14cmの石が中央部分にある。平面形は、隅円長方形と思われるが東半部の遺存のみで不詳。因って主軸方向も不明。

〔遺物〕

浅い豊穴で、遺物の出土は殆どない。一点紹介する。

出土遺物一覧

(単位: cm)

番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調
		整形・特徴
1	器台	—— / 砂粒を含む / 褶赤褐色 器受部底部のみの破片、内面は磨滅によりザラつく。外面は、磨きがかけられる。 小孔が何カ所かあけられる。装飾器台である。

〈12号住居址〉(第29・30図)

〔遺構〕

調査区西半部中央付近、15-D域に位置する。北側3分2は、10号住居址に切られ遺存していない。南壁は小溝により切られ、東壁は削平されている。遺存部分の壁高は、北壁が高く約20cmを測る。平面形は隅円長方形と思われるが、不詳。床面は略平坦。柱穴は、

3本が検出され、

4本目は10号住居址によって消滅。柱穴の床面からの深さは40cm強を測る。別に約70×80cmの楕円形の穴が、西壁近くにある。炉は、床面中央よりも東側にあり、57×64cmの不整円形に焼土・炭化物の黒い部分で、西端に長さ約19cmの石が置いてある。長軸の方向は、N-81°-Eか。

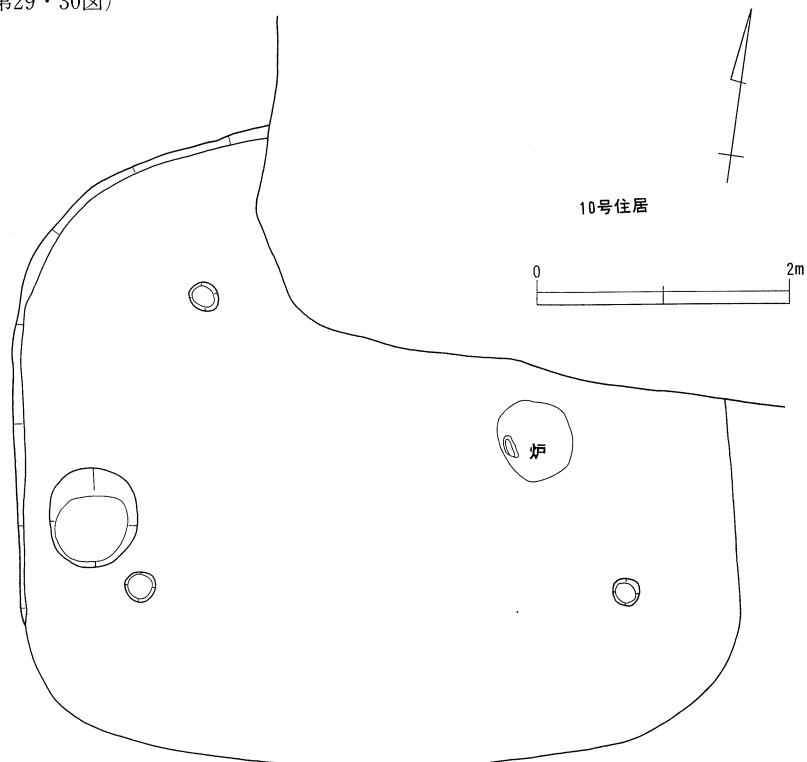
〔遺物〕

出土遺物は少ない。

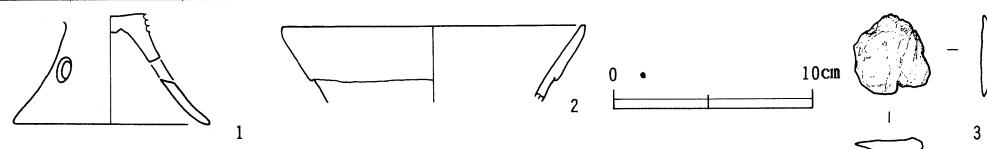
出土遺物一覧

(単位: cm)

番号	器種	法量等		/	胎土		/	色調	
		整	量	形	・	特徴	・	その他の	
1	高坏	高坏脚部破片	/	砂粒を含む	/	暗褐色			
		外面磨き。内面削り。3孔がある。							
2	甌(?)	口径16	口縁部破片	/	砂粒を含む	/	内外暗褐色、外面褪赤褐		
							折り返し口縁部横撫で。内面粗い磨き。外面刷毛目痕あり。		
3	不詳				/	砂粒を含む	/	白褐色	
								炉から出土。粘土の塊が焼けたものか。	



第29図 12号住居址平面図 (1/60)



第30図 12号住居址出土遺物 (1/4)

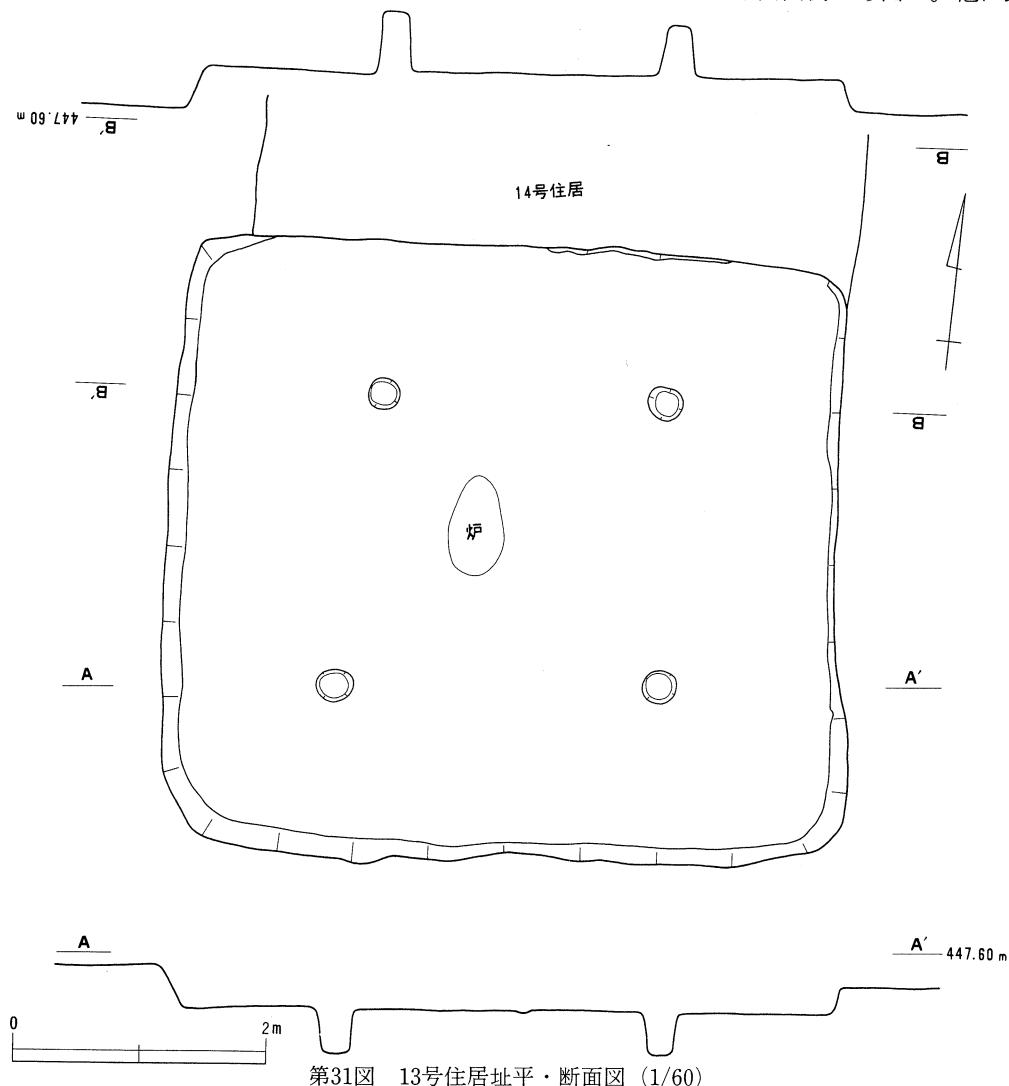
〈13号住居址〉（第31・32図）

〔遺構〕

調査区西半部東側に位置する。北壁は14号住居址と重複しており、明瞭でなかったが、極僅か立ち上がりがあり14号住居址を切って、本住居址が構築されたとされる。規模は東西約5.4m、南北約4.9mで、平面形は隅円方形を呈する。壁高は、西壁が高く40cm前後で、他は25cm前後を測る。柱穴は最寄りの壁より1.5m乃至1.3m離れて略方形に配された4本が検出された。柱穴の床面からの深さは、約45～35cmを測る。炉は、床面中央部やや西寄りにあり、45×80cmの長楕円形に厚さ約9cmで焼土・炭化物等が混入していた。床面は東へ微傾斜。長軸方向はN-87°-E。

〔遺物〕

西辺には甕類、南側には器台、東側には高坏等が出土。炭化材が床面西側から出土。他に鉄

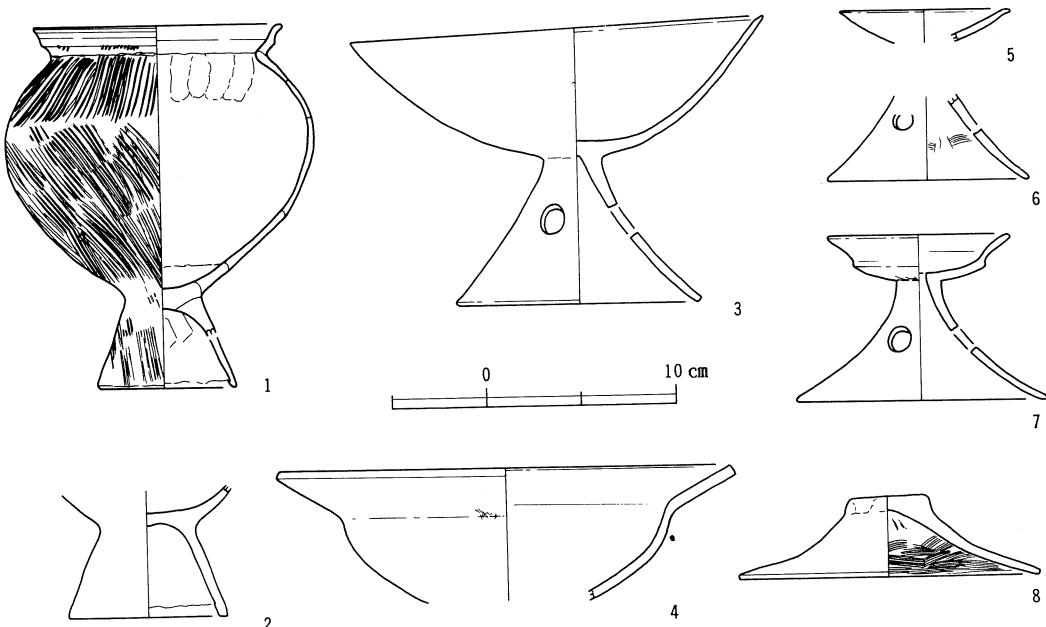


が出土しているが小片で形状・用途等は不詳な為図化しなかった。

出土遺物一覧

(単位: cm)

番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調
		整形・特徴・その他
1	台付甕	口径13.3 器高19.2 底径7.7 略完形 / 白色粒を多量に含む / 褐色
		S字状口縁部横撫で。内面胴部上方に指頭圧痕がみられる。外面胴部～脚台部にかけ順次、左下り右下り、縦方向の刷毛目が施される。脚台部端内面は折り返し。煤の付着は外面胴部上位以下に著しく、一部口縁部にも付着している。
2	台付甕	底径8.4 脚台部のみ / 砂粒を含む / 棍赤褐色
		残存胴部外面範削り。全体に磨滅しザラザラしている。脚台部は横撫ですか? 脚台部端内面折り返し。
3	高坏	口径21.8 底径13 器高14.6 1/5欠損 / 微砂粒、赤色粒を含む / 褐色
		坏部外面は、磨滅及び剝落が著しく、脚部も磨滅され、整形等は不明。坏部内面は磨きがかけられる。口唇端部は極浅い窪みがめぐり、内傾する平坦面のような感じをつくりだしている。脚部には、3孔があく。
4	高坏	口径24 口縁部付近の破片 / 砂粒、赤褐色粒子を含む / 肌色っぽい
		口縁が外反する高坏の資料。内面は範磨き、外面は刷毛目がみられる。
5	器台	口径9 口縁部破片 / 砂粒、赤褐色粒子を含む / 淡褐色
		口縁部横撫で。器面は磨きがかけられる。外面に刷毛目がのこる。
6	器台	底径10.6 脚部破片 / 砂粒、赤褐色粒子を含む / 淡褐色
		脚据部横撫で。外面範磨き。内面に刷毛目痕あり。3孔があく。



第32図 13号住居址出土遺物 (1/4)

番号	器種	法量等	/	胎土	/	色調
		整形	・	特徴	・	その他
7	器台	口径9.6 底径13.2 器高8.7	器受部若干欠損／微砂粒、赤褐色粒を含む／赤褐色			
		口縁部及び脚据部横撫で。器受部接合部付近及び脚部内面上位箇所削り。他は箇所が施される。器受部底部に単孔、脚部に3孔があく。				
8	蓋	鉢部径4.3 底径15.8 器高4.3	1/5欠損／砂粒、赤褐色粒を含む／暗褐色			
		外面磨滅によりザラつく。内面刷毛目痕あり。				

〈14号住居址〉(第33・34図)

〔遺構〕

調査区西

半部東側に A-A' 447.50m

位置する。

南半部は13

号住居址に
切られ遺存
していない。

規模は北壁
で東西約4.
6mを測る。
柱穴は2本
で床面から
の深さ35cm
を測る。壁
高は20cm前
後を測る。

床面は平坦

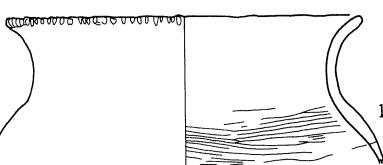
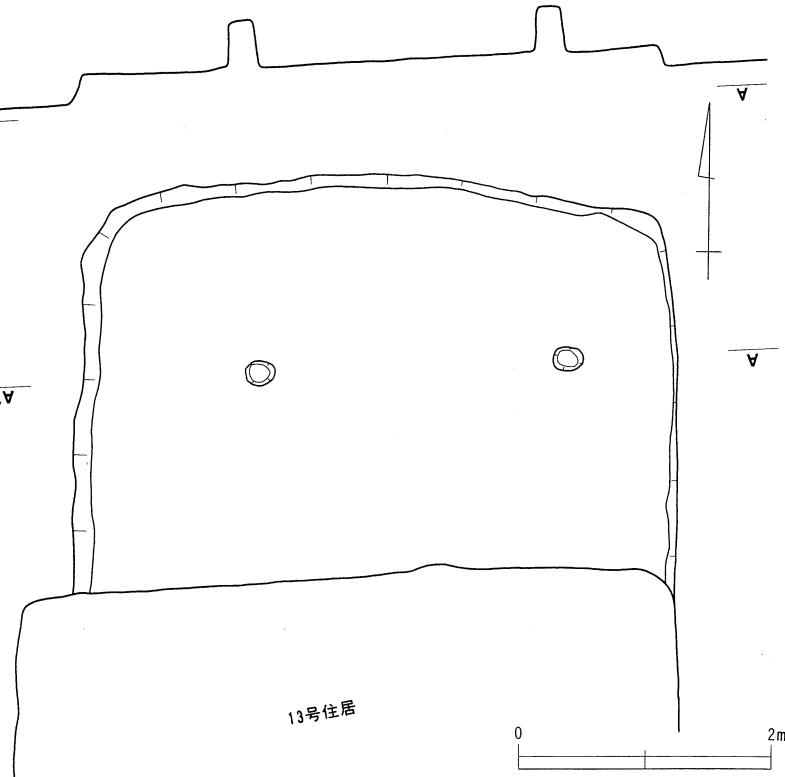
第33図 14号住居址平・断面図 (1/60)

で良好、13号住居址と略同レベルであるが、南側で切ら
れている。炉は遺存部にはなかった。

〔遺物〕

出土は少ない。

出土遺物一覧



第34図 14号住居址出土遺物 (1/4)

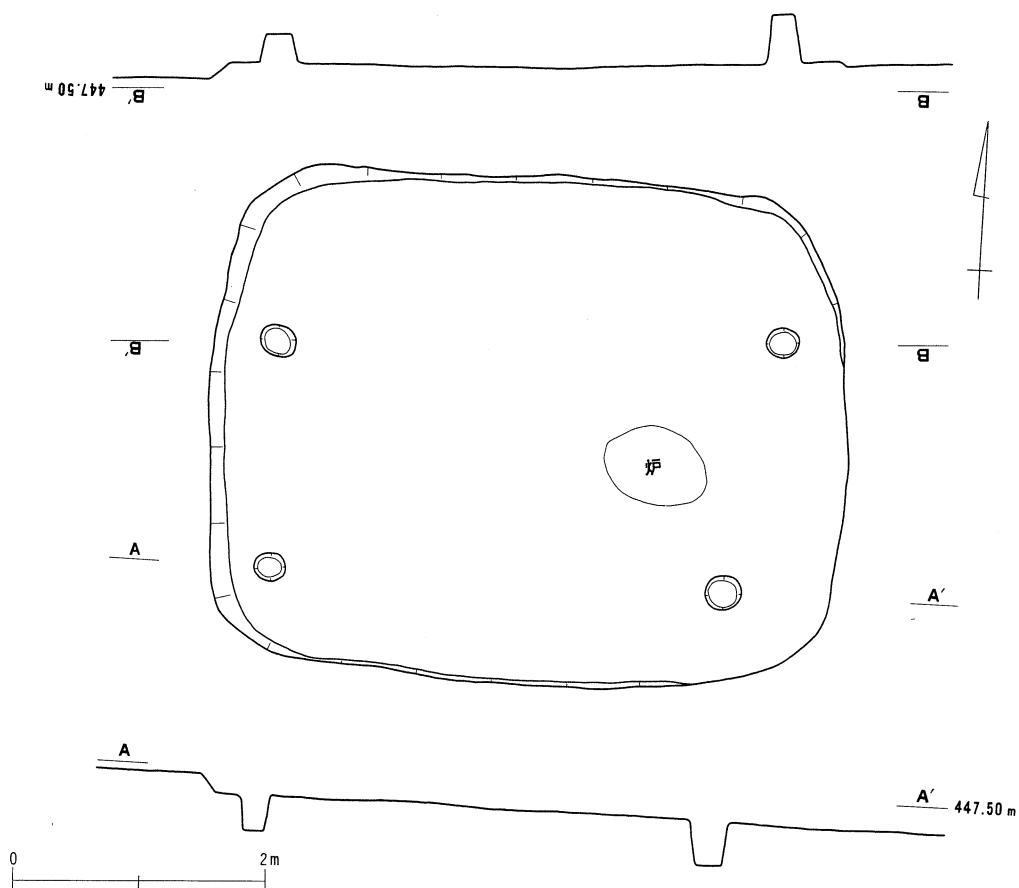
(単位: cm)

番号	器種	法量等	/	胎土	/	色調
		整形	・	特徴	・	その他
1	甕	口径18.8 口縁部付近破片	/ 砂粒を含む	外表面暗褐色、内面淡褐色		
		口縁部は横撫でされ、刻目が連続する。胴部内面は刷毛目がみられる。		胴部外表面は、撫でのような細かい刷毛目か?		

<15号住居址> (第35・36図)

[遺構]

調査区西半部東側、13号住居址の南側のE-18域に位置する。規模は東西約5m、南北約4mで、平面形は隅円長方形を呈する。削平が著しく浅い竪穴となっており、東側壁はほとんど立ち上がりがなく、壁高は高い所でも約15cmを測るのみである。柱穴は東・西壁に接近して検出された4本があたり、床面からの深さは約20~40cmを測る。床面は中央部が高く、東・西に若干低くなっている。炉は地床炉で、床面中央部から東寄りの所に60×85cmの楕円形で、焼土等の厚さは約10cmとなっていた。長軸の方向は、N-87°-E。



第35図 15号住居址平・断面図 (1/60)

[遺物]

遺物の出土は少なく、一点のみ図化出来た。

甕形土器

1. S字状口縁台付甕の資料。胎土には砂粒・赤褐色粒を含む

色調は赤褐色。磨滅により器面はザラつく。口縁部横撫で。胴部には斜位と横走する刷毛目。

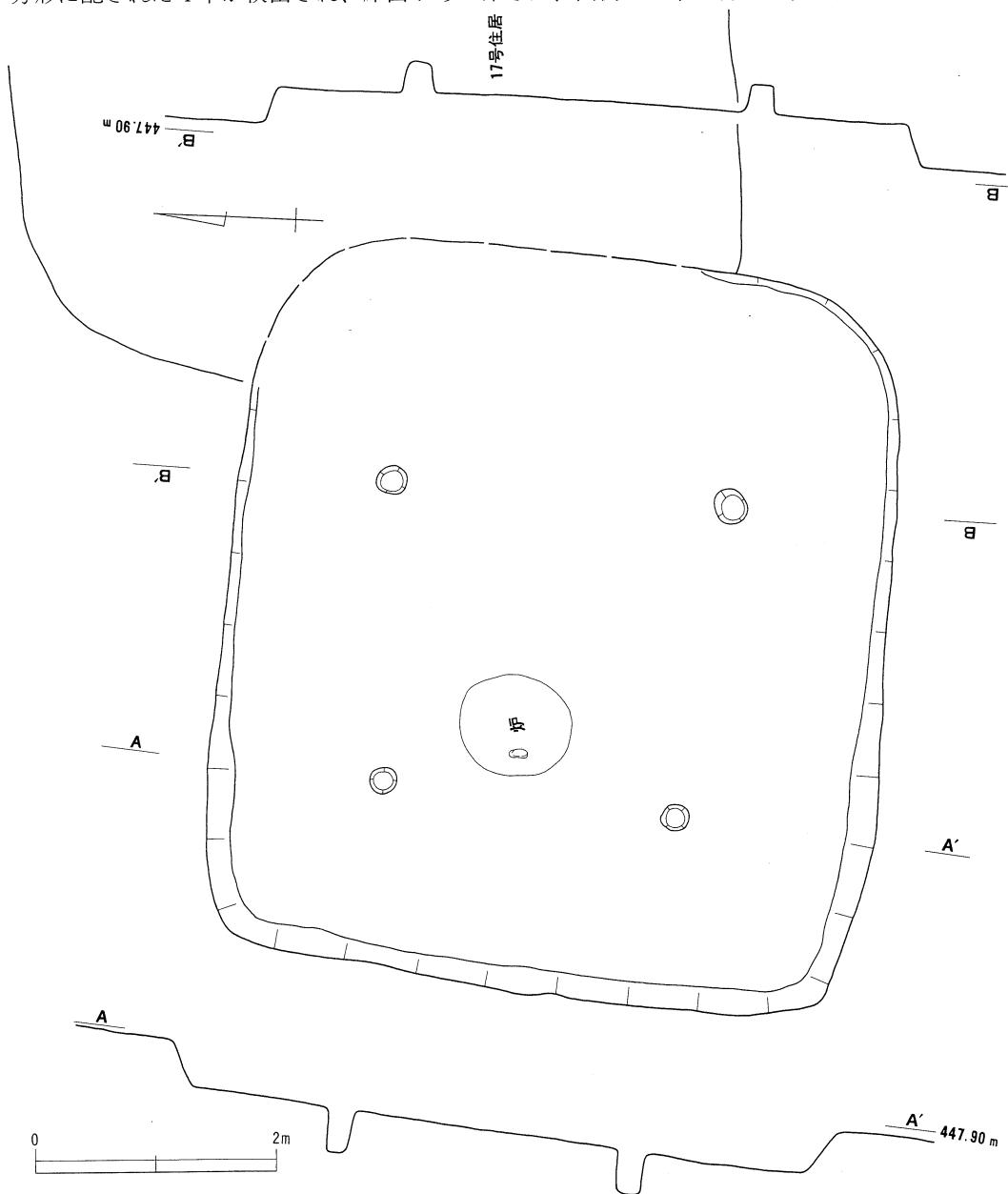


第36図 15号住居址出土遺物 (1/4)

〈16号住居址〉（第37・38図）

〔遺構〕

調査区西半部中央付近の17-C域に位置する。黄褐色土の中に暗褐色土の落ち込みを発見し発掘する。壁は外傾しながら良好な立ち上がりをみせるが、東壁から北壁にかけての一部は17号住居址と重複しており明瞭ではなかった。壁高は、西側が高く40cm前後、東側は25cm前後を測る。規模は東西約6.1m、南北約5.6mで、平面形は隅円長方形を呈する。柱穴は床面内に略方形に配された4本が検出され、床面からの深さは、西側の2本は約35cm、東側の2本は約25



第37図 16号住居址平・断面図 (1/60)

cmを測る。北東側の柱穴の内側には偏平な石がおかれている。炉は地床炉で、床面中央部から西寄り、2本の柱穴間よりも内側にあり、直径90cm前後の不整円形に床面より浅く窪んだ部分で、炭化物等の層が6cm程あり、その下に直径25cmの範囲で焼土が形成されていた。西に7×14cmの枕石が置かれている。床面は略平坦で17号住居址と同レベルで、見分けにくかった。また、17号住居址床面上に本住居址の床面が点在していたので、17号住居址を切って本住居址が構築されたと思われる。長軸の方向は、N-87°-W。

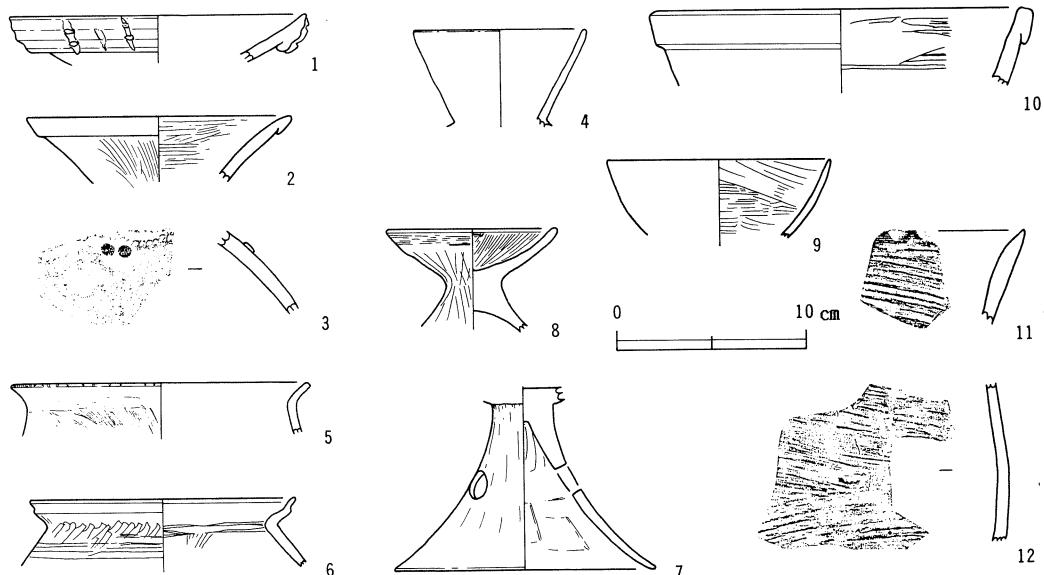
〔遺物〕

大型の住居址ではあるが、遺物の出土は少なく小片ばかりである。炉の近くには炭化材が出土している。

出土遺物一覧

(単位: cm)

番 号	器 種	法 量 等 / 胎 土 / 色 調
		整 形 • 特 徴 • そ の 他
1	壺	口径15.6 口縁部破片 / 砂粒、赤褐色粒を含む / 淡赤褐色 折り返し口縁部外側には、凹線文と、棒状浮文が施される。内面は鏡磨き。
2	壺	口径14 口縁部破片 / 砂粒を含む / 錫赤褐色 折り返し口縁部外側横撫で。内面縦位刷毛目痕あり。
3	壺	胴部破片 / 砂粒、雲母粒等を含む / 赤褐色 外面に刺突が連続し、円形貼付文が施される壺形土器の資料。
4	壺	口径9.1 口縁部破片 / 砂粒を含む / 暗白褐色 丁寧な磨きによる仕上げ、小型壺の資料
5	甕	口径15.7 口縁部破片 / 砂粒を含む / 暗褐色 口縁部は横撫でされ、刻目が連続する。胴部内面は鏡磨き、外面は細かい刷毛目がみられる。



第38図 16号住居址出土遺物 (1/4)

番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調
		整形・特徴・その他
6	台付甕	口径14 口縁部破片 / 砂粒、赤褐色粒を含む / 外面暗色、内面白褐色 頸部内面に刷毛目、胴部外面に斜位と横走する刷毛目の施されるS字口縁台付甕の資料。
		底径13.7 坏部欠損 / 微砂粒、赤褐色粒子を含む / 褐色
7	高坏	外面は鎧磨き。内面上半は鎧削り、下半は撫でが施される。3孔があく。
		底径13.7 坏部欠損 / 微砂粒、赤褐色粒子を含む / 褐色
8	器台	口径9 脚部欠損 / 微砂粒を含む / 白褐色 外面は刷毛整形の後磨きがかけられる。口縁部は横撫でされ、器受部内面は鎧磨きされる。脚部には3孔があくか。
		口径11.7 底部欠損 / 砂粒を含む / 橙褐色
9	高坏(?)	磨きにより仕上げられているが、内面に刷毛目痕がある。磨滅によりザラつく。
		口径20 口縁部破片 / 砂粒を含む / 暗い肌色
10	甕(?)	折り返し口縁をもつ甕形土器の資料。内面に刷毛目痕あり。
		口径20 口縁部破片 / 砂粒を含む / 暗い肌色
11	甕	口縁部破片 / 砂粒を含む / 暗褐色
		横位の条痕文を有する甕形土器の資料。内面は撫で状の整形
12	甕	胴部破片 / 砂粒を含む / 暗褐色
		横位の条痕文を有する甕形土器の資料。内面は撫で状の整形

〈17号住居址〉 (第39・40図)

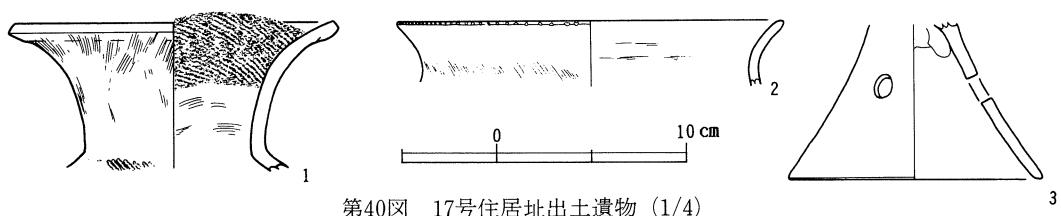
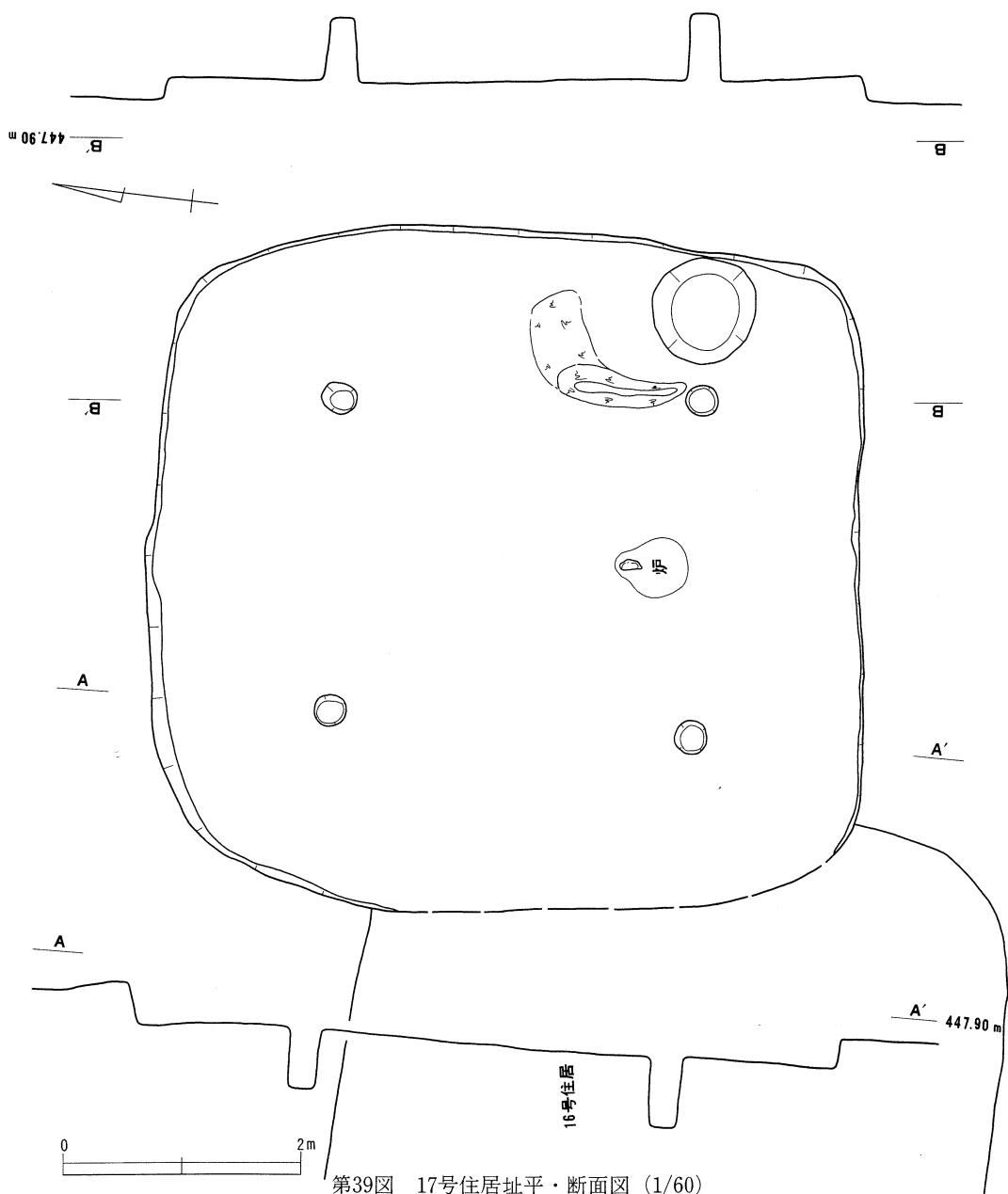
〔遺構〕

調査区西半部中央に位置する。長軸方向は、N—6°—W。排土作業中に土器が出土し、住居址とした。規模は東西約5.8m、南北約5.9mで、平面形は隅円方形を呈する。西壁の一部は、16号住居址に切られ遺存していないが、他は良好な立ち上がりをみせる。壁高は、約20~35cmを測る。柱穴は、略方形に配された4本が検出され、床面からの深さは約50~60cmを測る。東壁南側には、床面からの深さ約40cmで直径約90cmの小穴があり、めぐる土手状遺構が一部遺存。床面は略平坦で良好。炉は地床炉で、床面南側柱穴間を結んだ線よりも内側にあり、50×60cmの瘤付円形で、9×20cmの枕石をともない、炭化物層と焼土層が厚さ約6cmで形成されていた。

出土遺物一覧

(単位: cm)

番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調
		整形・特徴・その他
1	壺	口径17.5 口縁部破片 / 砂粒、赤褐色粒を含む / 赤褐色 折り返し口縁部内側及び外面頸部下に繩文が施される。内面は横位、外面は縦位の刷毛整形の後磨きがかけられている。
		口径20.4 口縁部破片 / 砂粒、雲母粒を含む / 暗褐色
2	甕	口縁部は横撫でされ、刻目が連続する。内外面に刷毛目痕あり。
		底径13.3 脚部破片 / 砂粒を含む / 褐色、外面は丹彩される 外面は磨き、内面は鎧削り及び撫でが施される。3孔があくと思われる。
3	高坏	底径13.3 脚部破片 / 砂粒を含む / 褐色、外面は丹彩される 外面は磨き、内面は鎧削り及び撫でが施される。3孔があくと思われる。



[遺物]

唯一排土作業で出土したものが図化できるのみであった。

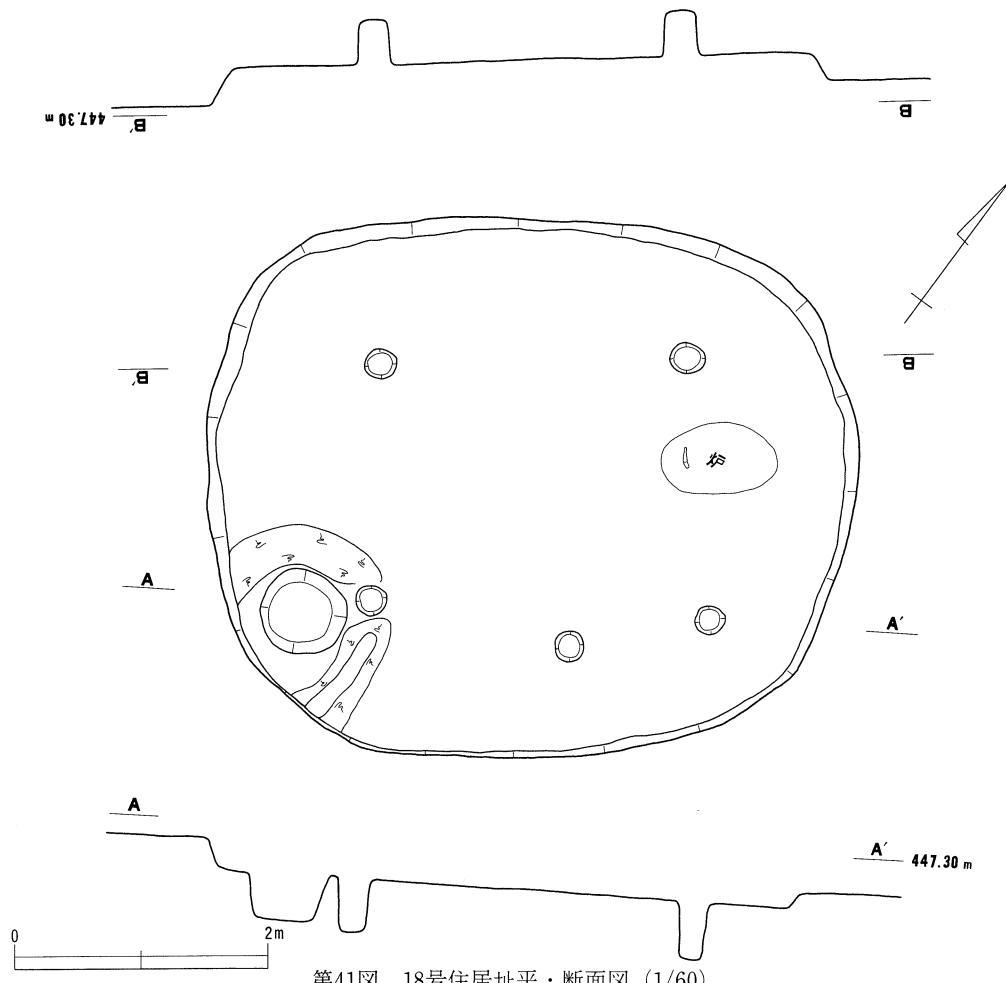
〈18号住居址〉(第41・42図)

〔遺構〕

調査区西半部南辺の20-E域に位置する。小型の遺存のよい竪穴式住居址となっている。規模は長軸約5.1m、短軸約4.3mで、平面形は胴張りの隅円長方形を呈する。壁は外傾しながら立ち上がり、高さは東側壁が低く約15cm、他は20~30cm前後を測る。柱穴は長方形に配された4本があたるが、南側の2本の柱穴を結んだ線よりも外側に主柱穴と同じ大きさで小穴が検出された。柱穴の床面からの深さは40cm前後を測る。炉は床面北東側の2本の柱穴を結んだ線上にある。破損の著しい埋甕炉で、57×92cmの長楕円形に炭化物等を含む部分が厚さ約6cm堆積し、その下に36×60cmの楕円形に厚さ約7cmの焼土層が形成されている。他に内部施設として、住居址内南西隅に、柱穴を挟むように土手状のたかまりが壁から出ており、その中に床面からの深さ約35cm直径約70cmの不整円形の穴がある。床面は略平坦で良好。長軸方向は、N-56°-E。

〔遺物〕

遺物の出土は少なく、炉に使用された壺の他甕と小型土器のみであった。針金状の鉄小片が



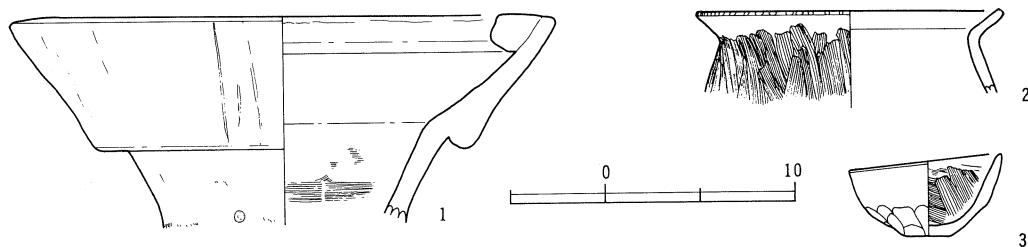
第41図 18号住居址平・断面図 (1/60)

出土しているが、僅かで不詳なため図化困難であった。

出土遺物一覧

(単位: cm)

番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調
		整形・特徴・その他
1	壺	口径28.8 口縁部破片 / 砂粒を含む / 褐黄褐色
		器面は刷毛整形の後磨きで仕上げられたと思われるが磨滅が著しい。複合口縁部外側には3本1単位の細い棒状沈線が施される。口縁内側に粘土帯を巡らし、口唇部は平坦面を有す。内面に煤付着。炉体土器
2	甕	口径16.2 口縁部付近破片 / 砂粒、雲母粒を含む / 褐色
		口縁は横撫でされ、刻目が巡る。内面は鏡磨き。胴部外面は縦位の細かい刷毛目が施される。
3	鉢	口径8 底径2.5 器高4 略完形 / 砂粒を含む / 黄土色
		内面は刷毛目痕が顕著。外面は鏡削り。小型の浅鉢形土器。



第42図 18号住居址出土遺物 (1/4)

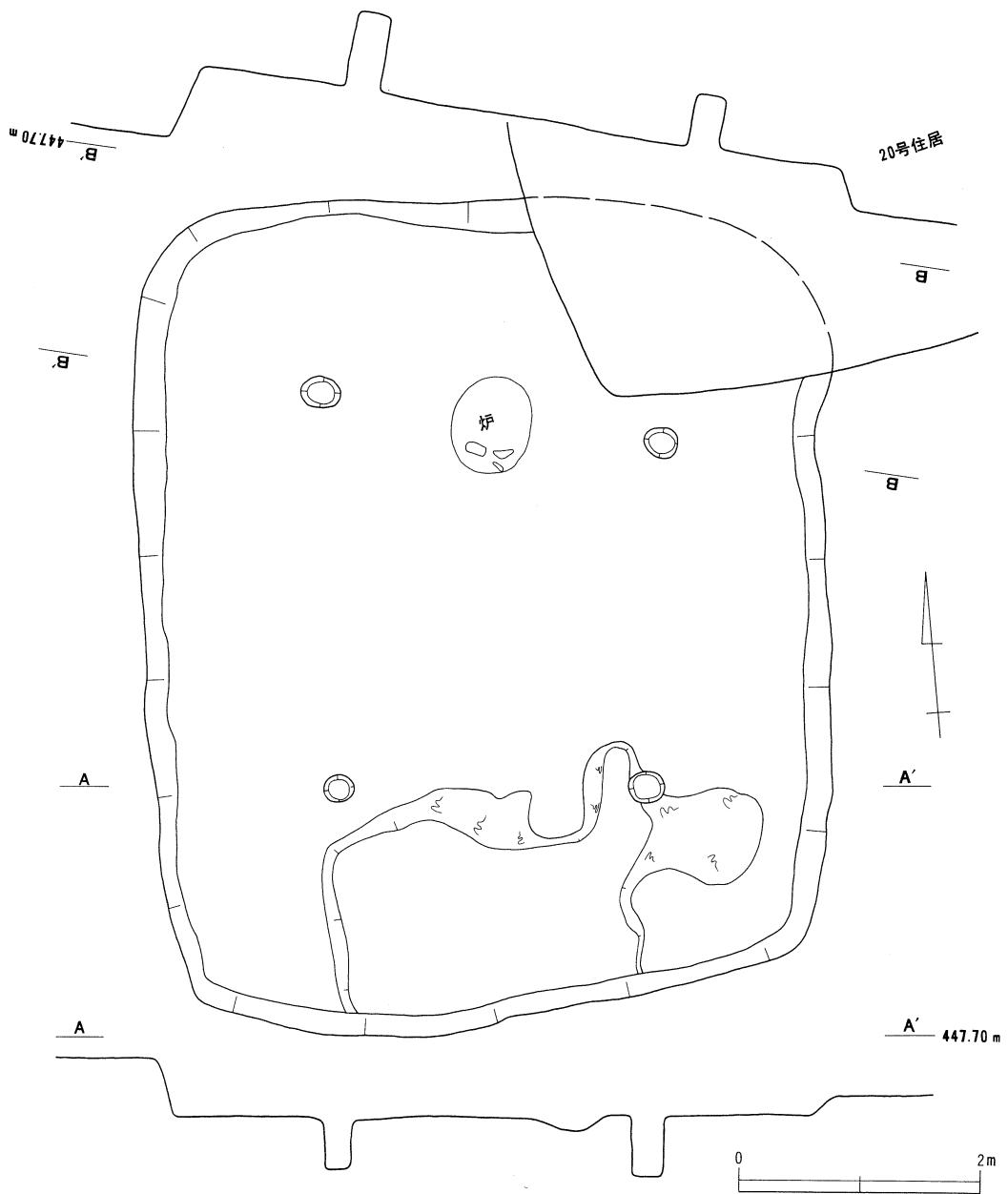
<19号住居址> (第43・44図)

[遺構]

調査区西半部南端の20-C域に位置する。規模は東西約5.6m、南北約6.9mで、平面形は隅円長方形を呈する。ローム層を掘り込んでおり、壁は外傾しながら立ち上がる。西壁の遺存状態は良好であるが、東壁は削平され低くなっている。壁高は、最も高い所で約70cm、最も低い所で約24cmを測る。柱穴は4本主柱穴で、略長方形に配されており、床面からの深さは40~65cm程と不揃い。床面は北側へ斜めになっており、北東隅は20号住居址に切られている。炉は北側2本の柱穴を結ぶ線上中程にあり、約65×80cmの炭化物等を含む楕円形の部分で、枕石を3個ともなっており、炭化物層よりも約6cm下の南側に、直径約30cmの円形に厚さ約6cmで焼土層が形成されている。南側2本の柱穴外側東寄りには、約2×3mの範囲で寝台状のたかまりがある。長軸の方向は、N-3°-E。

[遺物]

遺物は床面直上からのものが多いが、完形品は少なく、寝台状のたかまり上から高壙の略完形品が出土している。床面上中央からは、建築用材として使用されたものか、炭化材が散在して出ている。また、特殊なものとしては、北壁際に土器の破片と混じって粘土のかたまりが発見された。これは土器作成用のものとも考えられるが、果たしてどうであろうか。



第43図 19号住居址平・断面図 (1/60)

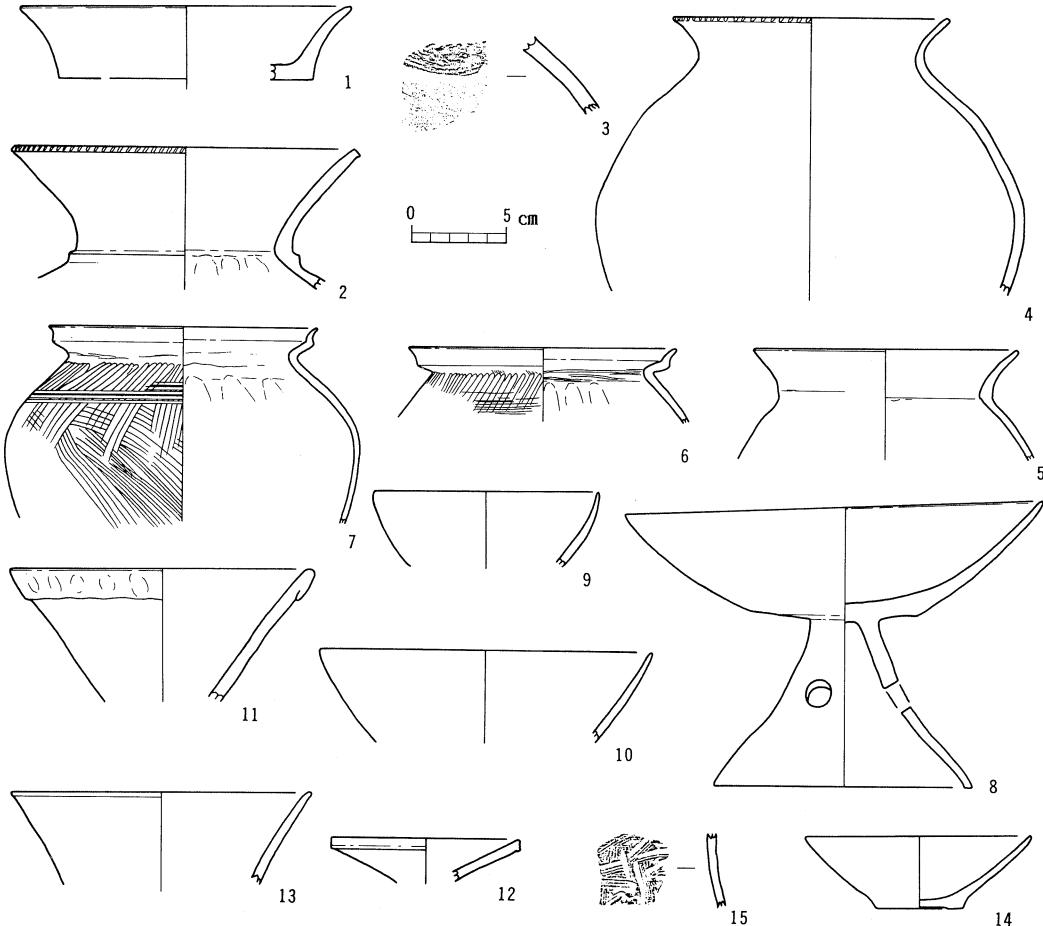
出土遺物一覧

(単位: cm)

番 号	器 種	法 量 等 / 胎 土 / 色 調
		整 形 • 特 徴 • そ の 他
1	壺	口径17.5 口縁部破片 / 砂粒を含む / 褐褐色 有段の複合口縁を有する壺形土器の資料。撫でと磨きにより仕上げてある。 磨滅しているが丹彩されていたことがわかる。

番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調
		整形・特徴・その他
2	壺	口径18.4 脊部以下欠損 / 砂粒、赤褐色粒を含む / 白褐色 口縁部に刻目がめぐる。器面は磨きによる仕上げ。頸部外面に凸帯が一本めぐる。 脣部内面に指頭圧痕がみられる。
3	壺	—— / 砂粒を含む / 暗褐色 外面頸部下に刷毛状工具による押圧文が施される壺形土器の資料。
4	甕	口径14.6 口縁部～脣部の破片 / 砂粒、赤色粒を含む / 暗褐色 口縁部は、横撫でされ、刻目が連続する。脣部外面は細かい刷毛目、内面は刷毛目がのこるが磨き仕上げ。外面中位より若干上に煤の付着がみられる。
5	甕	口径14 口縁部～脣部の破片 / 砂粒、赤褐色粒を含む / 暗褐色 口縁部横撫で。内面は箝磨きされる。脣部外面は撫でか。
6	台付甕	口径14 口縁部付近の破片 / 砂粒を含む / 楔黄褐色 S字状口縁部横撫で。頸部内面には刷毛目。脣部外面には、斜位と横走する刷毛目、内面は指頭圧痕がみられる。
7	台付甕	口径14.1 口縁部～脣部の破片 / 砂粒を含む / 暗褐色 S字状口縁部横撫で。内面に指頭圧痕がみられる。脣部外面は、上半が左下り、下半が右下りの刷毛目で、肩部に沈線が横走する。
8	高坏	口径22 底径13.7 器高14.7 / 微砂粒を含む / 赤褐色 坏部内面～脣部外面は箝磨き。口縁部は横撫で。口唇にわずかに平坦面を有する。脚部内面下半は刷毛目がうすい。脚部には4孔があく。
9	高坏	口径11.9 口縁部破片 / 精製 / 明褐色 口縁部横撫で、他は箝磨きによる仕上げ。
10	高坏(?)	口径17.6 口縁部破片 / 微砂粒、赤褐色粒を含む / 楔赤褐色 箝磨きにより仕上げられ、丹彩される。
11	瓶	口径16.1 脣部～底部欠損 / 砂粒、若干の赤褐色粒を含む / 白肌色 折り返し口縁部は横撫でされるが、外面に指頭圧痕が残る。内面は磨きがかけられる。
12	器台	口径10 器受部口縁部破片 / 砂粒を含む / 赤褐色 磨きと撫でによる整形
13	不詳	口径15.8 口縁部破片 / 砂粒を含む / 楔黄褐色 磨きによる仕上げ。口縁は緩く外反し開く形態で、口唇部外側には低い凸帯がめぐる、鉢乃至高坏と考えられるが不明。
14	鉢	口径11.9 底径4.6 器高3.8 1/3欠損 / 砂粒を含む / 暗褐色 撫でによる整形。底部は浅く凹む、あげ底。小形の浅鉢形土器

番号	器種	法量等	/	胎土	/	色調
		整形	・	特徴	・	その他の
15	甕(?)		/	砂粒を含む	/	白褐色
		内面は刷毛目。外面は縦横の刷毛目がみられる甕形土器の破片資料。				



第44図 19号住居址出土遺物 (1/4)

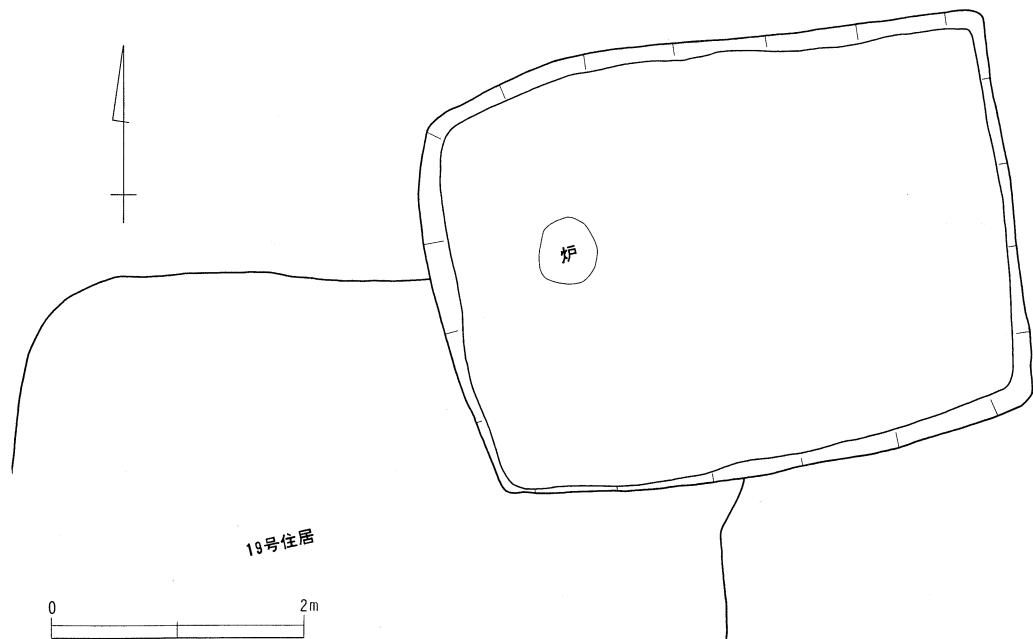
〈20号住居址〉(第45・46図)

〔遺構〕

調査区西半部南端の20-D域に位置する。19号住居址の北東に、19号住居址を切って構築される。規模は東西約4.6m、南北約3.5mで、平面形は長方形を呈する。床面は平坦で、全面に堅く良好である。壁は良好な立ち上がりをみせるが、南西側は19号住居址と重複しており明瞭ではなかった。壁高は、西壁～北壁にかけて高く約50cm、東側壁は30cm前後を測る。柱穴はない。炉は住居址内西方向にあり、直径50cm前後の不整円形の地床炉で、炭化物等の部分が約4cm堆積し、その下に直径約15cm、厚さ約2cmで焼土層が形成されている。長軸方向、N-83°-E。

〔遺物〕

埋没土からは土器小片の出土が多い。形状の推定できるものは、床面直上からの出土で、本



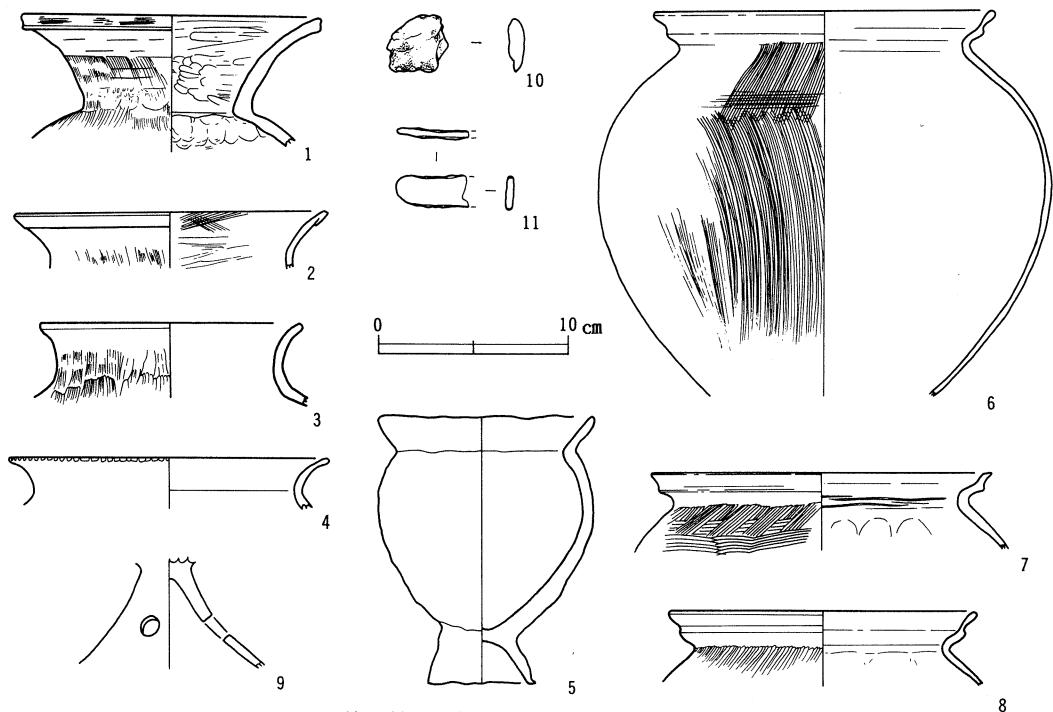
第45図 20号住居址平面図 (1/60)

遺構にともなうものであろう。床面中央付近からは炭化材が出土している。

出土遺物一覧

(単位: cm)

番 号	器 種	法 量 等 / 胎 土 / 色 調
		整 形 • 特 徴 • そ の 他
1	壺	口径15.8 脊部以下欠損 / 砂粒、赤褐色粒を含む / 褐色
		口縁部は横撫でされ、内面は箆磨き、外面は細かい刷毛目が施される。脊部外面は箆磨きされ、内面には指頭圧痕がある。外面頸部上位に爪形の抉り痕がある。
2	壺	口径16.5 口縁部破片 / 砂粒を含む / 暗褐色
		折り返し口縁の広口壺の破片資料。外面細かい刷毛目、内面刷毛目痕あり。外面に煤付着。
3	甕	口径13.8 口縁部破片 / 砂粒を含む / 白褐色
		口縁部横撫で。内面横位箆磨き。外面刷毛目痕あり。若干煤けている。台付甕の可能性もある。
4	甕	口径16.8 口縁部破片 / 砂粒を含む / 褐赤褐色
		口縁部に刻目の連続する甕の小片資料。台付甕か? 口縁部横撫で。
5	台付甕	口径11.4 底径5.7 器高14.2 1/5欠損/砂粒、赤褐色粒を含む/外面暗褐色、内面明褐色
		器面は撫で及び磨きで仕上げてあるが、磨滅により若干ザラつく。
6	台付甕	口径18 口縁部~脊部の破片 / 砂粒が多い / 外面暗褐色、内面明褐色
		S字状口縁部横撫で。脊部に斜位刷毛目が上下二段に施され、肩部に刷毛目が横走する。



第46号 20号住居址出土遺物 (1/4)

番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調
		整形・特徴・その他
7	台付甕	口径18 口縁部～肩部の破片／砂粒、若干の赤褐色粒子を含む／外面暗褐色、内面白褐色
		S字状口縁部横撫で。胴部は斜位の刷毛目。肩部に横位の刷毛目が施される。 頸部内面に刷毛目痕あり。
8	台付甕	口径16.3 口縁部付近破片 / 砂粒、赤褐色粒を含む / 橙褐色
		S字状口縁部横撫で。胴部外斜位の刷毛目。
9	高坏	脚部破片 / 砂粒、赤褐色粒を含む / 褐色
		外面は箆磨き、内面は細かい刷毛目が施され、3孔があく。
10		———— / 微砂粒、赤褐色粒子を含む / 暗赤褐色
		焼成を受けた、粘土のかたまりと思われる。
11		———— / ————— / 鉄鏽色
		鉄製品の小片と思われるが。不詳

<21号住居址> (第47・48図)

[遺構]

調査区西半部南東端の21-G域に位置する。平面形は略正方形を呈し、一辺約3.6mの規模で、小型の竪穴式住居址となっている。壁は良好な立ち上がりをみせ、壁高は約25～30cmを測る。床面は平坦であるが、堅い面はあまりなかった。柱穴は4本が検出されたが、壁に沿って平行でなく不揃いである。柱穴の床面からの深さは、25cm前後と浅い。炉は床面中央から北東寄りの所にあり、南側に石が置かれ、22×26cmの不整楕円形に焼土がみられた。

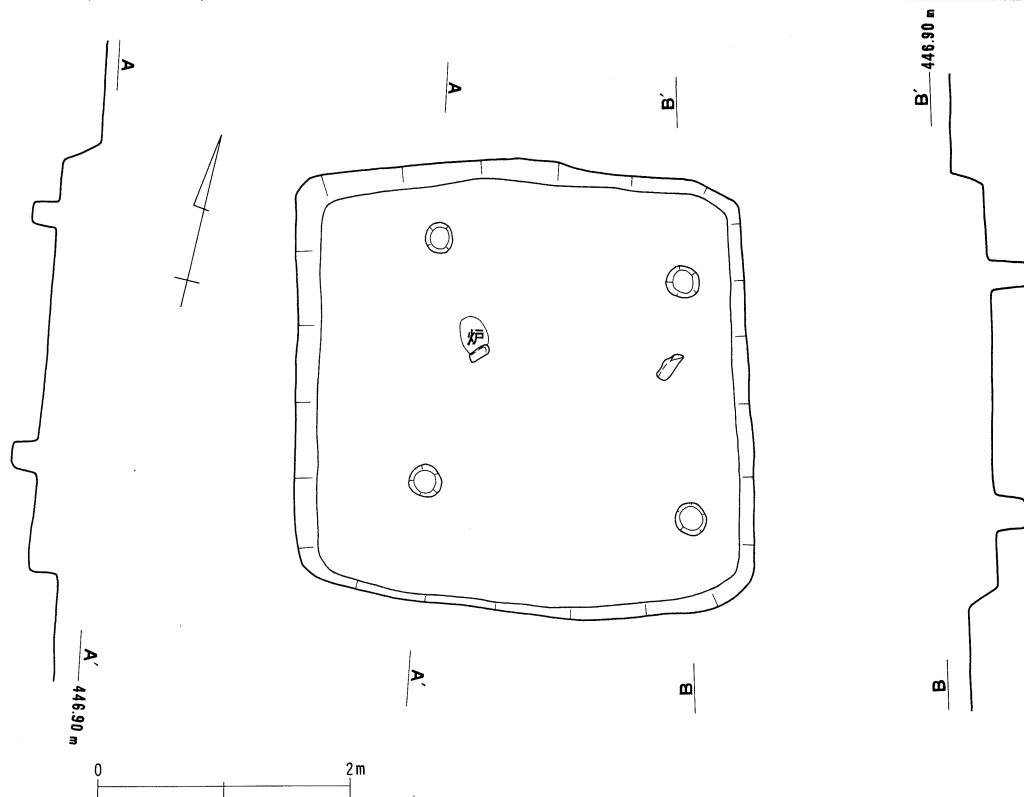
[遺物]

遺物の出土は少ない。

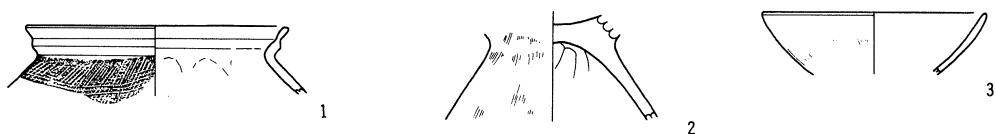
出土遺物一覧

(単位: cm)

番号	器種	法量等	/	胎土	/	色調
		整形	・	特徴	・	その他
1	台付甕	口径13.8	口縁部付近破片	/ 砂粒、赤褐色粒を含む	/ 明褐色	
		S字状口縁部横撫で。胴部に斜位と横走する刷毛目。				
2	台付甕			/ 砂粒を含む	/ 外面白褐色、内面褪赤褐色	
		S字状口縁台付甕の脚台部資料。外面に刷毛目痕あり、胴部内面に黒色。				
3	鉢	口径11.8	口縁部破片	/ 砂粒、赤褐色粒を含む	/ 暗褐色	
		口縁部横撫で。器面は磨き。外面に刷毛目痕がみられる。				



第47図 21号住居址平・断面図 (1/60)



第48図 21号住居址出土遺物 (1/4)

<22号住居址> (第49・50図)

[遺構]

調査区西半部南側東端の18-F・19-F域に位置する。排土作業に際して床面が検出された

住居址であり、削平が著しく東半部は遺存していなかった。規模は、遺存部で南北約7.6mを測る。平面形は隅円方形か。壁高は高い所でも約5cmしかない。床面は不良で、攪乱されており、柱穴及び炉址の発見は困難であった。

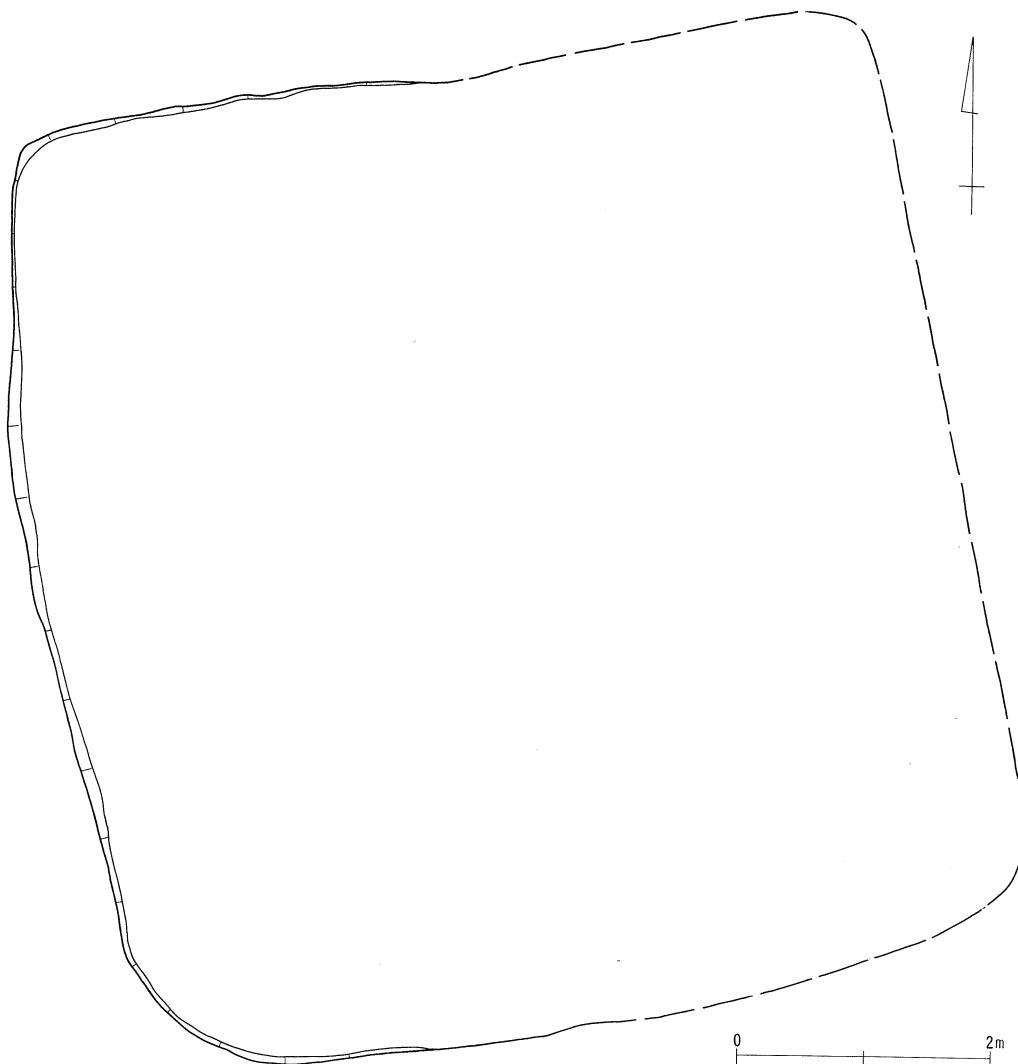
[遺物]

遺物の出土は少ない。

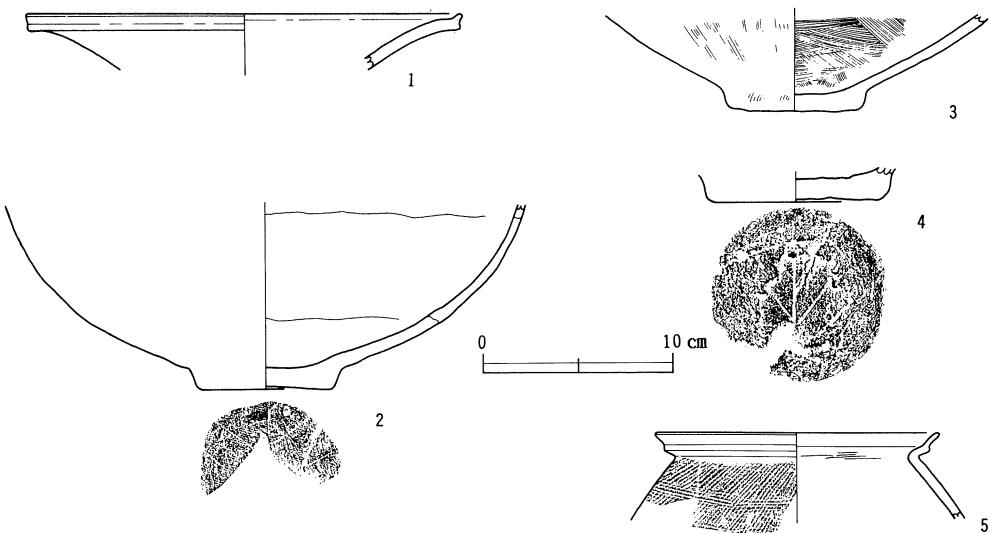
出土遺物一覧

(単位: cm)

番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調	
		整形・特徴	その他
1	壺	口径23 口縁部破片 / 砂粒を含む / 白黄褐色 口縁部横撫で。外面は黒く煤ける。	



第49図 22号住居址平面図 (1/60)



第50図 22号住居址出土遺物 (1/4)

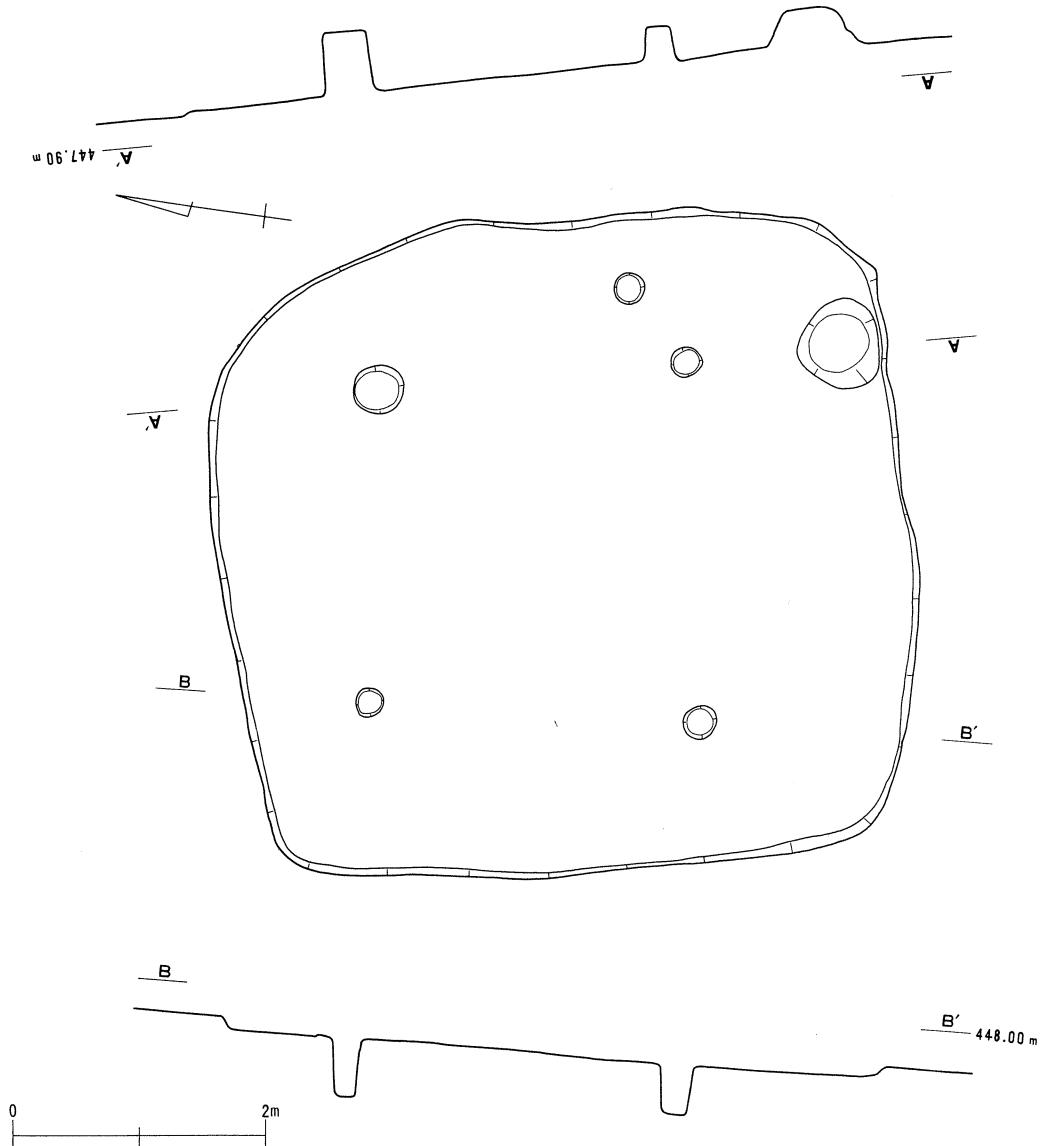
番号	器種	法量等	/	胎土	/	色調
		整形	・	特徴	・	その他の
2	壺	底径7	胴部上半欠損	/ 砂粒を含む	/ 外面白褐色、内面黒褐色	
						器面は刷毛整形の後、撫で乃至磨きが施される。底部は木葉痕。
3	壺	底径7	胴部下半～底部の破片	/ 砂粒を含む	/ 極明褐色	
						外面は磨きがかけられるが、所々に刷毛目がのこる。内面は刷毛目痕が顕著である。黒斑あり。
4	壺	底径8	底部破片	/ 砂粒を多く含む	/ 暗褐色	
						あげ底気味の底部中に木葉痕あり。
5	台付甕	口径15	口縁部～胴部の破片	/ 砂粒、赤褐色粒を含む	/ 暗褐色	
						S字状口縁部横撫で。頸部内面に刷毛目痕あり。胴部外面は、斜位の刷毛目が施され、頸部下より肩部にかけ横走する沈線帯が3段めぐる。

<23号住居址> (第51・52図)

[遺構]

調査区中央部の10-H・11-Hに位置する。規模は東西約5.2m、南北約5.5mで、平面形は隅円方形を呈する。削平により、浅い竪穴となっている。壁高は、平均約10cmで、最も高い所でも約15cmを測るのみである。床面は略平坦。柱穴は長方形に配された4本があたると思われる。西側の2本は、床面からの深さ約40cm。東側の2本のうち南は床面からの深さ約30cm、北は他の3本よりひとまわり大きく深さも約50cmを測る。他に、床面東辺に小穴が一個、南壁東側に接し床面からの深さ約26cm、直径70cm前後の不整円形の穴が発見された。炉は確認されず東側2本の柱穴を結ぶ線よりも内側の床面東半部が焼けていた。長軸の方向は、N-10°-Wか。

[遺物]



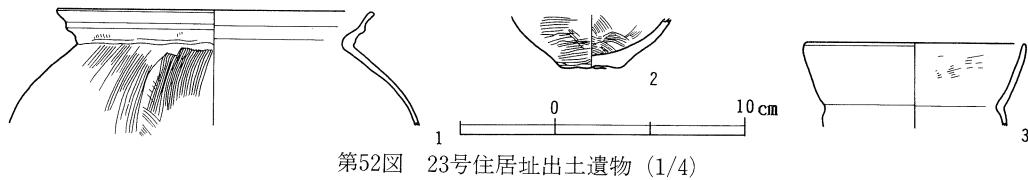
第51図 23号住居址平・断面図 (1/60)

遺物の出土は少ない。炭化材が出ている。

出土遺物一覧

(単位: cm)

番 号	器 種	法 量 等		/	胎 土	/	色 調
		整 形	・ 特 徵	・	そ の 他		
1	台付甕	口径16.7	口縁部～胴部の破片	/	砂粒を含む	/	口縁部赤褐色、他は暗褐色 S字状口縁部横撫で。胴部外面には斜位の刷毛目痕あり。
2	甕	底径 3.2	底部の破片	/	砂粒を含む	/	褪黄褐色、黒斑あり 内外面ともに刷毛目が顕著、底部が若干凹む。
3	鉢	口径11.7	口縁部破片	/	精選される	/	明褐色 内面に籠磨きの痕がうかがわれる。磨滅により器面はザラつく。

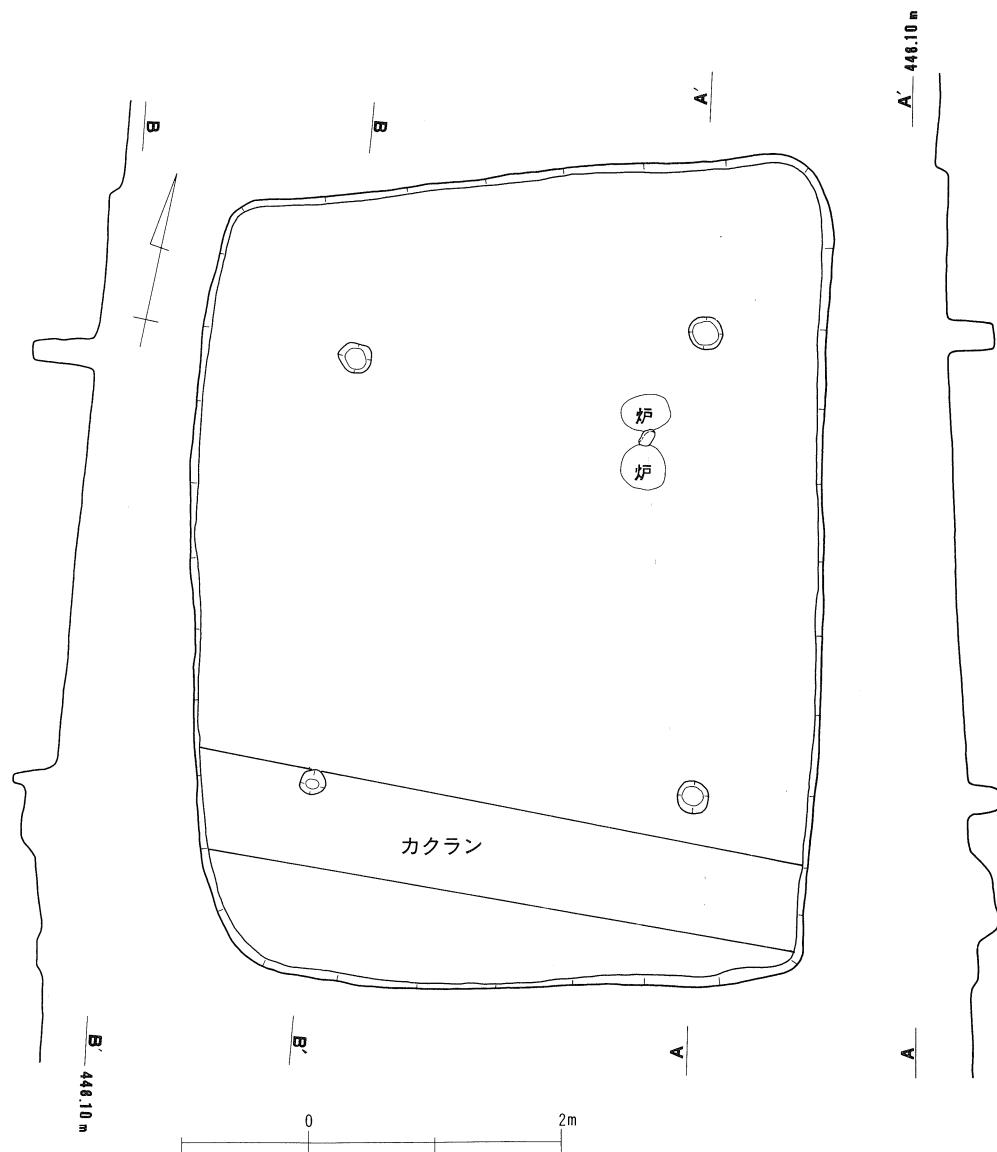


第52図 23号住居址出土遺物 (1/4)

〈24号住居址〉(第53図)

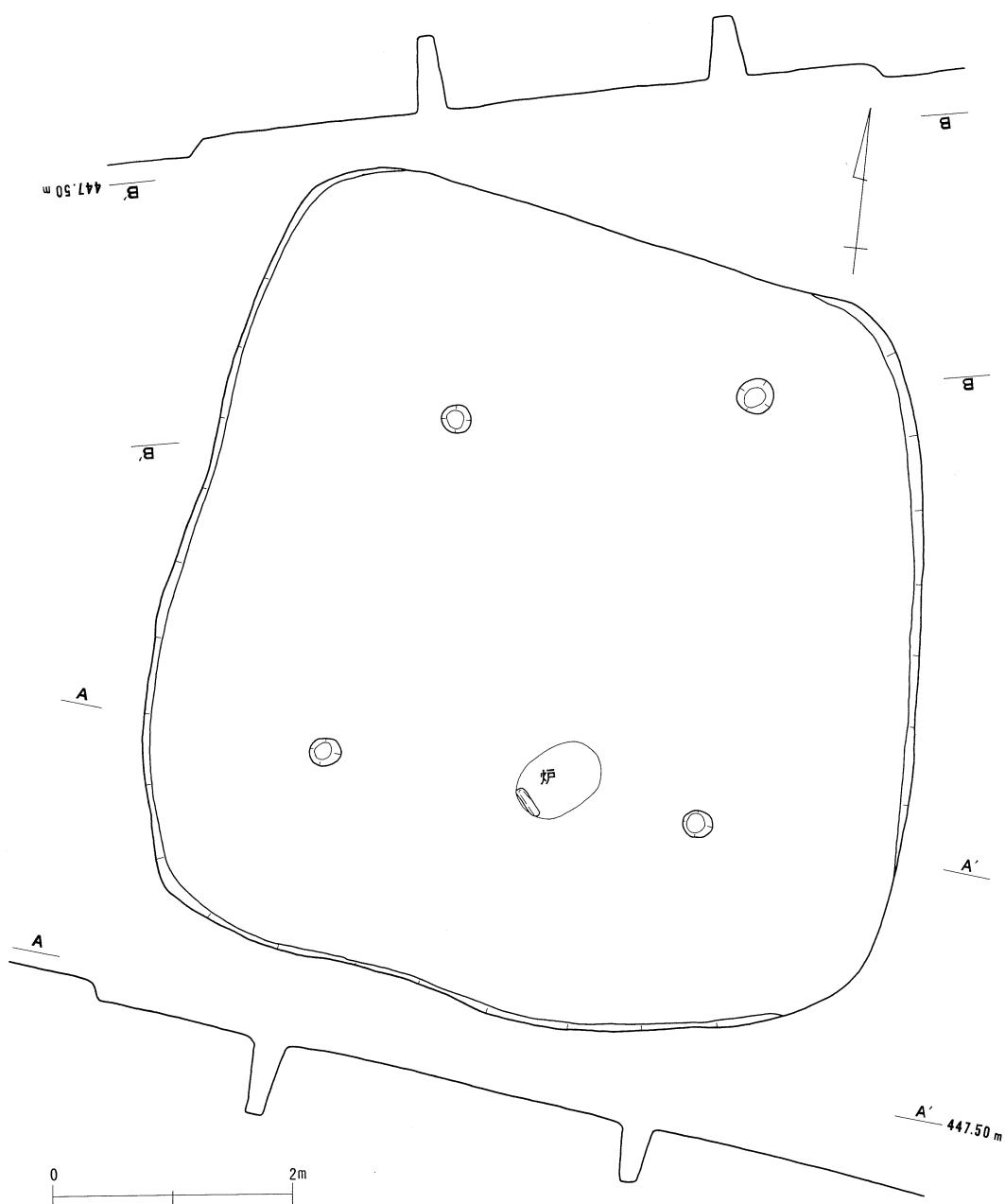
〔遺構〕

調査区中央部、23号住居址の西隣、11-G域に位置する。規模は東西約5m、南北約6.5mで、平面形は隅円長方形を呈する。浅い竪穴で、壁高は最も高い所でも約10cmを測るのみである。



第53図 24号住居址平・断面図 (1/60)

る。床面は北から南へ緩やかに傾いており、南端は東西に走る小溝によって攪乱を受けている。柱穴は4本で、長方形に配されているが、床面からの深さは約26~50cmと不揃いである。炉は、北東方向の柱穴寄りにあり、8×13cmの石を挟んで北と南に2ヵ所検出された。北の炉は、30×40cmの楕円形に炭化物等の部分があり、その下約4cmのところから厚さ7cmで焼土が形成されていた。南の炉は、直径35cm前後の不整円形に炭化物等の部分があり、その下約2cmのところから厚さ約4cmで焼土が形成されていた。長軸の方向は、N-10°-W。



第54図 25号住居址平・断面図 (1/60)

[遺物]

形状の推定でき得るものではなく、全て土器の小片であった。

<25号住居址> (第54図)

[遺構]

調査東半部中央の11-K・11-L・12-K・12-L域に位置する。遺構の東半部は攪乱が著しく当てにならない。規模は、南北約6.5mで、平面形は隅円長方形を呈すると思われる。壁は外傾し、高さ15cm前後を測り、浅い竪穴となっている。柱穴は4本主柱穴と思われ、西側の南北2本は床面からの深さそれぞれ約62cm・約74cmを測り、他は50cm前後を測る。床面は西から東へ緩やかに傾く。炉は、南側2本の柱穴間を結ぶ線上略中央に位置する。形状は52×75cmの楕円形で、炭化物層が厚さ約4cmで堆積し、その下に厚さ約6cmで焼土が形成されていた。南端に7×14×28cmの石が据えてある。長軸の方向は、N-7°-E。

[遺物]

著しい削平及び攪乱のためか、図化不能な土器の小片が出土したにすぎない。

<26号住居址> (第55・56図)

[遺構]

調査区東半部南端に位置する。東半部は溝状の攪乱により遺存していない。規模は、南北約6mを測る。平面形は隅円長方形を呈すると思われるが、定かではない。壁は攪乱を受けていない西壁～南壁にかけ良好な立ち上がりをみせ、壁高は30cm前後を測る。床面は中央が若干窪む。柱穴は西壁に平行に2本検出され、床面からの深さは北側のものが約70cm、南側のものが約60cmを測る。炉は遺存部北東端にあり、東側が遺存していないが、炭化物等が40×68cmの不整楕円形に存在する。中央に4×7×20cmの石が置かれ、厚さ約6cmの炭化物等の層の下に、石を囲むように厚さ約12cm、径30×32cmの不整円形に焼土が形成されていた。それよりも北側にも10×23cmの不整楕円形に焼土がみられた。長軸の方向は、N-9°-Eと思われる。なお、南西隅は27号住居址と境を接し、27号住居址を切って本住居址が構築されたと思われるが、排土作業に際し攪乱を受けたため不明白である。

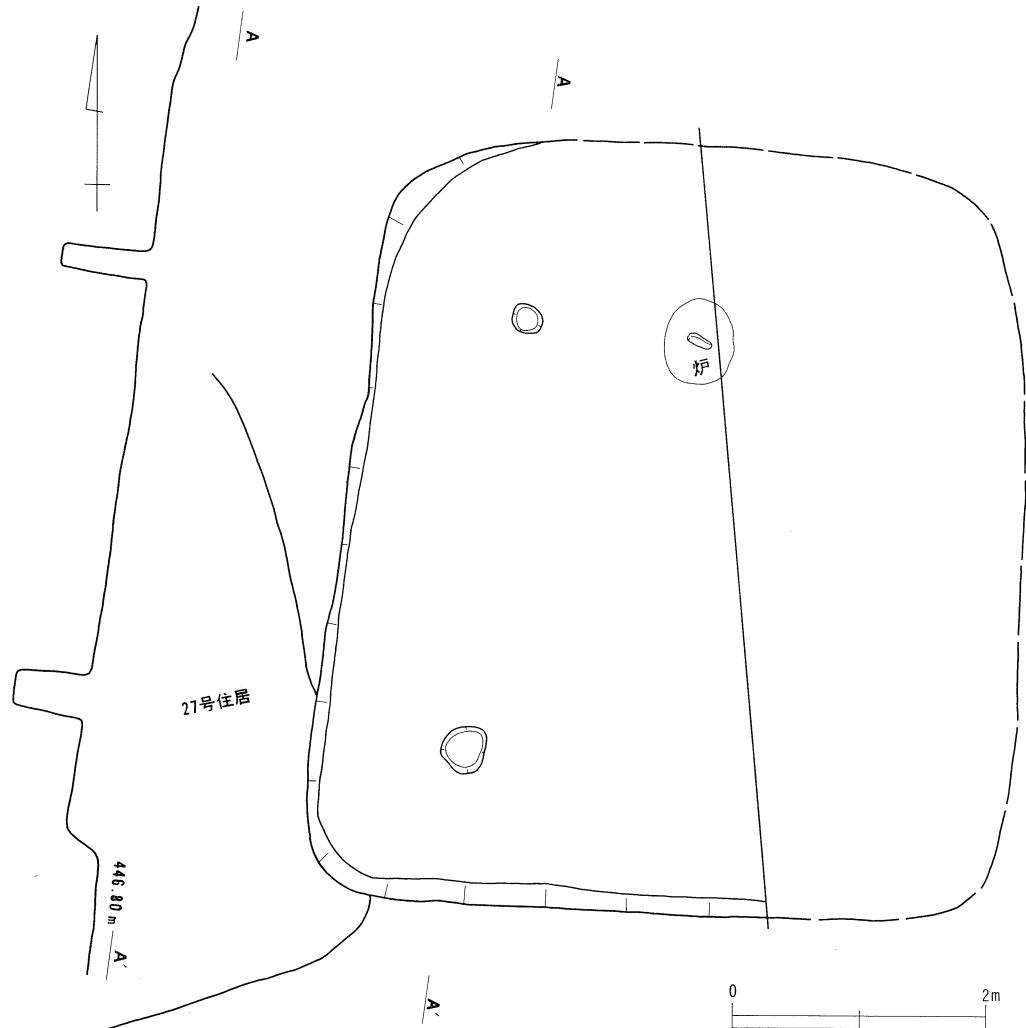
[遺物]

埋没土中から何点か土器片が出土したが、本住居址にともなうものは不詳。

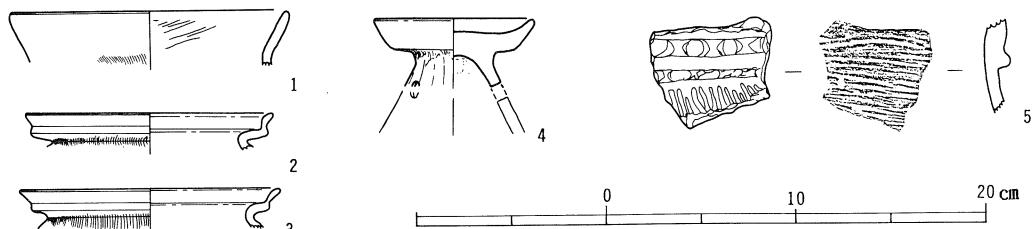
出土遺物一覧

(単位: cm)

番 号	器 種	法 量 等 /	胎 土 /	色 調
		整 形 • 特 徴	• そ の 他	
1	甕	口径14.7 口縁部破片 / 砂粒を含む / 暗褐色		
		口縁部横撫で。内面は磨きがかけられる。刷毛目痕がみられる。		
2	台付甕	口径13 口縁部破片 / 砂粒を含む / 褐色		
		S字状口縁台付甕の破片資料。		
3	台付甕	口径13.7 口縁部破片 / 砂粒、赤褐色粒を含む / 褐色		
		S字状口縁台付甕の破片資料。		



第55図 26号住居址平・断面図 (1/60)



第56図 26号住居址出土遺物 (1/4)

番号	器種	法	量	等	/	胎	土	/	色	調
		整	形	・	特	徴	・	其	の	他
4	器台	口径 8.7	脚部欠損	/	砂粒を含む	/	褪黄白褐色			
		器受部口縁横撫で。器受部と脚部の接合部外側に刷毛目痕がみられる。脚部には孔が穿ってある。								

番号	器種	法量等／胎土／色調
		整形・特徴・その他
5	甕	————／砂粒を含む／暗肌白 外面に指頭圧痕のある凸帶をめぐらす。内面には横位の条痕文が顕著である。 弥生時代中期のものか。

〈27号住居址〉（第57・58図）

〔遺構〕

調査区東半部南端、26号住居址の西隣に位置する。規模は東西約6m、南北約5.2mで、平面形は隅円長方形を呈する。ローム層を掘り込んでおり、壁は外傾しながら良好な立ち上がりをみせる。壁高は、東側が低く約10cmで、最も高い北西側では約42cmを測り、他は25~30cm前後である。床面は西から東へ傾き、堅く踏みしめられている。柱穴は略長方形に配された4本が確認され、床面からの深さは約50~70cmを測る。炉は、東側の2本の柱穴間を結ぶ線上の中央にあり、形状は58×75cmの不整橿円形。上から約4cm炭化物等が堆積し、その下にひとまわり小さな範囲に厚さ約8cmで焼土が形成されており、中に8×10×28cmの石がある。北東隅には、径約47cmの歪んだ浅い穴がある。他に内部施設として、南西端に、床面からの深さ約40cmの径約50cmの不整円形の穴があり、そのまわりを土手状のたかまりがめぐっている。長軸の方向は、N-78°-E。なお、東壁南側は26号住居址と重複しており、床面・壁等明瞭ではなかった。

〔遺物〕

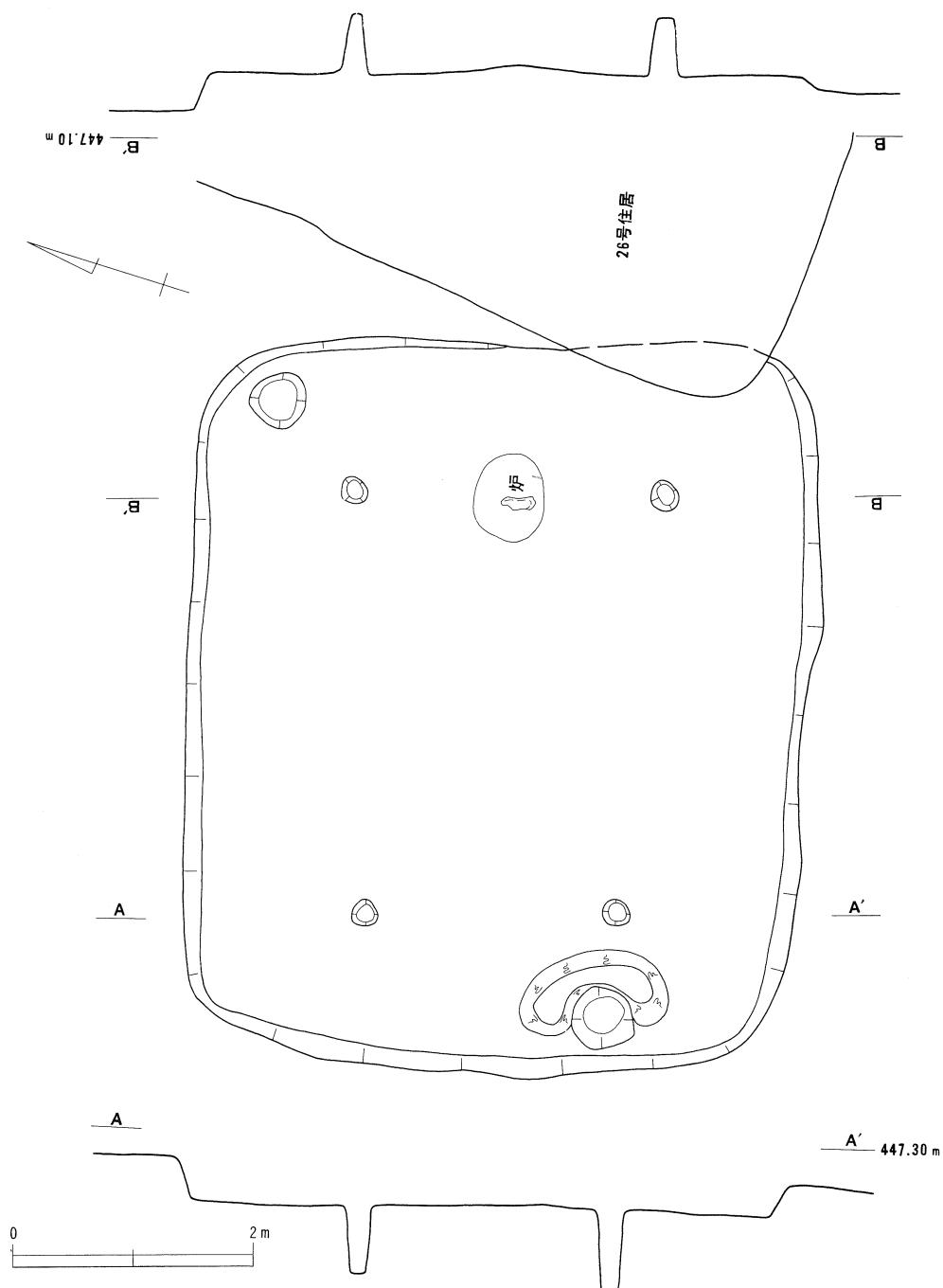
床面直上から土器が何点か出土しており、これらは本住居址にともなうものであろう。遺物のうち2と6は接して南東隅に、3は東辺に出土。7・8は南壁西側に近く出土。5は南西端の穴の中から出土。8の近くには、青灰色をした粘土の塊があった。他に炭化材、軽石らしきものが出土している。

出土遺物一覧

(単位: cm)

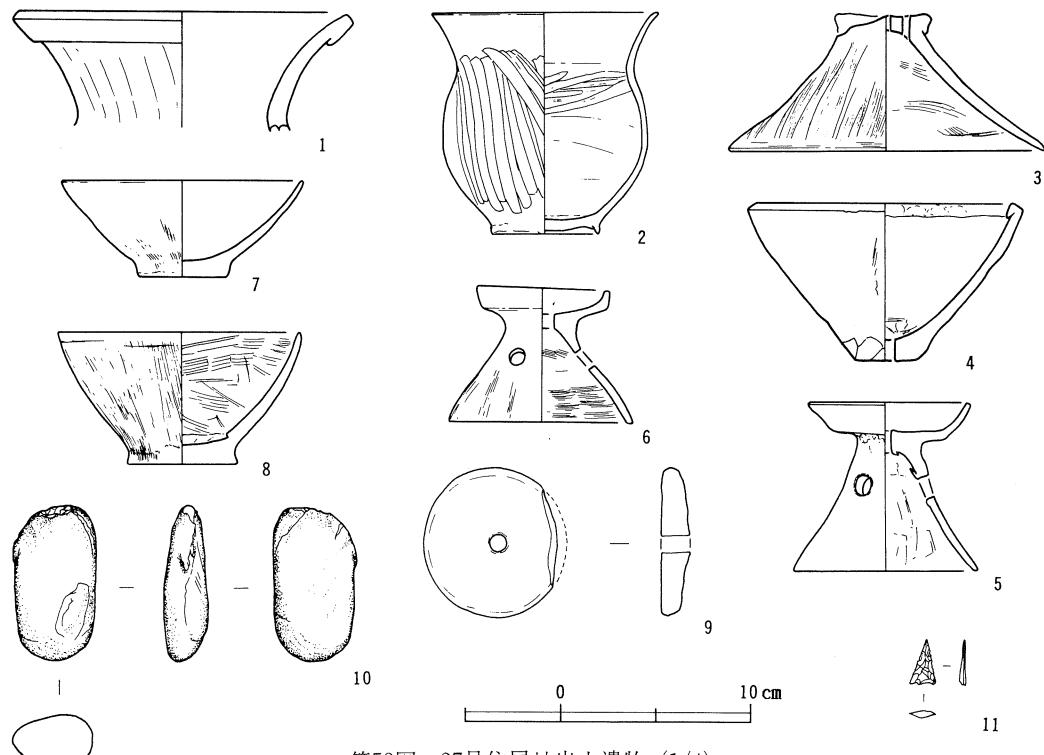
番号	器種	法量等／胎土／色調
		整形・特徴・その他
1	壺	口径17.8 口縁部破片／砂粒を含む／褐色 折り返し口縁部横撫で。内面は磨きがかけられる。外面は刷毛整形の後撫でか。
2	壺	口径11.8 底径5.6 器高11.7 半分欠損／砂粒、白色小粒を含む／外面暗赤褐色、内面暗褐色 口縁部横撫で。内面頸部下は横位の箝削り痕がある。胴部外面は箝削り痕が明瞭である。底部は凹み、高台風になる。
3	蓋	鉢径5 底径16.7 器高7.2／砂粒、金色小粒を含む／暗褐色 蓋端部横撫で。外面は縦位の刷毛目痕がみられる。内面は横位の箝磨きが施されるが、刷毛目がわずかにのる。鉢部には円孔が5個あく。甌の可能性もある。

番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調
		整形・特徴・その他
4	甌	口径14.5 底径3.5 器高8.3 1/2欠損／砂粒、雲母小片を含む／暗薄茶色 器面は撫で及び磨きによって仕上げてある。口縁部内側には粘土帯を巡らす。外面胴部下端は箝削りされる。底部に単孔があく。



第57図 27号住居址平・断面図 (1/60)

番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調
		整形・特徴・その他
5	器台	口径8.4 底径9.7 器高8.9 完形／砂粒、雲母小片を含む／暗薄茶色
		器受部は稜を持ち、口縁部は横撫でされ、底に単孔があく。脚部外面は磨きがかけられ、内面下半は横撫で、箆削り痕がみられる。脚部には3孔があく。
6	器台	口径7 底径9.7 器高7 略完形／砂粒、若干の雲母小片を含む／褪橙褐色
		器受部は稜を持ち、口縁部は横撫でされ、底に単孔があく。脚部は3孔があく、外面は刷毛整形の後磨きがかけられる。内面は刷毛目痕があり、下半は横撫でされる。脚部内面を除き丹彩される。
7	鉢	口径12.6 底径4.6 器高5.1 1/3欠損／砂粒、雲母小片を含む／外面暗薄茶色、内面透明褐色
		口縁部横撫で。内面は箆磨きされる。外面は刷毛整形の後、磨きがかけられるが、刷毛目痕がある。
8	鉢	口径12.7 底径5.7 器高7 完形／砂粒を含む／暗褐色
		口縁部横撫で。内面は横位の粗い刷毛目痕がある。外面は縦位の細かい刷毛目痕がみられる。
9	紡錘車	直径約8 厚さ約1.4 若干欠損／砂粒、白色小粒を含む／暗褐色
		器面は箆磨き(?) 中央に単孔が貫通する。



第58図 27号住居址出土遺物 (1/4)

番 号	器 種	法 量 等 / 胎 土 / 色 調
		整 形 • 特 徴 • そ の 他
10	石 器 研磨器(?)	長さ 8.2 幅 4.3 厚さ 2.3 / 石材は凝灰岩 / _____
		擦痕あり。
11	石 鑓	長さ 2.4 幅 1.4 厚さ 0.4 脚部端、茎部欠損 / 石材は黒耀石 / _____
		押圧剝離によってつくられる。

〈28号住居址〉 (第59・60・61・62・63・64図)

〔遺構〕

調査区東半部南側東端の15-G域に主体的に位置する。規模は一辺約8.5mで、平面形は方形を呈する。ローム層を掘り込んでおり、壁は良好な立ち上がりをみせる。壁高は、北壁がやや高く50~60cmで、他は40~50cm前後を測る。本住居址は、豊穴の深い大型の住居址である。周溝は幅25~30cm、床面からの深さ15cm前後で全周しており、北壁・西壁側には深さ10~20cmの小穴が検出された。床面は堅く、外周と炉の周辺が若干低くなっている。柱穴は、最寄りの壁から約1.7m程離れて床面を掘り込んでおり、深さ約80cmを測り、4本が正方形に配されている。炉は地床炉で、床面中央よりも西側に位置し、95×134cmの橢円形に浅く窪んでいる。厚さ約7cmで炭化物等の層が堆積し、その下にひと回り小さな範囲で厚さ5cmの焼土層が形成されていた。また、その焼土の上には拳2個分大の石が6個散在していた。炉から約50cm北側に、約25×30cmの偏平な石が置かれていた。主軸の方向は、N-83°-E。

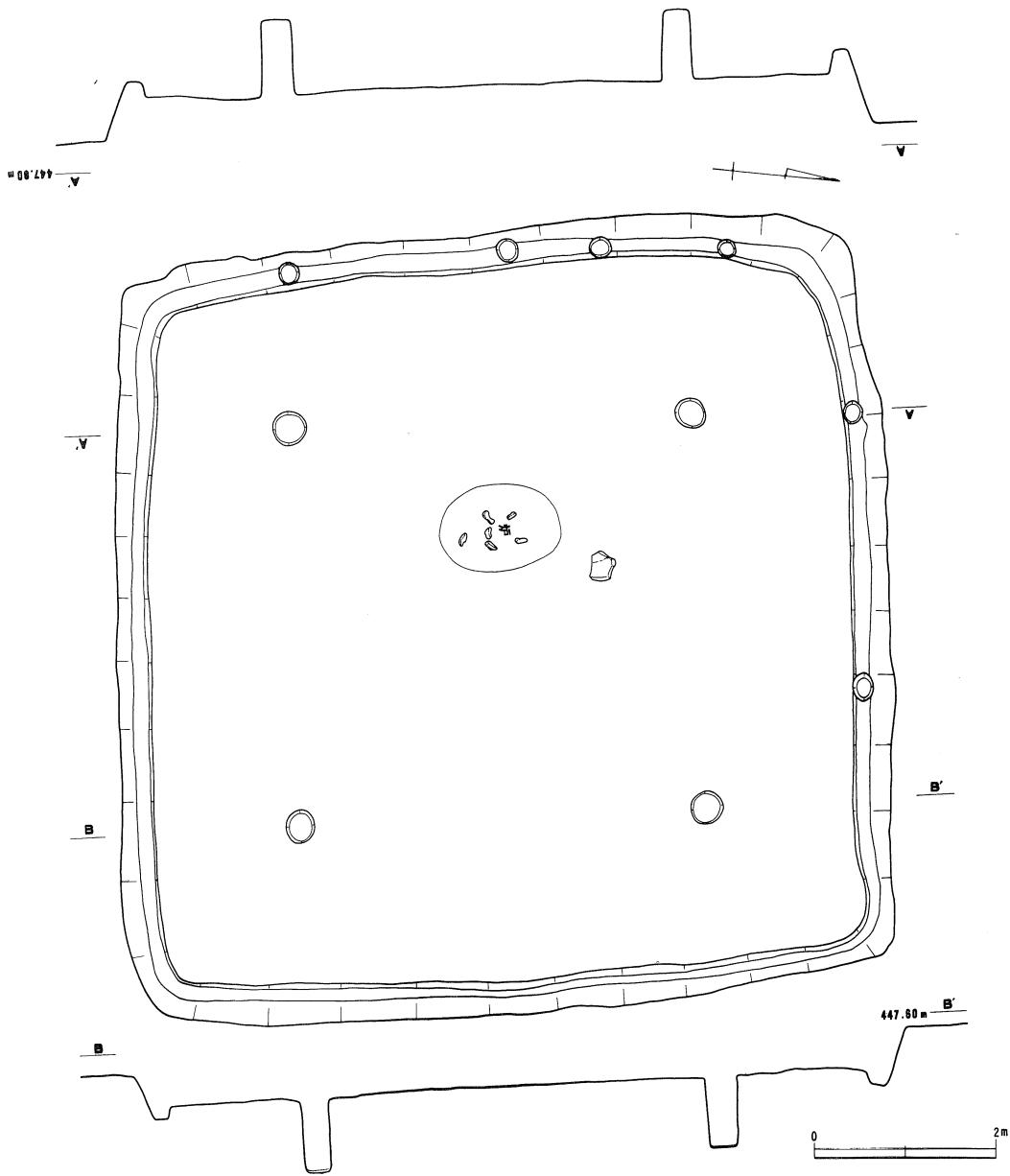
〔遺物〕

埋没土中及び床面直上から、主に土器が出土している。床面直上からの出土傾向は、壺・台付甕・器台等の不完形品が住居址南辺に、大型壺・台付甕・蓋等は北辺に集まっている。特に、北西隅の大型壺は南東側から押し潰されたような状態であった。その壺の南側からは、にぶい黄色の粘土が出土している。また、北東隅からは、拳2個分大の石が19個まとまって出土している、これらは火を受けたらしく煤が付着したり、若干脆くなっているが、俵を編むのに使用したものであろうか。炉址内からは、クリの炭化種子が確認された。土器類は、本住居址にともなうもので、ほぼ同時期のものであろう。

出土遺物一覧

(単位: cm)

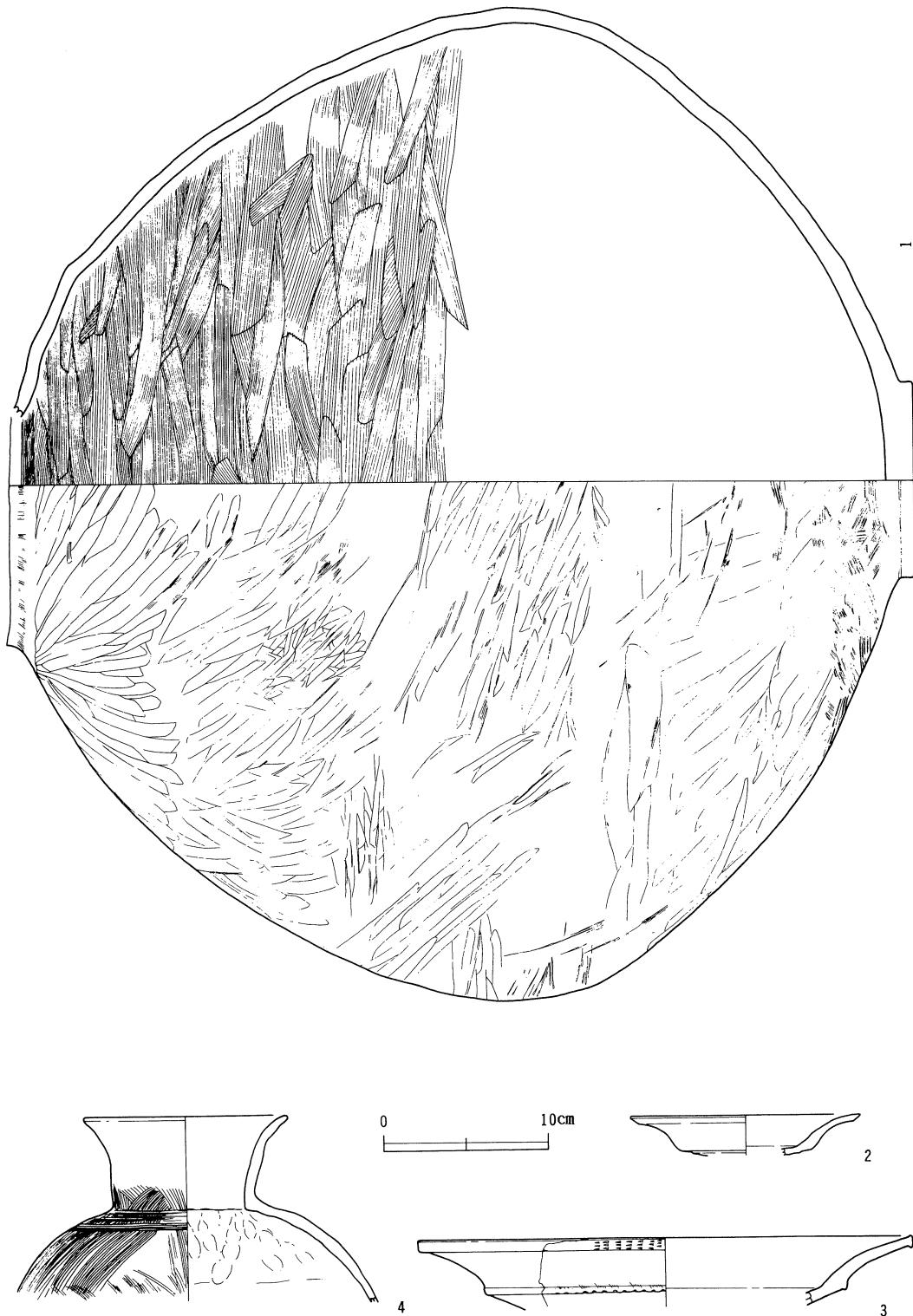
番 号	器 種	法 量 等 / 胎 土 / 色 調
		整 形 • 特 徴 • そ の 他
1	壺	底径11.9 口縁部欠損 / 砂粒、白色小粒を含む / 白褐色、薄茶色
		胴部最大径が下半にあり、60.3cmを測る。外面は箝磨きが施され、下端には刷毛目痕がみられる。内面上半は横位の刷毛目痕が顕著。大型の壺。黒斑あり。
2	壺	口径8.9 口縁部破片 / 砂粒、雲母小片を含む / 白褐色
		複合口縁外側に稜をもつ。口縁部横撫で。内面は磨き。丹彩される。



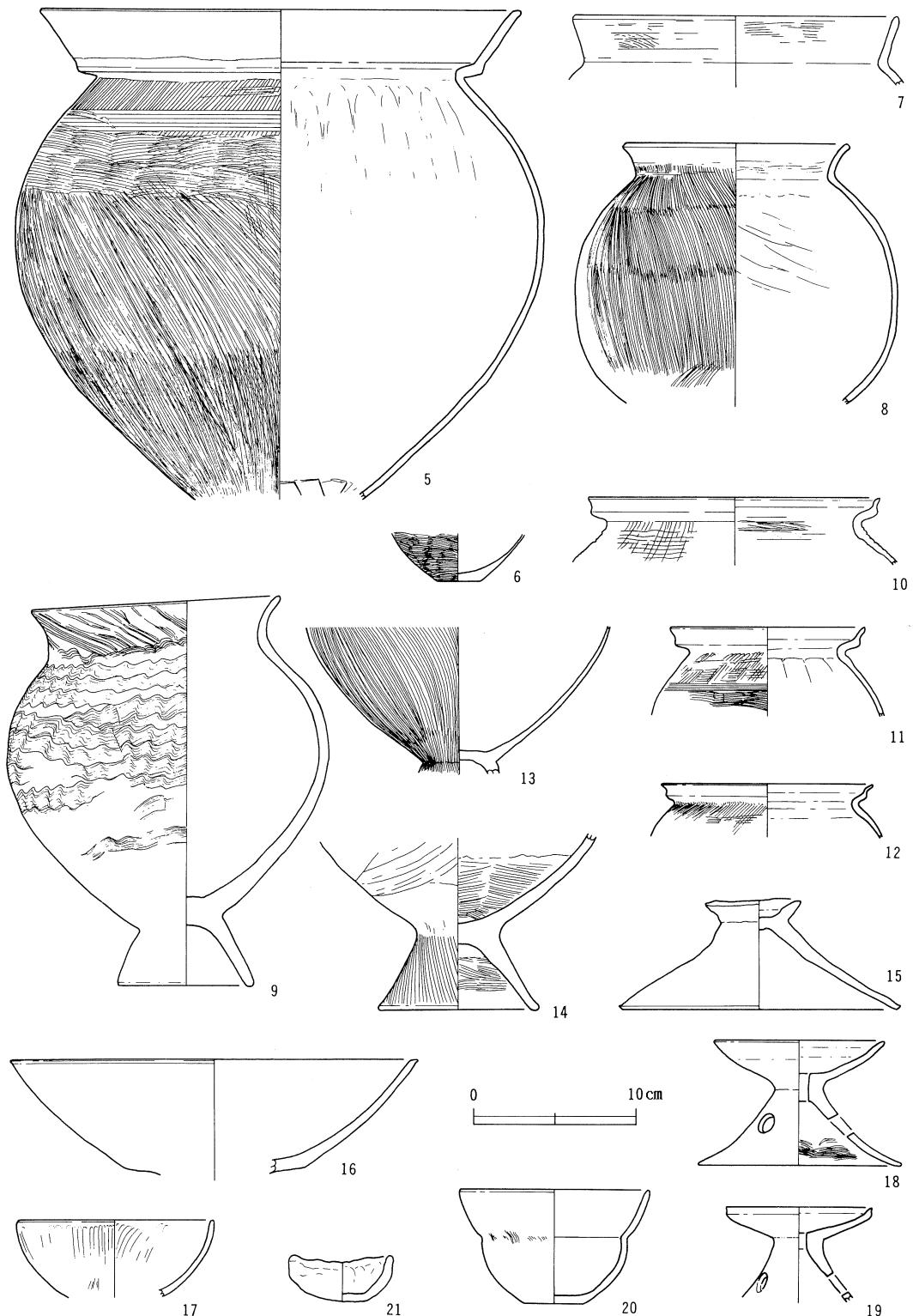
第59図 28号住居址平・断面図 (1/80)

番号	器種	法量等／胎土／色調
		整形・特徴・その他
3	壺	口径30 口縁部破片／砂粒を含む／白褐色 器面は、磨きによる仕上げ。口唇及び有段部外側に刷毛状工具による刺突がめぐる。
4	壺	口径12.3 胴部下半欠損／砂粒を含む／明褪褐色、口縁部暗褐色 口縁部横撫で。胴部内面頸部下は、指頭圧痕が明瞭にのこる。外面は頸部上から胴部にかけ刷毛目痕がみられ、頸部下に刷毛目が横走する。仕上げは磨き。

番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調
		整形・特徴・その他
5	甕	口径24.6 1/2及び底部欠損／砂粒、雲母小片を含む／暗黄褐色
		有段口縁部横撫で。外面胴部は、上から斜位の幅広の刷毛目、以下横位～斜位の粗い刷毛目が顕著。肩部に数条の沈線が横走する。胴部内面は指頭圧痕がみられる。
6	甕	底径2.6 胴部下端～底部の破片／砂粒、雲母小片を含む／暗薄茶色
		外面は、刷毛目が顕著。
7	甕	口径20 口縁部付近の破片／砂粒、石英、長石粒を含む／赤褐色
		口縁部は横撫でされるが、刷毛目痕がみえる。
8	甕	口径14 口縁部～胴部の破片／砂粒、赤褐色粒を含む／暗褐色
		口縁部は横撫でされるが、刷毛目痕がみえる。胴部外面は斜位の刷毛目、内面は削りもしくは磨きが施される。
9	台付甕	口径15.3 底径8.3 器高23.7 1/3欠損／微砂粒を含む／外面赤褐色、内面暗褐色
		口縁部横撫で。胴部内面は箇磨き。口縁部外側は斜位の櫛描文。外面胴部中位以下から上は、櫛描波状文が施され、以下は、脚台部外面まで箇磨きが施される。若干煤付着
10	台付甕	口径17.8 口縁部破片／砂粒を含む／薄茶色
		S字状口縁部横撫で。頸部内面に刷毛目痕。胴部外面斜位と横走する刷毛目。
11	台付甕	口径13 口縁部～胴部の破片／微砂粒、若干の赤褐色粒を含む／暗褐色
		S字状口縁部横撫で。胴部内面、指頭圧痕あり。胴部外面は上から斜位の刷毛目が施され肩部に数条の沈線が横走し、以下横位の粗い刷毛目となる。
12	台付甕	口径13 口縁部付近の破片／砂粒を含む／明褐色
		胴部に斜位と横走する刷毛目の施される、S字状口縁台付甕の資料。外面煤付着
13	台付甕	胴部下半の破片／砂粒、赤褐色粒を含む／外面薄茶色、内面橙褐色
		外面は刷毛目が顕著、磨滅により器面はザラつく。
14	台付甕	底径9.8 胴部下半～脚台部の破片／砂粒を含む／褐色
		胴部内面及び脚台部は刷毛目痕あり。胴部外面は箇削りによる整形。胎土がしまっているのか、器のわりに持つと重い。
15	蓋	鉢径6 底径17.3 器高6.8 完形／砂粗を含む／暗褐色、煤けている
		器面は、撫でと磨きにより丁寧に仕上げてある。
16	高坏	口径25 坏部破片／砂粒、黑色粒を含む／褪褐色
		器面は磨きによる仕上げ。口縁部端外面に低い凸帯がめぐり、口唇部に平坦面をつくりだしてある。下部に稜をもつ
17	高坏	口径12 坏部破片／砂粒を含む／暗褐色
		口縁部は横撫でされ、器面は箇磨きで仕上げ。



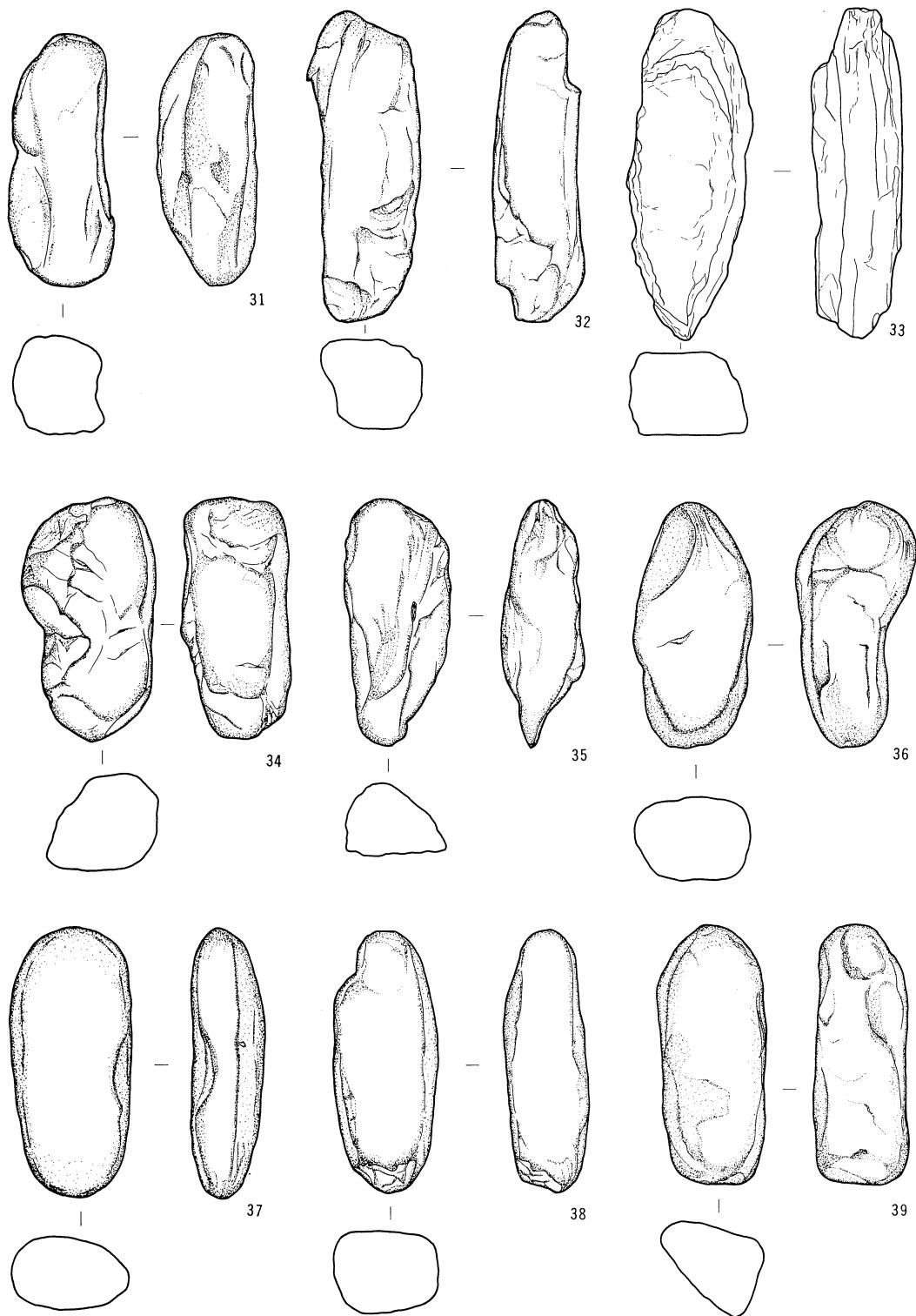
第60図 28号住居址出土遺物 (1/4)



第61図 28号住居址出土遺物 (1/4)

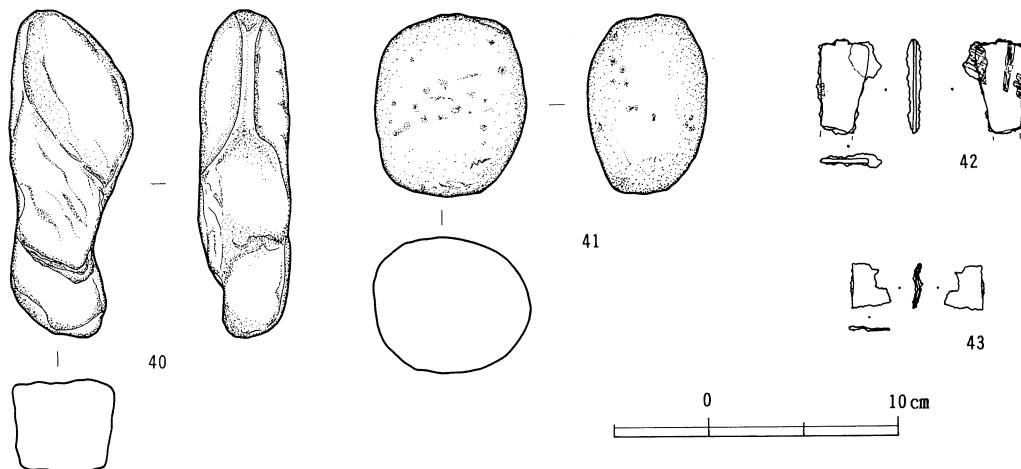


第62図 28号住居址出土遺物 (1/4)



第63図 28号住居址出土遺物 (1/4)

番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調
		整形・特徴・その他
18	器台	口径10.5 底径12.5 器高7.7 脚部1/3欠損／砂粒を含む／暗薄茶色 器受部器面及び脚部外面は、箝磨き。口縁部横撫で。器受部底には単孔があく。脚部内面、上半は箠削り、下半は刷毛目が施される。脚部には3孔があく。
		口径9 脚部下半欠損 / 精製 / 褶赤褐色 口縁部横撫で。器面は箠磨きされる。器受部底に単孔、脚部に3孔があく。
20	鉢	口径11.7 底径3.5 器高7 1/2欠損／微砂粒を含む／外面淡褐色、内面白褐色 口縁部横撫で。器面は撫でと磨きで仕上げ。頸部外面に刷毛目痕あり。
		口径6.4 底径2.4(?) 器高3 1/3欠損／砂粒、赤褐色粒を含む／ 指頭押圧痕あり。
22	編石	長さ17.6 幅6.6 厚さ5.5 / 石材 カコウ岩類
23	編石	長さ16.4 幅7.1 厚さ5.1 / 石材 細粒砂岩
24	編石	長さ15.3 幅6.1 厚さ5.1 / 石材 ホルンフェルス
25	編石	長さ18.2 幅7.0 厚さ5.3 / 石材 頁岩
26	編石	長さ19.3 幅7.7 厚さ5.0 / 石材 ホルンフェルス
27	編石	長さ18.6 幅6.6 厚さ6.5 / 石材 塩基性火山岩
28	編石	長さ15.9 幅6.7 厚さ6.0 / 石材 チャート
29	編石	長さ17.2 幅6.7 厚さ5.0 / 石材 中性塩基性火山岩



第64図 28号住居址出土遺物 (1/4)

番 号	器 種	法 量 等 / 胎 土 / 色 調
		整 形 • 特 徴 • そ の 他
30	編 石	長さ18.0 幅6.3 厚さ6.0 / 石材 中性塩基性火山岩
31	編 石	長さ15.6 幅6.6 厚さ6.1 / 石材 ホルンフェルス
32	編 石	長さ18.8 幅6.6 厚さ5.3 / 石材 ホルンフェルス
33	編 石	長さ20.2 幅7.1 厚さ4.9 / 石材 輝石安山岩
34	編 石	長さ14.7 幅8.0 厚さ5.1 / 石材 ホルンフェルス
35	編 石	長さ15.1 幅5.4 厚さ4.4 / 石材 細粒砂岩
36	編 石	長さ14.9 幅7.0 厚さ5.2 / 石材 カコウ岩類
37	編 石	長さ16.6 幅7.4 厚さ4.5 / 石材 輝石安山岩
38	編 石	長さ15.8 幅6.2 厚さ4.8 / 石材 閃緑岩
39	編 石	長さ15.8 幅6.4 厚さ5.5 / 石材 ホルンフェルス
40	編 石	長さ17.2 幅6.4 厚さ4.8 / 石材 ホルンフェルス
41	敲 石	長さ14.6 幅8.0 厚さ7.0 / 石質は安山岩 / ————— 敲打痕はほぼ全周に及ぶ。特に両端は石槌のように平坦に潰れている。
42	鉄 器	———— / ————— / ————— 床面直上り出土、端に木質が付着している。鎌か？
43	鉄 器	———— / ————— / ————— 埋没土中より出土。不詳

〈29号住居址〉 (第65・66図)

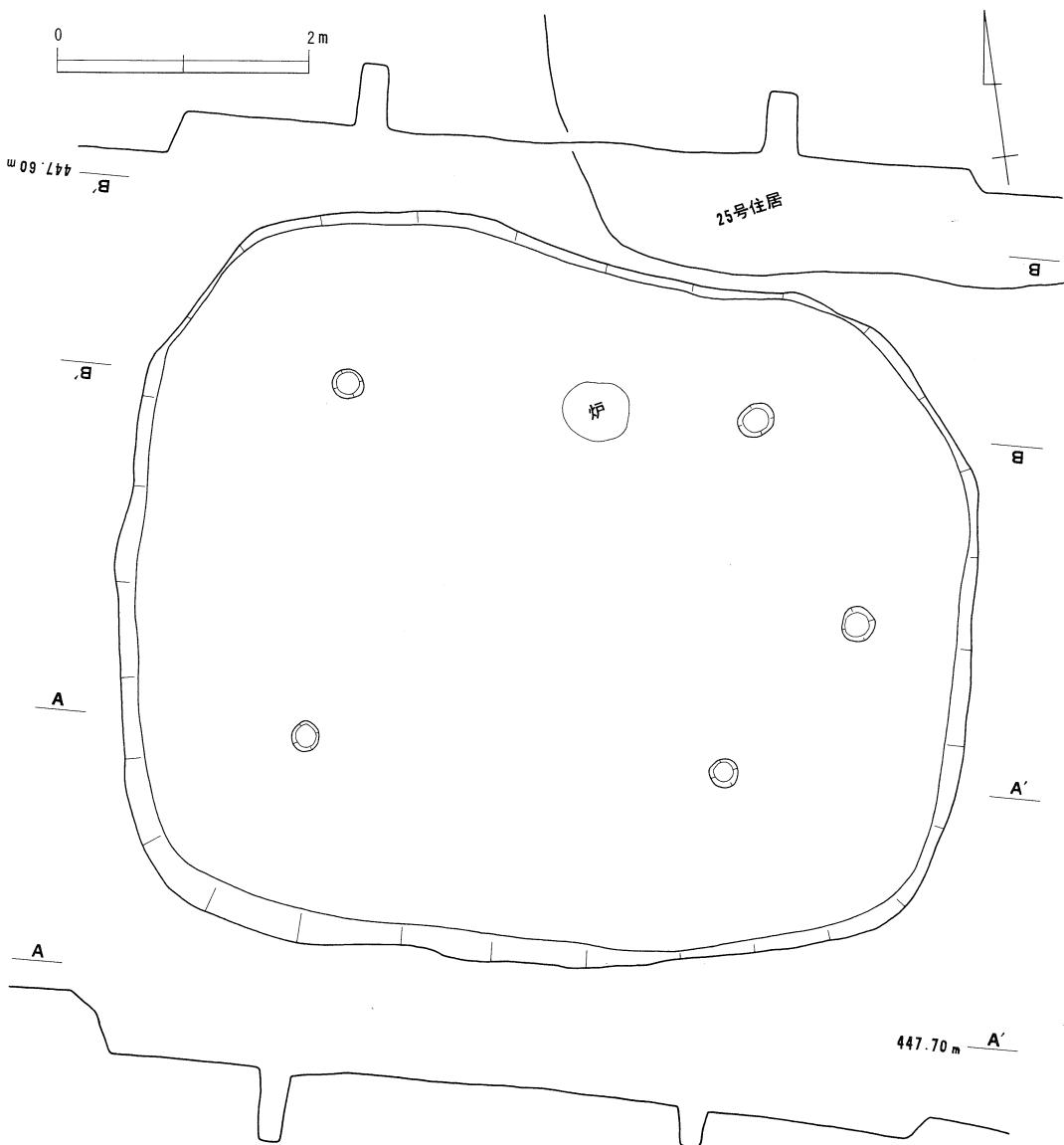
〔遺構〕

調査区東半部中央部南側、25号住居址の南に位置する。規模は東西約6.5m、南北約5.7mで、平面形はやや歪んだ隅円長方形を呈する。壁は外傾し立ち上がる。壁高は、削平により東側が低くなっおり20cm前後、最も高い西壁では約45cmを測る。壁の遺存状況は良好であるが、北壁東側は攪乱により不明瞭であった。床面は東側へ低くなっている。柱穴は4本主柱穴で、長方形に配されている。柱穴の床面からの深さは、北側2本が約50cm、南側西1本が約58cm、南側東1本がやや浅く約30cmを測る。また別に、東壁中央に近く、床面からの深さ約20cmの小穴がある。炉は、北側2本の柱穴間を結ぶ線上中央部よりやや東にあり、約46×52cmの不整橿円形に厚さ約7cmで炭化物が堆積し、さらにその下にひと回り小さな範囲に厚さ約5cmで焼土が形

成されている。南端には、 $7 \times 15\text{cm}$ と $15 \times 18\text{cm}$ の石 2 個が据えてある。長軸の方向は、N-75°-W。

〔遺物〕

本住居址からの土器の出土は、極少数であり、住居址中央部から、床面より 10cm 前後浮上して出土している。それらは、ほとんど破片であるが、8の鉢形土器は完形で出土した。土器以外の遺物としては、長さ約 10cm ・幅約 5cm ・厚さ約 3cm の石齧大短冊形の石（編石）が、西側 2 本の柱穴を結ぶ線の外に並列して発見された。土器については、住居廃滅後に廃棄された可能性もあるが、住居址にともなうもの或いはほぼ同一時期と見做してよいであろう。

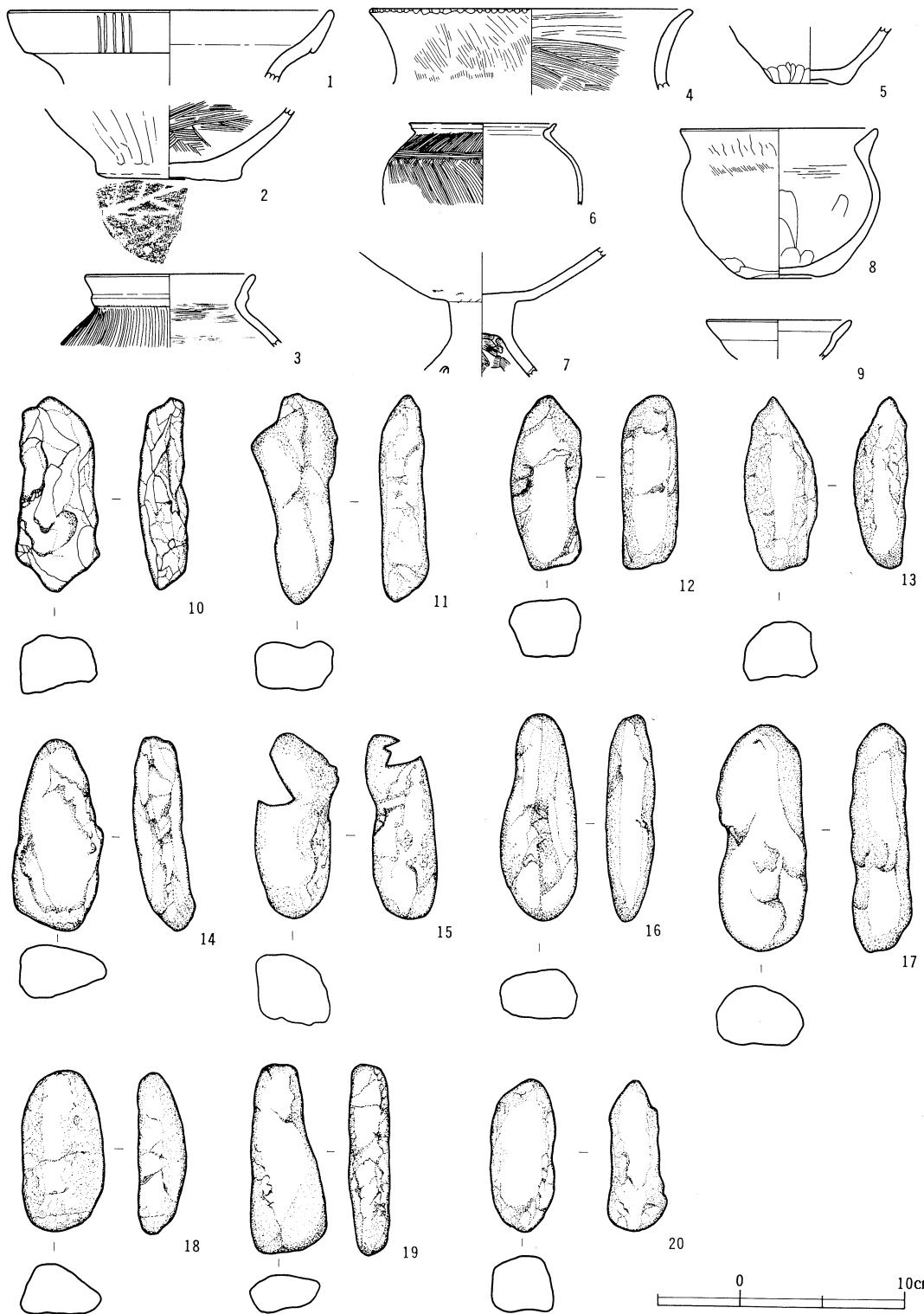


第65図 29号住居址平・断面図 (1/60)

出土遺物一覧

(単位: cm)

番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調
		整形・特徴・その他
1	壺	口径19.8 口縁部破片／砂粒を含む／外面赤褐色、内面淡黄褐色
		複合口縁で、かつ折り返し口縁の壺形土器の資料。内面は磨き。口縁部は横撫で。折り返し口縁、外側には5本1単位の棒状沈線が縱に施される。
2	壺	底径8.7 底部破片／砂粒、赤褐色粒を含む／薄茶色
		胴部内面は、刷毛目、外面は箒削りが施される。底部には木葉痕がみられる。
3	壺	口径10.4 口縁部～胴部の破片／砂粒を含む／暗色
		口縁部横撫で。口縁部外側に凸帯がめぐる。胴部外面は、縦位の刷毛目、内面は横位の細かい刷毛目。
4	甕	口径19.6 口縁部破片／砂粒を含む／暗色
		口縁部は横撫でされ、刻目が続く。内外面に刷毛目がみられる。
5	甕	底径4.5 胴部下端～底部の破片／砂粒を含む／外面褐色、内面褪黄褐色
		胴部外面は、箒削り。
6	台付甕	口径9.5 口縁部～胴部の破片／砂粒を含む／暗褐色
		S字状口縁部横撫で。胴部外面は、上から左下り、右下りの刷毛目が施され、肩部に数条の沈線が横走する。
7	高坏	接合部付近の破片／砂粒を含む／褪黄褐色～白褐色
		坏部内面は、箒磨きされ、黒く煤ける。外面は磨き。脚部内面は、刷毛目痕あり。脚部に孔が穿たれるが何ヵ所か定かではない。
8	鉢	口径12 底径4.5 器高9.2 完形／砂粒を含む／暗褐色
		胴部外面～口縁部～胴部内面上半は箒削りのような、箒撫でのような、箒磨きが施される。底部は、上げ底で若干凹んでいる。
9	鉢(?)	口径8.8 口縁部破片／砂粒を含む／白褐色
		口縁内側に凸帯をめぐらし、稜をつくり出している。小型浅鉢形土器の資料。
10	編石	長さ11.9 幅5.1 厚さ3.5 ／ 石材 中粒砂岩
11	編石	長さ12.9 幅5.2 厚さ2.8 ／ 石材 ホルンフェルス
12	編石	長さ10.6 幅4.2 厚さ3.6 ／ 石材 ホルンフェルス
13	編石	長さ10.6 幅4.4 厚さ3.4 ／ 石材 粗粒砂岩
14	編石	長さ11.7 幅5.3 厚さ3.2 ／ 石材 ホルンフェルス
15	編石	長さ11.4 幅4.6 厚さ4.1 ／ 石材 中粒砂岩



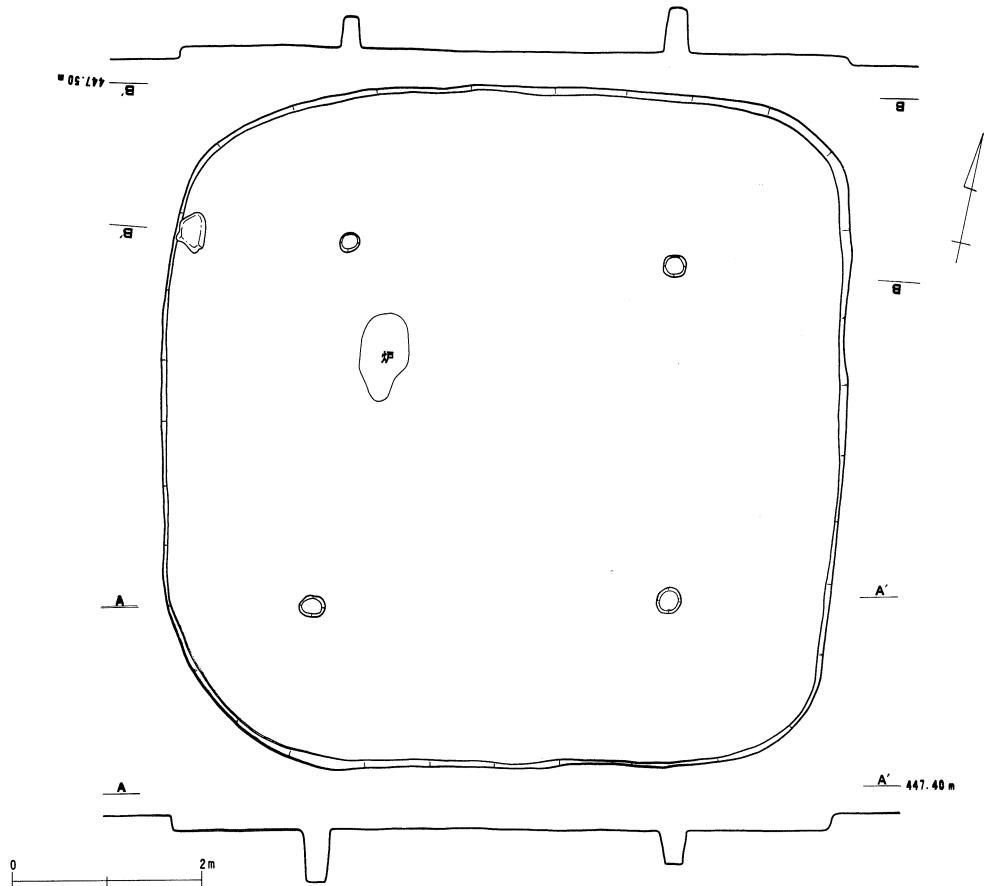
第66図 29号住居址出土遺物 (1/4)

番号	器種	法量等	/	胎土	/	色調
		整形	・	特徴	・	その他
16	編石	長さ12.6 幅4.7 厚さ3.0	/	石材 粗粒砂岩		
17	編石	長さ13.8 幅54.2 厚さ34	/	石材 ホルンフェルス		
18	編石	長さ9.9 幅5.0 厚さ3.1	/	石材 中粒砂岩		
19	編石	長さ11.6 幅4.6 厚さ2.3	/	石材 粗粒砂岩		
20	編石	長さ9.2 幅3.9 厚さ3.4	/	石材 ホルンフェルス		

<30号住居址> (第67・68図)

[遺構]

調査区東半部中央部東側、25号住居址の北に位置する。規模は一辺約7mで、平面形は隅円方形を呈する。大型の住居址ではあるが、削平により浅い竪穴となっている。壁は直立気味に立ち上がり、壁高は15cm前後で、高い所でも約20cmを測るのみであった。床面は平らであるが、



第67図 30号住居址平・断面図 (1/80)

南へやや傾いている。柱穴は、最寄りの壁から約1.5乃至1.8m離れて略正方形に4本が掘られていた。床面からの深さは、北西隅の柱穴から右回りに、約30・50・35・55cmを測る。炉は、北西隅の柱穴よりにあり、50×94cmの南側に瘤をもつ不整橢円形に炭化物等の堆積層がみられた。焼土は、炭化物層の下、瘤側に約40×67cmの橢円形に厚さ約9cmで形成されている。北西隅には、8×25×45cmの偏平な石が置かれていた。主軸の方向は、N-82°-E。

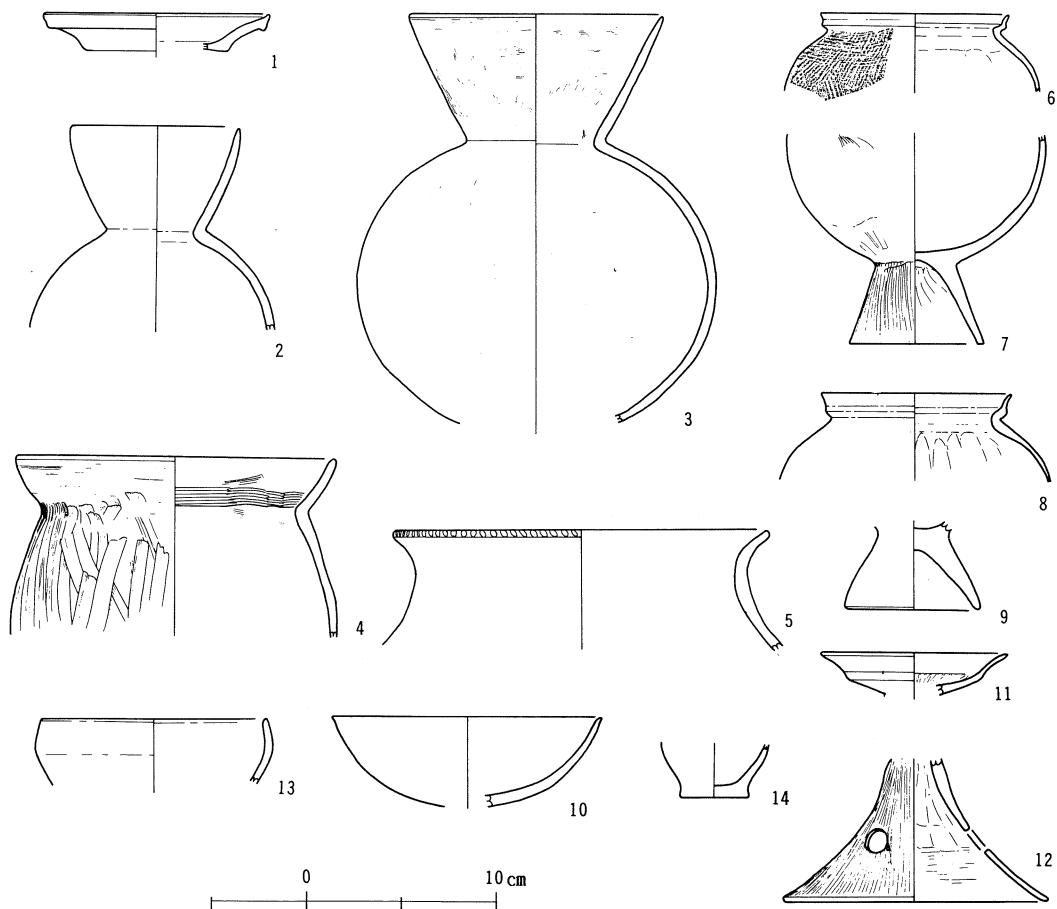
〔遺物〕

遺物の多くは土器である。北西隅の石の周辺に、何点か出土している。完形品ではなく、全て破片であり、床面より若干浮上していた。他の遺物として、北東隅の床面直上に、本住居址の建築用材として使用されたと思われる炭化材が遺っていた。

出土遺物一覧

(単位: cm)

番号	器種	法量等	/	胎土	/	色調
		整形	・	特徴	・	その他
1	壺	口径11.9 複合口縁部端横撫で。	口縁部破片	砂粒を含む	/	褐色



第68図 30号住居址出土遺物 (1/4)

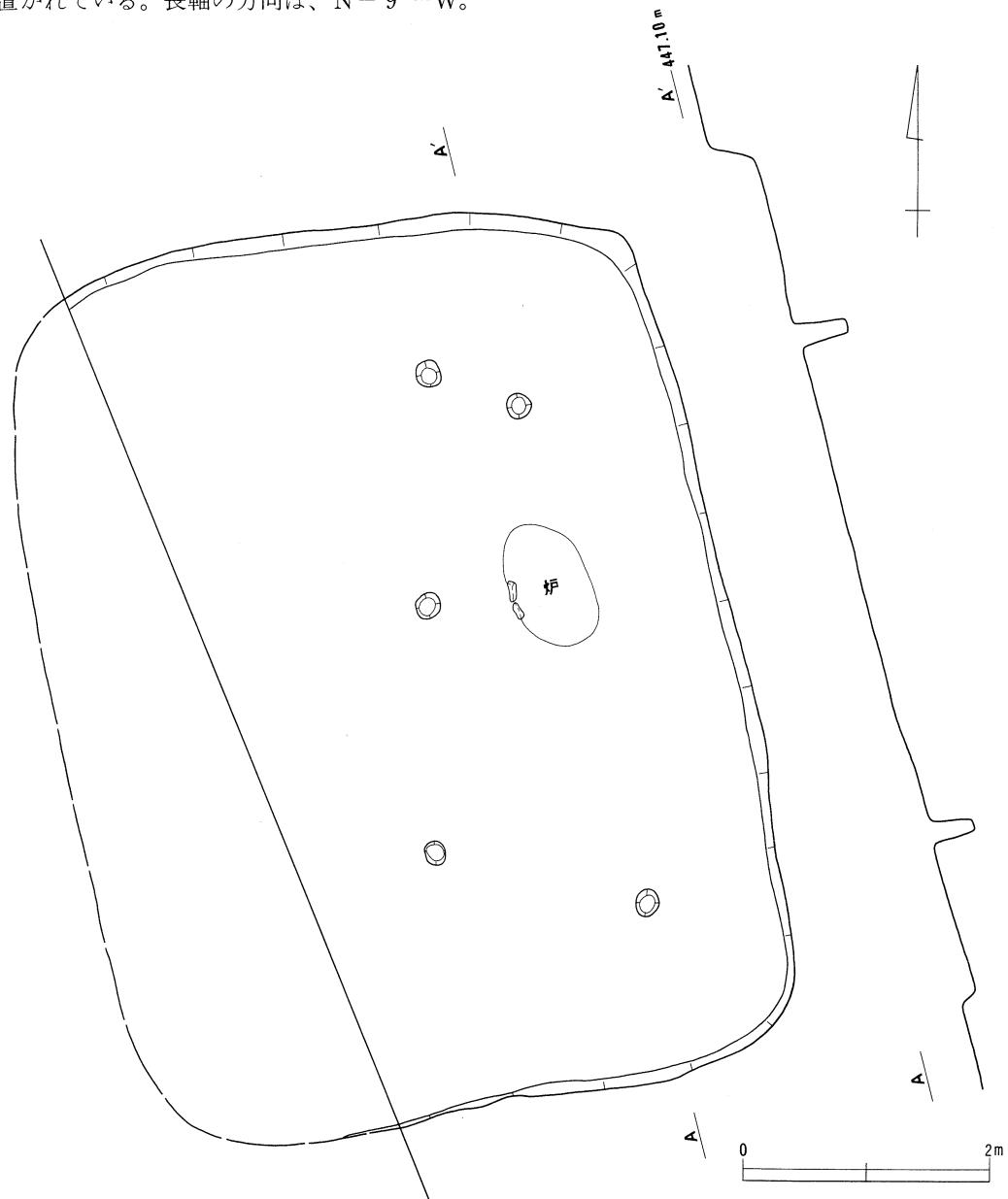
番号	器種	法量等／胎土／色調
		整形・特徴・その他
2	壺	口径9 口縁部～胴部の破片／微砂粒・赤褐色粒を含む／褪白褐色 胴部外面～口縁部内面は磨きと撫でによる整形。胴部内面は箆撫でか。
3	壺	口径13.4 口縁部～胴部の破片／精選、赤褐色粒を含む褪赤褐色～褐色 器面は丁寧な磨きと撫でにより仕上げられるが、磨滅により、ザラつく。 胴部内面は痘痕状に剥落している。
4	甕	口径16.8 胴部下半欠損／砂粒、赤褐色粒を含む／外面褪赤褐色、内面白褐色 口縁部横撫で。内面頸部上に明瞭は刷毛目、肌部には細かい刷毛目痕がみられる。 胴部外面には縦位の粗い刷毛目痕がみられる。
5	甕	口径19.8 口縁部破片／砂粒を含む／外面暗褐色、内面白黄褐色 口縁部に刻目が連続する甕形土器の資料。
6	台付甕	口径9.5 口縁部付近破片／砂粒若干の赤褐色粒を含む／明白褐色 S字状口縁部横撫で。胴部外面斜位の刷毛目。肩部に横走する沈線。
7	台付甕	底径7 胴部下半～胴台部の破片／砂粒を含む／外面暗褐色、内面褪橙褐色 外面は撫で整形で刷毛目痕がみられる。胴部内面は箆撫で。 若干煤けた。
8	台付甕	口径10 口縁部付近の破片／砂粒を含む／外面暗褐色、内面黒い色 S字状口縁部横撫で。胴部内面に指頭圧痕がみられる。外面は剥落が著しい。胴部外 面は刷毛目の上を撫でているか？
9	台付甕	底径7.1 脚台部破片／砂粒を含む／褪桃色っぽい 台付甕の脚台部資料
10	高坏	口径13.8 坏部破片／精選、赤褐色粒を含む／褪赤褐色 器面は磨き及び撫でにより丁寧に仕上げられたと思われるが、磨滅剥落が著しく定か ではない。
11	器台	口径9.8 器受部破片／精選 赤褐色粒を含む／褪赤褐色 口縁部横撫で。内面箆磨き、外面箆削り。
12	器台	底径14 脚部破片／精選 赤褐色粒を含む／褪明褐色 外面箆磨き。据部横撫で。内面上半箆削り。器受部との接合部に单孔があき、別に3 孔があく。
13	不明	口径11.8 口縁部破片／微砂粒を含む／淡白褐色 内面は磨き、外面は磨滅によりザラつく。
14	小型手 捏土器	底径3.6 底部破片／砂粒を含む／漂黄褐色 指頭圧痕が僅かにみられる。撫で整形。黒斑あり。

〈31号住居址〉(第69・70図)

[遺構]

調査区東半部南東側の15-M域に位置する。西側3分の1は、溝状の擾乱により遺存してい
ない。規模は、南北約7.3mを測る。平面形は隅円長方形を呈すると思われるが、定かではない。

壁は攪乱を受けていない東壁側～北壁にかけ良好な立ち上がりをみせ、壁高は30cm前後を測る。床面は中央が若干高い。柱穴は東壁に平行に2本検出され、床面からの深さは、35～40cmを測る。別に、それらよりも内側に小穴が3本並んであるが、柱穴とはかかわりなく後世の掘り込みとみられる。炉は、2本の柱穴を結ぶ線上の中央よりやや北寄りにあり、約65×105cmの不整楕円形の地床炉である。床面より若干窪み、上から4cm程炭化物等が堆積し、その下にひと回り小さな範囲に厚さ約10cmで焼土が形成されていた。西端には、5×15cmと6×17cmの枕石が置かれている。長軸の方向は、N-9°-W。



第69図 31号住居址平・断面図 (1/60)

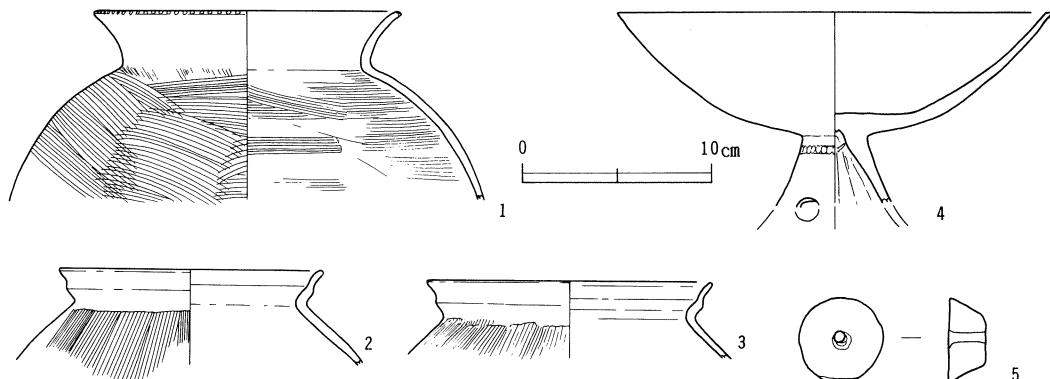
〔遺物〕

遺物の出土は少ない。炉の東側床面直上から高坏が、逆様に出土している。他に床面南東側より炭化材が発見された。

出土遺物一覧

(単位: cm)

番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調
		整形・特徴・その他
1	甕	口径16.2 口縁部～胴部破片／砂粒 雲母小片を含む／暗白褐色 胴部内、外面とも刷毛整形。特に外面は顕著。口縁部は横撫でされ、刻目が連続する。煤けている。
2	台付甕	口径13.8 口縁部～胴部破片／微砂粒を含む。密／暗赤褐色 S字状口縁部横撫で。胴部外面は斜位の刷毛目。焼成良好
3	台付甕	口径15 口縁部付近の破片 / 微砂粒を含む。密 / 暗褐色 S字状口縁部は横撫でされ、口唇内側に極僅かな浅い凹みがめぐる。胴部外面は斜位刷毛目。焼成良好
4	高坏	口径22.8 脚部下半欠損 / 精選 / 褪赤褐色 口縁部横撫で。口縁部端外側に低い凸帯がめぐり、口唇部に平坦面をつくりだしてある。器面は磨きによる仕上げであるが、磨滅によりザラつく。脚部内面は箆削り。脚部には3孔があくと思われる。また、脚部外面上端には、縦位の箆磨きによる浅い凹帯がめぐる。
5	紡鐘車	外径2.5・4.4 厚さ2 / 砂粒、白色粒を含む / 白褐色 断面は台形 全面研磨されるが、磨滅している。



第70図 31号住居址出土遺物 (1/4)

〈32号住居址〉 (第71・72図)

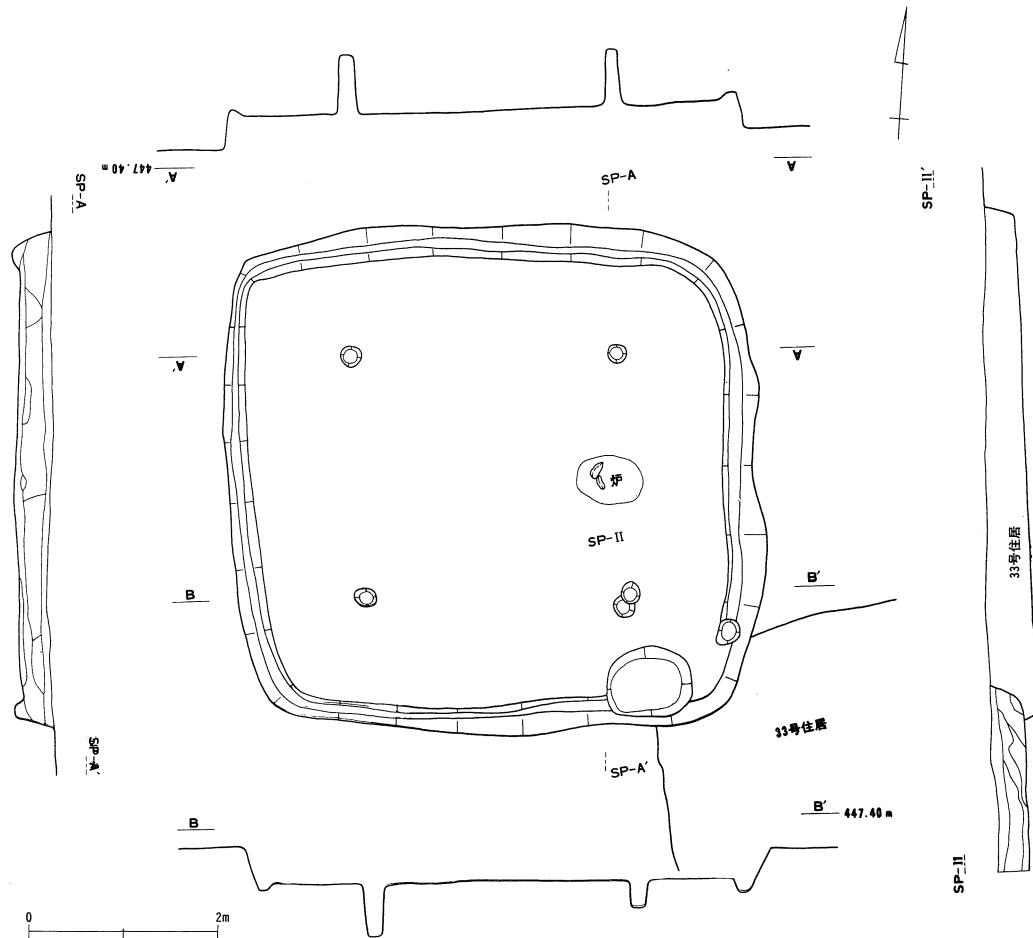
〔遺構〕

調査区東半部南側の15-J域に位置する。黄褐色土中に褐色土の落ち込みを発見し発掘を行う。南東隅が33号住居址と接している為、そこには住居址の対角線上に、土層観察用土手を設定した。埋没土は、おおむね3層に分かれ、上から褐色土・暗黄褐色土(黄褐色土)・暗褐色土の順に堆積している。壁は外傾しながら良好な立ち上がりをみせるが、西壁南半分は35号住居址

と重複しており明瞭ではなかった。壁高は、西側が高く約40cm、東側は30cm前後を測る。規模は一辺約5.4mで、平面形はやや胴張り気味の隅円方形を呈する。柱穴は最寄りの壁から1.3m程離れて掘り込まれており、4本が略正方形に配され、床面からの深さ60cm前後を測る。ただし、南東の柱穴には、床面からの深さ約30cmの小穴が寄り添って掘られていた。床面は南東へ低くなっている。周溝は幅20cm前後、床面からの深さ約10~15cmで南東隅を除きめぐらしている。この周溝がめぐらない所には、小穴と床面から約70cmの深さの70×90cmの不整楕円形の穴がある。炉は、東側2本の柱穴を結ぶ線上の中央にあり、50×70cmの楕円形に炭化物等の部分があり、西に9×20cmと6×15cmの枕石をともなっている。焼土は、枕石の下、炭化物層の約5cm下に、径約30cmの範囲に厚さ約6cmで形成されていた。主軸の方向は、N-0°-W。なお、土層観察により、本住居址は33号住居址を切って構築される。

[遺物]

出土遺物の主体は土器であり、住居址中央部から床面直上乃至若干浮上して出土している。南西隅の床面直上からは鉄器が出土している。他に、粘土が発見されている。

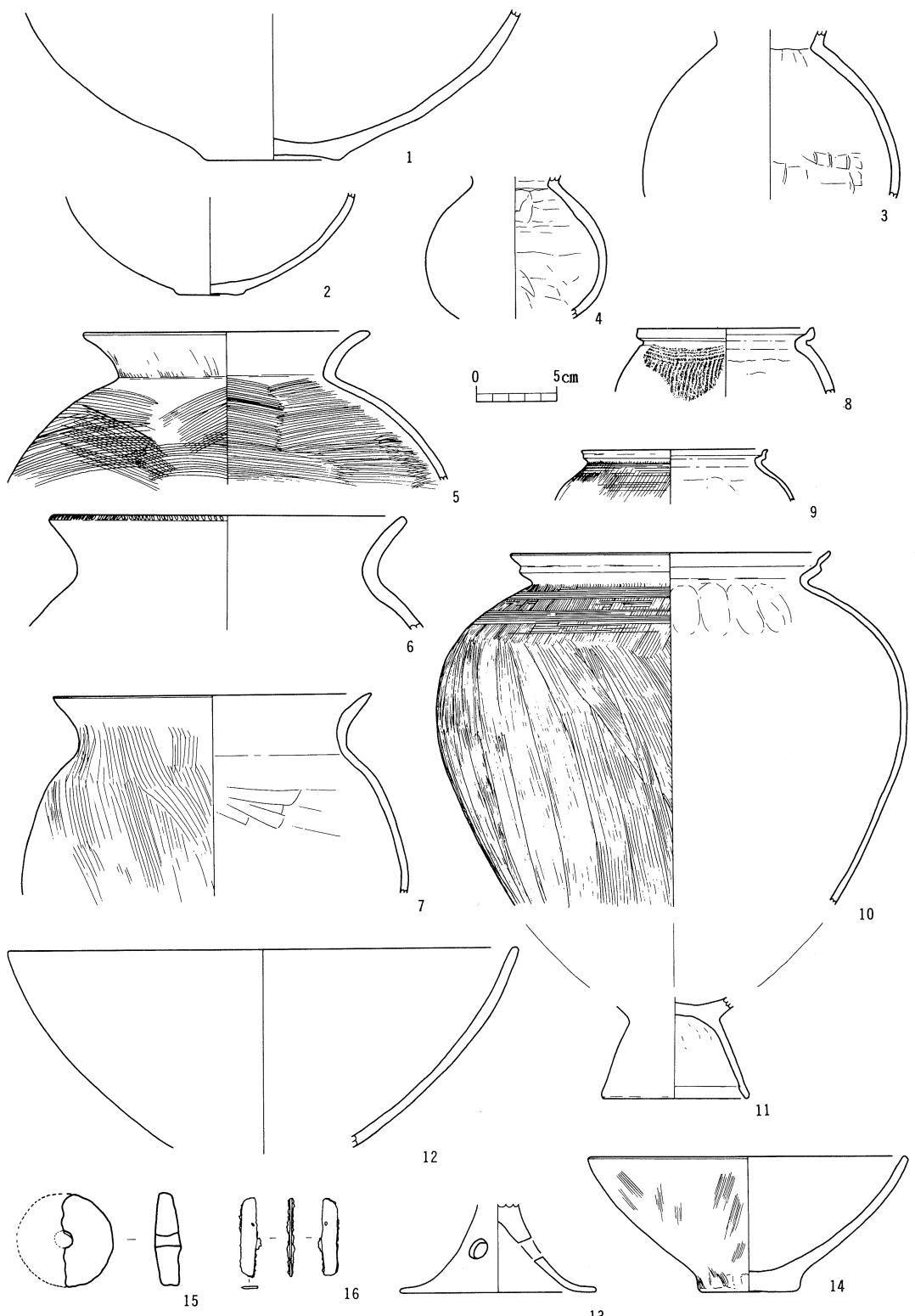


第71図 32号住居址平・断面図 (1/80)

出土遺物一覧

(単位: cm)

番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調
		整形・特徴・その他
1	壺	底径 8.3 脊部下半の破片 / 砂粒を含む / 外面赤褐色、内面暗褐色 外面は丁寧に磨かれる。内面は剥落がみられる。底部は上げ底。
2	壺	底径 4 脊部下半の破片 / 砂粒を含む / 外面褪赤褐色、内面白褐色 外面は磨き仕上げ。内面は剥落が著しい。
3	壺	脊部の破片 / 砂粒を含む / 淡薄茶色 外面は研磨される。内面は範撫で。圧痕がみられる。
4	壺	口縁部、脊部下半欠損 / 微砂粒を含む / 淡褐色 外面は丁寧に研磨され、丹彩される。内面は撫で、圧痕がみられる。
5	甕	口径 17.8 口縁部～脊部破片 / 砂粒、赤褐色粒を含む / 口縁部横撫で。脊部は内、外とも刷毛目が顕著。脊部外面は煤け、口縁部外側に煤が付着している。
6	甕	口径 22.1 脊部以下欠損 / 砂粒を含む / 淡白褐色 口縁部横撫で。器面は研磨される。頸部外面に煤が若干付着。 口縁部に刻目が連続する。
7	甕	口径 19.7 口縁部～脊部破片 / 砂粒、赤褐色粒を含む / 白薄茶色 口縁部横撫で。外面頸部～脊部にかけ刷毛目がみられる。脊部内面は範撫で。
8	台付甕	口径 10.9 口縁部～脊部破片 / 砂粒を含む / 白褐色 S字状というよりは、受け口状の口縁部で、横撫でされる。外面脊部は斜位の刷毛目 頸部は凹帯のようになっており下に 4 条の沈線が横走する。
9	台付甕	口径 11.5 口縁部～脊部破片 / 砂粒、赤褐色粒を含む / 暗肌色 S字状口縁部横撫で。外面脊部は斜位の刷毛目が施され、頸部下～肩部にかけ数条の 沈線が横走する。
10	台付甕	口径 19.8 口縁部～脊部破片 / 砂粒、赤褐色粒を含む / 赤褐色～黒褐色 S字状口縁部は横撫でされ、口唇部内側に極僅かに浅い凹帯がめぐる。外面脊部は、 斜位の刷毛目が施され、頸部下～肩部に刷毛目が帶状に横走する。脊部内面には、浅 い溝状の指頭圧痕がみらる。
11	台付甕	底径 9 脚台部破片 / 砂粒、赤褐色粒を含む / 暗赤褐色 S字状口縁台付甕の脚台部資料。
12	高坏	口径 31.6 坏部破片 / 砂粒を含む / 外面暗褐色、内面褪褐色 器面は磨き、撫でが施される。大型の高坏の破片資料
13	高坏	底径 12.2 脚部破片 / 砂粒を含む / 暗薄茶色 外面範磨き。内面は撫で。3 孔があく。
14	鉢	口径 19.7 2/3 欠損 / 砂粒、若干の赤褐色粒を含む / 薄茶色 口縁部横撫で。内面は研磨される。外面も磨かれるが刷毛目がのこる。



第72図 32号住居址出土遺物 (1/4)

番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調
		整形・特徴・その他
15	紡錘車	径 5.8 厚さ 1.5 前後 1/2 欠損 / 砂粒、若干の赤褐色粒を含む / 白褐色 器面は磨滅によりザラつく。中心孔のまわりが厚さを増す。
16	鉄器	長さ 5 幅 1 厚さ 0.1 / _____ / 片側に刃が付くと思われ反対側に穴があく。詳細は不明。

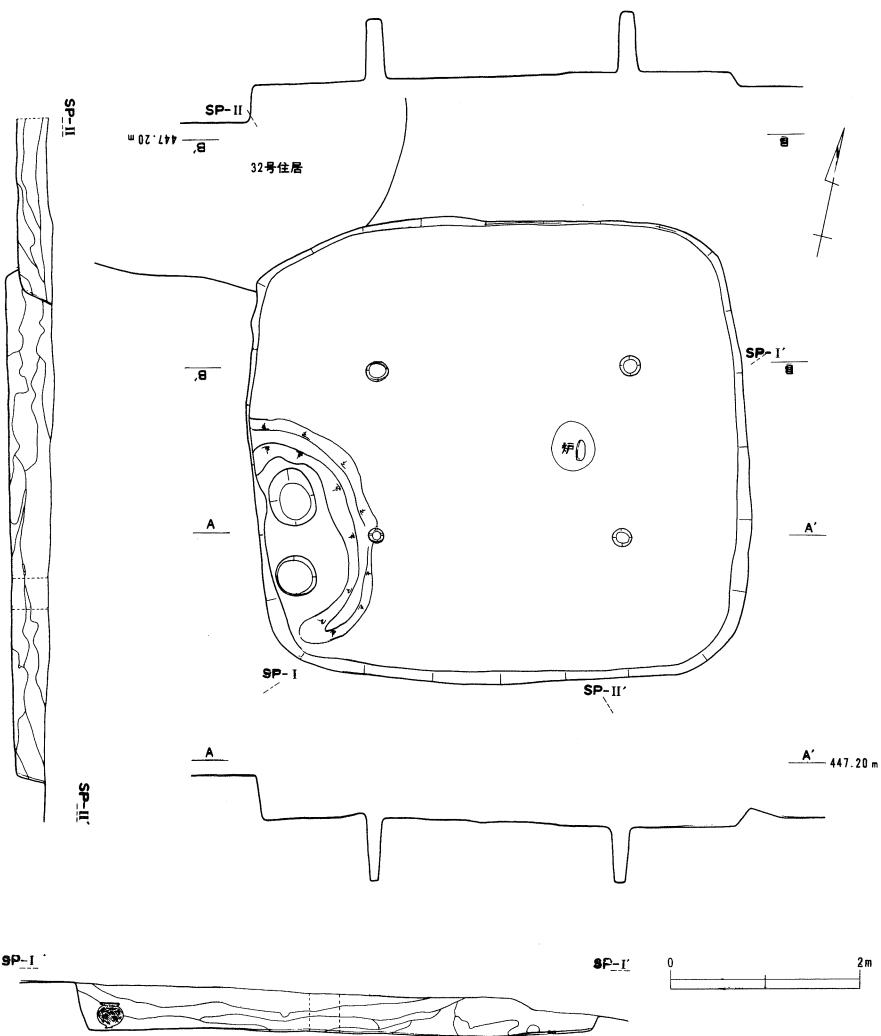
〈33号住居址〉 (第73・74・75図)

〔遺構〕

調査区東半部南側の16-K域に位置する。黄褐色土中に褐色土の落ち込みを発見し発掘を行う。32号住居址との切り合い関係を考慮し、住居址の対角線上に土層観察用土手を残し掘り下げた。埋没土は、上から褐色土・暗褐色土・黄褐色土・炭化物等を含む土の4層に大別される。

暗褐色土中

より炭化物・焼土の混入が多くなり、床面浮上約15cm下には多量の炭化材が検出された。壁は良好に立ち上がるが、北西隅は32号住居址と重複しており明瞭ではなく、また、東壁は削平により低くなっている。壁高は、40cm前後であるが、東壁は20cm前後を

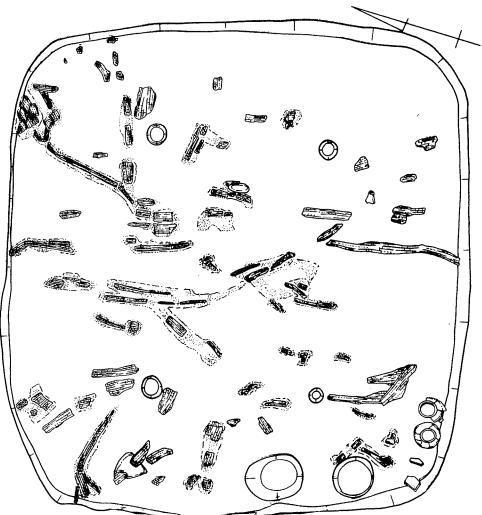


第73図 33号住居址平・断面図 (1/80)

測る。規模は東西約5.2m、南北約4.9mで、平面形は若干胴張り気味の隅円長方形を呈する。柱穴は床面やや南寄りに長方形に配された4本が検出された。床面からの深さは、60cm前後を測る。他に深さ約55cmで47×60cmの不整楕円形を呈する穴と、深さ約40cmで直径約43cmの円形の穴が、南西隅に北南にある。その穴の北の床面が若干高くなり、そこから穴を囲むように比較的低い土手状の高まりがめぐっている。炉は、床面中央部よりも東にあり、44×52cmの不整楕円形の床面より浅く窪んだ炭化物等の部分で、9×22cmの石が置かれている。焼土はその炭化物等の部分の下に、ひとまわり小さい範囲に約3cmの厚さで形成されていた。長軸の方向は、N-78°-E。

[遺物]

炭化材は、丸太材乃至角材と思われるもので、四方の壁から中心に向うように検出された。本住居址は、火災を受け廃絶されたものであろう。土器等の遺物は少なく、南西隅に1・2・



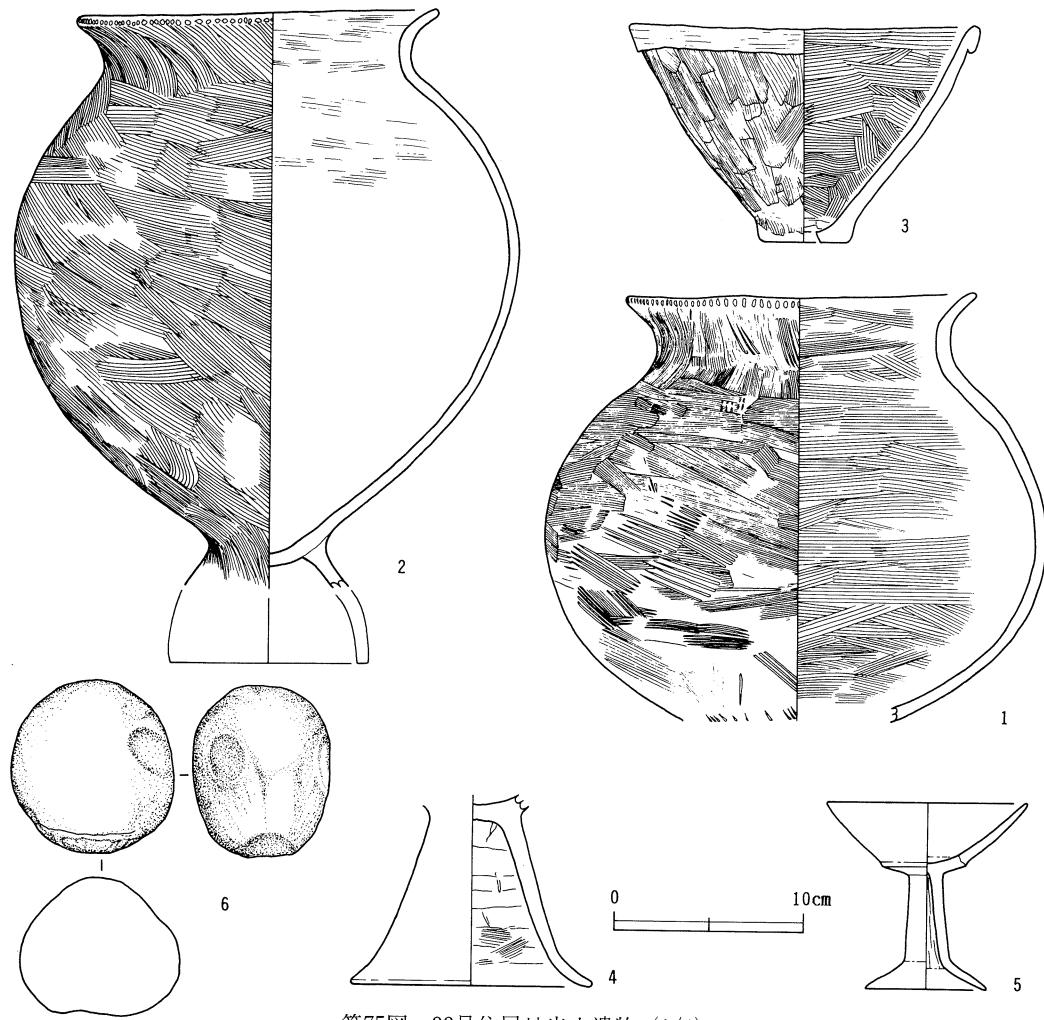
第74図 33号住居址炭化材等出土状態 (1/80)

出土遺物一覧

(単位: cm)

番 号	器 種	法 量 等 / 胎 土 / 色 調
		整 形 • 特 徴 • そ の 他
1	甕	口径18.4 底部欠損 / 雲母小片、砂粒を含む / 外面淡褐色、内面暗褐色
		口縁部は横撫でされ、刻目が連続する。内面は横位の刷毛目。外面、頸部付近は縦位、胴部上半は横位の細かい刷毛目。胴部下半は、粗い刷毛目。器面に黒斑あり。
2	台付甕	口径19 脚台部欠損 / 砂粒を含む / 外面胴部上半肌色、下半黒褐色、内面褐色
		外面は刷毛目が顕著。内面は刷毛整形後鎗撫でが施される。内面胴部中位には、煤が付着したように黒い帯が走る。口縁部には、櫛齒(刷毛)状工具による刻目が連続する。
3	甑	口径18.5 底径4.7 器高11.3 完形 / 雲母小片、砂粒を含む / 灰黄赤褐色
		折り返し口縁部横撫で。外面粗い縦刷毛整形後細かい縦刷毛整形。内面横位刷毛目。底部は鎗削りがみられ、单孔があく。
4	高 坏	底径12.7 坏部欠損 / 精製 / 赤褐色
		外面は丁寧に研磨され丹彩される。内面は輪積痕がみられるが、鎗撫で刷毛目が施される。
5	高 坏	口径10.5 底径6.4 器高9.9 坏部一部欠損 / 微砂粒を含む / 楚赤褐色
		器面は、撫で・磨きにより仕上げられるが、磨滅によりザラつく。
6	石 器	長さ9.0 幅8.5 厚さ7.0 / 石材は安山岩 / —————
		挙大の石器で。凹みを有し、擦痕、敲打痕がみられる。

3の土器があり、1の甕に3の甌がのった状態で出土しその西隣りに2の甕があった。他の遺物は埋没土中よりの出土である。特に5の高壺は北壁寄りに床面より約30cm浮上して出土しており、本遺構廃絶後に廃棄されたものととらえられ、他の土器とは時期を画するであろう。



第75図 33号住居址出土遺物 (1/4)

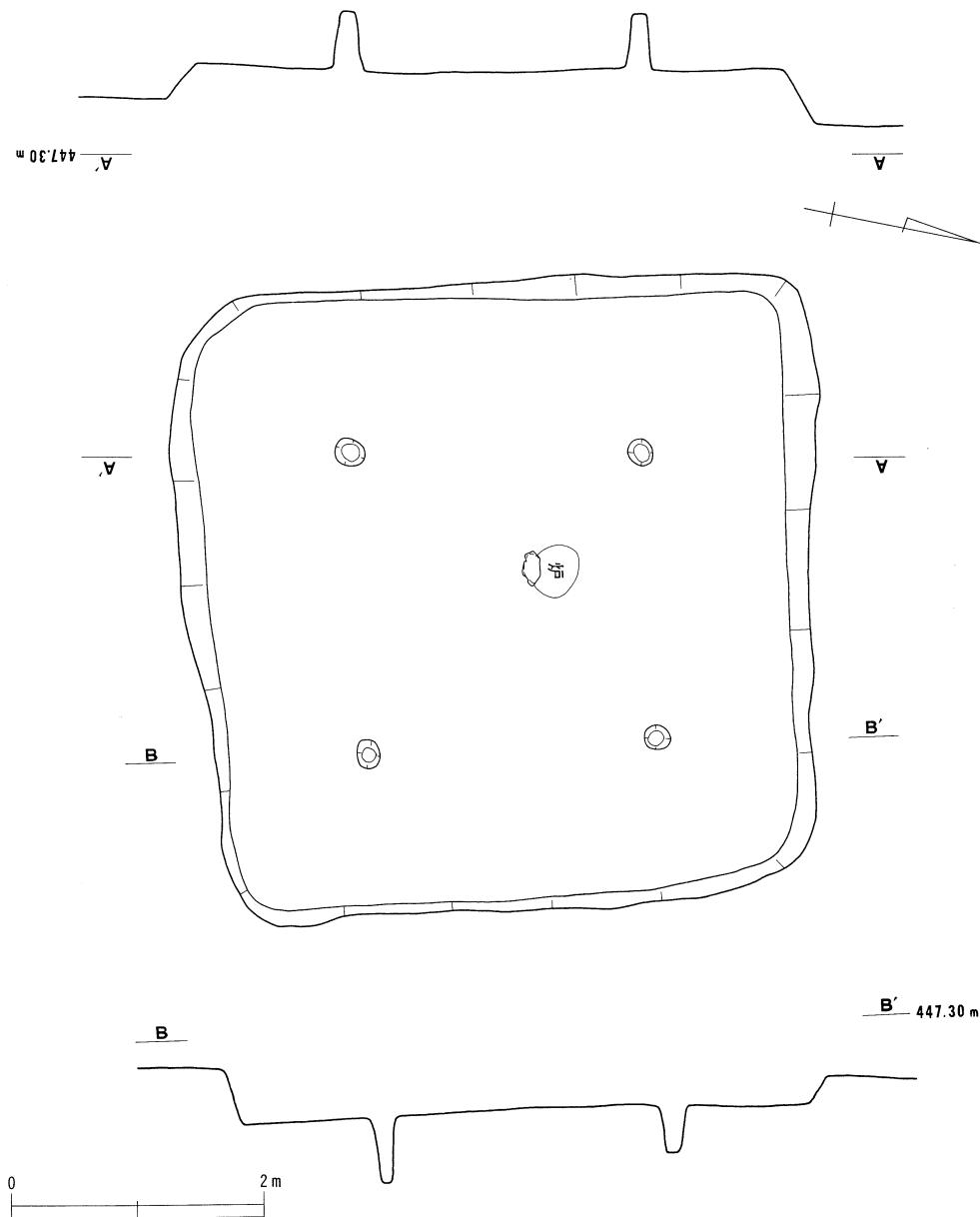
〈34号住居址〉(第76図)

〔遺構〕

調査区東半部南端の18-I域に位置する。規模は一边約5mで、平面形は隅円方形を呈する。壁は外傾しながら立ち上がり、高さ約30~45cmを測る。柱穴は、最寄りの壁より約1m乃至1.2m離れて、方形に配された4本が検出された。床面からの深さは、浅いもので約40cm未満、他は50cm前後を測る。床面は中央部東側が高く、周辺壁際に向って低くなっている。炉は床面中央部よりも北にあり、直径40cm前後の不整円形の範囲に焼土と炭化物の部分があり南端に13×28cmの石が据えられる。長軸の方向は、N-10°-W。

〔遺物〕

比較的遺存のよい竪穴であるが、出土遺物は小片ばかりで見るべきものがなかった。



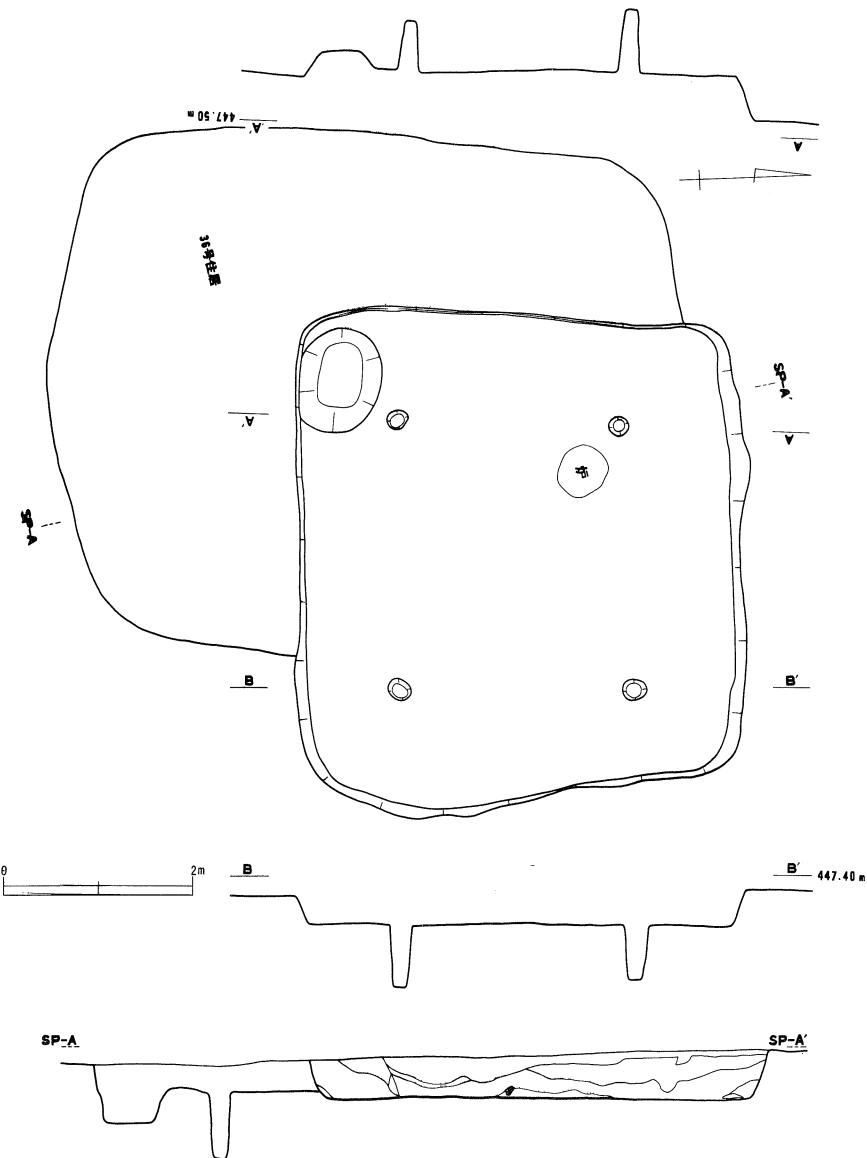
第76図 34号住居址平・断面図 (1/60)

〈35号住居址〉(第77・78・79・80図)

[遺構]

調査区南半部南側の15-I域に位置する。黄褐色土中に黄灰褐色土の落ち込みを発見し発掘する。南側と西側に落ち込みが広がっていたので、土層観察用土手を十字に残し掘り下げた。埋没土は、床面壁際に暗黄灰褐色土、床面直上中央に黒褐色土、その上に順次暗黄褐色土・黄褐色土・黄灰褐色土が堆積していた。壁は外傾しながら良好な立ち上がりをみせるが、南壁と

西壁の大部
分は、36号
住居址を切
っており、
黄褐色土の
良好な壁面
はなく、立
ち上がり部
分に僅かに
みられたに
すぎない。
また、東壁
北半部は32
号住居址と
重複してお
り、本住居
址が32号住
居址を切っ
ていると思
われるが、
明瞭ではな
かった。壁
高は、南壁
が低く約30
cmで、平均
45cm前後を

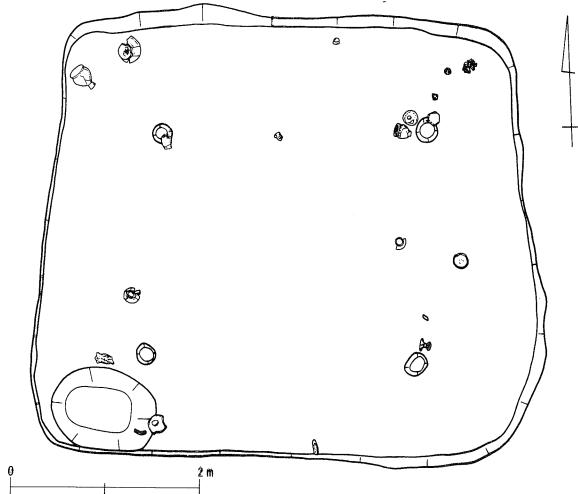


第77図 35号住居址平・断面図 (1/80)

測る。規模は東西約5m、南北約4.5mを測り、平面形は隅円長方形を呈する。柱穴は最寄りの壁から約1m程離れて掘り込まれており、4本が略長方形に配され、床面からの深さ約50~70cmを測る。床面は中央から南西にかけ若干高くなっている。南西隅に南壁に接して、床面からの深さ約40cmを測る85cm×1.1mの平面形長方円形を呈する穴が検出された。炉は、床面中央から北西隅柱穴に近い所にある。50×55cmの長方円形に厚さ約6cmで炭化物等の部分があり、その下の中央部分に28×32cmの範囲に焼土が形成されていた。焼土の厚さは約6cmを測る。長軸の方向は、N-86°-W。

[遺物]

土器が主体に豊富に出土している。それらは床面中央ではなく周辺にあり、北西側に台付甕・壺・小型土器、北東側に片口土器・小型台付甕・小型手捏ね土器、東側に甕・器台、南西側に壺・台付甕の胴部下半等と大まかな片寄りがみられる。土器は略床面直上からの出土であり、本住居址にともなうもので、編年的に同時期の良好な一括資料となろう。また、炭化材が、南西隅の穴の近くから出土している。



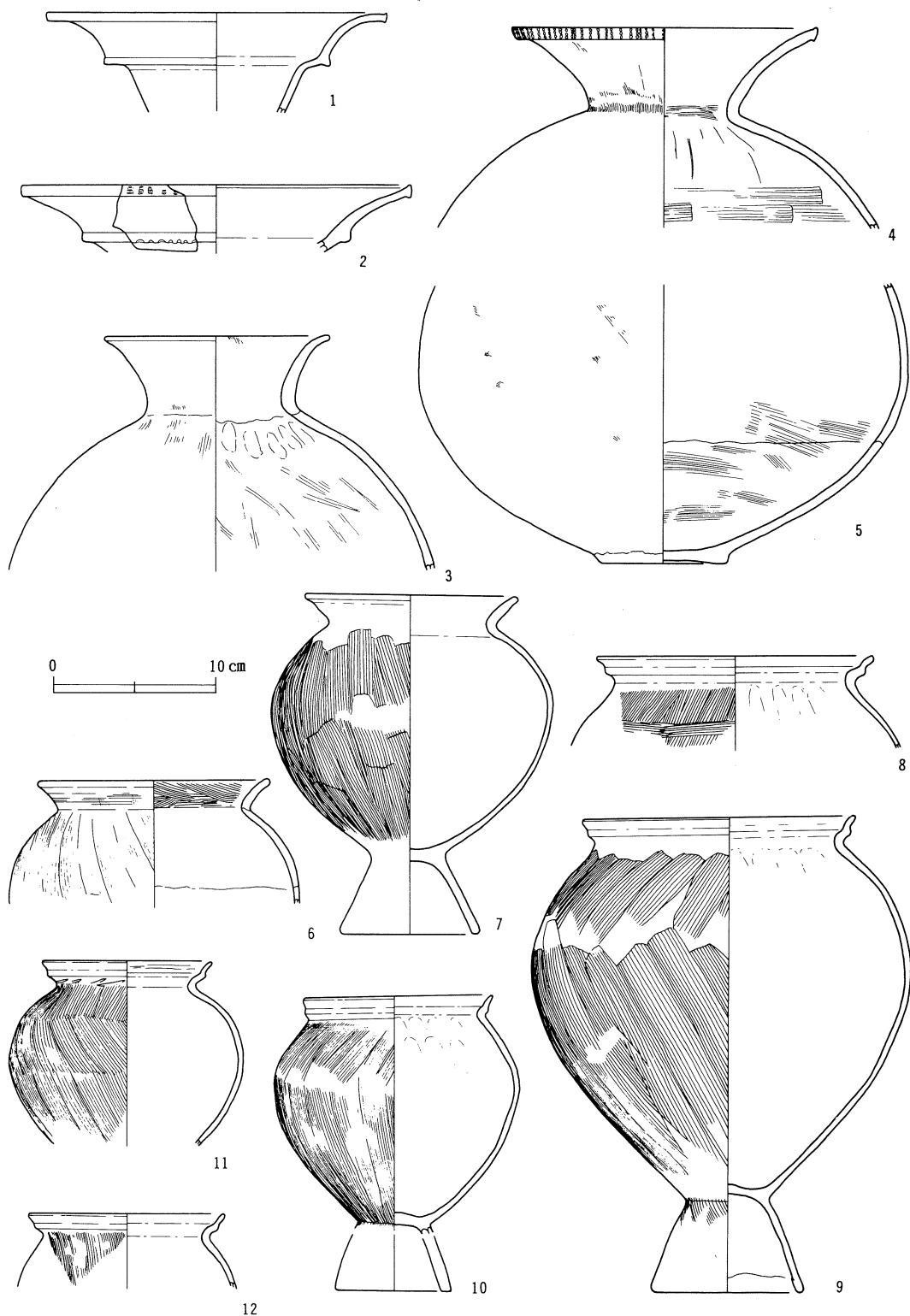
第78図 35号住居址遺物出土状態 (1/80)

出土遺物一覧

(単位: cm)

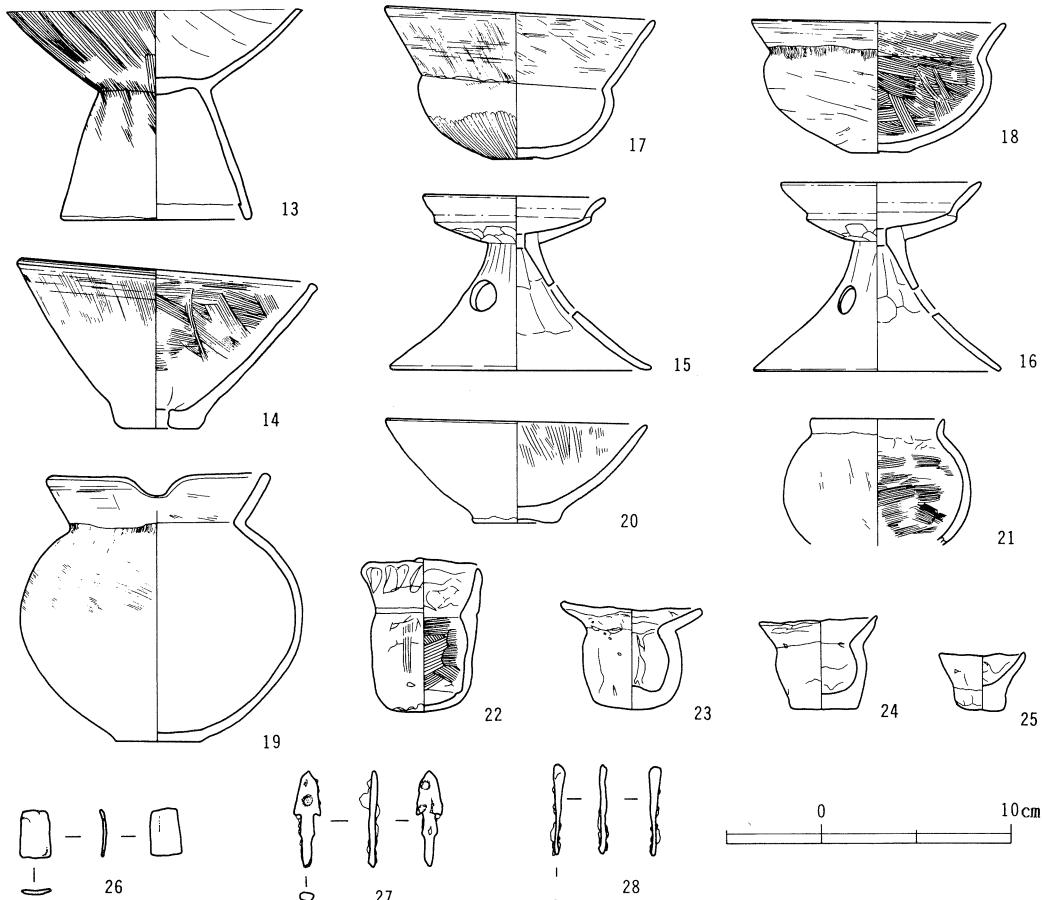
番 号	器 種	法 量 等 / 胎 土 / 色 調
		整 形 • 特 徴 • そ の 他
1	壺	口径20.9 口縁部破片／砂粒、赤褐色粒子を含む／暗薄茶色 内面は上から斜位～横位箒磨き。頸部が直立気味に立ち上がりそこから二段に外反する複合口縁。
2	壺	口径23.9 口縁部破片 / 砂粒を含む／白褐色 複合口縁部外側上下二段に刷毛状工具による圧痕、刻目が連続する。
3	壺	口径13.8 口縁部～胴部破片／砂粒を含む／外面明淡色、内面暗灰白褐色 外面は撫でによる仕上げ、内面は、箒削り痕、斑点状の圧痕がみられる。雑な箒磨きが施される。
4	壺	口径18.8 口縁部～胴部破片／白色粒子、砂粒を含む／外面明褪褐色、内面灰白褐色 内面、口縁部箒磨き、頸部に横位の刷毛目痕あり。内面胴部は刷毛状工具による撫で。外面は箒磨きされるが頸部に細かい刷毛目痕がある。幅のある口縁部外面に刷毛状（櫛齒状）工具による圧痕がめぐる。
5	壺	底径 7.8 脇部～底部破片／白色粒子、砂粒を含む／外面白茶褐色系、内面灰白褐色系 内面刷毛状工具による撫で。外面箒磨き。底部は、周辺に粘土をめぐらし、上げ底風になっており中に幽かに木葉痕がみられる。
6	甕	口径14.2 口縁部～胴部破片／砂粒、赤褐色粒を含む／暗褐色系 口縁部横撫で、刷毛目痕あり。胴部内面撫で、外面刷毛目整形。
7	台付甕	口径13 底径 8.5 器高21 若干欠損／砂粒を含む／暗褐色 口縁部横撫で、刷毛目痕あり。胴部内面及び脚台部は撫で・磨きによる仕上げ。胴部外面は刷毛目顯著。外面胴部上半は黒く煤け、燃焼によるものか、器面の剥落が多い。胴部最大径内面は煤が帶状に付着。

番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調
		整形・特徴・その他
8	台付甕	口径17 口縁部付近破片／白色粒、砂粒を含む／外面暗灰褐色、内面白褐色系
		S字状口縁部横撫で。胴部、外面斜位、横走の刷毛目、内面指頭圧痕あり。埋没土より出土。
9	台付甕	口径16.7 底径9.3 器高29.3 完形／金雲母粒、白色粒子、砂粒を含む／赤褐色系
		S字状口縁部横撫で。外面、胴部刷毛目が顕著、脚台部にもある。外面胴部最大径下半は煤け、内面も煤けている。脚台部端は折り返してある。
10	台付甕	口径11.6 脚台部他欠損／白色小粒、砂粒を含む／外面暗褐色、内面赤褐色系
		S字状口縁部横撫で。外面胴部刷毛目が顕著。熱によるものか内面、口縁部剝落がある。頸部下に横走する撫でが施される。
11	台付甕	口径10.3 口縁部～胴部破片／黒色粒、砂粒を含む／褪赤褐色、黒斑あり。
		S字状口縁部横撫で。胴部外面刷毛目。内外面とも磨滅によりザラつく。
12	台付甕	口径12 口縁部破片 / 砂粒を含む / 肌色
		S字状口縁部横撫で。胴部外面比較的細かい刷毛目。内面幽かに刷毛目痕あり。
13	台付甕	底径10 胴部上半欠損 / 砂粒を含む / 赤褐色
		外面、脚台部上端～胴部、刷毛目が顕著。胴部内面は撫で、黒斑あり。脚台部端は折り返してある。
14	甕	口径15.8 底径4.3 器高8.5 完形／白色粒、砂粒を含む／薄茶色系
		口縁部横撫で。内外面とも刷毛目がみられる。底部に单孔があく。
15	器台	口径9.6 底径13.7 器高9.3 若干欠損 / 精製 / 褪赤褐色
		口縁部横撫で。器受部、内面箇磨き、外面箇削りされ、底に单孔があく。脚部、外面箇磨き、内面上半箇削り、下半撫でが施され、円孔が3つあく。
16	器台	口径10.5 底径13 器高10 若干欠損 / 赤褐色粒子を含む。精選 / 褪赤褐色
		口縁部横撫で。器受部、内面箇磨き、外面箇削りされ、底に单孔があく。脚部、外面箇磨き、内面上半箇削り、下半撫でが施され、円孔が3つあく。
17	鉢	口径14.2 底径2.8 器高7.8 1/5欠損 / 黒色粒子、砂粒を含む。暗薄茶色
		器面は全体を刷毛整形の後、口縁部横撫で。胴部箇磨きが施される。
18	鉢	口径13.3 底径3 器高7 略完形／微砂粒、赤褐色粒子を含む／薄茶色系
		口縁部横撫で。内面は全体に刷毛目痕がみられる。外面頸部に刷毛目痕あり。外面胴部は、箇削り。
19	片口	口径11.7 底径4.5 器高14 完形／砂粒を含む／暗薄茶色
		口縁部横撫で。内面胴部比較的丁寧な箇磨き。外面は箇磨きが施されるが、胴部上半に刷毛目痕がみられる。
20	鉢	口径13.7 底径4.4 器高5.4 若干欠損 / 赤褐色小粒、砂粒を含む / 暗薄茶色系
		口縁部横撫で。箇磨きで仕上げられるが、内面は刷毛目がみられ、剝落が著しい。



第79図 35号住居址出土遺物 (1/4)

番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調
		整形・特徴・その他
21	小型壺	口径 7.0 口縁部～胴部破片 / 砂粒を含む / 明白黄褐色 口縁部横撫で。外面磨き、内面箒撫でにより仕上げられる。
		口径 6.2 底径 3.0 器高 8.0 完形 / 赤褐色粒子、砂粒を含む / 白褐色 口縁部は指頭圧痕顕著。胴部内面 刷毛目痕がみられる。
23	小型手捏土器	口径 7.3 底径 3.5 器高 5.3 完形 / 白色粒子、砂粒を含む / 暗白褐色 手こねによりつくられる。
		口径 6.2 底径 3.5 器高 4.7 口縁部若干欠損 / 砂粒を含む / 白褐色 箒削りによる整形痕がみられる。
25	小型手捏土器	口径 4.5 底径 2.4 器高 2.9 1/3欠損 / 砂粒を含む / 外面黒色、内面暗白褐色 手こねでつくられる。
		長さ 2.6 幅 1.5 厚さ 0.25 / 銅製 / 緑青色
27	鉄鍔	長さ 5.1 最大幅 1.4 厚さ 0.35 / 鉄製 /
		長さ 4.8 厚さ 0.4 / 鉄製 /

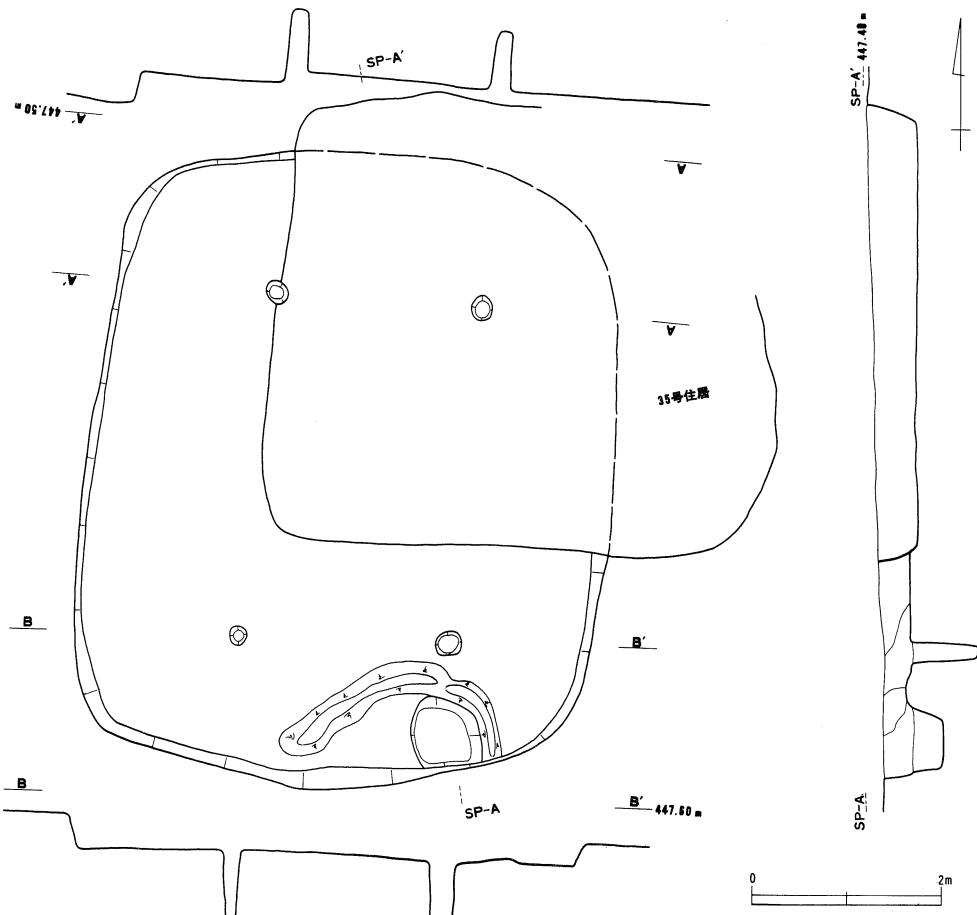


第80図 35号住居址出土遺物 (1/4)

〈36号住居址〉(第81・82図)

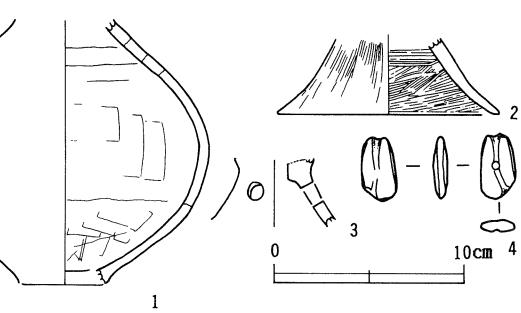
[遺構]

調査区東半部南西側、28号住居址の東に位置する。北東側大部分は、35号住居址に切られ遺存していない。埋没土は、壁から暗茶褐色と暗褐色土が交互に堆積。規模は南壁約5m、西壁約6mを測り、平面形は隅円長方形を呈していたと思われる。壁はやや外傾し、高さ約40cm、



第81図 36号住居址平・断面図 (1/80)

東壁が低く25cm前後を測る。床面は略平坦。柱穴は、長方形に配された4本主柱穴で、床面からの深さ80cm前後を測る。北東側の1本は、35号住居址の床面下より検出された。南壁東側に床面からの深さ約30cm、一辺約75cmの平面形不整形の穴が壁に接してあり、そのまわりを土手状の高まりがめぐっている。炉は遺存



第82図 36号住居址出土遺物 (1/4)

部ではない。長軸の方向は、N - 7° - E。

[遺物]

遺物の出土は少ない。4は石製装飾品の半製品、石材は凝灰岩(?)。

出土遺物一覧

(単位: cm)

番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調
		整形・特徴・その他
1	壺	底径4.6 脊部破片 / 微砂粒を含む / 赤褐色系
		外面磨滅によりザラついているが、丹彩された形跡がある、内面は範撫での後範磨きが施される。輪積痕あり。
2	高坏	底径11.6 脚部破片 / 白色粒子、砂粒を含む / 暗灰褐色
		内外面ともに刷毛目痕がみられる。
3	器台	破片 / 砂粒を含む / 白褐色系
		器受部底部に单孔。脚部に3孔があく器台の破片資料。

<37号住居址> (第83・84図)

[遺構]

調査区東半部北西端、1-H域に位置する。大型の豈穴式住居址ではあるが、攪乱、削平が著しい。規模は、一辺約8.5mを測る。平面形は隅円方形を呈する。壁は東・南壁が削平により低く、西壁等高い所では50cm前後を測る。床面は北から南へ緩やかに傾むいている。柱穴は、4本主柱穴で正方形に配される。床面からの深さは、北側2本が約1m、南側2本が約80cmを測る。深さ約24cm、約70cm×1.2mの隅円長方形の穴が南西隅にある。炉は、床面中央からやや北西寄りの所に、直径1.4m前後の不整円形に炭化物等の部分があり、その下に45×90cmの範囲に焼土が形成されていた。長軸の方向は、N - 5° - W。

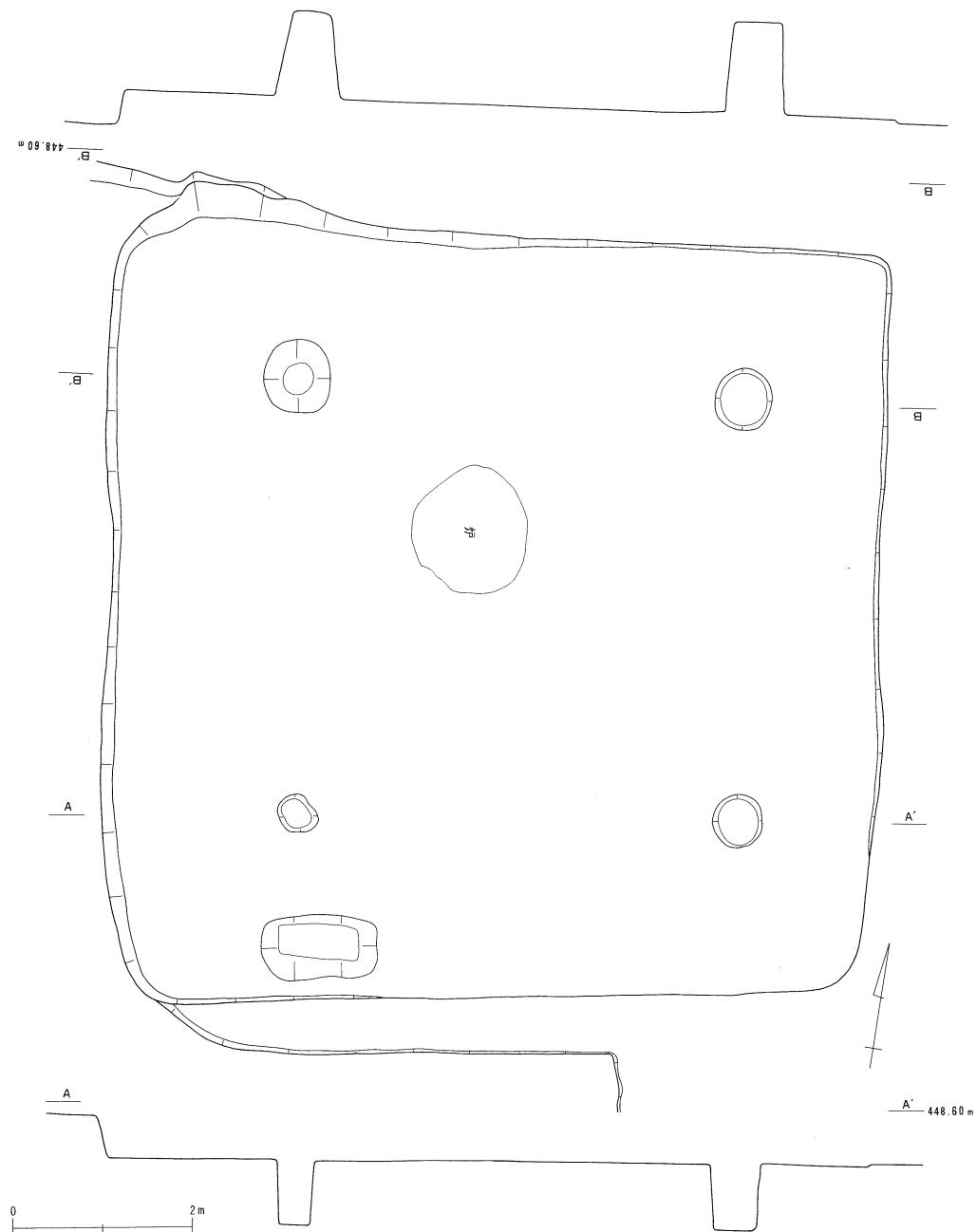
[遺物]

遺物の出土は少なく、破片ばかりである。16は磨製石鎌の破片。炭化材も出土している。

出土遺物一覧

(単位: cm)

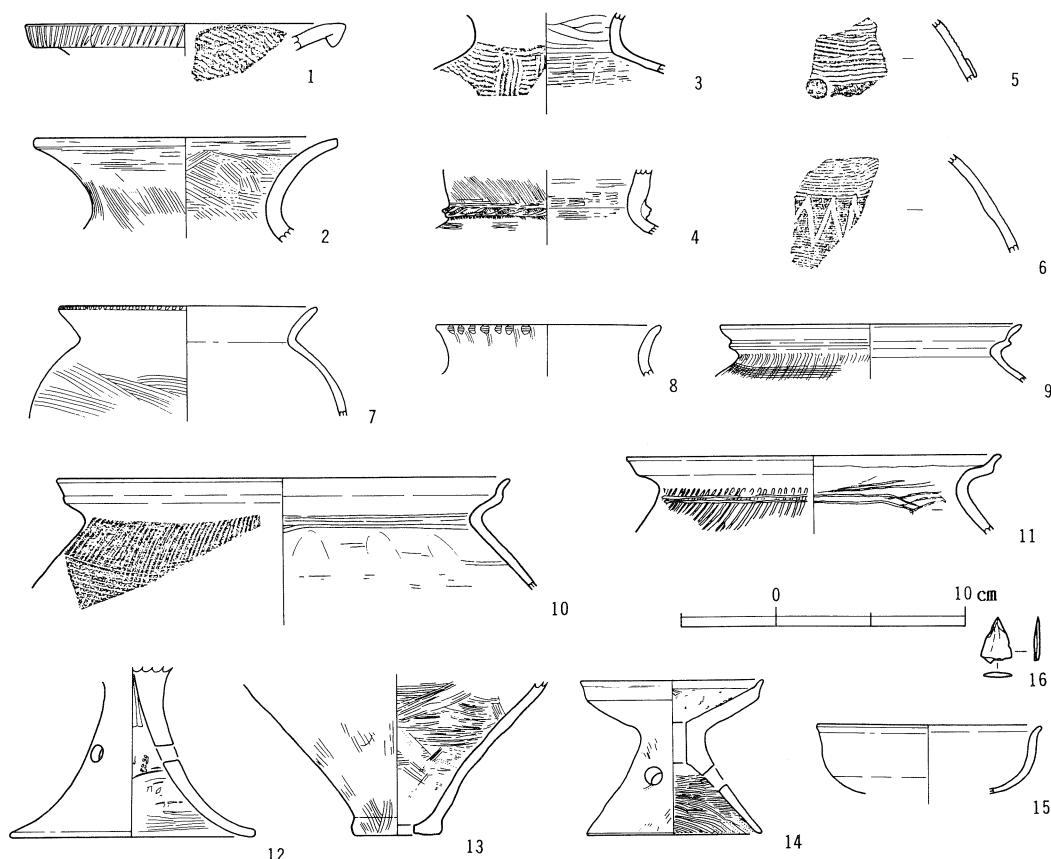
番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調
		整形・特徴・その他
1	壺	口径16.8 口縁部小破片 / 砂粒を含む / 白褐色系
		折り返し口縁外側に斜位の短い沈線がめぐる。内面に繩文が施される。
2	壺	口径16.0 口縁部破片 / 砂粒を含む / 褐褐色系
		口縁部横撫で。内外面とも刷毛目がみられる。内面若干煤付着。
3	壺	頸部付近破片 / 赤褐色粒子、砂粒を含む / 白黄褐色～薄茶色
		頸部内面範磨き。胴部内面刷毛目痕あり、外面は横位の振幅の小さい櫛描波状文と縦位の櫛描文が施される。
4	壺	頸部付近破片 / 赤褐色粒、砂粒を含む / 褐褐色系
		頸部内面は磨かれ丹彩される。外面は刷毛目痕がみられ、頸部に櫛歯文(刷毛状工具による刺突)の施される凸帶がめぐる。



第83図 37号住居址平・断面図 (1/80)

番号	器種	法量等／胎土／色調
		整形・特徴・その他
5	壺	胴部破片／赤褐色粒子、砂粒を含む／暗褪赤褐色系 内面は刷毛目。外面は、振幅の極僅かな櫛描波状文と、断続の激しい櫛描簾状文が施され、円形貼付文が付される。3と同一個体かもしれない。

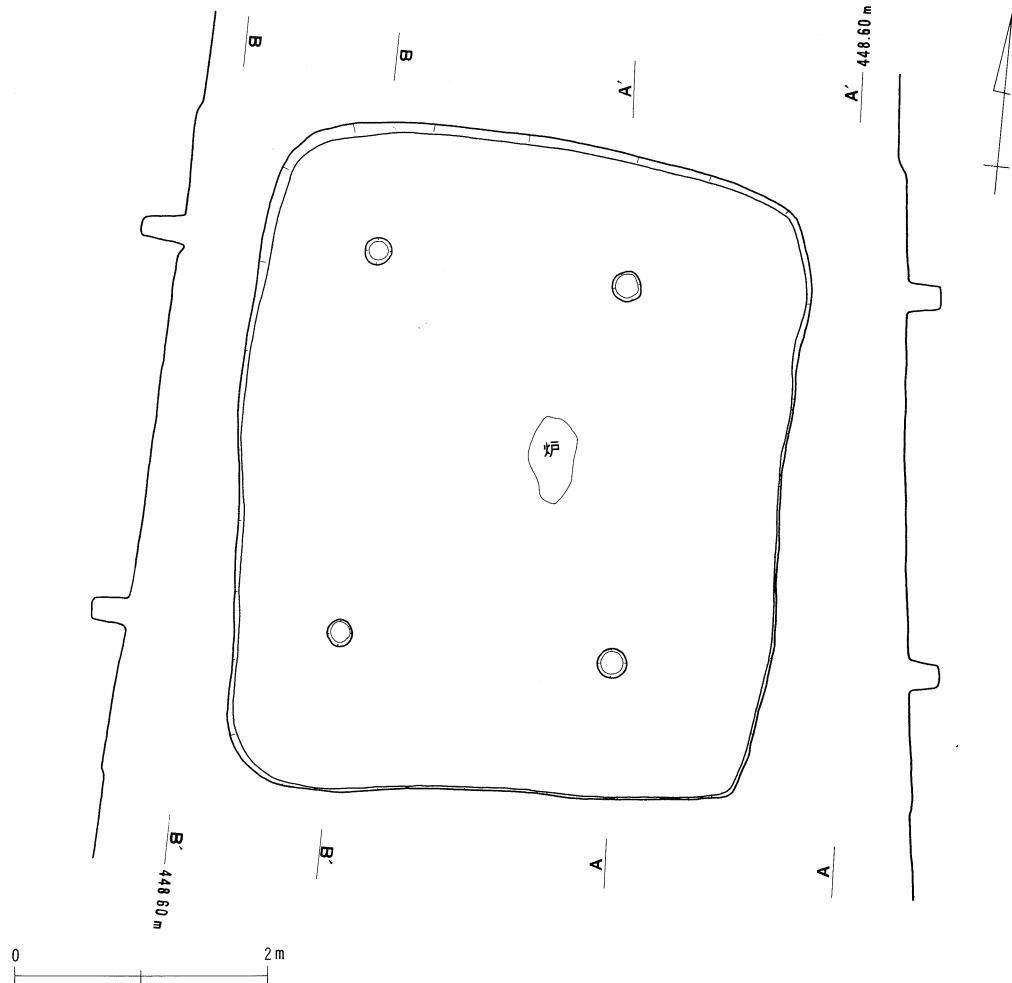
番号	器種	法量等／胎土／色調
		整形・特徴・その他
6	壺	胴部破片／赤褐色粒、砂粒を含む／褪褐色系 外面に横走する櫛描文と沈線による鋸歯文が描かれる。
7	甕	口径13.5 口縁部～胴部破片／砂粒を含む／褪明褐色 磨滅が著しい。口縁部は横撫でされ、刻目が連続する。胴部外面は刷毛目がみられ、煤付着。
8	甕	口径11.8 口縁部小破片／赤褐色粒子、砂粒を含む／外面暗赤褐色、内面淡褐色 外面口縁部に刷毛状工具による刻目がめぐる。
9	台付甕	口径15.8 口縁部破片／白色粒子、砂粒を含む／赤褐色系 S字状口縁部横撫で。胴部外面は、斜位と横走する刷毛目がみられる。
10	台付甕	口径23.8 口縁部破片／白色粒、砂粒を含む／白黄褐色 S字状口縁部横撫で。胴部外面は斜位と横走する刷毛目。内面、頸部は刷毛目、胴部には指頭圧痕がみられる。内面若干燥ける。
11	台付甕	口径19.7 口縁部破片／白色粒、砂粒を含む／白褐色系 S字状口縁部横撫で。胴部外面は、斜位の粗い刷毛目と横位の沈線がみられる。内面頸部刷毛目痕あり。口縁部若干黒くなっている。



第84図 37号住居址出土遺物 (1/4)

番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調
		整形・特徴・その他
12	高坏	底径12.8 坏部欠損 / 砂粒を含む / 白黄褐色系
		外面籠磨き。内面に刷毛目痕がみられる。3孔があく。
13	甌	底径4.6 口縁部欠損 / 砂粒を含む / 白褐色系
		内面は刷毛目が比較的顯著。底に单孔があく。外面黒斑あり。
14	器台	口径9.6 底径9.2 器高8.2 若干欠損/赤褐色粒、砂粒を含む/白黄褐色系
		器受部、口縁部横撫で。器面は磨きによる仕上げ。脚部内面は刷毛目痕がみられる。器受部と脚部の接合部に单孔があき、脚部には3孔があく。
15	碗	口径11.8 口縁部破片 / 精製 / 赤褐色系
		口縁部は横撫でされ、器面は丁寧に磨かれる。

<38号住居址> (第85図)



第85図 38号住居址平・断面図 (1/60)

〔遺構〕

調査区東半部西側の7-G域に位置する。黄褐色土中に暗褐色土の落ち込みを発見し発掘する。東西約4m、南北約5mを測り、平面形は隅円長方形を呈する。削平により浅い豊穴で、壁高は約5~10cmを測る。床面は、北から南へ微傾斜。柱穴は略長方形に配された4本があたり、床面からの深さは25cm前後を測る。炉は、床面中央からやや東寄りに、約35×70cmの不整長楕円形の範囲にあり、焼土は厚さ約7cmでひとまわり小さく約20×40cmの範囲に形成されていた。長軸の方向は、N-0°-W。

〔遺物〕

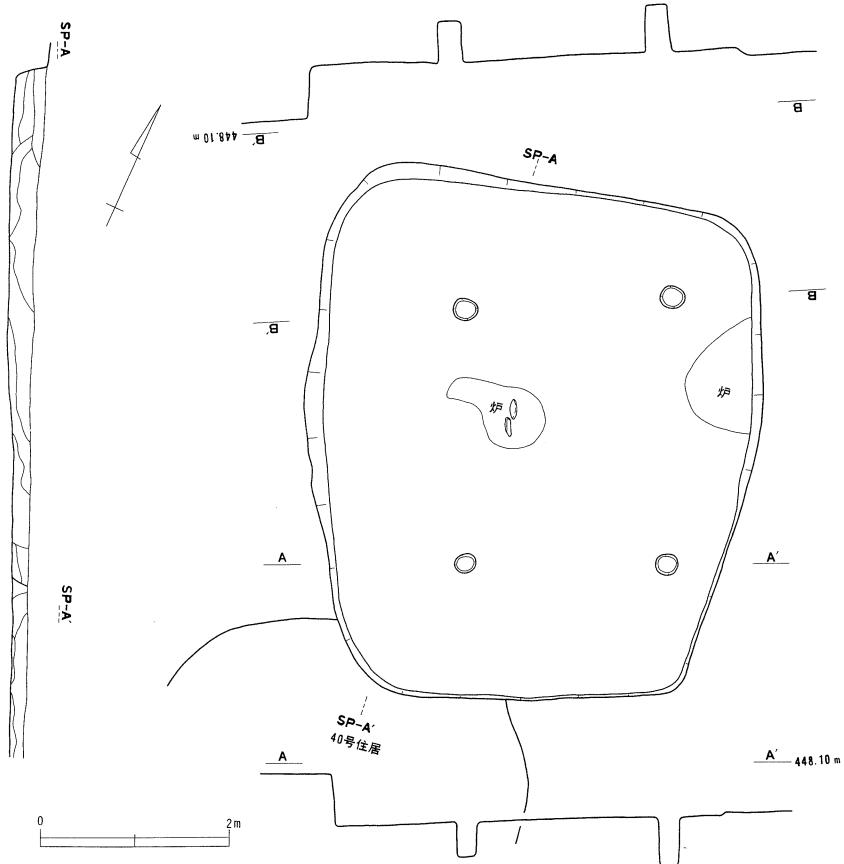
遺物の出土はほとんどなく、図化し得るものはなかった。炉の北西方向、直面直上に粘土が出土している。

〈39号住居址〉(第86・87図)

〔遺構〕

調査区東半部北端の0-J域に位置する。黄褐色土中にやや暗い黄褐色土の落ち込みを発見し、土層観察用土手を残して掘り下げる。埋没土はおおむね壁際から暗褐色土・茶褐色土・黄褐色土・褐色土の順に堆積。壁は西・北が高く、他は削平が著しく東壁は明瞭ではなかった。

壁高は、高い所で55cm前後を測り、低い所は5cm位である。南西隅は40号住居址を切っている。柱穴は4本主柱穴で、長方形に配される。床面からの深さは、西側の2本は40cm前後、東側のものは50cm前後を測る。床面

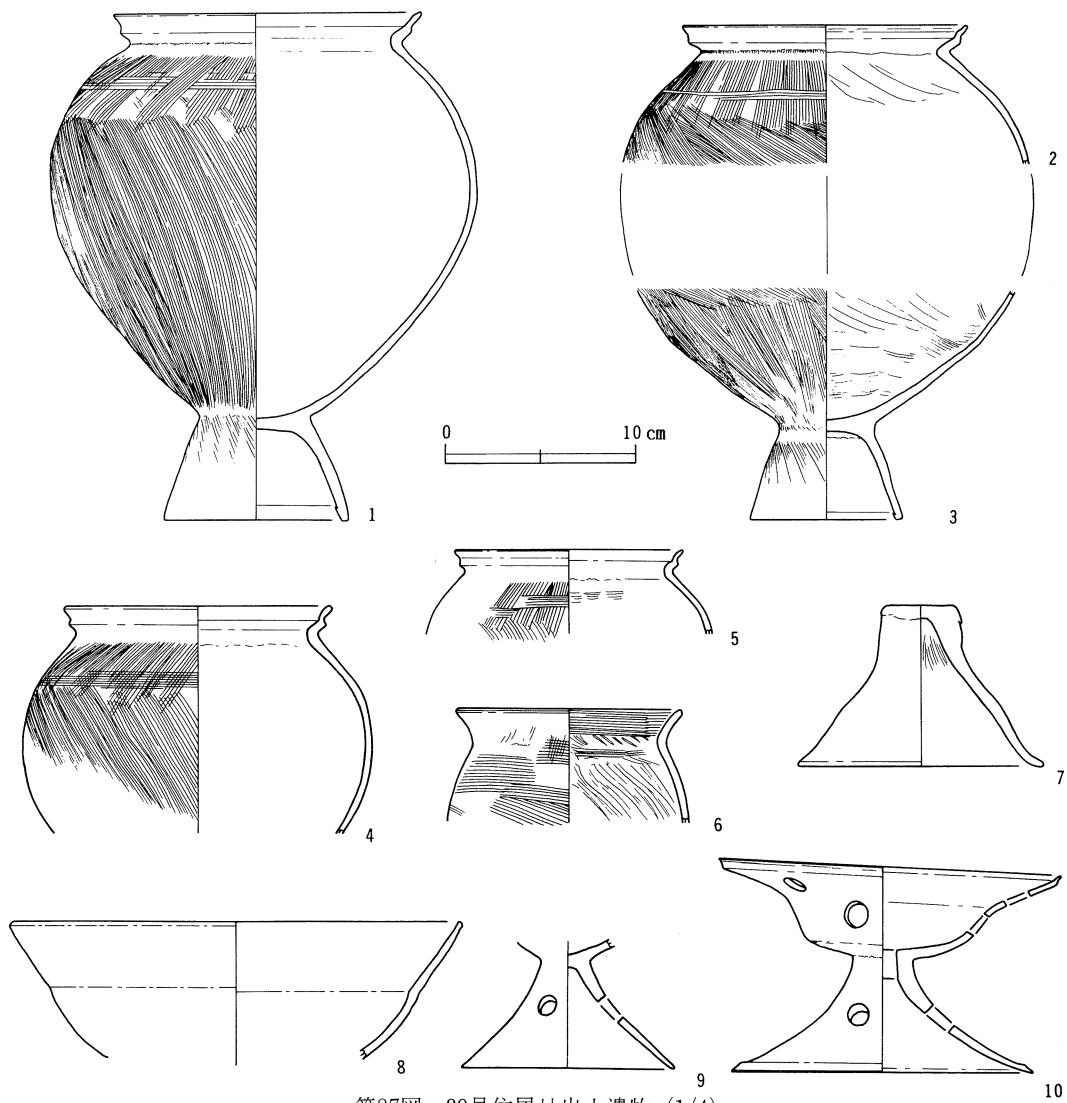


第86図 39号住居址平・断面図 (1/80)

は西へ低くなっている。規模は東西約4.6m、南北約5.5mを測る。平面形は不整の隅円長方形を呈する。炉は床面中央から西へ寄った所にあり、御玉杓子の形状を呈する。御玉杓子の頭の部分の直径は約65cmで、中央に長さ約20cm程の枕石が2個あり、ひとまわり小さく厚さ約10cmで焼土が形成されてた。長軸の方向は、N-20°-W。

〔遺物〕

遺物は全て土器であり、量的にはそれほど多くなかった。出土の状況はある程度のまとまりをもっており、S字状口縁台付甕は北西隅に蓋とともに出土し、高坏等は北東側、器台は南辺に発見された。西側からの出土が目立っているが、竪穴式住居址の東側が削平されているので土器等の遺物ももっていかれてしまった可能性が大である。出土した土器は、床面直上乃至若干浮上して発見されており、本住居址にともなうものであろう。



第87図 39号住居址出土遺物 (1/4)

出土遺物一覧

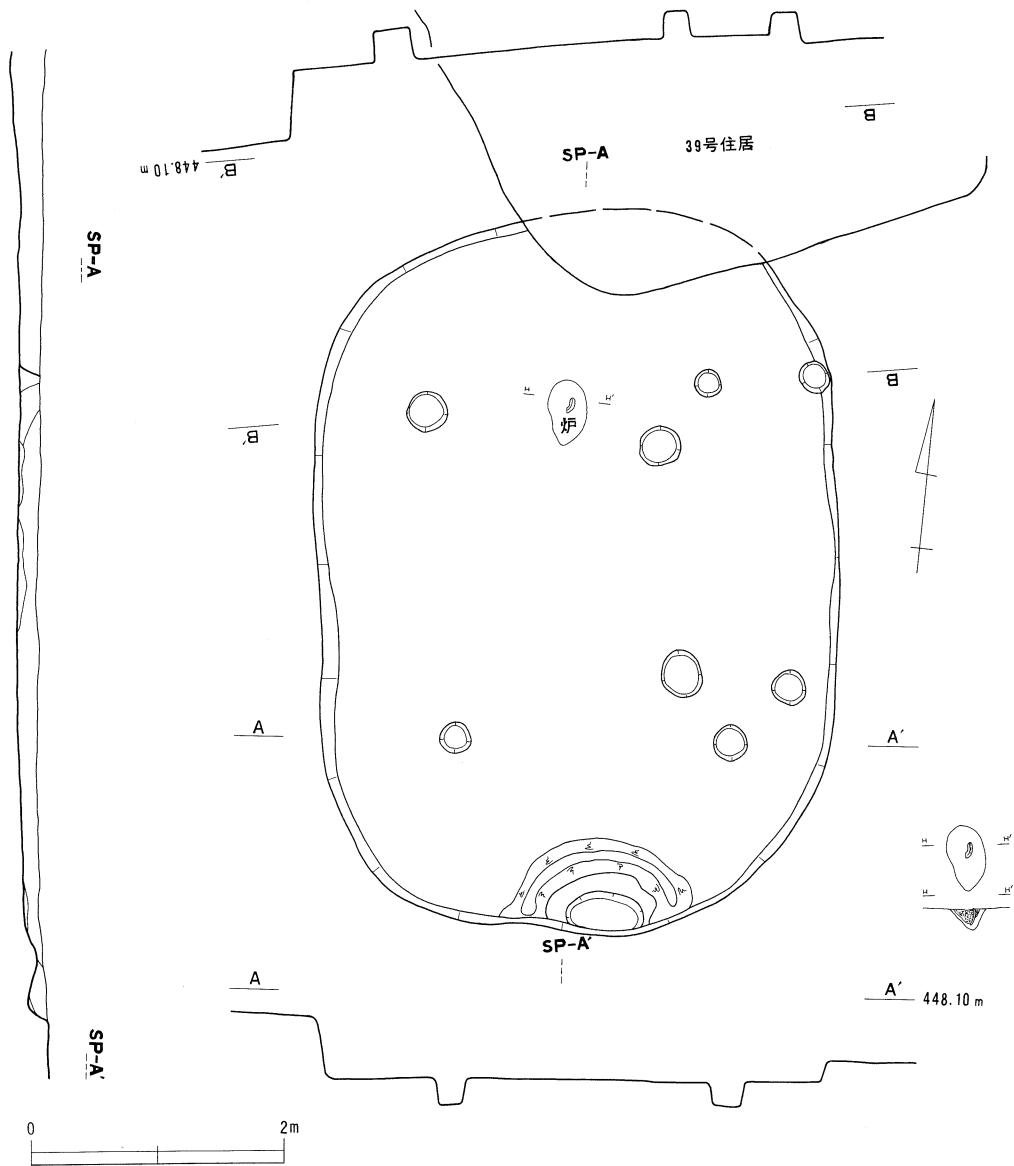
(単位: cm)

番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調
		整形・特徴・その他
1	台付甕	口径16.1 底径9.6 器高27.7 若干欠損／赤褐色粒、砂粒を含む／暗褐色 S字状口縁部は横撫で。口唇部内側に浅い凹みがめぐる。外面、頸部横撫で、胴部斜位の刷毛目、肩部付近に横位の刷毛目痕あり、脚台部外面上半には刷毛目痕がみられ、下端内側は折り返されている。器内面は剝落がみられる。
2	台付甕	口径15 胴部上半の破片／砂粒を含む／暗褐色系 S字状口縁部は横撫でされ、内側に浅い凹みがめぐる。胴部内面は雑な撫で。外面、頸部直下は横撫で、胴部は縦位・斜位の刷毛目が施され、肩部付近に刷毛目を横走させる。
3	台付甕	底径8 胴部下半の破片／赤褐色粒、砂粒を含む／暗・白褐色系 外面刷毛目痕が顕著。胴部内面にも刷毛目痕がみられる。脚台部底は、内側へ折り返しがみられる。
4	台付甕	口径14 口縁部～胴部の破片／白色、赤褐色粒、砂粒を含む／外面暗褐色系、内面白褐色 S字状口縁部横撫で。外面、頸部横撫で、胴部斜位の刷毛目、肩部付近には刷毛目が横走する。
5	台付甕	口径12 口縁部付近の破片／砂粒を含む／白黄褐色 S字状口縁部、頸部横撫で。胴部内面は撫で。僅かに刷毛目痕がみられる。胴部外面は斜位と横走する刷毛目が施される。
6	甕	口径11.8 口縁部～胴部破片／砂粒を含む／白褐色系 口縁部内面は顕著な刷毛目、外面は撫で。胴部内面は粗い鎧撫で、外面は刷毛目が著しく、煤付着。
7	蓋	鉢部径4 底径12.8 器高8.5 1/4欠損／赤褐色粒、砂粒を含む／暗褐色 内面上端に僅かに刷毛目痕あり。撫でによって仕上げられる。
8	鉢	口径23.6 破片 / 砂粒を含む / 楔褐色 撫で、磨きにより仕上げられると思われるが、磨滅により不詳。
9	高坏	底径11.2 部欠損 / 微砂粒を含む / 赤褐色 磨滅により器面はザラつき、整形等は不詳。脚部に3孔があく。
10	器台	口径18 底径15.8 器高11 1/4欠損／砂粒を含む／褪赤褐色 磨滅しているが、器面は丁寧な磨きにより仕上げられる。器受部には円孔が8カ所にあき、底に单孔があく。脚部は3孔があく。

<40号住居址> (第88・89図)

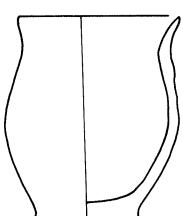
〔遺構〕

調査区東半部北辺の1-J域に位置する。黄褐色土中に暗黄褐色土の落ち込みを発見し、土層観察用土手を残し掘り下げる。埋没土は壁際から、おおむね褐色系土・黄褐色土・暗黄褐色



第88図 40号住居址平・断面図 (1/60)

土の順に堆積。壁は、西側が高く、削平により東側が低くなつておひ、高さはそれぞれ55cm前後、20cm以下を測る。規模は、東西約4.1m、南北約5.6mを測る。平面形は略小判形を呈する。壁は若干外傾し良好な立ち上がりをみせるが、北東側は39号住居址に切られていた。柱穴は4本主柱穴で、長方形に配され、床面からの深さ約20~25cm前後を測る。東壁際には小穴が2ヶ所に検出された。さらに東側2本の柱穴の内側に、直径30~40cm、床面から約30cm前後の小穴が2個あった。この小穴は、ともに小さな石がつまつてありその上に拳2個大位の石があった。他に、南壁中央に接し、周囲に土



第89図 40号住居址出土遺物 (1/4)

手状のたかまりをもつ楕円形の穴が検出された。炉は、北側2本の主柱穴を結ぶ線上略中央に位置し、約30×50cmの不整長楕円形に炭化物等の部分があり、それよりもひとまわり小さく厚さ10cm前後で焼土が形成されていた。埋甕炉であろう。長軸の方向は、N-7°-W。

〔遺物〕

遺物の出土は極めて少ない。他に粘土が出土している。

出土遺物一覧

(単位: cm)

番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調
		整形・特徴・その他
	壺	口径8.5 底径5.5 器高10.8 1/3欠損／白色粒、雲母片を含む／暗赤褐色 器面は磨きにより仕上げてあるが、磨滅により、ザラついている。

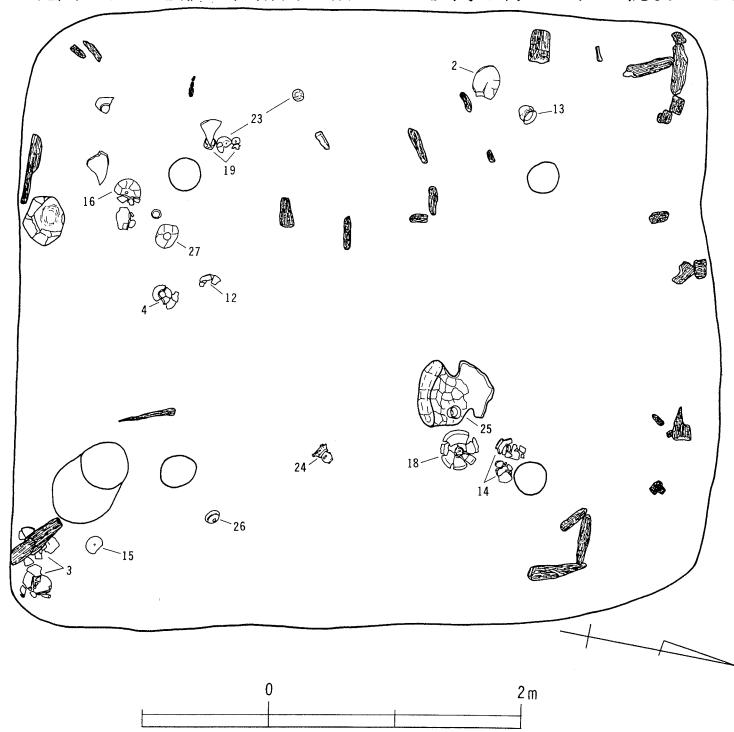
〈41号住居址〉(第90・91・92・93図)

〔遺構〕

調査区東半部北西辺の3-G域に位置する。排土作業に際して、暗褐色土中より土器片が出土したので、精査し遺構を確認した。耕作等の削平によるものか、浅い竪穴となっている。壁は、東側が高く20cm前後を測り、他は2~15cm前後を測る。規模は東西約5m、南北約5.5mで、平面形は隅円長方形を呈する。床面は褐色土で堅く、北西から南東に緩やかに傾いている。柱穴は、4本を長方形に配し、床面からの深さ50cm前後を測る。炉は、床面中央部から北東寄りの所にあり、約50×60cmの範囲に粘土を敷き、南側に幅10cm前後高さ約5cm程の枕状のたかまりを設けたつくりとなっている。他に内部施設として、南東隅近くに土壙が検出された。長軸の方向は、N-7°-W。

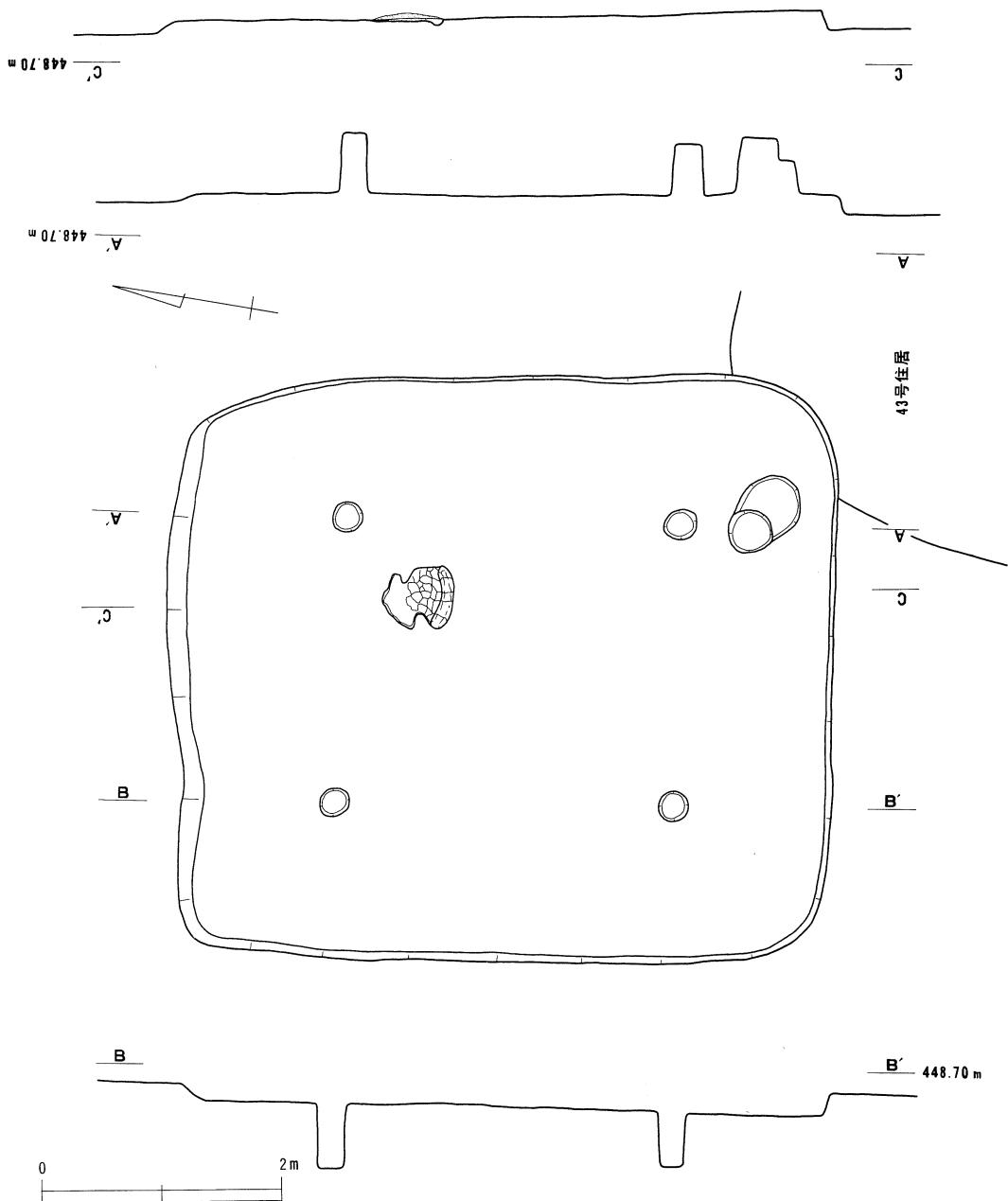
〔遺物〕

土器を主体に多数の出土がみられた。炭化材は、丸太材乃至角材と思われるもので、竪穴内の壁際に散在していた。土器は床面直上からの出土がほとんどで、南西側主柱穴周辺・北西側・炉の周辺・土壙周辺及びその内部からと大まかな片寄りがみ

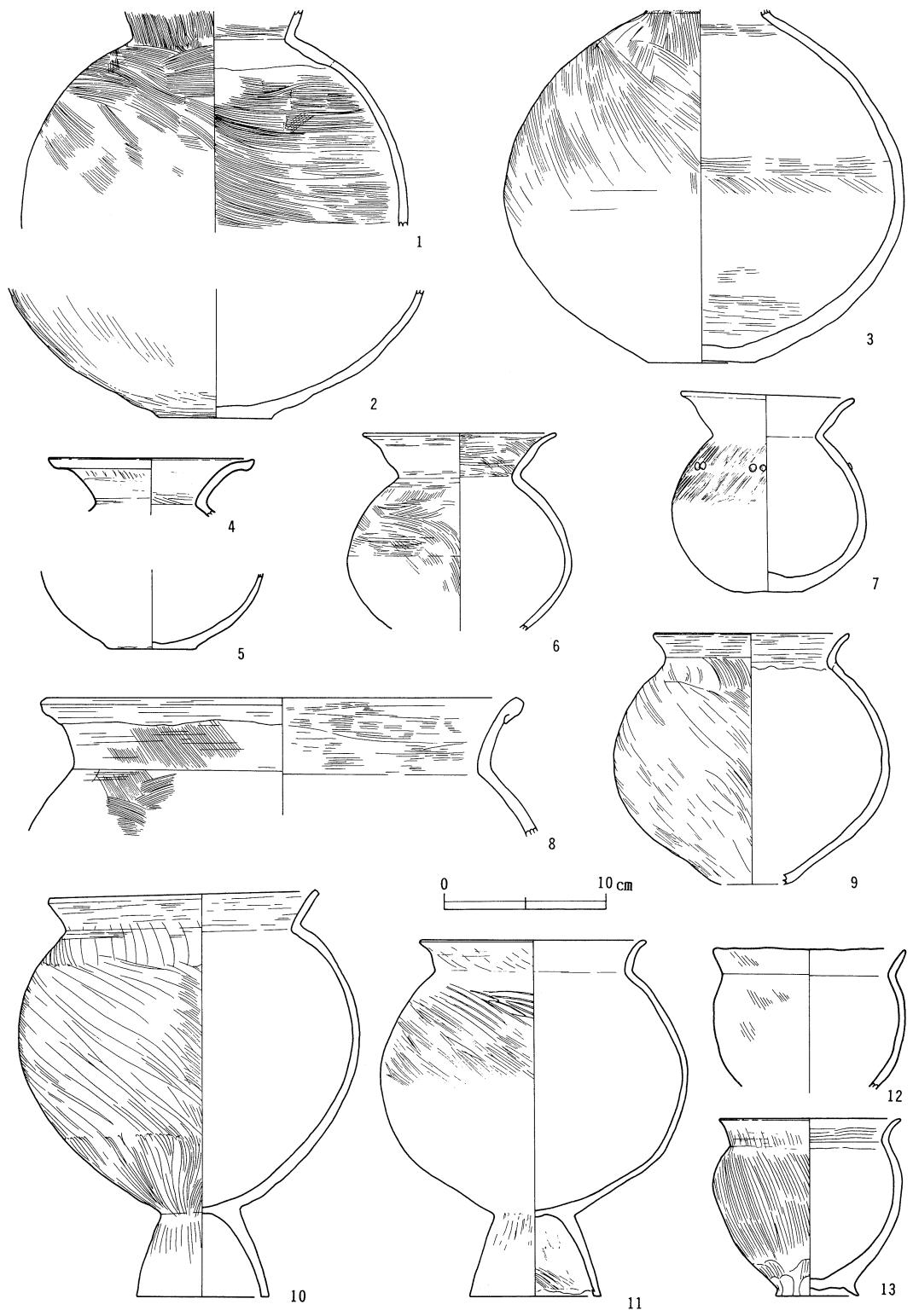


第90図 41号住居址遺物出土状態 (1/60)

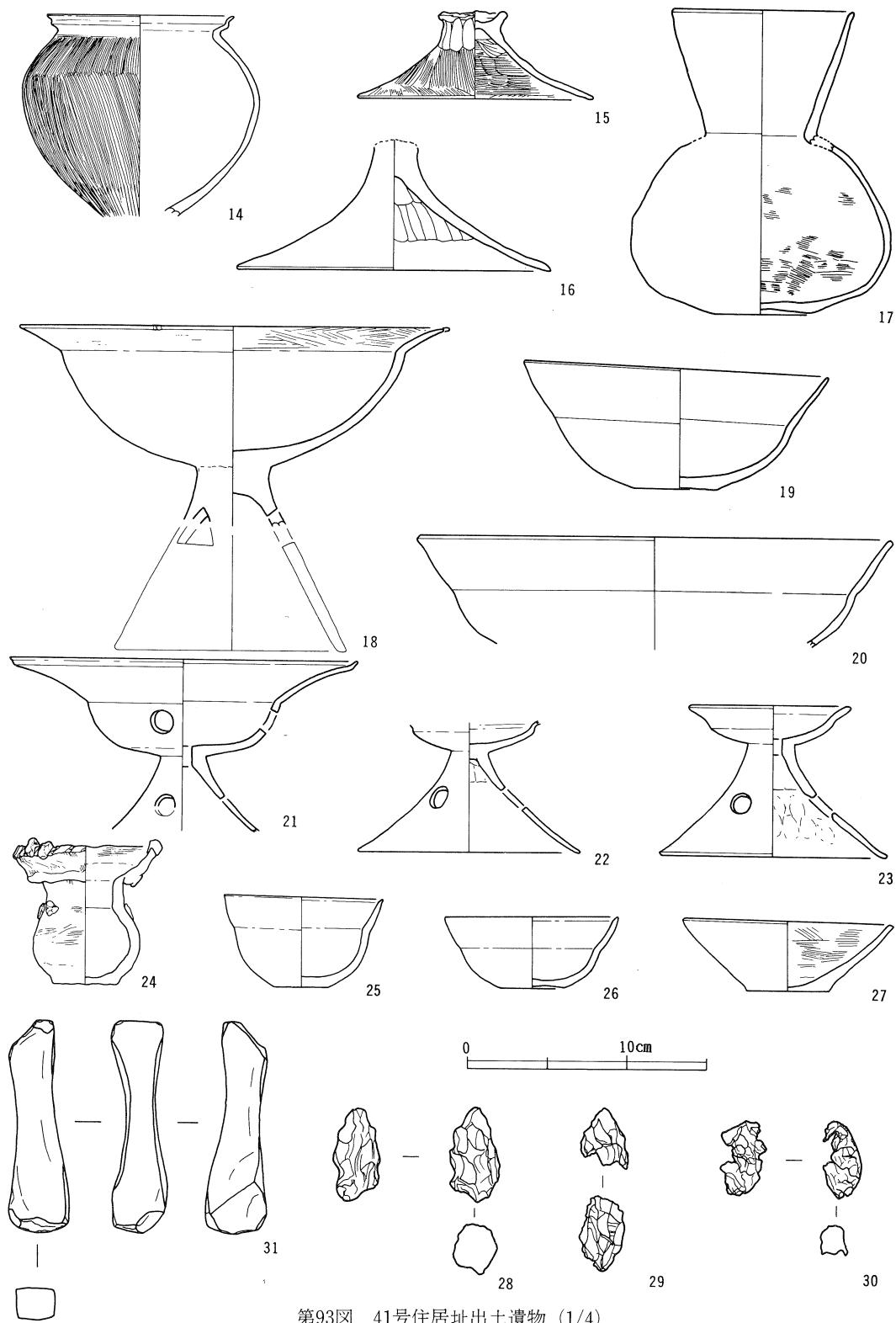
られる。これらの出土土器は、ほとんどが本住居址にともなうものととらえられ、編年的に同時期の良好な一括資料となろう。また、本址からは焼成を受けた粘土塊28・29・30が出土しており、表面に指乃至指頭・棒状工具などによる圧痕がみられる。特に28・29は手で握られた形状を呈している。これらの粘土塊は、土器製作にかかわるもので、本址が火災を受けた時に焼成を受けたととらえられようか。



第91図 41号住居址平・断面図 (1/60)



第92図 41号住居址出土遺物 (1/4)



第93図 41号住居址出土遺物 (1/4)

出土遺物一覧

(単位: cm)

番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調
		整形・特徴・その他
1	壺	胴部上半破片 / 白色粒子、赤褐色粒子等、微砂粒を含む / 褐色、内面煤ける
		胴部外面は、刷毛整形の後、雜な箝磨きが施され、内面は横位の刷毛目がみられる。 頸部内外面は刷毛目痕あり。
2	壺	底径 7 脇部上半欠損 / 赤褐色粒、微砂粒を含む / 外面近赤褐色、内面白褐色
		外面は丁寧な磨き、内面は撫でが施される。
3	壺	底径 6.5 脇部 1/4 及び口縁部欠損 / 赤褐色粒、微砂粒を含む / 外面赤褐色、内面白褐色
		外面は箝磨きが施されるが、上半には刷毛目痕がみられる。内面は刷毛整形の後、撫でが施される。黒斑あり。
4	壺	口径 12.7 口縁部破片 / 砂粒を含む / 暗灰褐色
		刷毛整形の後撫でが施される。
5	壺	底径 5.4 脇部下半の破片 / 砂粒を含む / 赤褐色
		撫で及び磨きが施されると思われるが、磨滅により不明白。黒斑あり。
6	壺	口径 12 底部及び 1/2 欠損 / 微砂粒を含む / 近肌色、半分は黒色化している。
		口縁部は、刷毛整形の後、横撫で。胴部内面は撫で、外面は雜な箝磨きが施され、刷毛目痕がみられる。
7	壺	口径 10.7 底径 4 器高 12.3 口縁部若干欠損 / 砂粒を含む / 外面褐色～白褐色、内面暗灰褐色
		口縁部横撫で。胴部内面撫で。胴部外面下半は磨きがかけられ、上半は撫糸(?)による文様が施され、円形貼付文が付される。
8	広口甕	口径 29.8 口縁部破片 / 砂粒を含む / 明黒色
		折り返し口縁部横撫で。外面は刷毛目がみられる。内面は撫でが施されるが、若干の刷毛目痕がある。
9	甕	口径 12 底径 4 器高 15.5 1/2 欠損 / 砂粒を含む / 褐色～赤褐色
		口縁部横撫で。棒状工具により、胴部外面は磨きがかけられ、内面は撫でが施される。
10	台付甕	口径 16.5 底径 8.1 器高 25 1/5 欠損 / 黒色斑、細砂粒を含む / 白褐色(近肌色系)
		口縁部は、刷毛整形の後横撫でされる。胴部内面は撫で、外面は木片による刷毛目状の整形が施される。
11	台付甕	口径 13.8 底径 8.1 器高 22.1 2/3 欠損 / 黒色粒、細砂粒を含む / 暗赤褐色
		口縁部は刷毛整形の後横撫でされる。胴部内面は横撫で、外面上半は棒状工具乃至木片による刷毛目状の整形がみられ、下半は磨滅等により剝落が著しい。脚台部は刷毛目状整形の後撫で。

番 号	器 種	法 量 等 / 胎 土 / 色 調
		整 形 ・ 特 徴 ・ そ の 他
12	小型甕	口径11・7 2/3欠損 / 砂粒を含む / 褐色
		器面は撫でによる仕上げ。外面は若干刷毛目痕がみられる。外面煤付着。
13	小型甕	口径11・1 底径5.1 器高11 若干欠損/砂粒を含む/明褐色
		口縁部横撫で、内側に刷毛目痕あり。胴部内面は撫で、外面は刷毛目。底部外周は、指頭により摘まみ出しの高台がついている。黒斑あり。
14	台付甕	口径11・7 底部脚台部欠損 / 砂粒を含む / 褐明赤褐色
		S字状口縁部横撫で。胴部外面は刷毛目痕が顕著。内面は撫で。外面頸部下に刷毛目が浅く横走する。
15	蓋	鉢部径4.3 底径14・8 器高5.5 若干欠損/細砂粒を含む/褐赤褐色
		内面は刷毛目痕が顕著。外面は刷毛整形の後、撫でが施される。鉢部は摘まみ出しが行われる。
16	蓋	底径19・6 鉢部欠損 / 微砂粒を含む。密 / 褐色
		外面は細かい刷毛整形の後、撫で。内面も撫でが施されるが、上半に箇削り痕がみられる。
17	壺	口径11・3 底径5.7 器高19・1 口縁部～底部の破片 / 微砂粒を含む。密 / 外面褐色、内面暗褐色
		撫でと磨きにより仕上げられると思われるが、磨滅により不明白。
18	高 坯	口径26・5 脚部欠損 / 赤褐色粒、砂粒を含む / 外面白褐色系、内面褐色
		口縁部は横撫でと磨きが施され、内側に刷毛目痕がみられる。脚部内面を除き。器面は磨きがかけられるが、外面は磨滅が著しい。脚部内面を除き丹彩されていた痕跡がある。脚部には、三角形状の孔が三方に穿ってある。
19	鉢	口径19・1 底径5.1 器高7.6 口縁部1/3欠損/砂粒を含む/赤褐色系～暗褐色
		口縁部横撫で。底部内面は刷毛整形の後、撫でと磨きが施される。胴部外面上半は、撫でと磨きが施され、下半は箇削りの後、撫でと磨きが施されている。黒斑あり。
20	鉢	口径29・5 口縁部破片 / 砂粒を含む / 赤褐色系
		口縁部刷毛整形の後、撫で。
21	器 台	口径21・8 1/2欠損 / 精選。密 / 漂褐色
		丁寧な磨きにより仕上げられていると思われるが、磨滅により不明白。器受部には、円孔が4カ所にあり、底に单孔があく。脚部は3孔があく。
22	器 台	底径13・9 1/3欠損 / 精選 / 褐色
		磨滅により整形は明瞭でないが、磨きにより仕上げられていたであろう。脚部には3孔があく。
23	器 台	口径10 底径14・2 器高9.5 1/4欠損/精選/暗褐色系
		磨滅により器面はザラつく。口縁部及び、脚部端部内側は撫でが施される。脚部内側には、削り痕と凹みがみられる。器受部底部に单孔し、脚部に3孔があく。

番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調
		整形・特徴・その他
24	小型壺	口径8.3 底径4 器高9 口縁部若干欠損／砂粒を含む／暗褐色系
		口縁部内面は磨き、胴部内面は撫でが施される。口縁部端内側に刷毛目痕がみられる。口唇部には櫛歯状工具による刻目が連続し、2個1単位の豆状貼付文が4カ所につけられる。口縁部外面下端に粘土紐をめぐらし有段口縁をつくり出している。胴部外面には、波状文風の刷毛目痕がみられ、2個1単位の円形貼付文が付けられる。器外表面は、撫でが施されるが刷毛目痕がみられる。
25	鉢	口径10 底径3.3 器高5.7 口縁部若干欠損／砂粒を含む／白褐色
		口縁部横撫で。胴部内外面は比較的粗い幅の細い箇磨きが施される。
26	鉢	口径10.8 底径4 器高4.5 口縁部若干欠損／砂粒を含む／白褐色系
		口縁部横撫で。胴部内外面は比較的粗い幅の細い箇磨きが施される。
27	鉢	口径13.1 底径5.1 器高4.5 口縁部底部若干欠損／砂粒を含む／肌色系
		外面は磨き、内面は撫でによる仕上げ。内面に刷毛痕がみられる。
31	砥石	長さ13.4 / 石材は、凝灰岩
		略全面にわたり使用痕がある。

〈42号住居址〉(第94・95図)

〔遺構〕

調査区東半部北西側の4-H・4-I域に位置する。黄褐色土中に暗褐色土の落ち込みを発見し発掘する。東西約7.3m、南北約7mを測り、平面形は隅円方形を呈する。削平により浅い竪穴で、壁高は10cm前後高い所でも約20cmを測る。床面は平坦。柱穴は略長方形に配された4本があたり、東側2本は直径約50cm床面からの深さ75cm前後を測るのに対し、西側のものは直径約20・25cm床面からの深さ約90・50cmを測り不揃いである。北西側柱穴の内側に、直径約20cm、床面からの深さ約55cmの小穴があった。炉は、東側2本の柱穴を結ぶ線上にあり、長さ約147cm、最大幅63cmの範囲に炭化物等の部分があり、焼土は厚い所で約16cmの層を形成していた。なお、南西側の壁は43号住居址を切って構築される。長軸の方向は、N-76°-W。

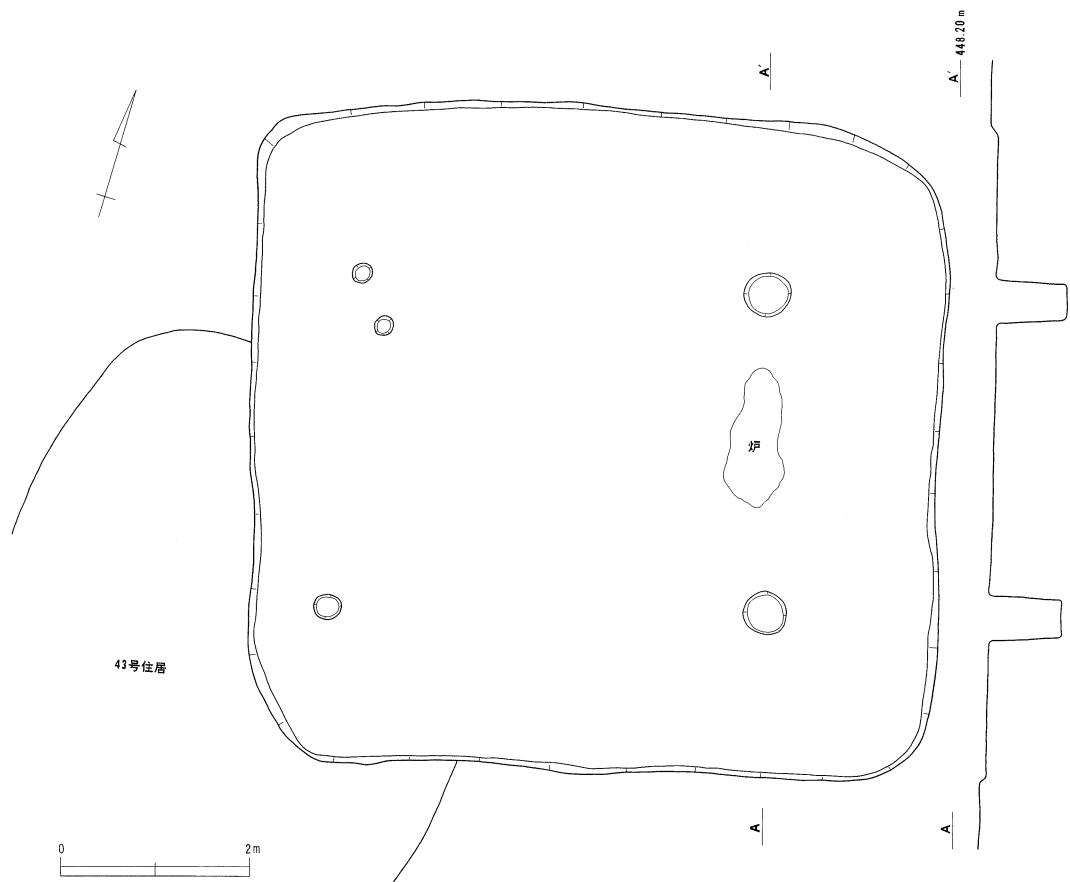
〔遺物〕

大型の住居址ではあるが、遺物の出土は少ない。

出土遺物一覧

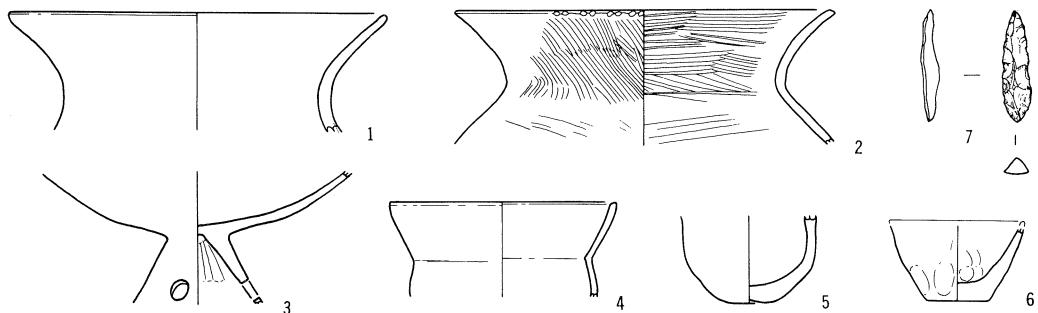
(単位: cm)

番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調
		整形・特徴・その他
1	壺	口径19.8 / 砂粒を含む / 白褐色系
		壺形土器の口縁部破片。器面は磨きにより仕上げられるが磨滅によりザラついている。
2	甕	口径20 / 砂粒、赤褐色粒子を含む / 外面暗白褐色、内面褪褐色
		甕形土器の口縁部破片。内外面ともに刷毛目が顕著。口縁部に刻目が連続する。
3	高坏	口縁部、脚部下半欠損 / 砂粒を含む / 肌色系
		磨きにより仕上げられる。脚部内面には削り痕あり。また脚部には3孔があく。
4	鉢	口径12 口縁部付近破片 / 砂粒を含む / 褪白褐色系
		口縁部横撫で。胴部外面は箇磨き。黒斑あり。



第94図 42号住居址平・断面図 (1/80)

番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調	
		整形・特徴	その他
5	小型土器	底径 2.5 胴部～底部の破片 / 砂粒を含む / 白褐色系	
		丁寧な磨きにより仕上げられるが、磨滅により器面はザラつく。	
6	小型手捏土器	底径 3.2 口縁部欠損 / 砂粒を含む / 深褐色	
		指頭圧痕がみられる。	
7		長さ 6.0 幅 1.5 厚さ 8.0 / 石材は黒耀石	
		押圧剥離によりつくられる。	

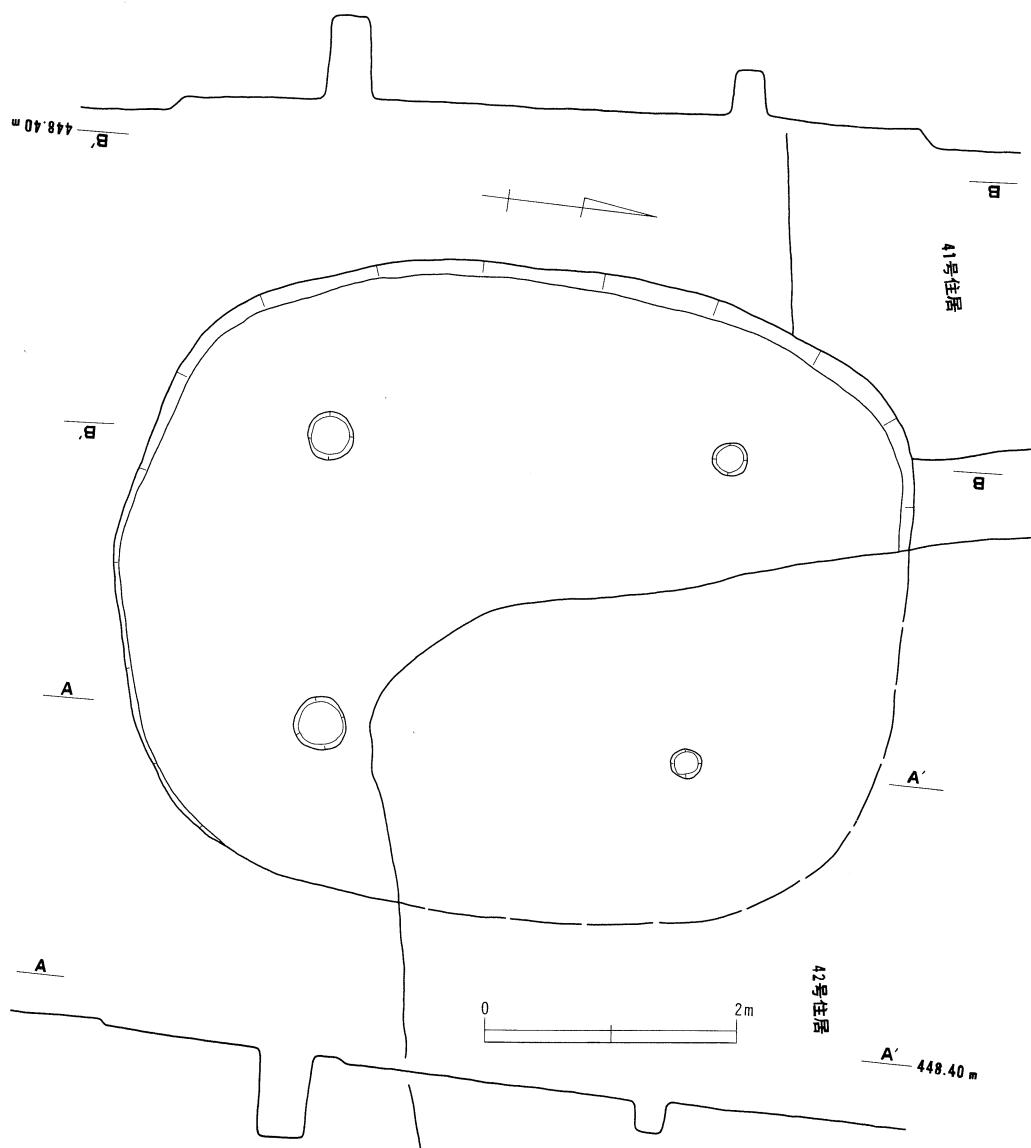


第95図 42号住居址出土遺物 (1/4)

〈43号住居址〉（第96・97図）

〔遺構〕

調査区東半部北西側の4-H域に位置する。黄褐色土中に暗褐色土の落ち込みを発見し発掘する。規模は東西約5m、南北約6mを測り、平面形は胸が張る小判形を呈する。東側壁は削平され、また北側壁とともに42号住居址に切られている。床面は略平坦、北東側は42号住居址に切られ遺存していない。壁高は高い所で30cmを測り、西から東へ低くなっている。柱穴は長方形に配された4本があたり、床面からの深さは、南側2本が70cm前後、北側は約35cmとひとまわり小さい。炉は遺存部にはなかった。長軸の方向は、N-2°-W。



第96図 43号住居址平・断面図 (1/60)

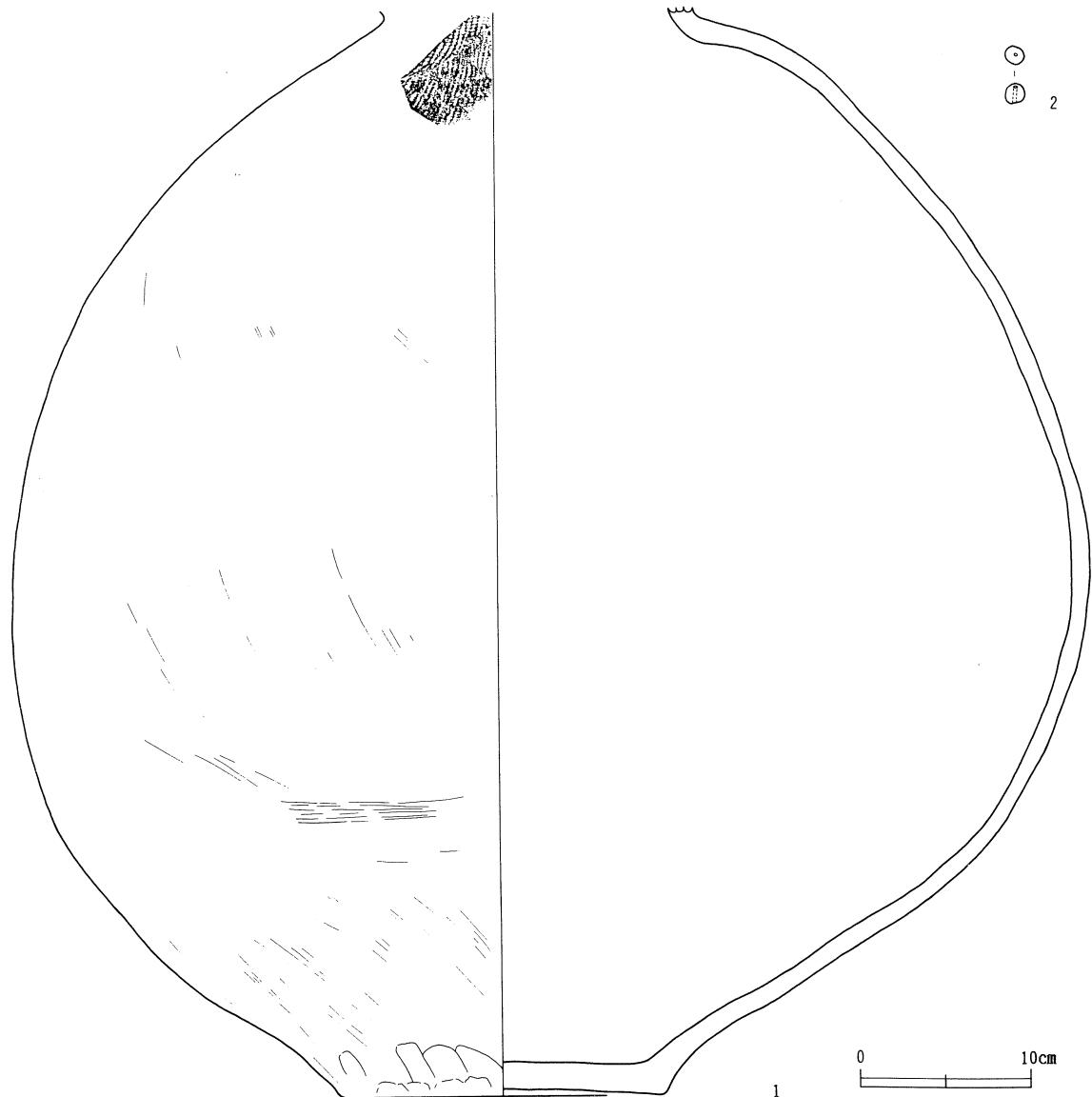
[遺物]

竪穴内中央に土器片が集中して出土。一個体分の壺であった。

出土遺物一覧

(単位: cm)

番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調	
		整形・特徴	その他
1	壺	底径17.8 口縁部及び、1/4欠損／砂粒、白色小粒を含む／褪褐色 胴部最大径が中位にあり、60.3 cmを測る。籠磨き、撫で等が施されるが、器面の剥落が顕著である。外面、頸部下に縄文が施される。	
2	土製玉	外径5 mm 厚さ約5 mm 孔径約1 mm / 砂粒を含む / 褐色	

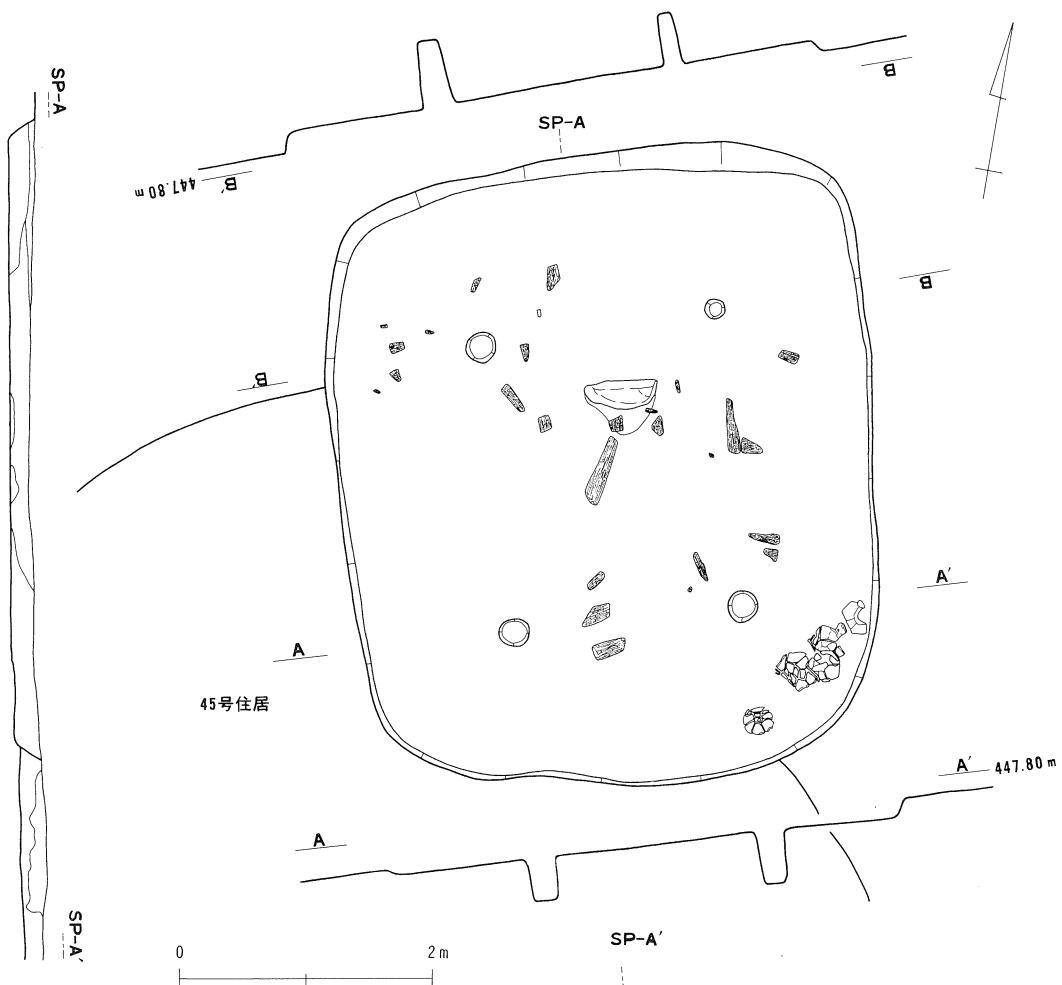


第97図 43号住居址出土遺物 (1/4) 2は (1/2)

〈44号住居址〉(第98・99図)

[遺構]

調査区東半部北側の3-J・3-H域に位置する。黄褐色土中に褐色土の落ち込みを発見し発掘を行う。南西側が45号住居址と重複している為、土層観察用の土手を残し掘り下げる。埋没土は、おおむね4層に分かれ、上から褐色土・暗褐色土・茶褐色土・暗黄褐色土の順に堆積している。竪穴は黄褐色土層を掘り込んでおり、壁は外傾しながら立ち上がるが、南西側は45号住居址を切って構築される。壁高は20cm前後を測る。床面は平坦で、良好である。規模は東西約4.3m、南北約5mで、平面形は隅円長方形を呈する。柱穴は、最寄りの壁より約1~1.2m離れ、長方形に配された4本が検出され、床面からの深さは約35~50cmを測り不揃いとなっている。炉は床面中央から北へ約50cm寄った位置にあり、約45×55cmの範囲の南北半部にひとまわり小さく厚さ約5cmで焼土層が形成され、北半部に長さ約55cm、幅約25cm、厚さ約15cmの石



第98図 44号住居址平・断面図 (1/60)

が据えてあった。長軸方向は、N-15°-W。

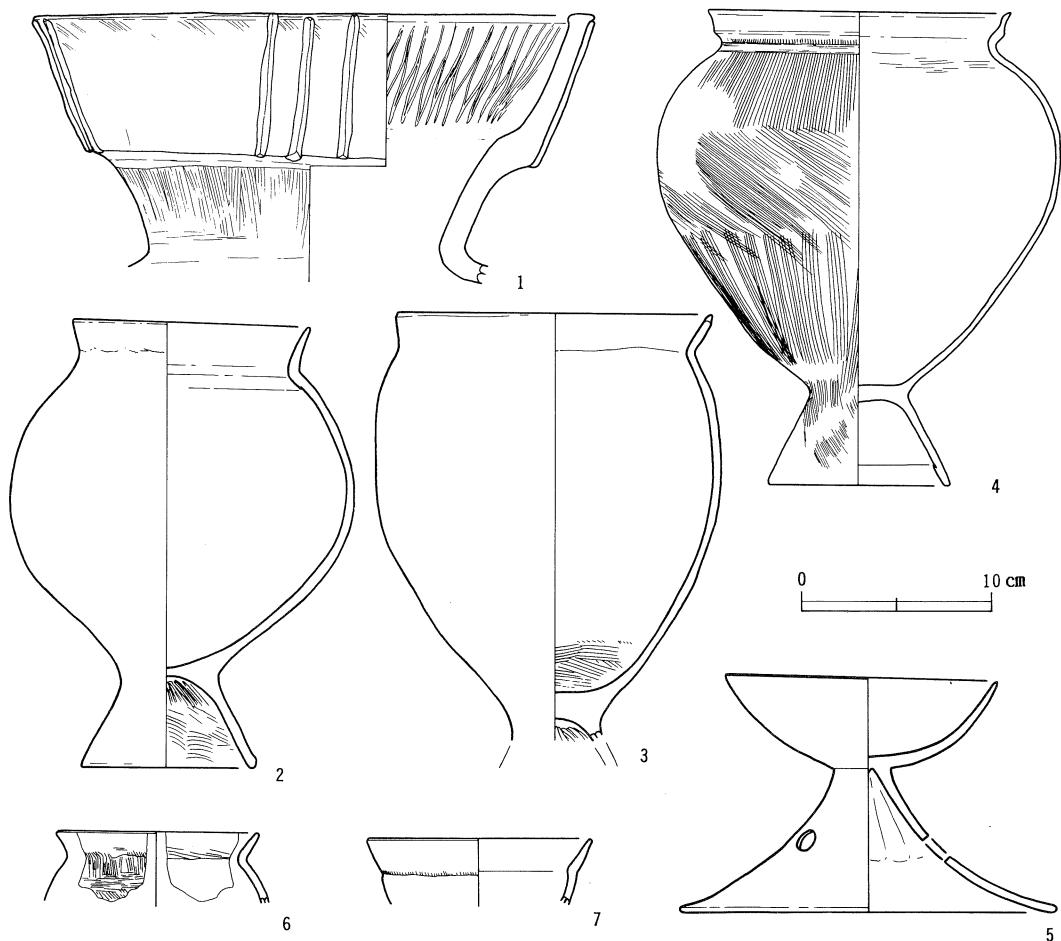
〔遺物〕

炭化材は、丸乃至角材・板材と思われるもので、焼土とともに散在しており、本住居址は、火災を受け廃絶されたものであろう。他の出土遺物は土器のみで、出土状態は床面直上からであった。それらは南東隅壁際にまとまって、押し潰されて出土している。これらは編年的に一括資料として良好なものとなろう。

出土遺物一覧

(単位: cm)

番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調
		整形・特徴・その他
1	壺	口径29.6 脊部欠損/細砂粒、赤褐色粒を含む/外面褐色系、内面暗褐色 器面は刷毛整形の後、撫で・磨きにより仕上げられるが、外面には刷毛目痕がみられ、特に頸部は顕著である。複合口縁外側には3本1単位の棒状浮文が4カ所に付けられる。口縁部内面には暗文がみられる。口唇部は内外に小さく張り出し平坦面を有す。口縁部内側は煤ける。



第99図 44号住居址出土遺物 (1/4)

番号	器種	法量等／胎土／色調
		整形・特徴・その他
2	台付甕	口径12.5 底径9.2 器高23.5 若干欠損／砂粒を含む／赤褐色系
		口縁部横撫で。胴部内面は、撫で等により器面を密にしてある。胴部外面は、削りが顕著。脚台部は据部横撫で、内面刷毛目痕あり。
3	台付甕	口径16.6 脚台部欠損／砂粒を含む／赤褐色系
		口縁部撫で。器面は削りと撫でにより密にされる。甕底に刷毛目痕がみられる。
4	台付甕	口径16 底径9.6 器高25 1/2欠損／砂粒を含む／赤褐色
		S字状口縁部横撫で。外面頸部に撫でによる無文帯がめぐる。外面胴部中央は斜位、上半は縦位の密の刷毛目、下半は疎な縦位の刷毛目が施される。外面脚台部にも刷毛目痕あり。脚台部端は内側へ折り返しがみられる。
5	高坏	口径14.3 底径20 器高12.4 若干欠損／精製／赤褐色系
		器面は丁寧な磨きにより仕上げられるが、磨滅によりザラザラしている。脚部には円孔が4カ所にあき、内面上半には笠削り痕がみられる。
6	小型甕	口径10.6 口縁部付近破片／砂粒を含む／肌色系
		口縁部は撫でが施される。外面には細かな刷毛目痕がみられる。
7	鉢	口径11.8 口縁部付近破片／砂粒を含む／肌色系
		口縁部横撫で。外面頸部はくびれ、刷毛目痕がみられる。

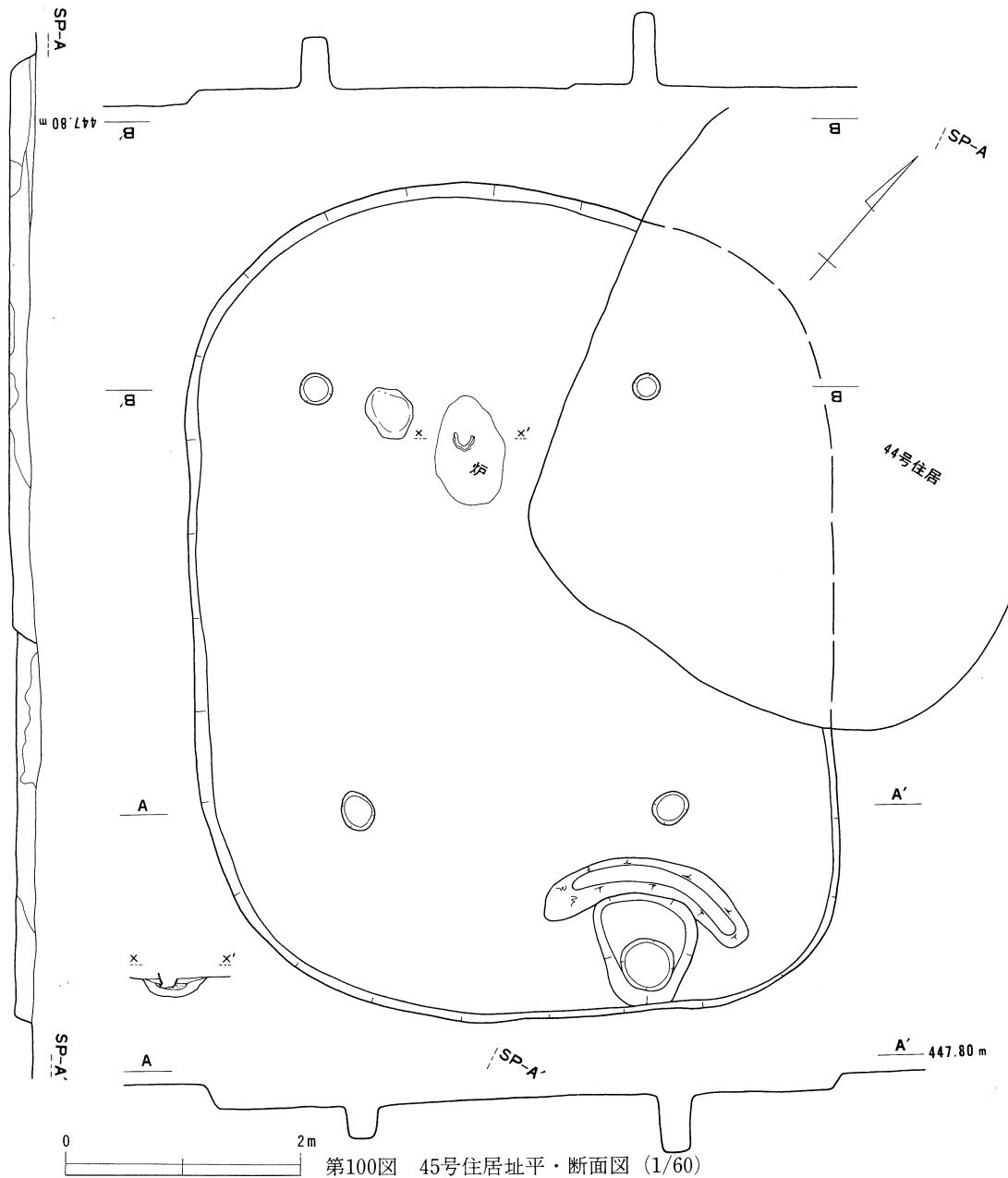
〈45号住居址〉（第100・101図）

〔遺構〕

調査区東半部北側の3-J域に位置する。黄褐色土中に褐色土の落ち込みを発見し発掘する。北側が44号住居址と重複している為、切り合いを考慮し、土層観察用の土手を残し掘り下げた。埋没土は3層に分かれ、上から褐色土・黄褐色土・暗黄褐色土の順に堆積している。竪穴は黄褐色土層を掘り込んでおり、壁は外傾しながら立ち上がるが、北側は44号住居址に切られ遺存していない。壁高は20cm前後を測る。床面は平坦で、良好である。規模は長辺約6.5m、短辺約5.2mで、平面形は短辺がやや脹らむ隅円長方形を呈する。柱穴は長方形に配された4本が検出され、床面からの深さは約27~60cmを測り不揃いとなっている。炉は北西側にあり、埋甕炉である。約60×90cmの不整橜円形の範囲に炭化物等を含む部分がありその中に、甕形土器の口縁部から胴部までの破片の一部を逆位に埋設している。焼土の厚さは約6cmである。他の内部施設として南東壁際に、床面からの深さ約50cmの二段の穴があり、この穴の周囲には三日月形に土手状のたかまりが繞っている。炉の西側には偏平な石があった。長軸の方向は、N-43°-W。

〔遺物〕

遺物の出土は少ない。3は埋甕炉に使用されていた甕形土器である。土器以外のものとして7があるが、石の材質は輝石安山岩で長さ約10cm、幅約8cm、厚さ約4~7cmの大きさをもち、片面に2カ所の凹みをもっている。

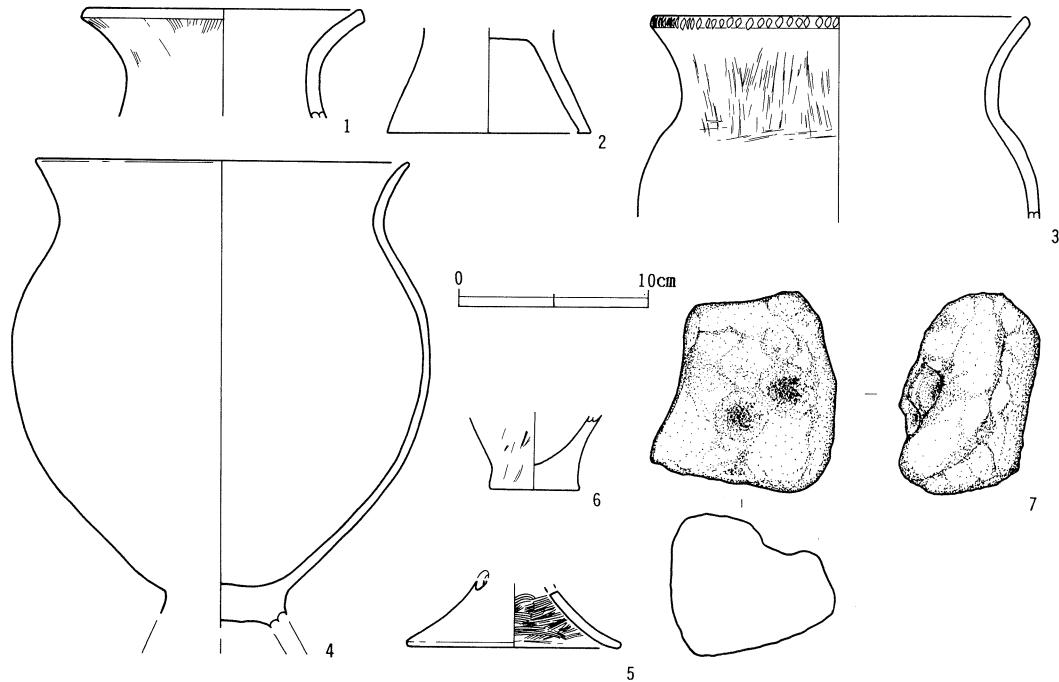


出土遺物一覧

(単位: cm)

番 号	器 種	法 量 等 /		胎 土 /		色 調	
		整 形	・ 特 徴	・	そ の 他		
1	壺	口径14.5	口縁部破片 / 砂粒を含む /	砂粒を含む /	褪褐色		
		磨きによる仕上げが施されるが、磨滅により器面は若干ザラついている。単純口縁の外側には刷毛目痕がみられる。					
2	台付甕	底径10.7	脚台部破片 / 砂粒を含む /	砂粒を含む /	白褐色系		
		削りと磨きによる整形。台付甕の脚台部破片資料。					

番号	器種	法量等・胎土・色調
		整形・特徴・その他
3	甕	口径19.6 脊部下半欠損／微砂粒を含む。精選／白褐色系～褪赤褐色
		内面は箝磨きにより仕上げられる。口縁部は横撫でされ、刻目が連続する。外面頸部付近には、撫でもしくは削りによる痕がみられる。脣部外面は箝撫で。炉体土器
4	台付甕	口径19.6 口縁部～脣部下半の破片／砂粒を含む／褪褐色系
		口縁部横撫で。脣部内面は棒状工具による撫でが施される。脣部外面は磨きと撫でにより仕上げられると思われるが、磨滅により不明白。もろい土器である。
5	高坏	底径11.2 脚部破片／砂粒を含む／褪褐色
		外面は磨かれるが、内面には刷毛目痕がみられる。3孔があく。
6	鉢	底径4.6 脣部上半欠損／砂粒、赤褐色を含む／外面暗褐色、内面褪赤褐色
		撫でと磨きにより仕上げられる。

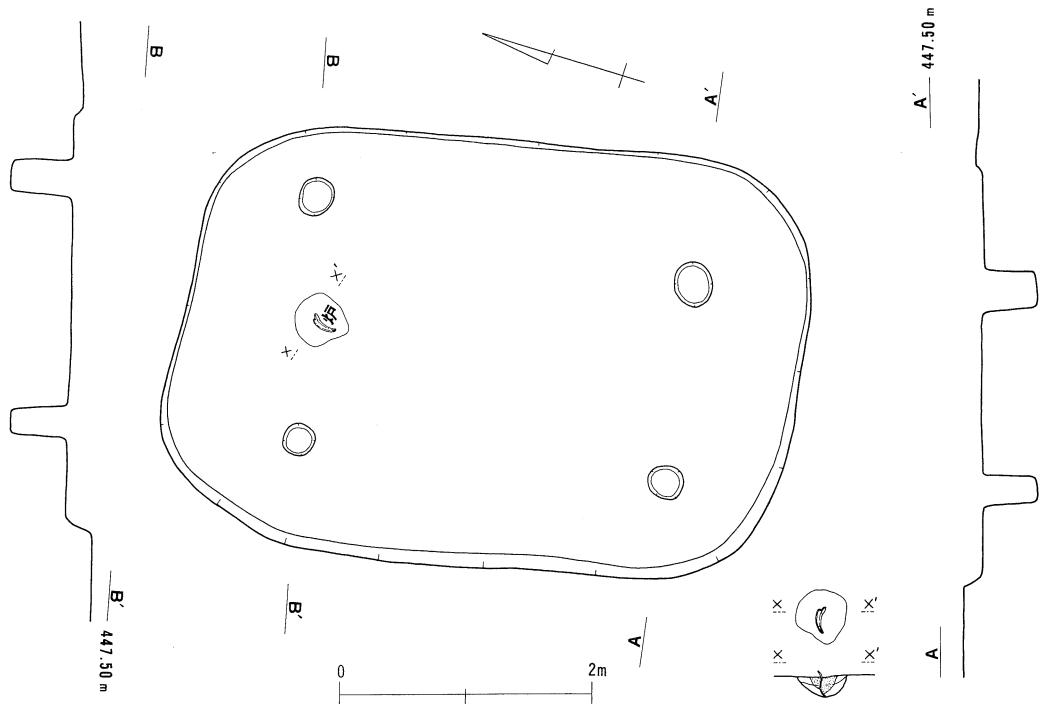


第101図 45号住居址出土遺物 (1/4)

〈46号住居址〉(第102・103図)

〔遺構〕

調査区東半部北東辺の1-L域に位置する。規模は東西約3.4m、南北約4.9mを測り、平面形は隅円長方形を呈する。竪穴は黄褐色土層を掘り込んであり、壁は外傾しながら立ち上がる。壁高は約5～25cmを測り、削平等により東側が低くなっている。柱穴は略長方形に配された4本があり、床面からの深さ約40～50cmを測る。床面は東側が低くなっている。炉は埋甕炉で、北側2本の柱穴を結ぶ線上にかかっており、径40cm前後の不整円形の範囲に焼土を含む炭化物



第102図 46号住居址平・断面図 (1/60)

等の部分がありその中に甕形土器の胴部破片を埋設している。焼土の厚さは約15cmである。長軸の方向は、N—8°—W。

〔遺物〕

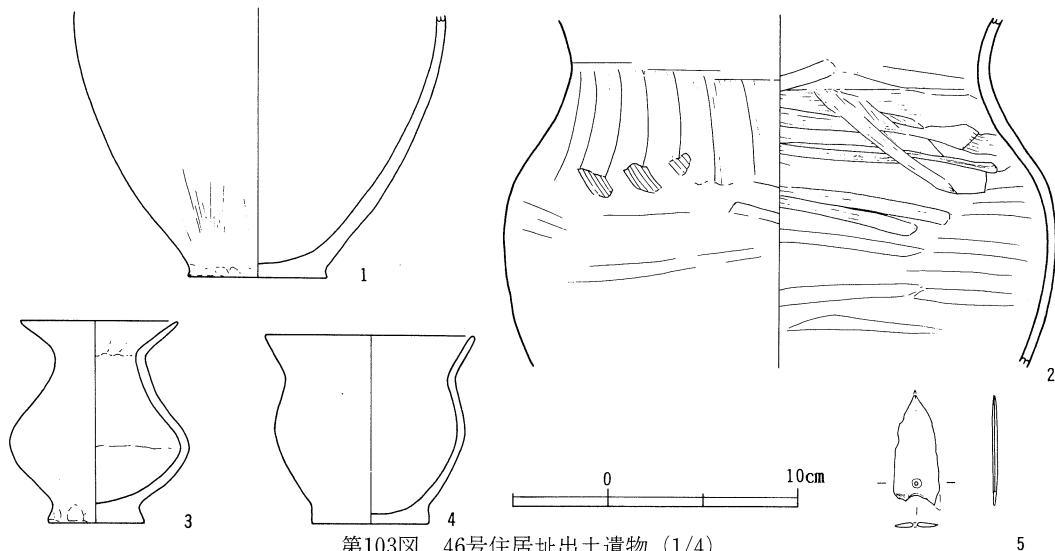
出土遺物は少ない。土器は住居址内中央に集中していた。磨製石鎌5は、南東側柱穴東脇から出土している。長さ約5.7cm、幅約2.4cm、厚さ約0.3cmで尖端及び基部が若干欠損しており、基部には单孔があく。石材は、緑色片岩である。

出土遺物一覧

(単位: cm)

番 号	器 種	法 量 等	/	胎 土	/	色 調
		整 形	・	特 徵	・	そ の 他
1	甕	底径 7.3	胴部下半～底部の破片	／砂粒を含む	／外面漂白褐色、内面薄茶褐色	
			胴部外面は刷毛整形の後撫で、内面は撫での後粗い篦磨きが施される。磨滅により器面は若干ザラつく。			
2	甕	胴部の破片	／砂粒、赤褐色粒子を含む	／外面褪褐色、内面明黄褐色		
			内面上半は刷毛目痕あり、下半は撫で。外面上端は横撫で、上半は縦位の刷毛目がみられ、下半は横撫でされる。炉体土器、外面黒斑あり。			
3	小型壺	口径 8.3 底径 5 器高 10.7	口縁部若干欠損	／砂粒を含む	／肌色系	
			器面は撫でと磨きにより仕上げられ、丹彩のあとがみられる。内面には削り痕がみられる。小型の土器である。			

番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調
		整形・特徴・その他
4	小型壺	口径11 底径5.1 器高10 1/2 欠損／砂粒を含む／黒～暗褐色 底部は箝削りされる。器面は全体に撫でと磨きにより比較的丁寧に仕上げられるが、風化により細かな鱗が生じている。



第103図 46号住居址出土遺物 (1/4)

<47号住居址> (第104・105図)

[遺構]

調査区東半部北東辺の3-L域に位置する。規模は東西約7.2m、南北約7.5mを測り、平面形は略隅円方形を呈する。竪穴は黄褐色土層を掘り込んでおり、壁はやや外傾しながら良好な立ち上がりをみせる。壁高は、西側が高く40cm前後、東側は削平等により低くなつており20cm前後を測る。なお、東壁は49号住居址を切って構築される。柱穴は4本主柱穴で、最寄りの壁から1.5m程離れ掘られ、床面からの深さは約70~80cmを測る。床面は中央がやや低くなっている。炉は地床炉で、床面中央よりやや南側に位置し、約60×80cmの不整橢円形に炭化物等を含む部分があり、それよりひとまわり小さな範囲に約6cmで焼土が形成されていた。他の内部施設として東壁南寄りに、床面からの深さ約70cmの三段の穴があり、この穴の周囲には三日月形に僅かに土手状のたかまりが繞っている。長軸の方向は、N-6°-W。

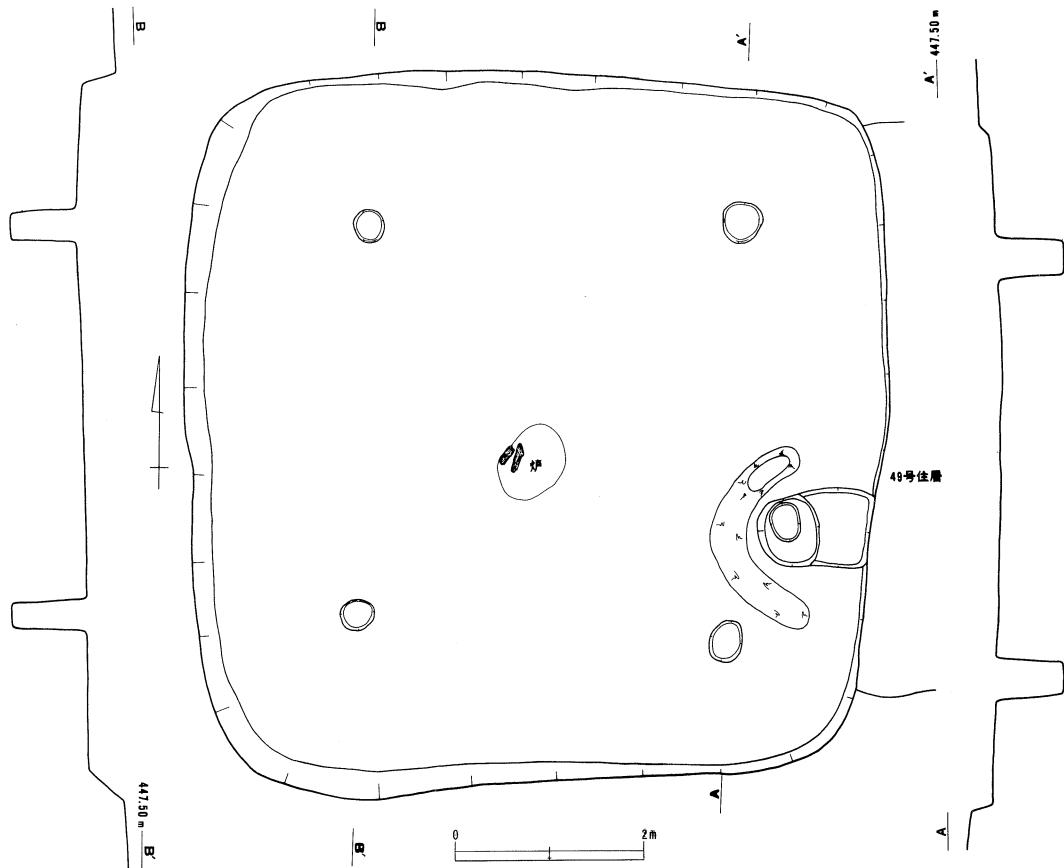
[遺物]

遺物の出土は少なく、破片がほとんどである。

出土遺物一覧

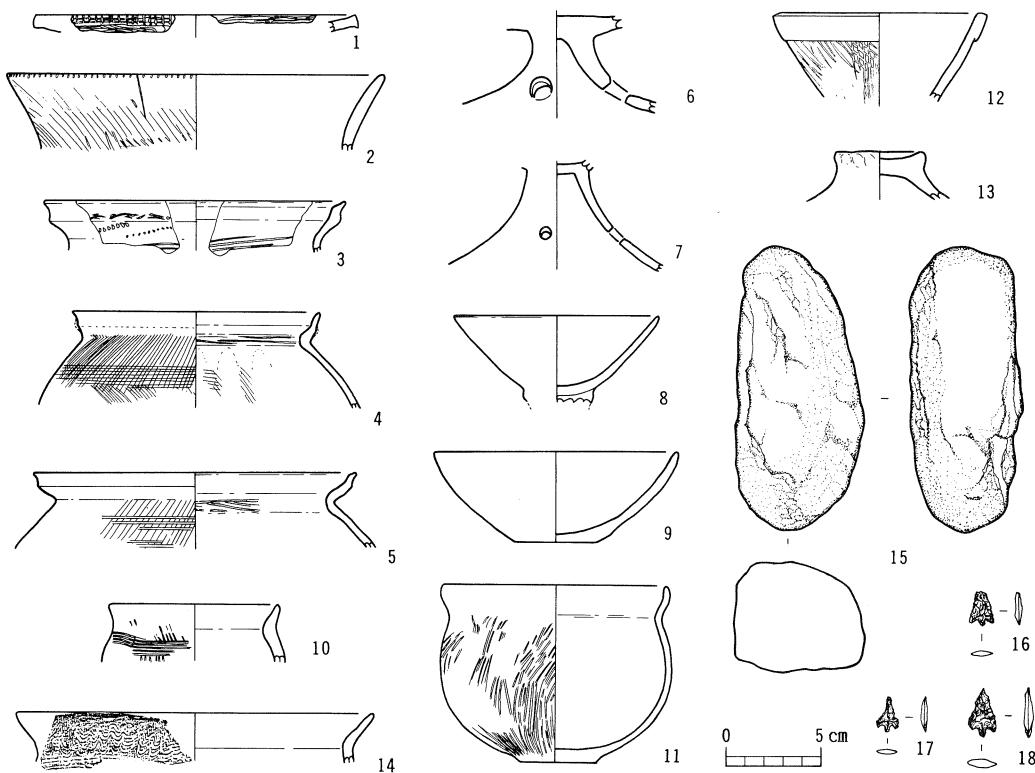
(単位: cm)

番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調
		整形・特徴・その他
1	壺	口径16.8 口縁部破片 / 砂粒を含む / 内外面に刷毛目痕がみられ、外側に刻目が連続する。



第104図 47号住居址平・断面図 (1/80)

番号	器種	法量等／胎土／色調		
		整形	特徴	その他
2	甕	口径19.8 口縁部破片／砂粒、赤褐色粒を含む／褪暗褐色		
		口縁部横撫で。外面に刷毛目痕がみられる。刻目が連続する。		
3	台付甕	口径15.7 口縁部破片／砂粒を含む／褐色系		
		S字状口縁部は横撫され、外側に櫛齒状工具による刺突がめぐる。内面頸部刷毛目痕あり。口唇部は受け口状になっている。		
4	台付甕	口径13 口縁部付近破片／砂粒を含む／暗褪褐色		
		S字状口縁部外面有段部剝離。口縁部横撫で。胴部外面は斜位と横位の刷毛目が施される。内面頸部は刷毛目痕あり、胴部は指頭圧痕と刷毛目がみられる。		
5	台付甕	口径17 口縁部付近破片／砂粒を含む／外面黒褐色、内面薄黄土色		
		S字状口縁部横撫で。口唇は極浅い凹帯がめぐる。内面頸部は刷毛目痕あり。外面に斜位と横位の刷毛目が施される。		
6	高坏	脚部破片／砂粒を含む／褪褐色		
		撫でと磨きによる仕上げ。3孔があく。		



第105図 47号住居址出土遺物 (1/4)

番号	器種	法量等 / 胎土 /		色調	
		整形	・特徴	・	その他の
7	高 坯	脚部破片 / 砂粒を含む / 漂白褐色			
		撫でと磨きによる仕上げ。坯部内面に刷毛目痕がみられる。4孔があく。			
8	高 坯	口径10.8 坯部破片 / 砂粒、赤褐色粒を含む / 楪明白黄褐色			
		磨滅により器面はザラつく。内面にかすかに刷毛目痕がみられる程度である。			
9	鉢	口径12.8 底径4.2 器高4.8 3/4欠損 / 砂粒を含む / 外面暗褐色、内面白褐色			
		口縁部横撫で。外面は削り、内面には撫でによるものか細かな刷毛目痕がみられる。			
10	小型甕	口径8.9 口縁部付近破片 / 砂粒を含む / 薄茶色			
		口縁部横撫で。外面に刷毛目 (?) がみられる。			
11	鉢	口径11.7 底径4 器高9.4 1/3欠損 / 砂粒を含む / 白褐色			
		口縁部横撫で、外面胴部に刷毛目痕がみられる。			
12	甕	口径11 口縁部付近破片 / 砂粒を含む / 楪褐色			
		口縁部横撫で。外面に刷毛目痕あり。			
13	蓋	鉢部径4.8 鉢部破片 / 砂粒を含む / 外面楕褐色、内面白褐色			
		外面上に指頭圧痕あり。内面に僅かに刷毛目痕あり。			

14は外面に櫛描波状文・簾状文が施される甕型土器の破片資料で、内面は撫で、磨きがかけられ、暗褐色を呈し、胎土には砂粒・赤褐色粒を含む。15は花崗岩製で15×6×7 cmの大きさで片方に赤色物が付着している。16～18は黒耀石製の有茎式石鎌で、頭部・脚部等が欠損。

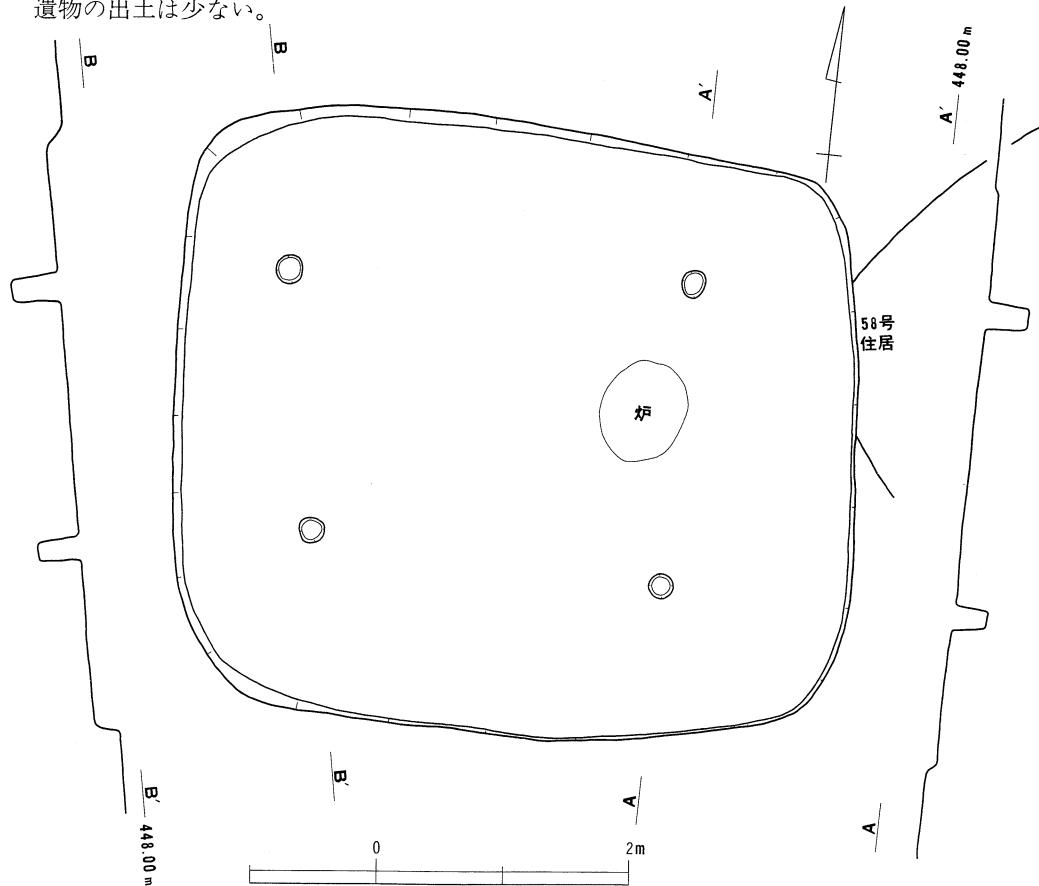
〈48号住居址〉（第106・107図）

〔遺構〕

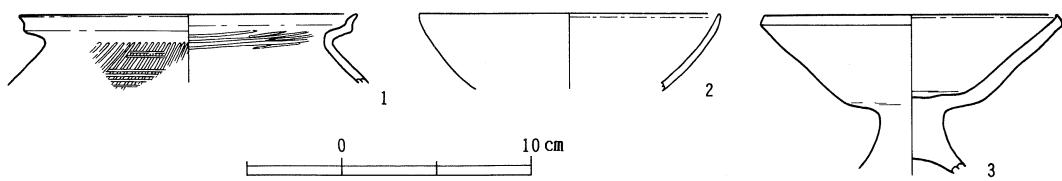
調査区東半部北半の中央 6-K 域に位置する。規模は東西約5.2m、南北約4.5mを測り、平面形は隅円長方形を呈する。竪穴は黄褐色土層を掘り込んであるが、削平等により浅くなっている。壁は外傾し、高さは低い所で約5cm、高い所で約20cmを測る。柱穴は4本主柱穴で、床面からの深さ30cm前後～40cmを測る。床面は、平坦で良好。炉は地床炉で、東寄りに位置し、約65×80cmの不整楕円形に炭化物等の部分があり、焼土は厚さ約4cmで形成されていた。長軸の方向は、略東西をしめす。

〔遺物〕

遺物の出土は少ない。



第106図 48号住居址平・断面図 (1/60)



第107図 48号住居址出土遺物 (1/4)

出土遺物一覧

(単位: cm)

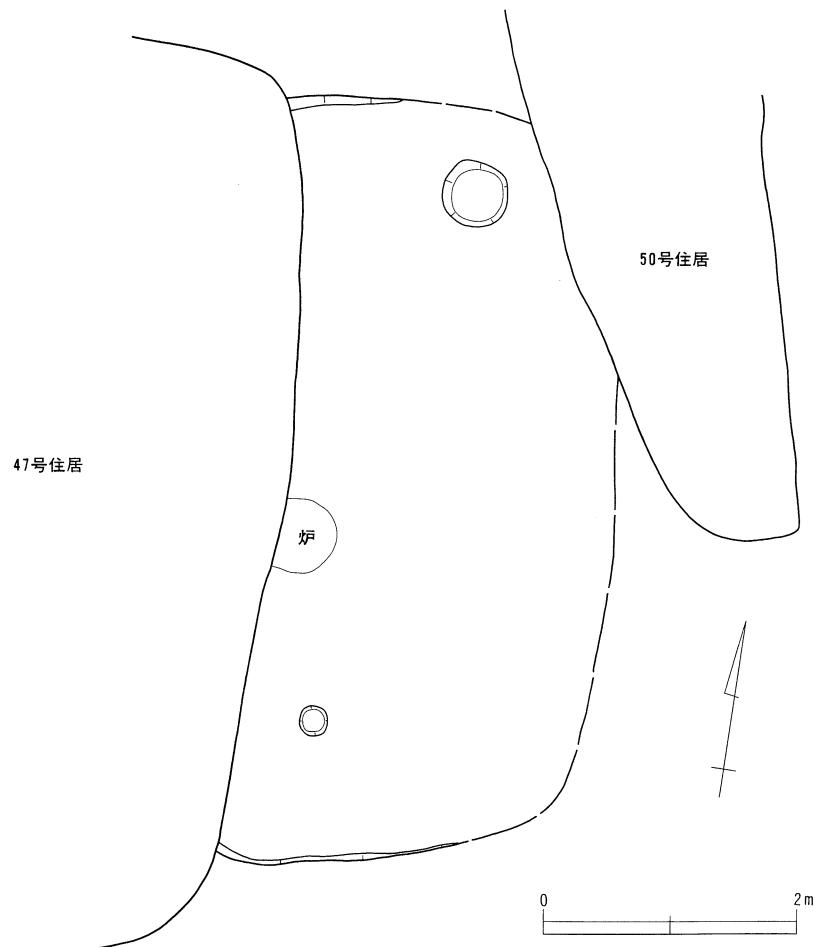
番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調
		整形・特徴・その他
1	台付甕	口径17.8 口縁部破片 / 砂粒を含む / 淡黄褐色 S字状口縁部横撫で。頸部内面刷毛目痕あり。外面刷毛目痕あり。
2	高坏	口径15.8 口縁部破片 / 砂粒を含む / 白褐色系 撫でと磨きにより仕上げられるが、磨滅によりザラついている。
3	高坏	口径15.5 脚部欠損 / 砂粒を含む / 黄白褐色 撫でによる仕上げ。

<49号住居址> (第108図)

〔遺物〕

調査区東半部北

東辺の3-N域に位置する。西半部は47号住居址、南側は50号住居址に切られている。遺存部で、南北約6mを測る。竪穴は黄褐色土層を掘り込んであるが、削平が著しく、浅い。壁は、北と南に僅かに残っており、高さ約4cmを測る。床面は東へ微傾斜している。北と南に穴があり、床面からの深さはそれぞれ約74cm、約54cmを測る。柱穴か



第108図 49号住居址平面図 (1/60)

どうかは不明白。炉は遺存部分の西端中央にあり、直径60cm程の地床炉で、西側は遺存していない。焼土の厚さは約8cmを測る。本住居址は、削平等により遺存状態が悪く、平面形は定かではない。長軸方向は、不明白。

〔遺物〕

土器の細片が埋没土中より若干出土したが、図示できるものはなかった。

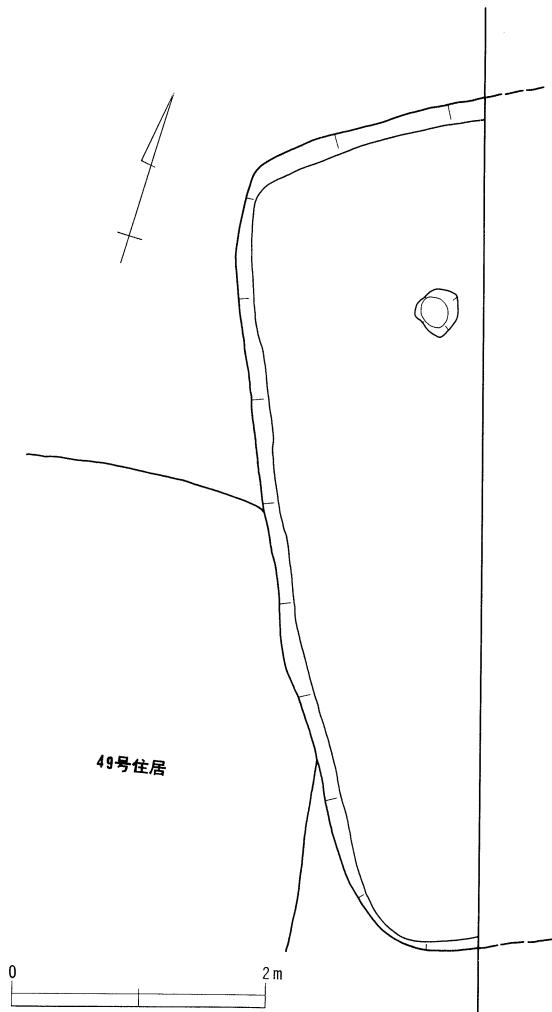
〈50号住居址〉(第109・110図)

〔遺構〕

調査区東半部北東端の2-N域に位置する。黄褐色土層中に褐色土の落ち込みを発見し発掘する。東側は、調査区域外、道路等との関わりで完掘できなかった。規模は、南北で約6.3mを測る。平面形は不明白。竪穴は黄褐色土層を掘り込んでおり、壁は外傾し立ち上がる。壁高は約10cmを測る。西壁は49号住居址を切っている。床面は略平坦。北側に直径約35cmの不整円形の穴があり、床面からの深さ約58cmを測り、柱穴の一つと思われる。炉は、発掘個所には検出されなかった。長軸方向は不明白。

〔遺物〕

発掘個所の狭小なわりに、まとまって土器が出土した。穴の西に器台、西壁北側際に石器、南辺に壺片・甌があり、いずれも床面直上からの出土であった。

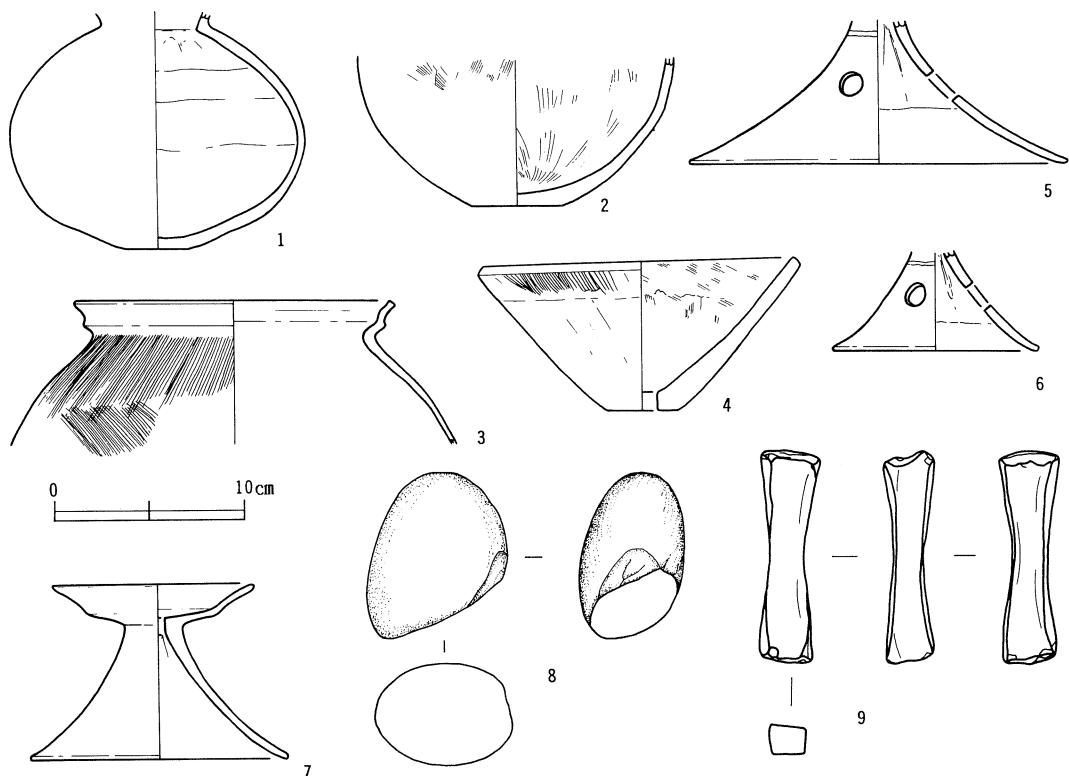


第109図 50号住居址平面図 (1/60)

(単位: cm)

出土遺物一覧

番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調
		整形・特徴・その他
1	壺	底径3.3 口縁部、胴部破損／砂粒を含む／白褐色系、黒斑あり 外面は丁寧な磨きにより仕上げられる。内面は指頭圧痕、輪積痕がみられる。
2	壺	底径4.8 胴部上半欠損／砂粒、赤褐色粒子を含む／暗赤褐色系 外面は刷毛整形の後、撫で・磨きがかけられる。内面には刷毛目痕がみられる。
3	台付甌	口径16.6 胴部以下欠損／砂粒、赤肌色粒子を含む／褪赤褐色 S字状口縁部横撫で。胴部外面に斜位の刷毛目が施される。磨滅により器面はザラつく。
4	甌	口径16.3 底径3.6 器高7.9 / 砂粒を含む / 褪淡赤褐色 器面は刷毛整形の後、撫でられるが、刷毛目がのこる。底に单孔があく。
5	高坏	底径19.8 脚部若干、坏部欠損／精選、赤褐色粒子を含む／明赤褐色系 外面は磨きがかけられる。据部横撫で、内面上半は削り痕あり。3孔があく。



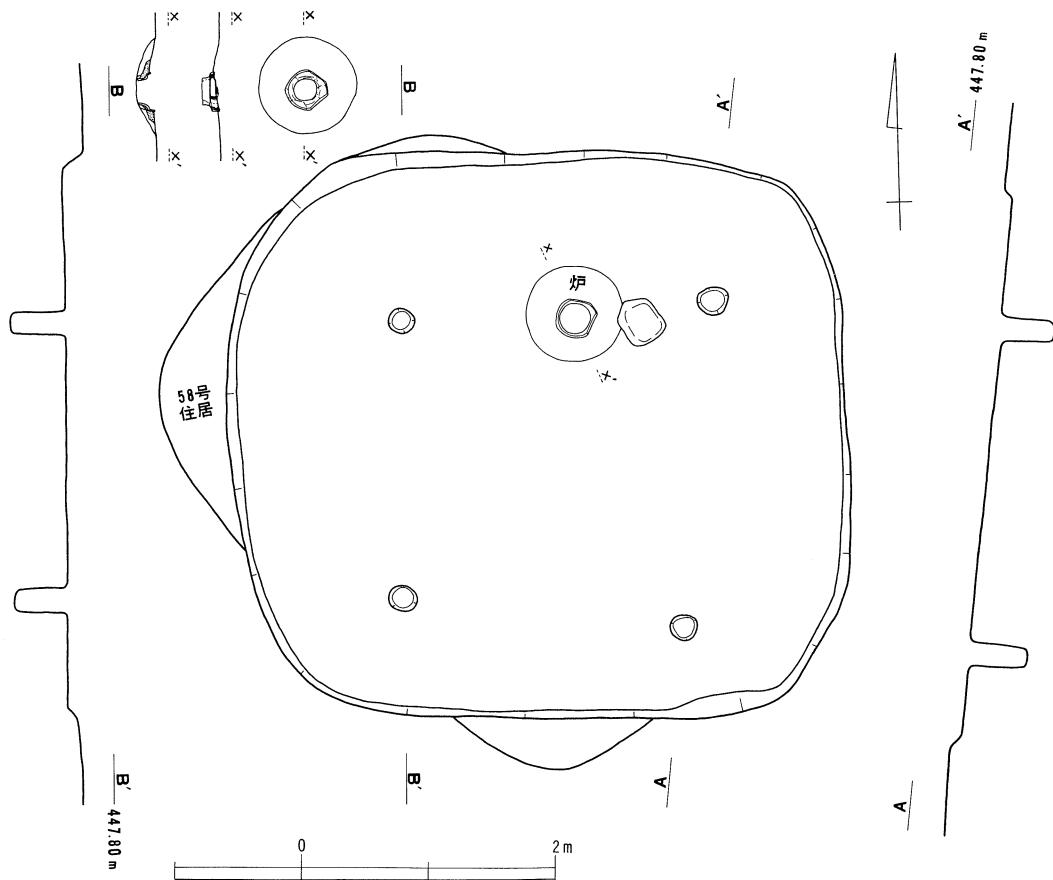
第110図 50号住居址出土遺物 (1/4)

番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調		
		整形	・ 特徴	・ その他
6	高壺	底径10.8	壺部欠損 / 精選、赤褐色粒子を含む / 淡褐色系	
		外面は磨き。据部横撫で、内面上半は削り。3孔があく。		
7	器台	口径10.5 底径13.5 器高9.3	若干欠損 / 精選、赤褐色粒子を含む / 明赤褐色系	
		磨きと撫でにより仕上げられるが、磨滅により器面がザラつき、不明白となっている。 脚部に3孔があく。		
8	石器	長さ8.5 幅7.0 厚さ5.3	石材 デイサイト	
		丸味のある側に僅かに敲打痕がみられる。		
9	砥石	長さ11.3 幅約3.0 厚さ約1.5	石材 凝灰岩	
		細長い長方形で、使用により中央が窪む。		

<51号住居址> (第111・112図)

〔遺構〕

調査区東半部北半の5-L・6-L域、48号住居址の東側に位置する。規模は東西約4.5m、南北約4.2mを測り、平面形は隅円長方形を呈する。竪穴は黄褐色土層を掘り込んで構築されるが、削平等により浅くなっている。壁は外傾し、高さは約10~15cmを測る。柱穴は4本で、略正方形に配され、床面からの深さ約40~45cmを測る。炉は、北側2本の柱穴を結ぶ線上の中央付近に、土器を用いつくられている。土器を囲み直径75cmの範囲に炭化物と焼土の混じり合う



第111図 51号住居址平・断面図 (1/60)

部分があり、この東端に約30×33cmの偏平な石が置かれていた。長軸の方向は、N-88°-W。本住居址は、58号住居址の上に構築される。

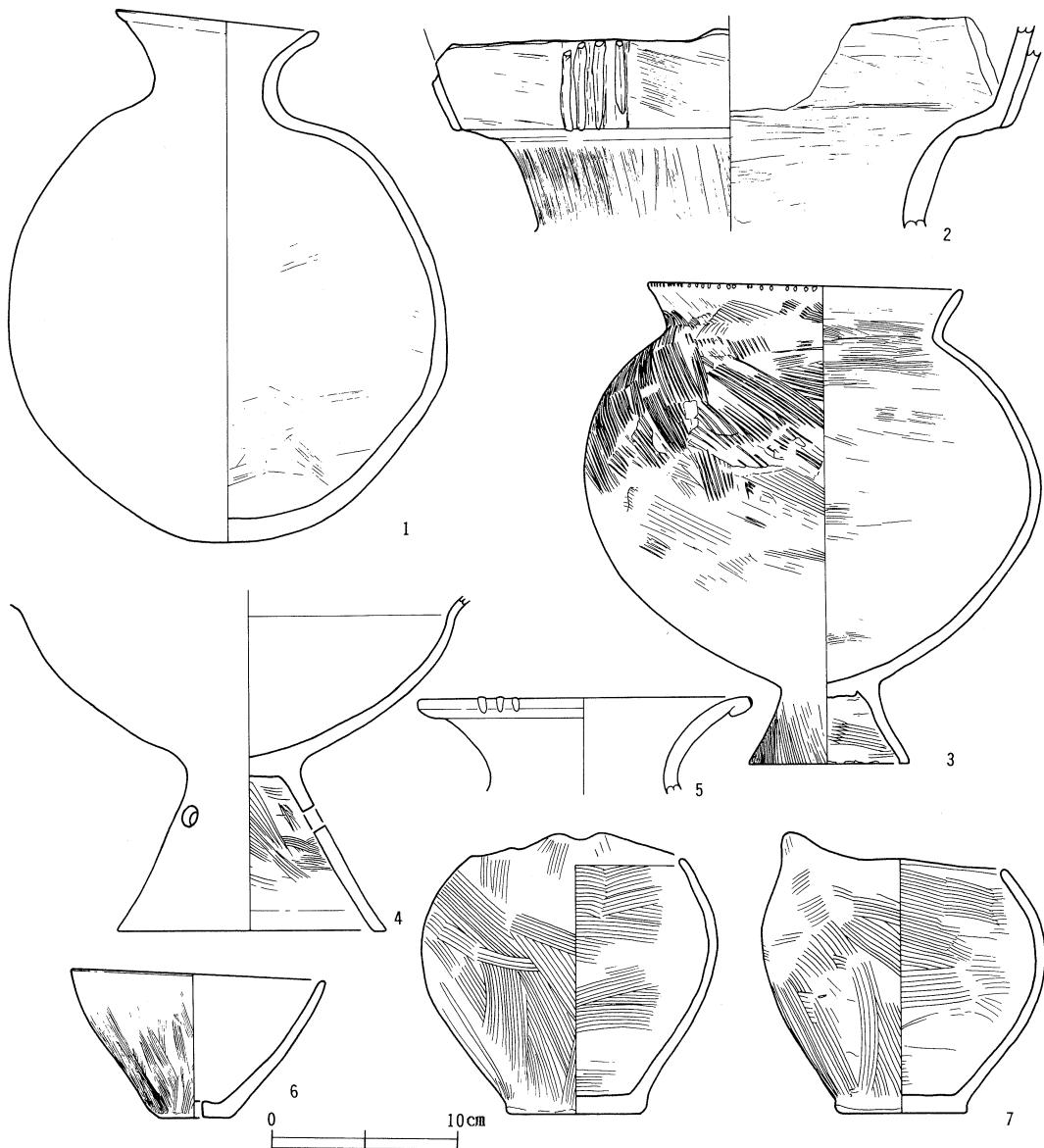
〔遺物〕

南壁際に土器の出土がみられた。炉体土器は、壺形土器の口縁部を使用し、正位に埋設してあった。南西の柱穴の周りには石が出土している。中央から炭化材も出土している。土器は、

出土遺物一覧

(単位: cm)

番 号	器 種	法 量 等 / 胎 土 /		色 調	
		整 形	・ 特 徴	・	そ の 他
1	壺	口径11	底径一 器高28	1/5欠損	砂粒を含む/赤褐色系
		器面は、撫でと磨きにより仕上げられるが、磨滅により詳細は不明白。内面に刷毛目痕がみられる。歪である。			
2	壺	口縁部・胴部以下欠損	砂粒を含む。黒色粒子が目立つ	白褐色系	
		外表面は細かい刷毛目痕がみられる。内面は撫でと細かい刷毛目がみられる。複合口縁部外側に4本1単位の棒状浮文が、一部欠損してはいるが6カ所に付けられる。内側は、黒斑があり、赤褐色を呈する部分が縁にある。炉体土器			



第112図 51号住居址出土遺物 (1/4)

壺・台付甕・高坏・甌・片口などであり、いずれも床面直上からの出土で、本住居址にともなう編年的に良好な一括資料となろう。

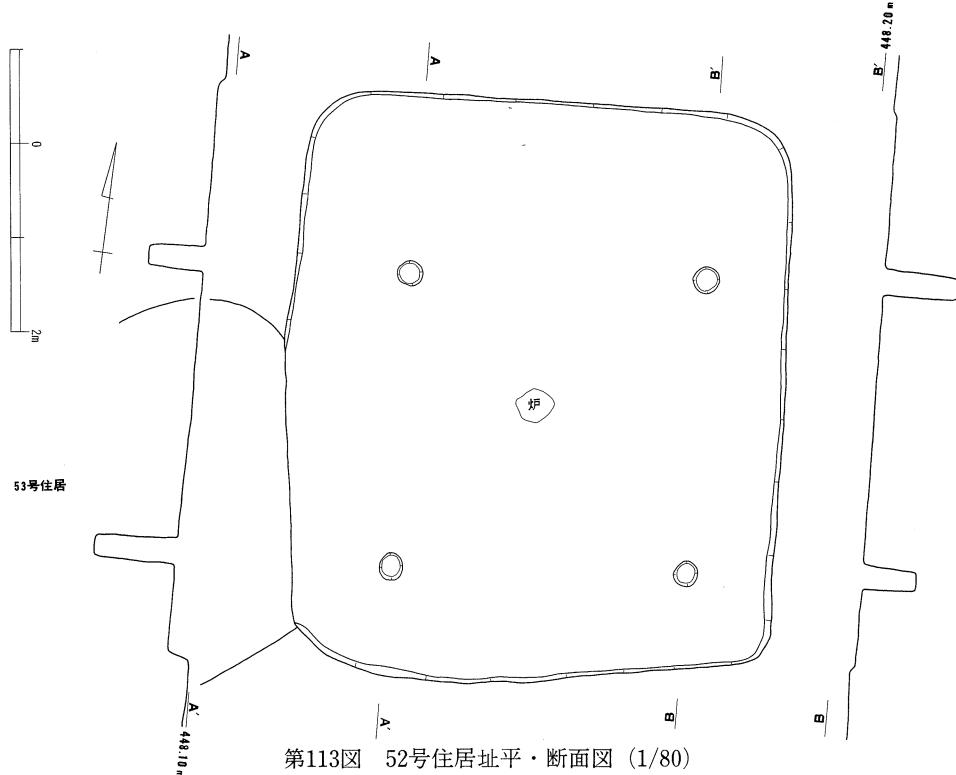
番 号	器 種	法 量 等 /	胎 土 /	色 調
		整 形	・ 特 徴	・ そ の 他
3	台付甕	口径16.8 底径8.6 器高25.8	1/5欠損/砂粒を含む/暗白褐色系~赤褐色	脚部内面は撫でが施されるが、刷毛目痕がある。内面口縁部は横撫でされ、下半から頸部下にかけて刷毛目痕がある。外面胴部上半及び脚台部は刷毛目が顕著。外面口縁部は横撫でされ、刻目がめぐる。外面は煤けている。

番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調
		整形・特徴・その他
4	高坏	底径14.3 口縁部欠損／精製、赤褐色粒子を含む／褪赤褐色系、黒斑あり 器面は撫でと磨きにより丁寧に仕上げられたと思われるが、磨滅によりザラつく。丹塗りされた痕跡がある。脚部は3孔があき、内側に刷毛目痕がある。
5	壺	口径18 口縁部破片／砂粒を含む／褪淡褐色 器面は撫でと磨きにより仕上げ。折り返し口縁外側に棒状貼付文がつく。
6	甌	口径13.6 底径3.7 器高7.8 口縁部若干欠損／砂粒を含む／淡褐色 外面口縁部横撫で。外面胴部は細かい刷毛目痕がみられる。内面は横位の撫でが施される。底部に单孔があく。
7	片口	口径12 底径7 器高15 若干欠損／砂粒を含む／白褐色系 口縁部横撫で。内外面ともに刷毛目が顯著。

<52号住居址> (第113図)

〔遺構〕

調査区東半部中央北側の7-I域に位置する。規模は東西約5m、南北約6mで、平面形は隅円長方形を呈する。削平等により非常に浅い竪穴となっており、壁高は平均5cm程で高い所は約25cmを測る。西壁南半部は、53号住居址と重複しており明瞭ではなかった。柱穴は略正方形に配された4本が当たり、床面からの深さは深いもので80cmを超し、浅いものは約55cmを測



第113図 52号住居址平・断面図 (1/80)

る。床面は平坦で良好。炉は床面中央部にあり、径30~40cmの不整円形に炭化物等の部分があり若干窪み、焼土はひとまわり小さな範囲で厚さ約4cmに形成されていた。長軸の方向は、N-5°-W。

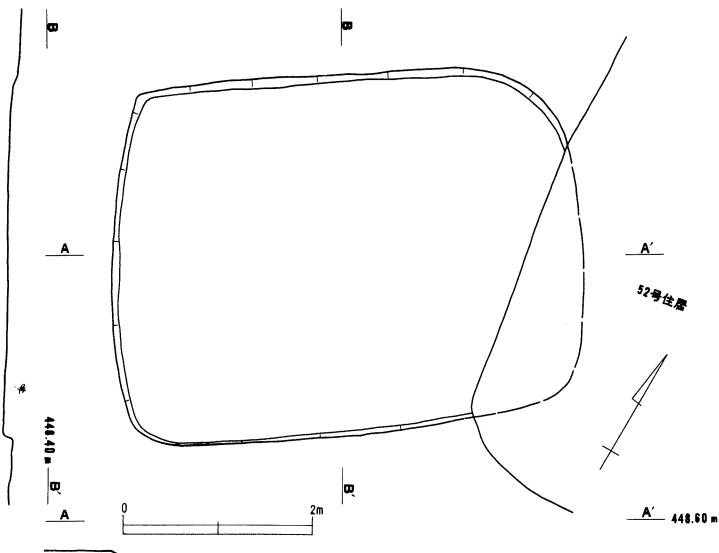
〔遺物〕

埋没土中から土器の細破片が僅かに出土しただけである。他には炭化材が出土している。

〈53号住居址〉(第114図)

〔遺構〕

調査区東半部中央北側の7-H域、52号住居址の西に位置する。規模は東西約4.5m、南北約3.7mで、平面形は隅円長方形を呈する。削平等により浅い竪穴となっており、壁高は約5~10cmを測る。東側壁は、52号住居址と重複しており明瞭ではなかった。床面は平坦であ



第114図 53号住居址平・断面図 (1/80)

り、52号住居址の床面との比高差は無く、52号住居址の床面検出に際して本住居址は発見された。柱穴・炉址の内部施設はない。長軸の方向は、N-58°-E。

〔遺物〕

土器片が極僅かに出土しただけである。

〈54号住居址〉(第115・116図)

〔遺構〕

調査区東半部中央北側の7-J域に位置する。規模は東西約6.5m、南北約5.5mで、平面形は長方形を呈する。壁はやや外傾しながら立ち上がる。壁高は35cm前後を測る。東壁は55号住居址と重複しており、あまり明瞭ではなかった。柱穴は4本で、略長方形に配されており、床面からの深さは30cm前後を測る。床面は平坦で良好。炉は地床炉で、床面中央から北東よりにある。約70×95cmの不整楕円形の範囲に炭化物等の部分があり、長さ約15cmと約20cmの枕石が2個あった。炉の南西の対角線上には偏平な石が置かれていた。長軸の方向は、N-85°-Eを示す。

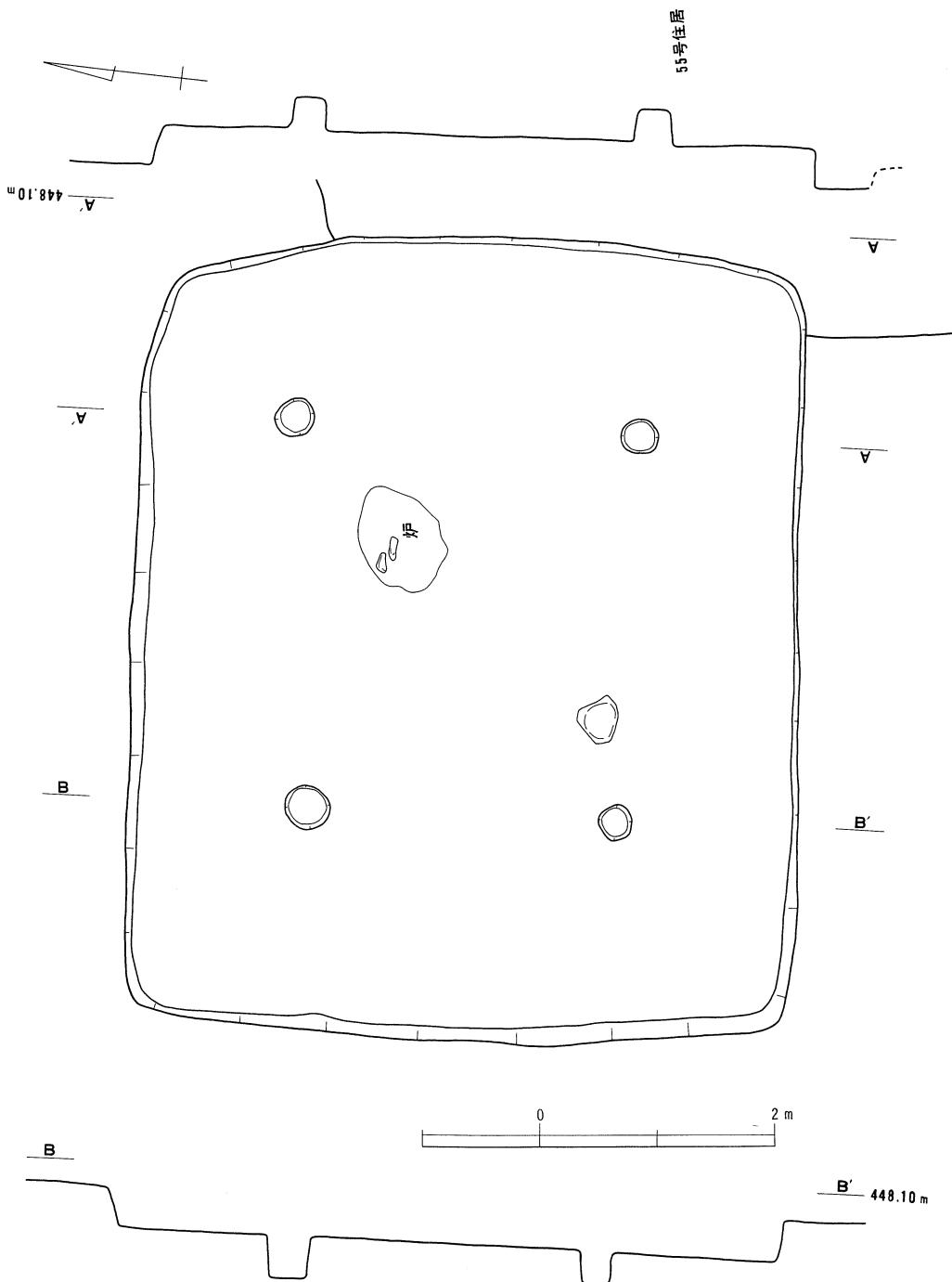
〔遺物〕

土器の出土は非常に少なく、全て破片であった。他に、黄褐色を呈する粘土と炭化物が出土している。

出土遺物一覧

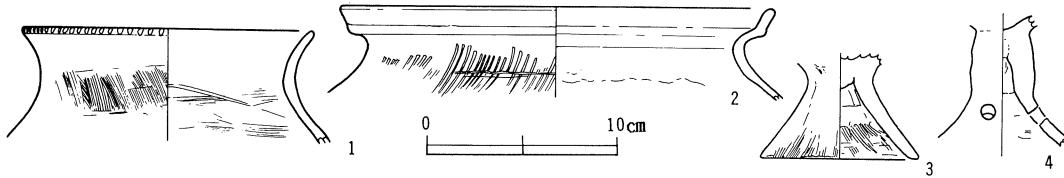
(単位: cm)

番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調	
		整形・特徴	
1	壺	口径15.3 口縁部付近破片 / 砂粒を含む / 褐褐色 口縁部は横撫でされ、刻目がめぐる。頸部に刷毛目痕がみられる。	



第115図 54号住居址平・断面図 (1/60)

番号	器種	法量等 / 胎土 /		色調	
		整形	・特徴	・	その他
2	台付甕	口径22.8	口縁部破片 / 砂粒を含む /	褪黄肌色系	
			受け口状の口縁部、外面に刷毛目あり。		
3	台付甕	底径8.3	脚台部破片 / 砂粒を含む /	褪白赤褐色	
			刷毛整形の後撫でられるが、刷毛目痕がみられる。		
4	高坏	脚部破片	/ 砂粒を含む /	褪褐色	
			撫でと磨きにより仕上げられるが、内面に刷毛目痕がみられる。4孔があく。		



第116図 54号住居址出土遺物 (1/4)

<55号住居址> (第117・118図)

〔遺構〕

調査区東半部中央北東の7-L・8-L域に位置する。規模は東西約10m、南北約8mを測り、大型の竪穴となっている。平面形は隅円長方形を呈する。竪穴は黄褐色土を掘り込んでおり、壁はやや外傾しながら良好な立ち上がりを見せる。壁高は平均50cm位で、低い所は約45cm、高い所は約60cmを測る。西壁は54号住居址と重複、56号住居址を切っている。周溝は幅25cm前後で、床面からの深さ約5~15cmを測る。西壁側の周溝内には小穴が3つ検出された。床面は略平らで良好であるが、南壁際中央の周溝が跡切れた内側は若干高くなっていた。ここから東側へL字形に小石が敷き詰められていた。柱穴は4本で、略長方形に配されており、床面からの深さは南側の2本が約55cm、北側の2本が約65cmを測る。炉は南東側柱穴の東にあり、直径45cm前後の不整円形で、東半部に石をともない、焼土は床面から約6cm下に厚さ約7cmで形成されていた。床面北東側には、直径約40cmの不整円形の中に土器を敷き詰めた窪みが検出された。北西際には約30×35cmの偏平な石があった。長軸の方向は、N-83°-E。

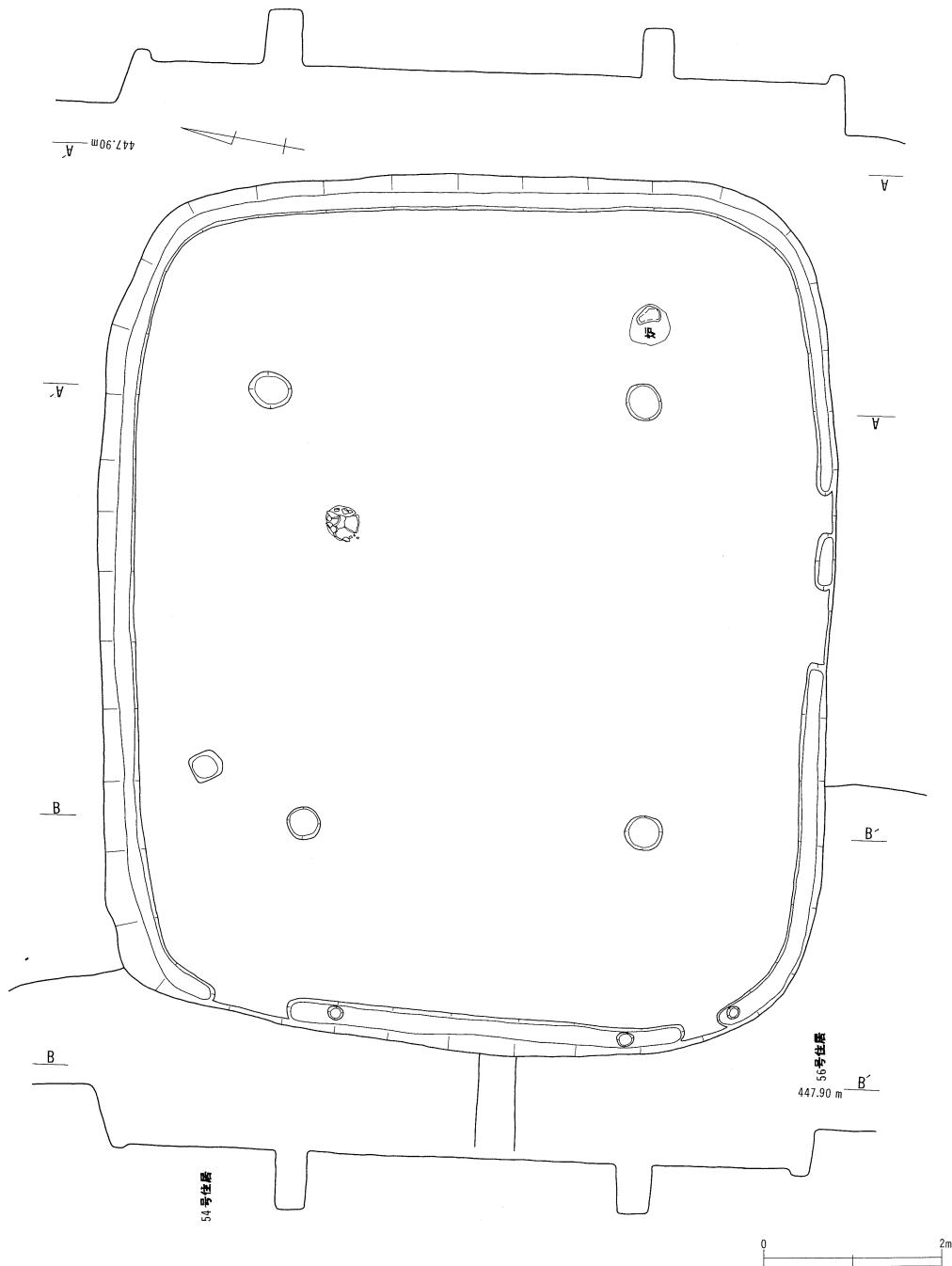
〔遺物〕

土器が主体に出土。出土場所は南東隅に集中しており、炉の近くには器台がまとまって数点出土した。南壁際東端には台付甕・高坏などが出土した。窪みに敷き詰められた土器は、風化が著しく、取り上げるとほとんど粉々になってしまい始末であった。他に、炭化した種子の出土がみられた。

出土遺物一覧

(単位: cm)

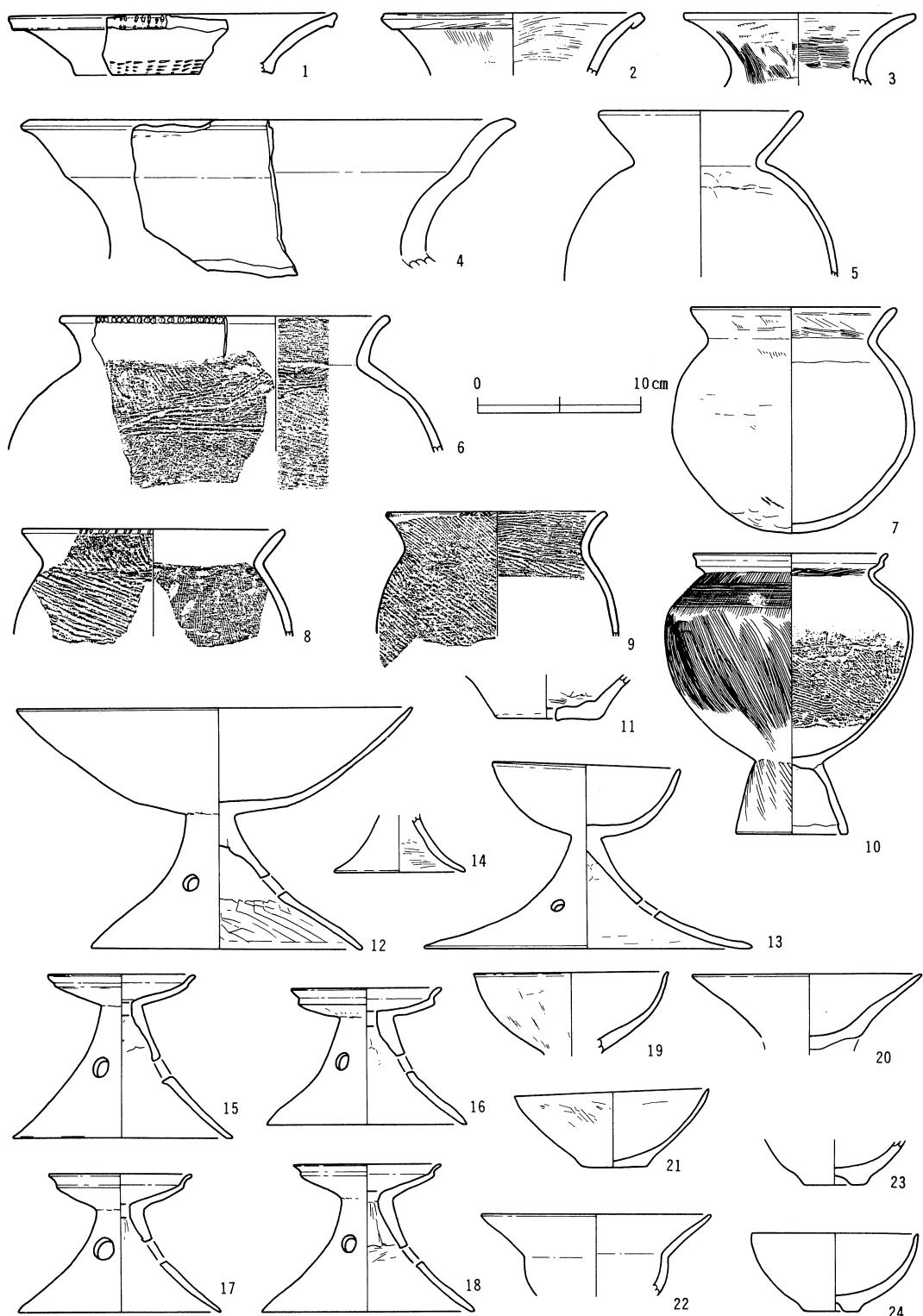
番号	器種	法量等 / 胎土 /		色調	
		整形	・特徴	・	その他
1	壺	口径20	口縁部破片 / 砂粒を含む /	外面白褐色、内面暗褐色	
			撫でにより仕上げられ、外側に櫛歯状工具による刻目をめぐらす。		
2	壺	口径15.5	口縁部破片 / 砂粒を含む /	褪褐色	
			折り返し口縁部横撫で。刷毛目痕が顕著である。		



第117図 55号住居址平・断面図 (1/80)

番号	器種	法量等 / 胎土			・	色調	
		整	形	・	特徴	・	その他の
3	壺	口径14	口縁部破片	/	砂粒を含む	/	赤みがかった肌色
		器面は刷毛目が顕著にのこる。					

番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調
		整形・特徴・その他
4	壺	口径29 口縁部破片 / 砂粒を含む / 褐色
		複合口縁で、箒磨きにより器面を密にしてある。内面に煤付着
5	甕	口径12 口縁部～胴部破片 / 砂粒を含む / 白褐色系
		口縁部横撫で。器面を撫でと磨きにより仕上げ。内面頸部下に圧痕あり。
6	甕	口径19.7 口縁部～胴部破片 / 砂粒・赤褐色粒を含む / 外面暗褐色、内面明褐色系
		口縁部は刷毛整形の後横撫でされ、刻目がめぐる。胴部内外面に刷毛目痕あり。
7	甕	口径12.3 丸底 器高13.9 1/5欠損 / 砂粒を含む / 外面暗褐色系、内面明褐色系
		口縁部横撫で。外面頸部に刷毛目痕あり。外面胴部は撫で整形されるが、煤が付着し、剥落がみられる。胴部内面は撫で等により器面を密にしてある。口縁部内側には刷毛目痕あり。
8	甕	口径15.7 口縁部～胴部破片 / 砂粒、赤褐色粒子を含む / 外面暗褐色、内面白褐色系
		口縁部は横撫でされ刻目がめぐる。外面は粗い刷毛目痕、胴部内面は細かい刷毛目痕がみられる。
9	甕	口径13.2 口縁部～胴部破片 / 砂粒、赤褐色粒子を含む / 黒赤褐色
		口縁部内側～外面にかけて刷毛目が顕著。口唇に櫛齒状工具による刻目がめぐる。外面に煤付着。
10	台付甕	口径11.7 底径6.7 器高17.2 若干欠損 / 砂粒を含む / 明褐色
		S字状口縁部横撫で。内面、頸部に刷毛目痕あり、胴部中位以下に刷毛目痕あり。外面、肩部に刷毛目が横走し、胴部全体に刷毛目痕が顕著。胴部外面は煤が付着し、剥落がみられる。脚台部外面は刷毛目痕があり、内面には内側へ折り返しがある。
11	甑	底径6.2 底部破片 / 砂粒を含む / 明赤褐色
		内面に棒状工具による整形痕がみられる。底部に单孔があく。
12	高坏	口径24 底径16.4 器高14.8 1/6欠損 / 微砂粒を含む / 褐色
		口縁部横撫で。脚部外面及び坏部は箒磨きが施される。脚部内面下半は箒削り痕がみられる。脚部は3孔があく。丹彩痕あり。
13	高坏	口径11.3 底径20 器高11.3 1/7欠損 / 精製 / 明褐色系
		口縁部及び脚部端部横撫で。器面は撫でと磨きで仕上げられるが、若干細かな刷毛目痕がみられる。脚部に3孔があく。
14	器台	底径8 脚部破片 / 砂粒を含む / 暗黄褐色系
		外面は箒磨きされ、丹彩される。内面に刷毛目痕あり。
15	器台	口径8.8 底径13.4 器高10 若干欠損 / 精製 / 褐色系
		口縁部横撫で。脚部外面及び器受部は箒磨きが施される。器受部内面に煤付着。脚部内面撫で。器受部底に单孔、脚部に单孔があく。
16	器台	口径14 底径12.1 器高8.4 1/5欠損 / 砂粒を含む / 明褐色系
		口縁部横撫で。器面は撫でと磨きにより仕上げられる。器受部底に单孔、脚部に3孔があく。



第118図 55号住居址出土遺物 (1/4)

番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調
		整形・特徴・その他
17	器台	口径8.6 底径12.3 器高8.5 口縁部及び脚部若干欠損／砂粒を含む／褪褐色
		口縁部横撫で。器受部及び外面は箒磨きが施される。脚部内側は撫でられる。器受部底に単孔、脚に3孔があく。
18	器台	口径8.9 底径13 器高9 若干欠損／砂粒を含む／褪褐色
		口縁部横撫で。器面は撫でと比較的粗い箒磨きが施される。脚部内面下半にも横位の粗い箒磨き痕がみられる。器受部底に単孔、脚部に3孔があく。
19	高坏	口径11.8 口縁部破片 / 砂粒を含む / 褪褐色
		口縁部横撫で。内面は比較的丁寧な箒磨き。外面は粗い箒磨きが施され、刷毛目痕がみられる。高坏の坏部か？
20	高坏	口径14.9 底部欠損 / 砂粒を含む / 褪褐色系
		口縁部横撫で。器面は比較的粗い箒磨きが施される。高坏の坏部か？
21	鉢	口径11.8 底径4 器高4.7 若干欠損 / 砂粒を含む / 肌色系 黒斑あり
		撫でと磨きにより仕上げられる。外面に刷毛目痕がみられる。
22	鉢	口径13.8 口縁部破片 / 微砂粒を含む / 白褐色～白赤褐色
		箒磨きにより仕上げられる。口縁部横撫で。
23	鉢	底径3.7 底部破片 / 砂粒を含む / 暗い肌色系、黒斑あり。
		内面は箒磨き。外面は撫でにより仕上げられる。底部は凹む。
24	鉢	口径10 底径3.3 器高4.8 若干欠損 / 砂粒を含む / 薄灰褐色系
		器面は比較的丁寧な磨きにより仕上げられる。底部は凹む。

<56号住居址> (第119・120図)

〔遺構〕

調査区東半部中央の8-J・8-K域に位置する。規模は東西約7m、南北約6mで、平面形は隅円長方形を呈する。竪穴は黄褐色土を掘り込んでおり、壁はやや外傾しながら立ち上がる。壁高は20cm前後を測る。北東側は55号住居址に切られ遺存していなかった。床面は平坦で良好。柱穴は4本主柱穴と思われるが、3本が検出され、床面からの深さ約55~60cmを測る。炉は地床炉で、径約75×90cmの不整卵形を呈し、長さ12cm程の枕石2個が置かれ、焼土はひとまわり小さく約10cmの厚さで形成されていた。炉の位置は、西側2本の柱穴を結ぶ線上中央から内側に広がっている。南壁際中央付近に偏平な石があった。長軸の方向は、N-83°-E。

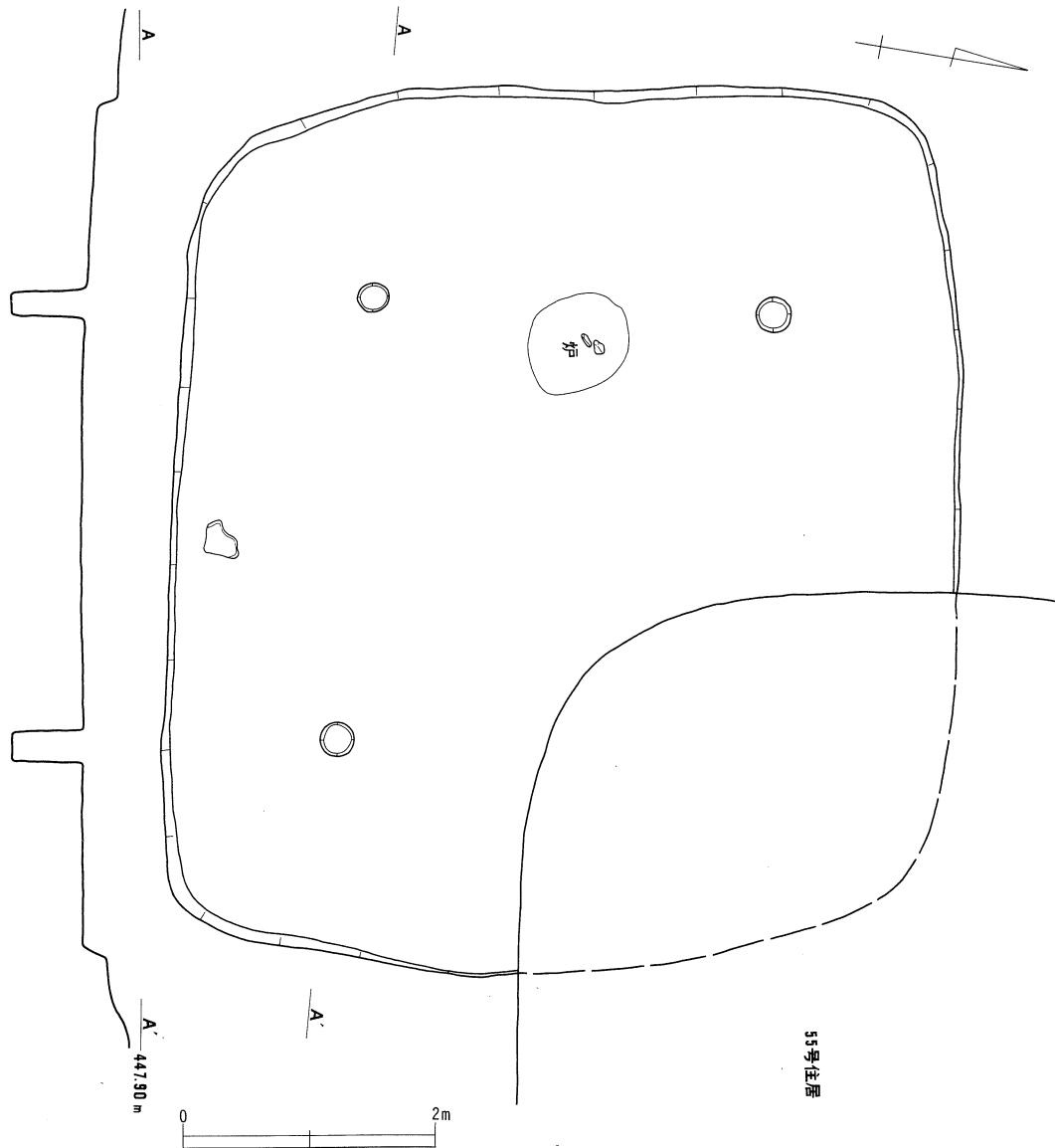
〔遺物〕

遺物は土器が主体であるが、量的には少ない。

出土遺物一覧

(単位: cm)

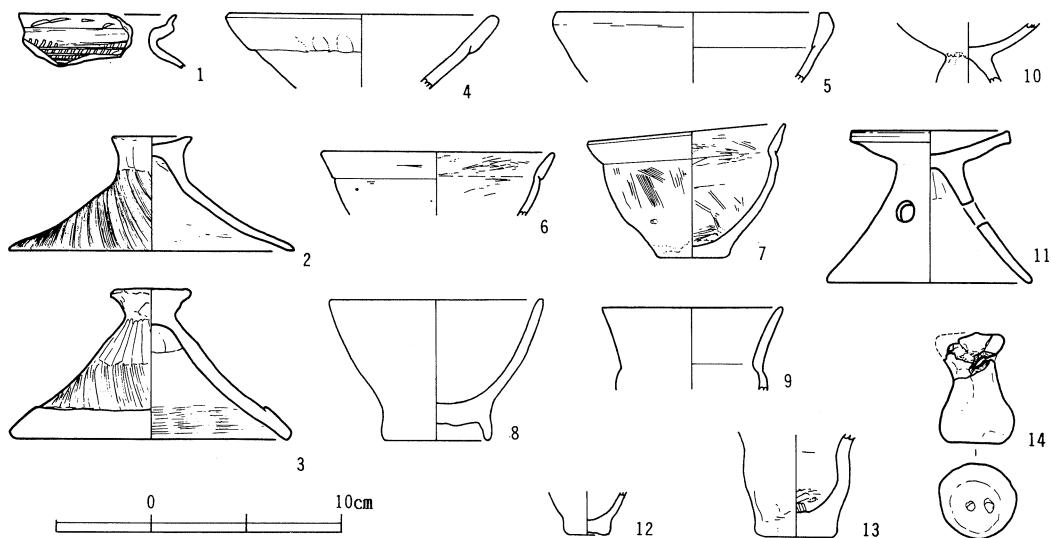
番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調
		整形・特徴・その他
1	台付甕	口縁部破片 / 砂粒、赤褐色粒を含む / 薄茶色系
		口縁部は横撫でされ、外側に刺突状の凹みがめぐる。頸部内面に刷毛目がみられる。



第119図 56号住居址平・断面図 (1/60)

番 号	器 種	法 量 等 / 胎 土 /		色 調	
		整 形	・ 特 徴	・	そ の 他
2	蓋	鉢径 4.2 底径15 器高 6	1/2欠損/砂粒を含む/赤褐色系、黒斑あり		
		鉢部は、指によりつまみ出してある。内外面ともに刷毛目痕がみられる。			
3	蓋	鉢径 4.2 底径14.5 器高 8	若干欠損/砂粒を含む/暗褐色		
		据部縁は折り返して、横撫でされる。外面は鉢部と据部を除き比較的細かい刷毛目がみられる。内面下半には横位の刷毛目がみられる。			
4	瓶	口径13.9 口縁部破片	/ 砂粒を含む /	褪明褐色	
		折り返し口縁で、外側に圧痕がある。器面は磨滅によりザラつく。			

番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調
		整形・特徴・その他
5	瓶	口径14.3 口縁部破片 / 砂粒を含む / 暗い薄茶色 内側への折り返し口縁で、撫でにより仕上げられる。
		口径12.1 口縁部付近破片 / 砂粒を含む / 赤褐色 折り返し口縁部横撫で。内面に細かな刷毛目痕がみられる。瓶か?
7	鉢	口径10.3 底径3.6 器高6.7 1/2欠損/砂粒を含む/白褐色系 折り返し口縁。器面は撫でによって仕上げられるが、細かな刷毛目痕がみられる。
		口径11 底径5.5 器高7.4 1/3欠損/砂粒を含む/白褐色、黒斑あり。 口縁部横撫で。撫でと磨きにより仕上げられるが、磨滅によりザラつく。底部は、高台付となっている。
9	小型丸底土器	口径9.4 口縁部破片 / 砂粒を含む / 褐明褐色 磨滅が著しく、器面がザラつき、整形は不明白。
		坏部底部付近破片 / 砂粒を含む / 赤褐色系 器面は磨きにより仕上げられるが、磨滅により若干ザラつく。
11	器台	口径8.2 底径10.7 器高8 若干欠損/砂粒、赤褐色粒を含む/暗褐色 口縁部横撫で。器面は撫でにより仕上げられる。脚部に3孔があく。器受部底は剝落が著しい。
		底径2.2 口縁部欠損 / 微砂粒を含む / 暗褐色 手こねによりつくられる。
13	小型手捏土器	底径4 2/3欠損 / 微砂粒を含む / 褶薄赤褐色 内面に棒状工具による撫で痕がある。
		直径3.5 長さ5.8 若干欠損 / 砂粒を含む / 暗褐色系 手こねによりつくられる。乳棒状のもので、片側に浅い凹みが2ヶ所ある。用途は不明白
14		

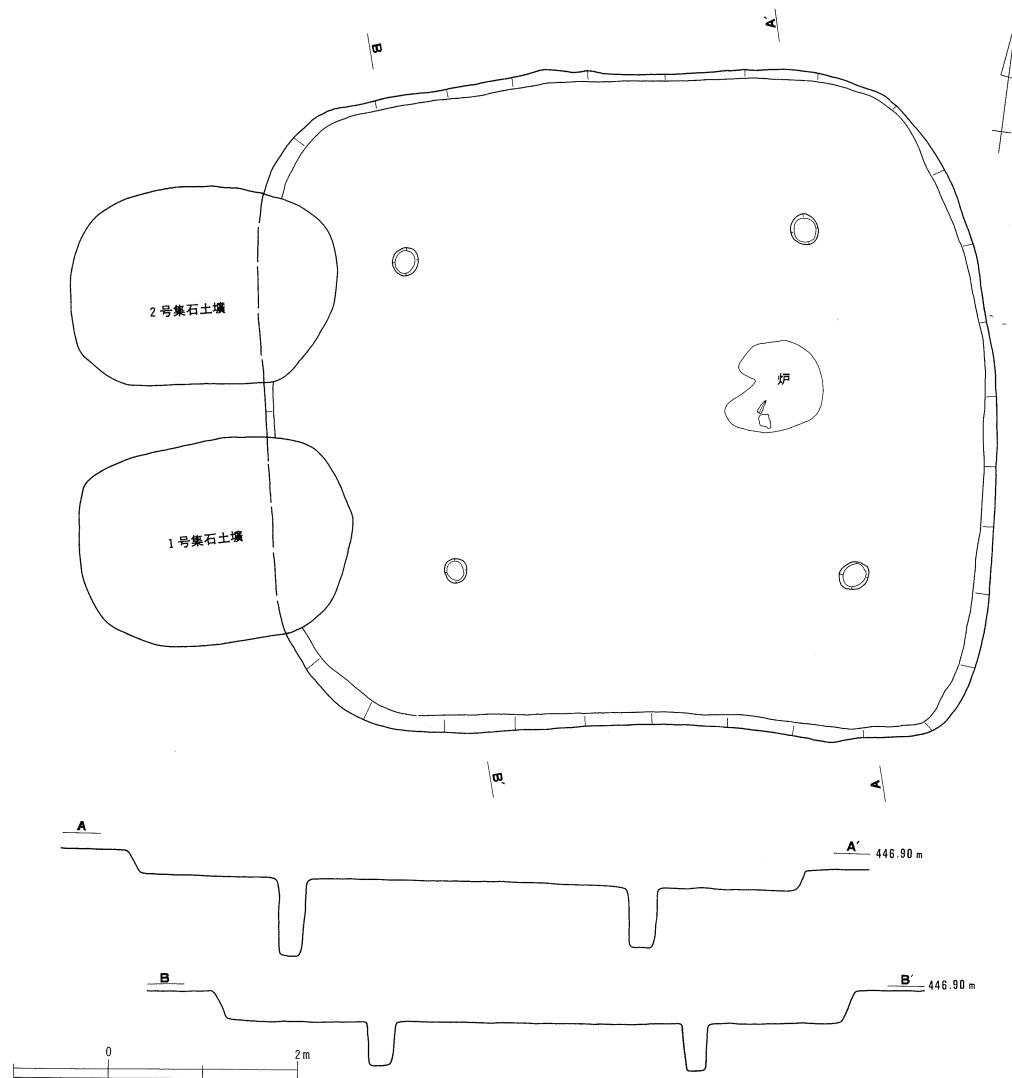


第120図 56号住居址出土遺物 (1/4)

〈57号住居址〉（第121・122図）

〔遺構〕

調査区東半部北側東辺の4-N域に位置する。規模は東西約7.5m、南北約7mで、平面形は隅円長方形を呈する。竪穴は黄褐色土を掘り込んであり、壁は外傾しながら立ち上がる。西壁側には、1号・2号集石土壙があり壁の遺存率は悪い。削平などにより壁は西から東へ低くなってしまっており、壁高は約20~30cmを測る。柱穴は4本で若干ズレるが、略長方形に配されており、床面からの深さ50cm前後と約60cmと約80cmを測り不揃いとなっている。床面は平坦で良好。炉は東側2本の柱穴を結ぶ線よりも内側で、床面中央よりも東側にあり、径約95×100cmの範囲で偶蹄類の蹄状の平面形を呈する。炉の焼土の広がりは、蹄の片方ずつにひとまわり小さくありその厚さは10cm前後を測る。炉の南側からは土器片が検出された。長軸の方向は、N-80°-



第121図 57号住居址平・断面図 (1/80)

W。

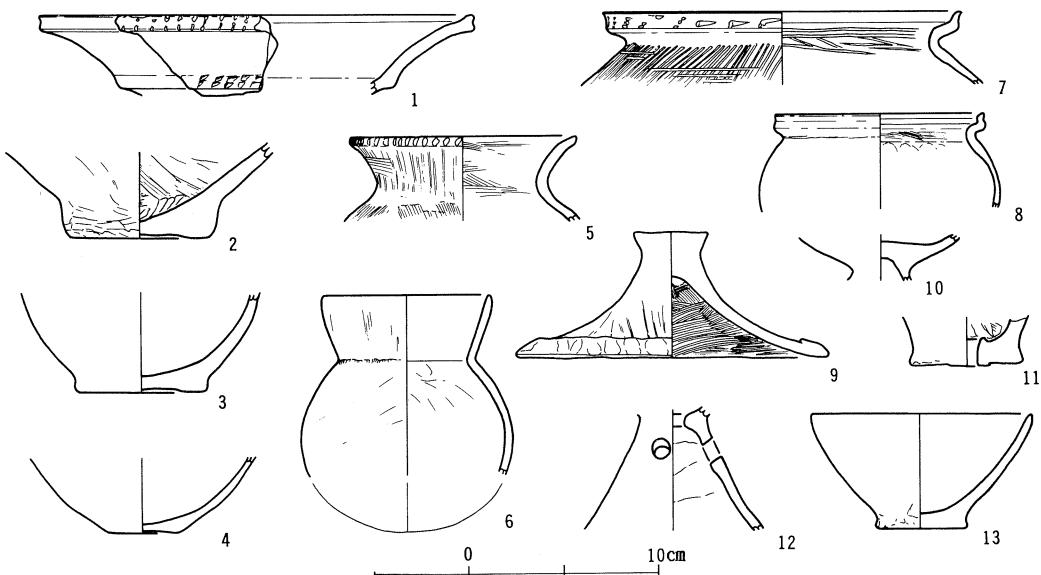
[遺物]

遺物の出土は少なく、土器片が中心に出土した。特殊なものとしては、埋没土中からモモの種子が出土している。

出土遺物一覧

(単位: cm)

番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調
		整形・特徴・その他
1	壺	口径22.7 口縁部破片／砂粒を含む／暗い白褐色
		複合口縁部外側上下二段に刷毛状工具による圧痕・刻目が連続する。
2	壺	底径 7.3 底部破片／砂粒を含む／褪赤褐色～白褐色系黒斑あり
		内面は細かい刷毛目痕がみられる。外面は撫で。底部は周辺が高く、凹み底を呈する。
3	壺	底径 6.6 底部破片／微砂粒を含む／外面暗褐色、内面褪黄褐色
		撫で等により器面を整形。底部は周辺が高く、凹み底を呈する。
4	壺	底径 3.6 脊部～底部破片／砂粒を含む／明褪褐色
		器面は撫でと磨きが施されるが、かすかに刷毛目痕がみられる。外面は黒く、煤などが付着。
5	壺	口径11.8 口縁部破片／砂粒、赤褐色粒を含む／赤褐色
		口縁部は横撫でされ、刻目がめぐる。内外面に刷毛目痕が顕著。
6	小型丸底土器	口径 8.7 脊部～底部欠損／砂粒、赤褐色粒子を含む／暗い肌色系
		脊部内面は撫で。口縁部内面～器外表面は箠磨きが施される。頸部外表面には刷毛目痕がみられる。口縁部は横撫で。
7	台付甕	口径18.7 口縁部破片／砂粒を含む／白褐色系
		S字状口縁部は横撫でされ、外側に刷毛状工具による刺突がめぐる。頸部内面は刷毛目痕がある。外面頸部下は比較的粗い刷毛目が施される。



第122図 57号住居址出土遺物 (1/4)

番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調
		整形・特徴・その他
8	台付甕	口径10.8 口縁部～胴部上半の破片／砂粒を含む／褪褐色
		S字状口縁部横撫で。器面は撫でにより仕上げられるが、僅かにかすかに細かい刷毛目痕がみられる。
9	蓋	鉢径3.9 底径16.2 器高6.6 若干欠損／砂粒、赤褐色粒子を含む／外面白褐色系、内面暗褐色
		内面は刷毛目が顕著。据部は折り返えされ、圧痕がめぐる。外面は刷毛目痕あり。
10	高坏	坏部破片／砂粒・赤褐色粒子を含む／褪褐色
		器面は丁寧に磨かれたと思われるが、磨滅によりザラついている。
11	甕	底径5.8 底部破片／微砂粒を含む／赤褐色系
		撫でと磨きにより仕上げられ、底部に单孔があく。
12	器台	脚部破片／砂粒を含む／肌色系
		外面は鏡磨きが施される。磨滅により器面はザラつく。器受部の单孔、脚部の3孔があく。
13	鉢	口径11.5 底径4.6 器高6.1／3欠損／砂粒、赤褐色粒を含む／褪明褐色
		口縁部横撫で。外面にかすかに刷毛目痕がみられる。

〈58号住居址〉（第123・124図）

〔遺構〕

調査区東半部北半の5-L・6-L域、48号住居址の東側に位置する。51号住居址の炉体土器を取り上げる作業に際して床面が検出され、一段下に住居址があることが判明。58号住居址とし床面検出を行い、壁の立ち上がりを追った。規模は長辺約4.5m、短辺約3.5mで、平面形は隅円長方形を呈する。本住居址の大半は51号住居址により削られているが、破壊を受けていない北西壁では壁高約30cmを測る。床面は平坦で、51号住居址床面との比高差5cm前後を測る。西隅壁上半は48号住居址に切られている。柱穴は4本で、略長方形に配され、床面からの深さ平均約40cmであるが、西側の1本は約50cmを測る。炉は床面中央から北西寄りの所に位置し、約55×75cmの不整隅円長方形の範囲に炭化物等の部分があり、東側に長さ10cm前後の石を4個ともなっていた。炉の焼土の範囲は炭化物等の部分よりもひとまわり小さく、厚さは約7cmを測る。長軸の方向は、N-43°-W。

〔遺物〕

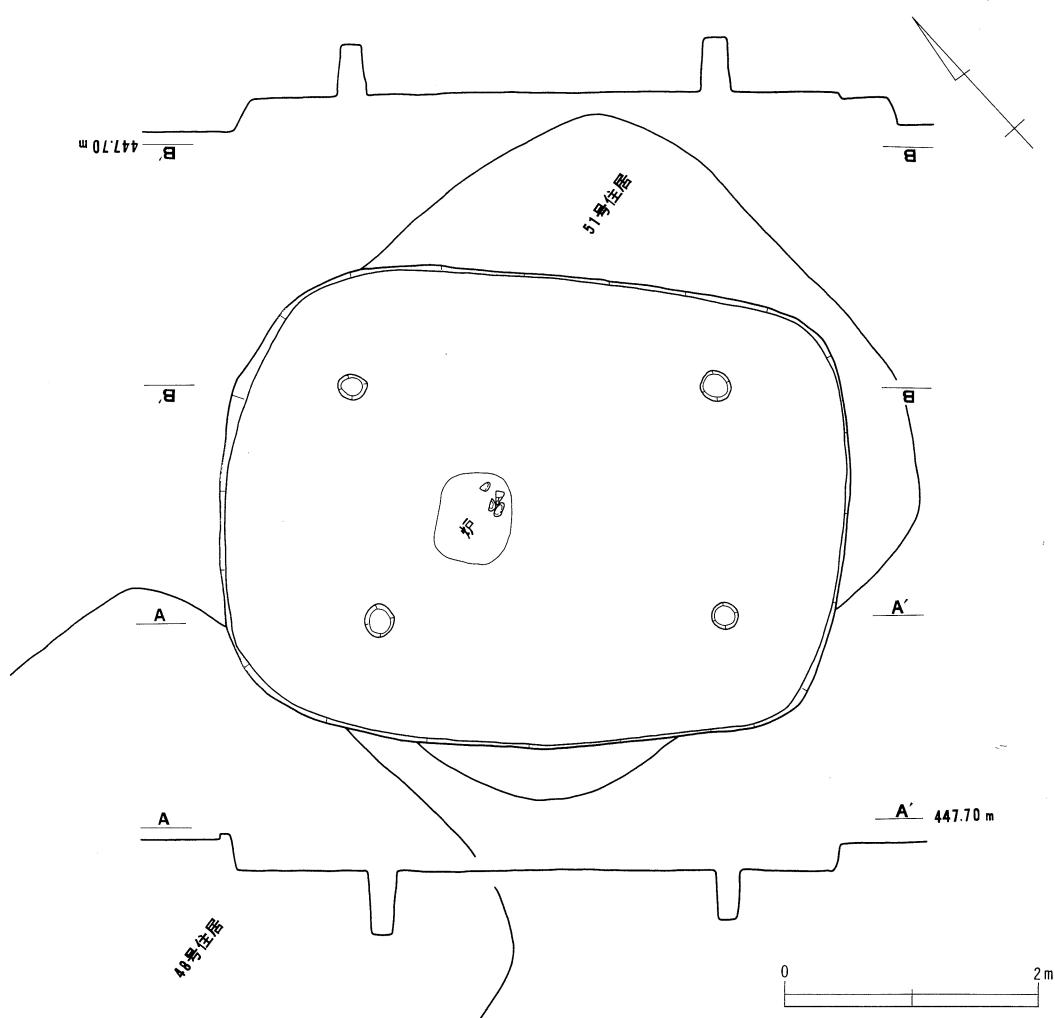
遺物の出土は極めて少ない。

出土遺物一覧

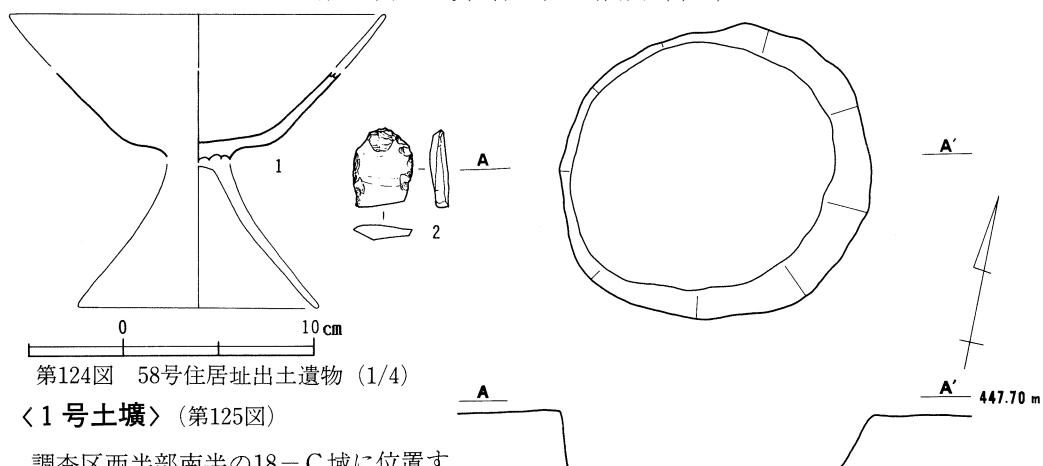
(単位: cm)

番号	器種	法量等 / 胎土 / 色調
		整形・特徴・その他
1	高坏	坏部破片 / 砂粒を含む / 明褐色
		磨きにより器面を密にしてある。
2	石器	長さ約4.0 幅約3.0 厚さ約0.7 / 黒耀石製
		片面に押圧剝離により刃がつけられている。縄文時代の所産であろう。

以上、古墳時代の住居址の遺構と遺物についてみてきたが、次に2基の土壙についてみてみよう。



第123図 58号住居址平・断面図 (1/60)



調査区西半部南半の18-C域に位置する。規模は直径約2.4mで、平面形は不整

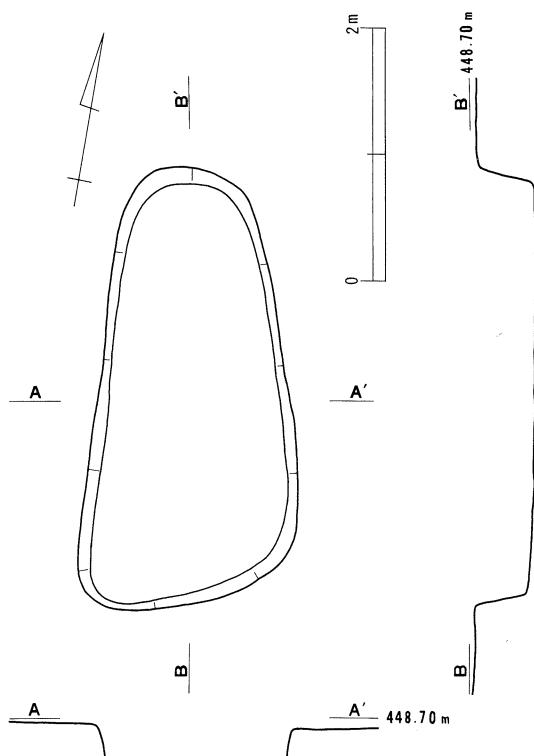
第125図 1号土壙平・断面図 (1/60)

の円形を呈する。遺構確認面からの深さは約50cmを測る。出土遺物はない。

〈2号土壙〉(第126図)

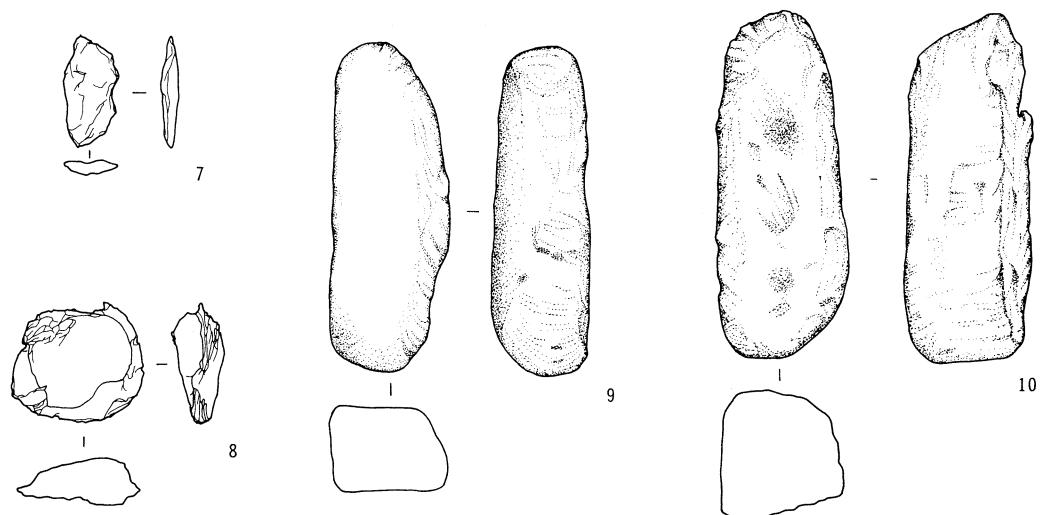
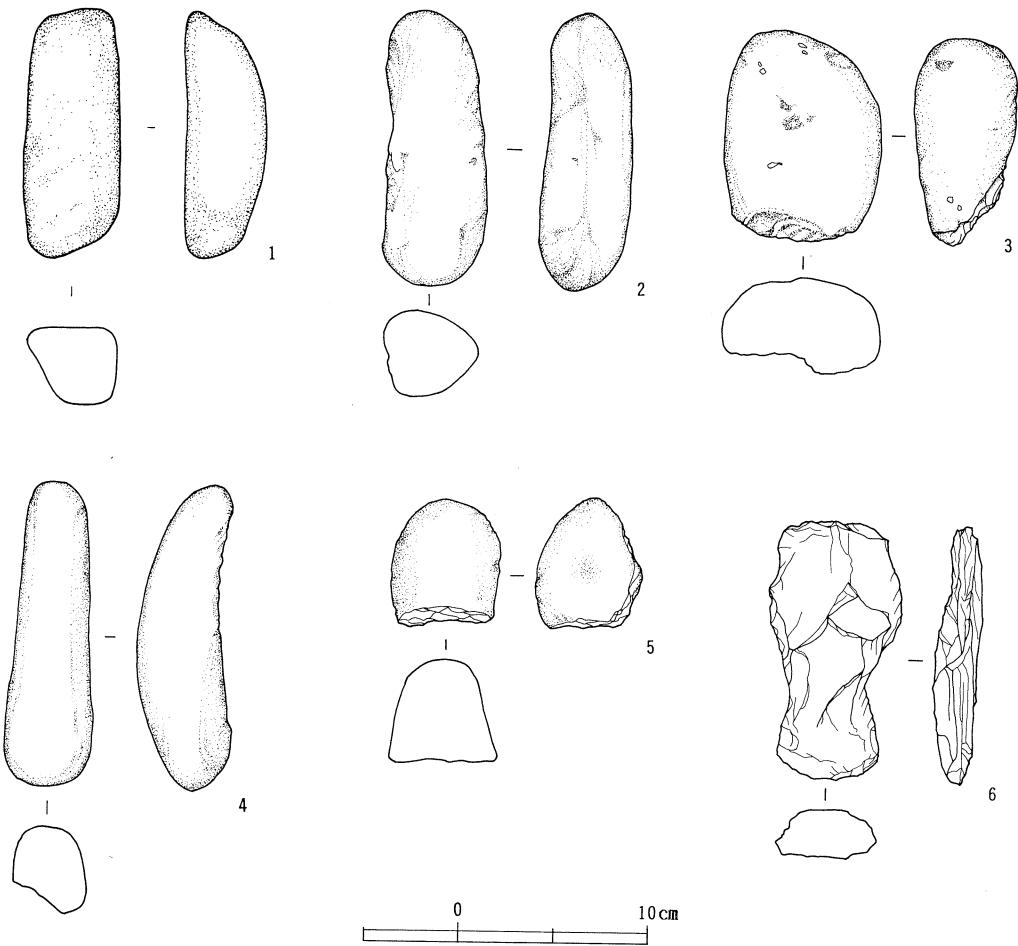
調査区東半部北西端の1-G域に位置する。規模は東西約1.6m、南北約3.5mを測り、平面形は南側が広がる撥形を呈する。遺構確認面からの深さは約45cmを測る。出土遺物はない。

以上、古墳時代の遺構と遺物についてみてきたが、前掲した各遺物の外におのの遺構から棒状の石が多く出土したので、それ以外のものも含め、ここに一括して上げておく。これらは打製石斧の類を除くとその用途が不明白なものがほとんどである。ただし、47号住居址出土のものは形状等が比較的まとまっており、編石としておきたい。

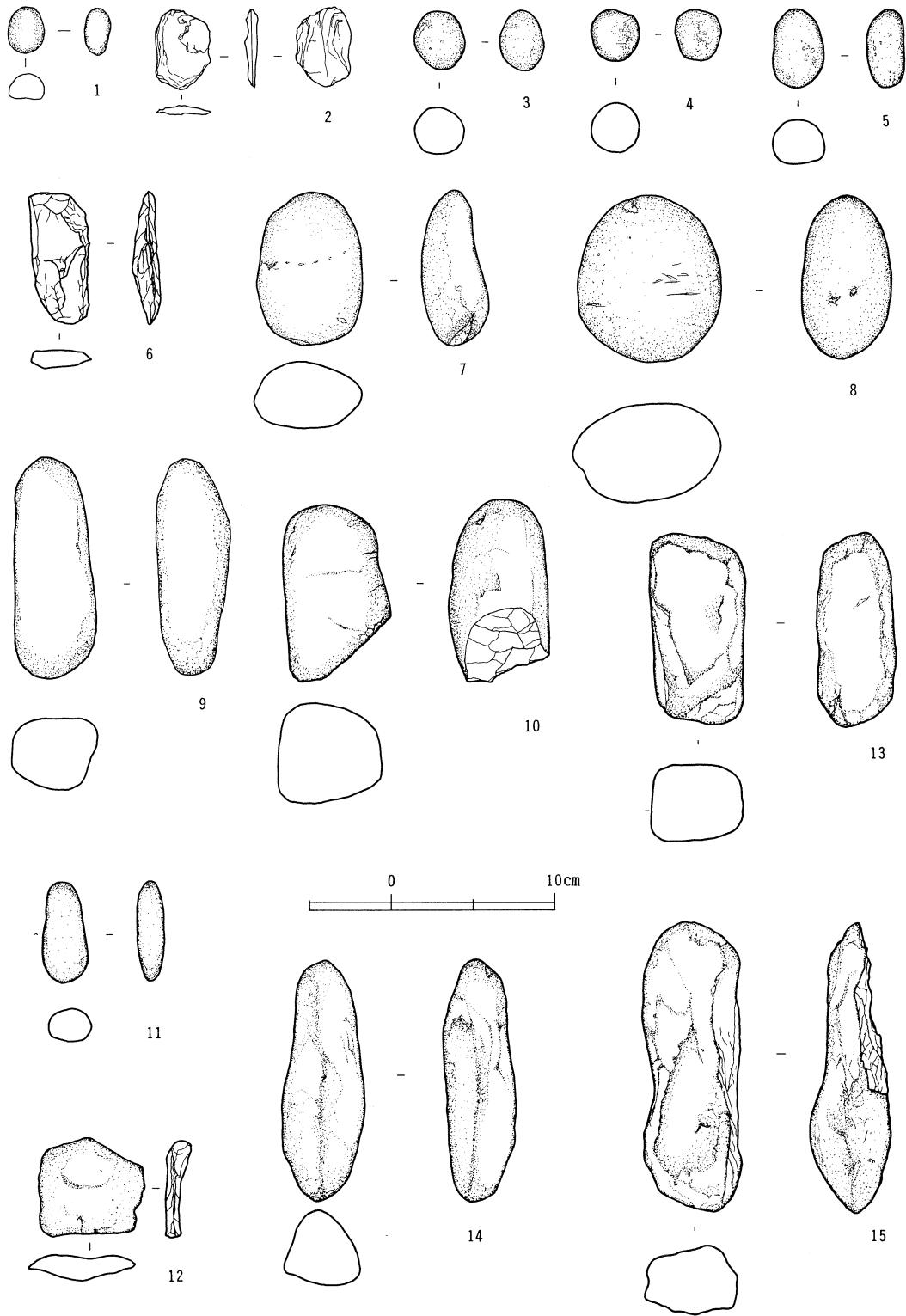


第126図 2号土壙平・断面図 (1/60)

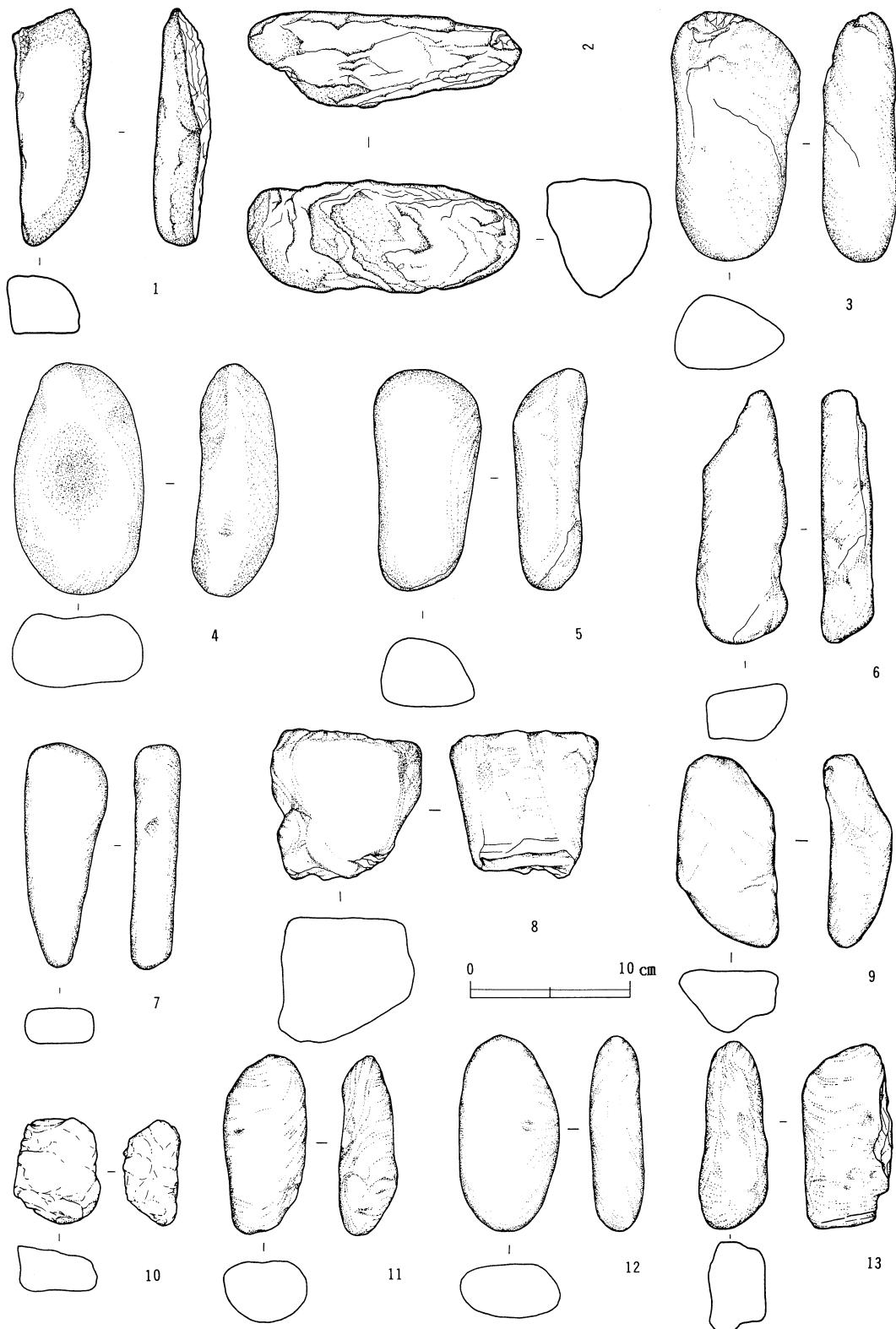
番号 挿図一番	出土 住居址	形態	残存状態	石材	長さ・幅・厚さ	特徴
127-1	5住	柱状	完形	デイサイト	13.0 5.0 4.0	
127-2	31住	柱状	完形	ホルンフェルス	14.4 5.0 4.4	
127-3	32住	不明	一部欠	輝石安山岩	(10.8) 8.2 4.8	
127-4	35住	柱状	完形	安山岩	16.0 3.8 4.0	
127-5	35住	不明	破片	輝石安山岩	(10.4) 5.4 5.2	凹石(?)
127-6	37住	分胴形	一部欠	粘板岩 (ホルンフェルス)	13.6 5.4 2.4	打製石斧
127-7	37住		完形	粘板岩	5.8 2.4 0.8	
127-8	37住		完形	石灰岩	6.2 6.6 2.0	
127-9	37住	柱状	完形	ホルンフェルス	17.2 6.2 4.4	
127-10	37住	短冊形	完形	ホルンフェルス	18.2 6.4 6.6	
128-1	39住	豆状	完形	珪質岩	2.8 2.2 1.2	
128-2	40住		完形	粘板岩	4.8 3.2 0.6	
128-3	43住	豆状	完形	安山岩	3.6 3.0 2.8	
128-4	43住	豆状	完形	安山岩	3.0 2.8 3.0	
128-5	43住	豆状	完形	安山岩	4.8 3.0 2.6	
128-6	43住	短冊形	完形	負岩	8.0 3.4 1.0	
128-7	43住	石けん状	完形	粗粒凝灰岩	9.2 6.2 4.0	



第127図 遺構出土石器 (1/4)



第128図 遺構出土石器 (1/4)



第129図 遺構出土石器 (1/4)

番号 捕図一番	出土 住居址	形態	残存状態	石 材	長さ・幅・厚さ	特 徴 その他の
128-8	43 住	楕円状	完形	輝石安山岩	10.2 8.6 6.0	
128-9	45 住	柱状	完形	ホルンフェルス	13.6 4.6 4.2	
128-10	45 住	不明	半分欠	粗粒砂岩	(10.6) 6.2 6.0	
128-11	47 住	茄子形	完形	閃緑山	6.2 2.4 2.0	編石
128-12	47 住		完形	輝石安山岩	6.0 6.2 1.6	編石
128-13	47 住	短冊形	完形	ホルンフェルス	11.2 5.6 4.6	編石
128-14	47 住	柱状	完形	ホルンフェルス	14.6 4.6 4.4	編石
128-15	47 住	不明	一部欠	砂質頁岩	17.2 5.8 4.0	編石
129-1	47 住	不明	一部欠	細粒砂岩	13.8 4.8 3.6	編石
129-2	47 住	短冊形	完形	ホルンフェルス	19.0 6.6 6.4	編石
129-3	51 住	短冊形	完形	輝石安山岩	15.4 7.6 4.8	
129-4	51 住	楕円状	完形	輝石安山岩	14.2 8.0 4.4	凹石(?)
129-5	51 住	短冊形	完形	細粒凝灰岩	13.8 6.6 4.2	
129-6	55 住	短冊形	完形	輝石安山岩	15.8 5.4 3.4	
129-7	56 住	三角形	完形	細粒砂岩	14.0 5.0 2.2	
129-8	58 住		完形	頁岩	9.3 9.3 7.7	擦痕あり
129-9	58 住	餅形	完形	細粒砂岩	11.2 6.2 3.8	
129-10	58 住		完形	砂質頁岩	6.6 5.0 2.7	
129-11	58 住	餅形	完形	ホルンフェルス	11.0 5.2 3.8	
129-12	58 住	小判形	完形	輝石安山岩	12.3 6.2 3.4	
129-13	58 住	短冊形	一部欠	ホルンフェルス	11.7 3.6 5.6	

第2節 中世以降の遺構と遺物

今回の発掘調査の結果、室町時代の集石土壙が2基発見され、外に溝状遺構がみられた。

〈1号集石土壙〉(第130・131図)

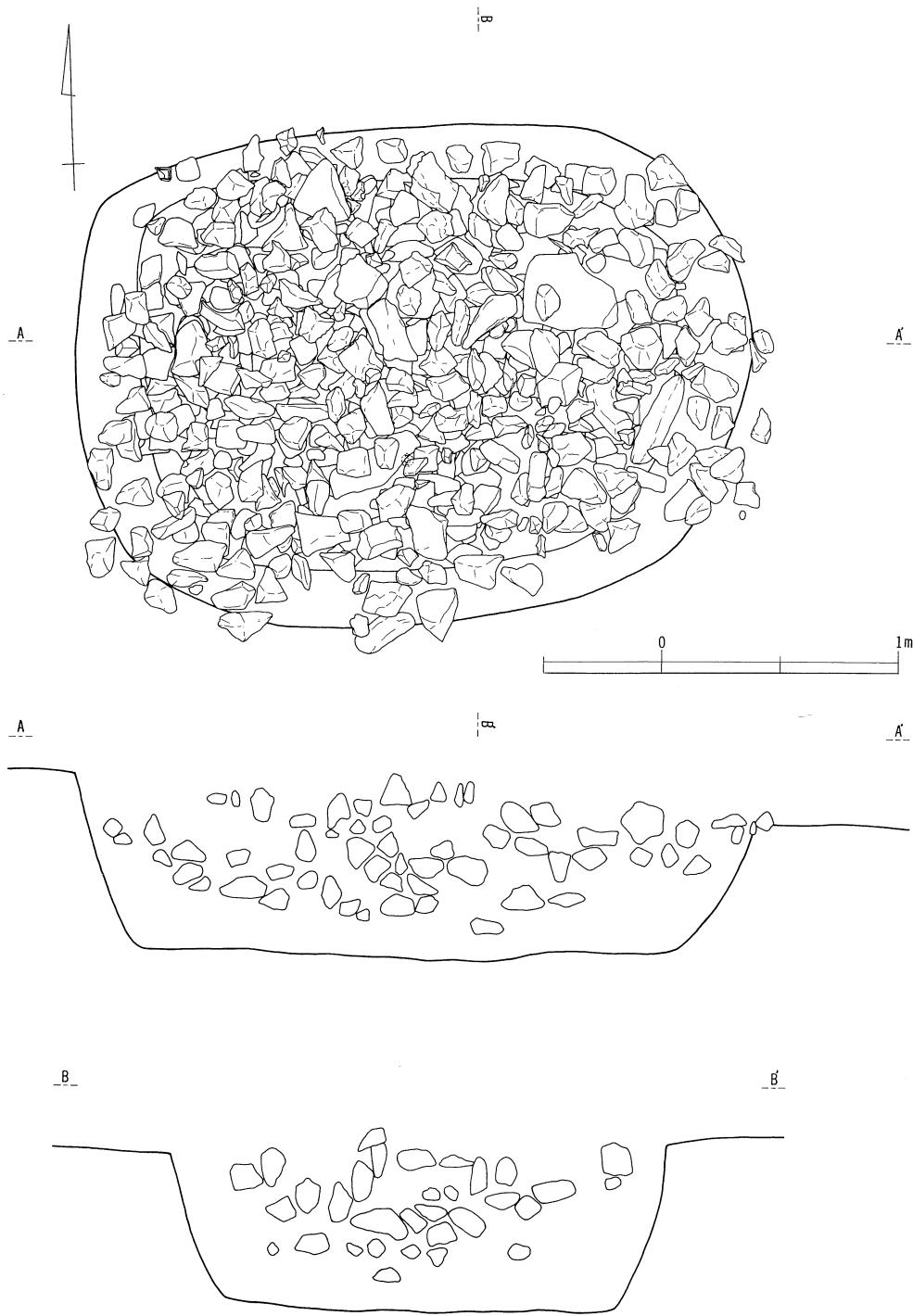
[遺構]

調査区東半部北側東辺の4-M域に位置する。排土作業に際して、石が多く検出されたので平面図を取りながら掘り下げを行った。規模は東西約2.9m、南北約2.1mで、57号住居址の西壁を切って構築される。平面形は不整小判形を呈する。遺構確認面からの深さは、約70cmを測る。壁はやや外側へ湾曲し外傾しながら立ち上がる。壙底は比較的平坦であったが、堅緻ではなかった。石は壙内中央部に厚く堆積しており、大きさは長さ約20cm前後のものが主となっている。底面から約15cm浮上し、壙内中央付近に焼土が直径約50cmの範囲に検出された。長軸の方向は、略東西を示す。

[遺物]

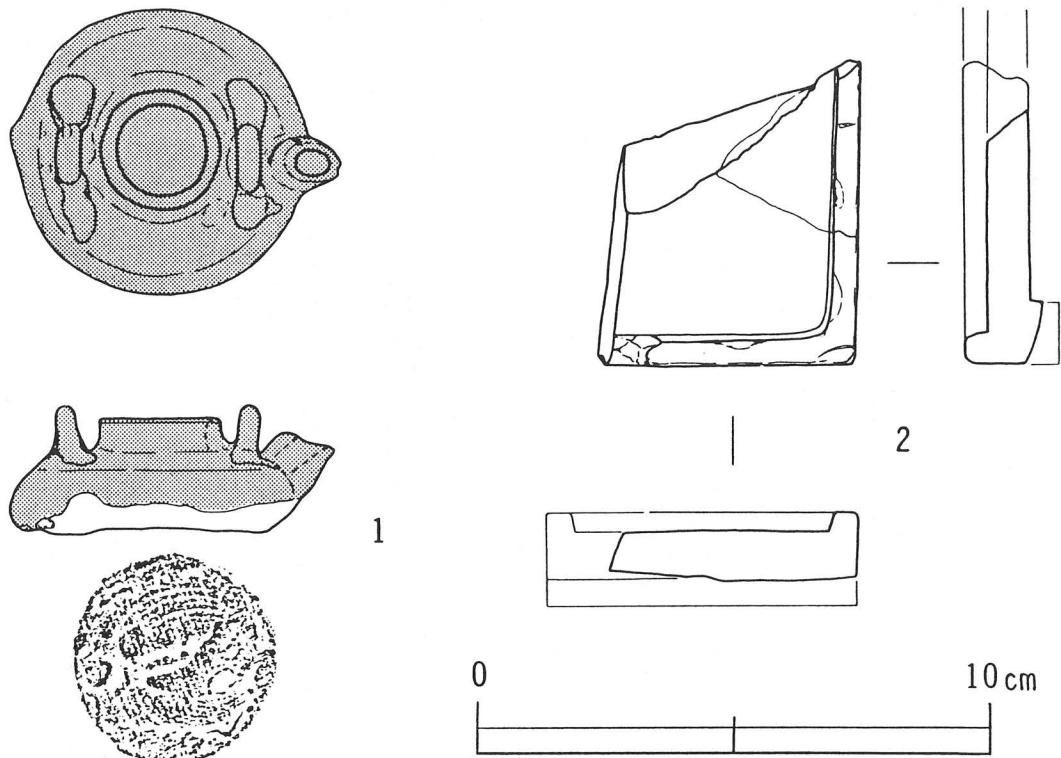
壙内中央南側に底面から約15cm浮上して水滴が、北西側壙縁に硯片が出土。

1. 水滴 口径約2.3cm・底径約4cm・器高約2.5cm。完形品。胴部は偏平で、略中位に稜を持つ。小さく直立する口縁部の外側に一対の擬似把手が付けられ、片側に注口が付く。底部は



第130図 1号集石土壙 (1/30)

回転の糸切り痕がみられる。鉄釉は胴部上半から口縁部に施され、胴部下半から底部にかけては渋薬が施されている。底部には、焼成時に亀裂が入ったものか、補修の痕跡がみられる。時期的には、美濃窯の大窯II期の古手、16世紀第2四半紀前半と考えられる。



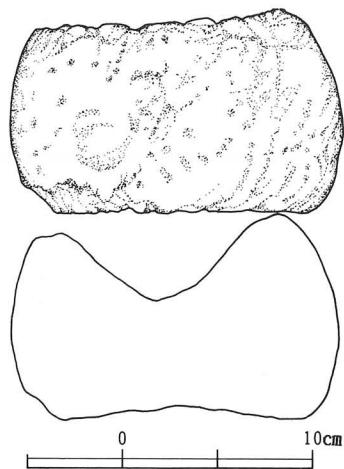
第131図 1号集石土壙出土遺物 (2/3)

2. 琥 方形琥の破片。石材は粘板岩。縁部は斜めには切れ込む。裏側には削り出しにより台を設けてあったと思われる。

〈2号集石土壙〉(第132・133図)

〔遺構〕

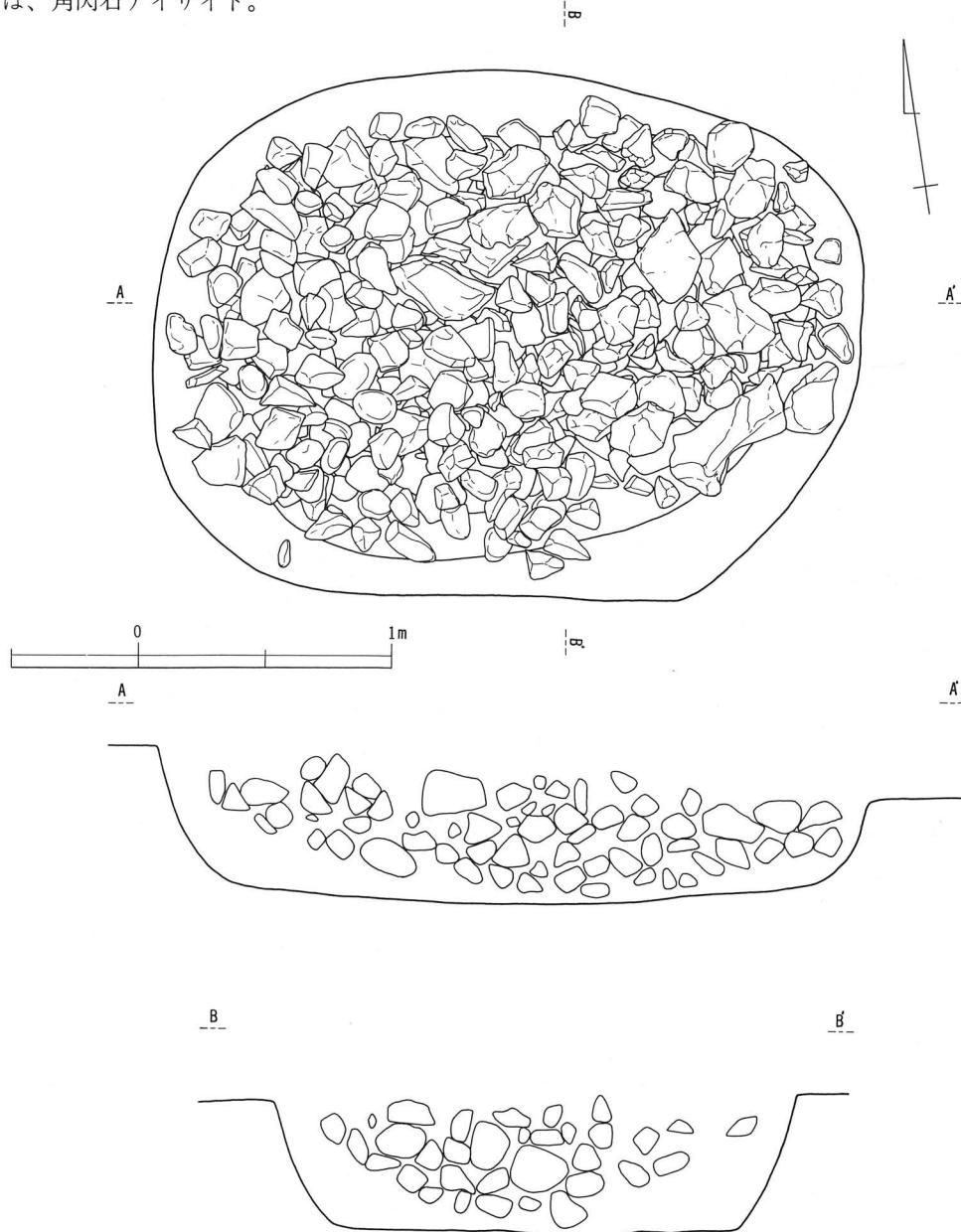
調査区東半部北側東辺の4-M域、1号集石土壙の北に位置する。排土作業に際して、石が多く検出されたので平面図を取りながら掘り下げを行った。規模は東西2.8m、南北2.1mで、57号住居址の西壁を切って構築される。平面形は不整小判形を呈する。遺構確認面からの深さは、約60cmを測る。壁は外湾しながら斜めに立ち上がる。壙底は比較的平坦であったが、堅緻ではなかった。石は壙内中央に厚く密集して堆積しており、上層には大型の石が若干あり、平均的に長さ約10~20cm前後のものが主体となっている。本土壙からは1号集石土壙のように焼土は検出されなかった。長軸の方向は、N-78°-Wを示す。



第133図 2号集石土壙出土遺物 (1/4)

〔遺物〕

集石にまじって、水輪が出土した。最大径17.5cm・高さ10.5cmを測り、中央が凹んでいる。石材は、角閃石デイサイト。



第132図 2号集石土壤 (1/30)

〈溝状遺構〉(全体図参照)

9号住居址を切って、東西に走る溝は、13-F域で北に直角に曲がり、13-L域で南に直角に曲がる。溝の断面はV字形を呈する。幅2m前後、底部幅約25cm、確認面からの深さ約1.8mを測る。出土遺物は少なく、中・近世以降の陶磁器片がみられた。本遺構の性格等は不明白。

第IV章 まとめ

第1節 古墳時代

1. 古墳時代前期の土器編年

今回の調査で発見された古墳時代の58軒の住居址から出土した土器は、多種多様のものがみられる。また、住居址同士の重複・切り合い関係が一部にみられ、58軒が同時に存在したとは考えられない。そこで、まず土器について器種分類を行い、次いでおおまかな時間的差異を概観してみたい。

(1) 器種分類

〈壺形土器〉

口縁部の文様及び形態に注目し分類を行い、原則として口縁部形態不明のものは分類から除外しておいた。

A類 折り返し口縁で、断面が四角形状を呈するもの。

A₁類…刷毛目・笠削り・撫で等が施される以外には文様をもたないもの。

A₂類…文様の施されるもの。

B類 折り返し口縁で、断面が三角形状を呈するもの。

B₁類…口縁部外側に凹線文・棒状浮文等の文様が付けられるもの。

B₂類…口縁部外側に刻目風に斜位の短い沈線がめぐり、内側に縄文の施されるもの。

C類 複合口縁のもの。

C₁類…幅広の複合口縁外側に棒状浮文が付けられるもの。

C₂類…口縁部外側に平行沈線を垂下させるもの。

C₃類…無文のもの。

D類 口縁部に段を有する二重口縁のもの。

D₁類…口縁部外側上下二段に櫛歯状工具等により、列点状の刺突・刻目がめぐるもの。

D₂類…無文のもの。

E類 口縁部が外反する単純口縁のもの。

E₁類…口唇部が幅をもち、櫛歯状工具等により列点状の刺突がめぐるもの。

E₂類…刷毛目や笠削り・磨き・撫で等の整形以外に文様をもたないもの。

F類 球形乃至偏平な球形の胴部で、頸部から直線的にあるいは内湾気味に外反する口縁部をもつもの。丸底、凹底、平底気味のものがみられる。

G類 口縁部は斜めに直に広がり、端に刻目がめぐり、頸部に凸帯をもつもの。

H類 受け口状の口縁部で外側に棒状浮文のつくもの。

I類 外面頸部付近に凸帯がめぐり、胴部に刷毛目痕のある短頸壺状のもの。

J類 大型の壺。(第60図1・第97図1)

〈甕形土器〉

脚台部の付く台付甕と、付かない甕とに分けた。底部形態の判然としないものも甕とした。

台付甕

A類 口縁部に刷毛目状工具・籠状工具等による刻目がめぐり、器外面に刷毛目整形が施されるもの。

B類 単純口縁で、籠削り、撫で整形等が施されるもの。刷毛目痕が若干みられるものもある。口縁部が大きく広がるものと、そうでないものとがみられる。

C類 単純口縁で、器面に刷毛目整形が施されるもの。

D類 一般的に言うところのS字状口縁台付甕。大きいもの、小さいものがある。

D₁類…口縁部に櫛歯状工具による刺突がめぐるもの。

D₂類…肩部に横走する平行沈線がめぐるもので、頸部内面に刷毛目痕がみられるもの。

D₃類…肩部に横走する平行沈線がめぐるもので、頸部内面に刷毛目痕のないもの。

D₄類…肩部の横走する平行沈線が施されないもの。

D₅類…直立気味の口縁部で、胴部外面は撫で乃至刷毛目整形により仕上げられるもの。小型である。

E類 単純口縁で、外面に櫛歯状工具による波状文が施されるもの。

甕

A類 単純口縁で、器面に刷毛目整形が施されるもので、小さな平底から鉢状に外反気味に広がり、頸部にかけて球胴となるもの。

A₁類…比較的鋭く屈折する頸部で、外反する口縁部のもの。外面に粗い刷毛目整形が行われる。

A₂類…口縁部は短く外反し、端部が面取りされるもの。内外面ともに刷毛目が顯著。

B類 口縁部に櫛歯・刷毛・籠状工具による刻目がめぐるもの。器面は刷毛目・削り・撫で等の整形が施される。

B₁類…頸部は「く」の字形状に外反し、球胴乃至球状にふくらむ胴部のもの。

B₂類…頸部は「く」の字形状に外反し、長胴化する胴部のもの。

B₃類…頸部の外反が緩やかなもの。

C類 単純口縁で、器面は刷毛目・削り・撫で等の整形が施されるもの。

C₁類…頸部は「く」の字形状に外反し、球胴乃至球状にふくらむ胴部のもの。

C₂類…頸部は「く」の字形状に外反し、C₁類のような球胴状のものでないもの。

C₃類…頸部の外反が緩やかなもの。

D類 折り返し口縁のもの。大型である。

E類 口縁部が内湾しながら外反するもの。長胴化した胴部外面に刷毛目整形が施される。

F類 頸部から短く外反し、直立する比較的幅をもった口縁部のもの。

G類 頸部が鋭く屈折し、直線的に斜めに立ち上がる幅広の口縁部をもつもの。外面胴部は刷毛目整形が施される。

〈小型壺形土器〉

器高10cm前後の小型品。

A類 口縁部は外反し、頸部は「く」の字形状に括れる球胴の小型壺形土器。円形貼付文のつくもの。

B類 下ぶくれの胴部と外反する口縁部のもの。

C類 頸部が外湾しながら立ち上がる口縁部の広いもの。平底のものと、底部端がつまみ出される高台風の底になっているものがある。

D類 直立気味の短い口縁で球胴のもの。

E類 複合口縁で装飾のつくもの。

〈小型甕形土器〉

器高10cm前後で、口縁部は外反し、刷毛目・撫でによる整形が行われるもの。

〈高坏形土器〉

A類 大型の深みのある坏部で、丸みをもって立ち上がり、外反する口縁部をもつもの。

B類 坏部下端に稜をもつもの。脚部は喇叭状に広がり、円孔を有する。比較的大型である。

C類 坏部は内湾しながら広がり、下端に稜がつくられないもの。比較的大型である。

D類 坏部が内湾しながら立ち上がる半月形のもので、比較的小さなもの。

E類 坏部が塊形で、脚部の開きが大きく、裾部が広がり坏部よりも大きいもの。

F類 坏部及び脚部が比較的直線的に開くもの。坏部に刷毛目痕がみられる。

G類 坏部下端に稜があり、そこから直線的に広がるもので、坏部と脚部の間が柱状になっているもの。

H類 坏部下端に段を有し、脚部が円筒状で裾部で屈曲して開くもの。

これらは、坏部の形態を中心に分類したが、坏部形態の不明なもので特徴的な脚部として、坏部接点から徐々に開き裾部で外湾するもの（第84図12）、外面丹彩され坏部接点から直線的に開き裾部で外反するもの（第75図4）、坏部底部から外反しながら開くもの（第30図1）、円筒状のもの（第116図4）などがみられる。

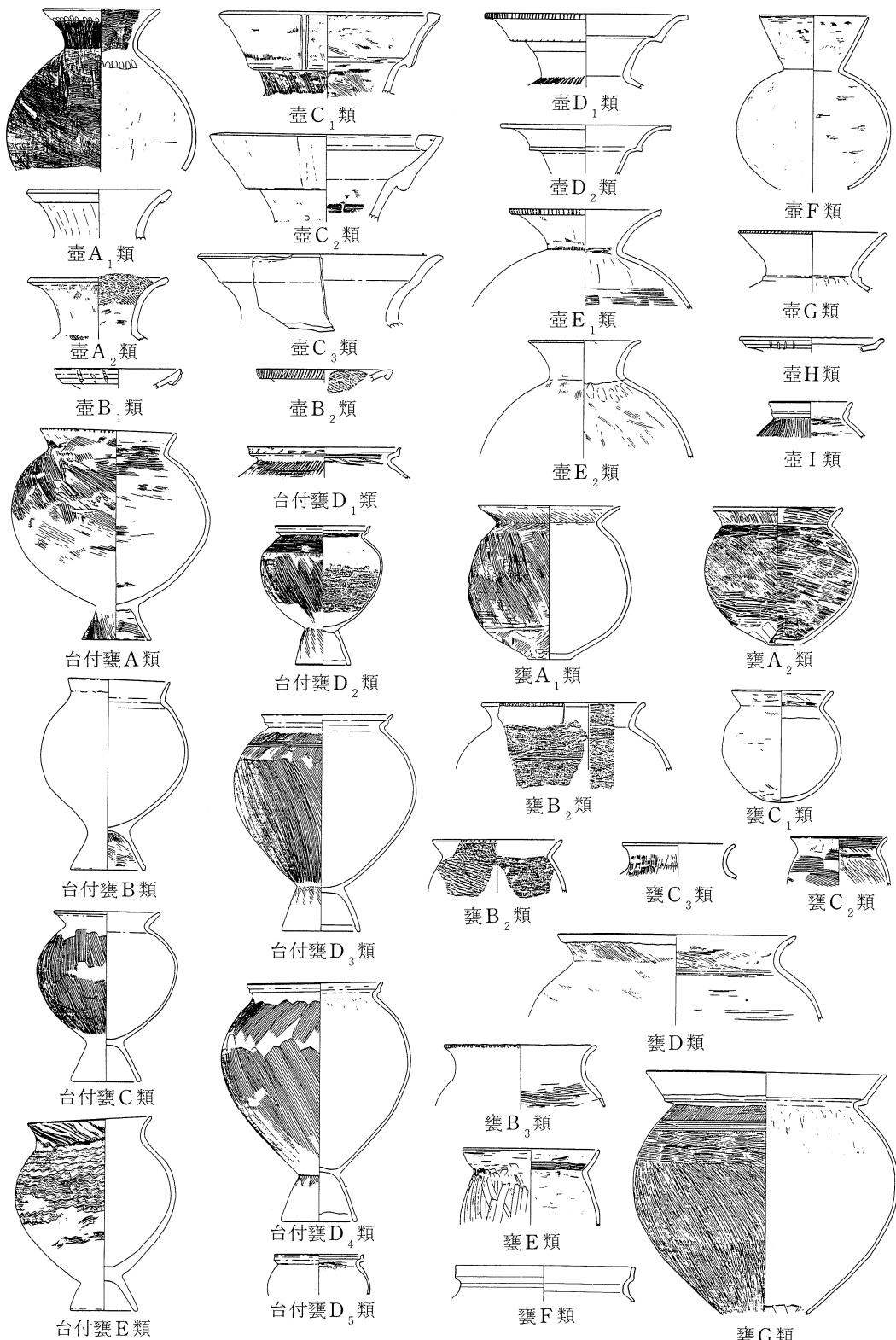
〈器台形土器〉

A類 円孔が多数穿たれる、いわゆる装飾器台。

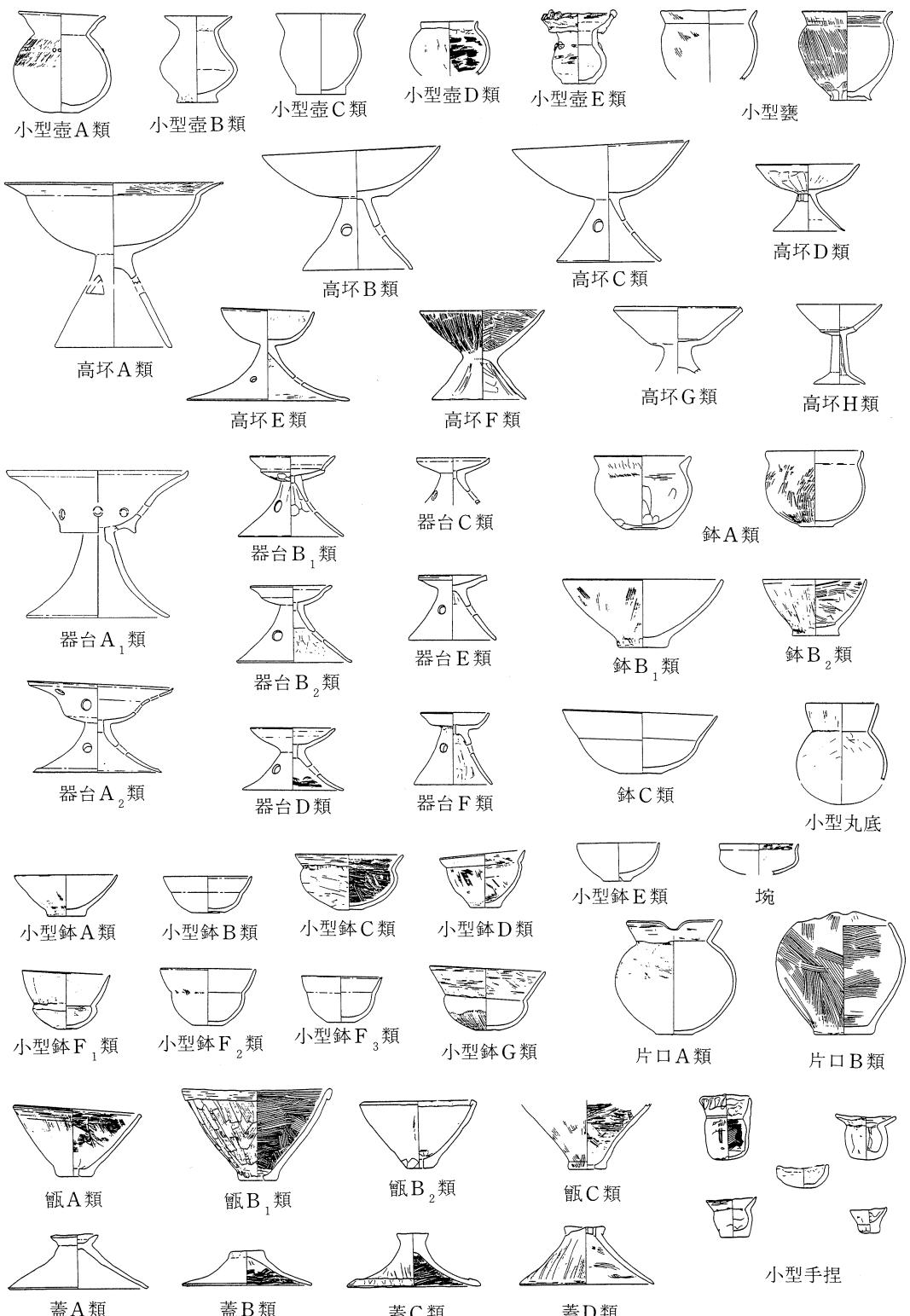
A₁類…器受部下端が凸帯となって稜をもつもの。

A₂類…器受部下端は断面隅円形で、口縁部は大きく外反して開く。

B類 器受下半が稜をなし、口縁部が外反して開くもの。ほとんどが器受部底に円孔がある



第134図 土器分類図1



第135図 土器分類図2

が、あかない例もある。

B₁類…稜が明瞭で有段となるもの。

B₂類…やや明瞭さに欠けるもの。

C類 器受部は直線的乃至内湾状に広がり、口縁部が直立気味に立ち上がるもの。

D類 器受部が浅く皿状のもの。器受部底に円孔のあるものと、ないものがある。

E類 器受部が直線的に開くもの。端部が面取りされる。

F類 下端に稜をもち、内湾気味の器受部のもの。

〈鉢形土器〉

A類 頸部で括れ、口縁部が外反するもの。器面は刷毛目・撫で・削り等の整形が施される。

口縁部が内湾しながら外反するものも含めた。

B類 底部から直線的乃至内湾して開く浅鉢形のもの。

B₁類…底部に比して口径が広く、身の浅くみえるもの。

B₂類…身の深いもの。高台風のつまみ出しを底部に有するものもある。

C類 器体部は底部から丸味をもって立ち上がり、中位で一寸括れて大きく開くもの。

〈小型鉢形土器〉

A類 底部から直線的乃至内湾して開く浅鉢形のもの。高台風のつまみだしが底部につくものもある。

B類 底部から丸味をもって立ち上がり、中位で一寸括れて大きく開くもの。

C類 頸部で括れ、肩部を有し、口縁部が短く外反するもの。

D類 頸部で括れ、短く外反する折り返し口縁部をもつもの。

E類 底部から体部口縁部にかけて丸味をもって立ち上がる塊状のもの。凹底が主体であるが、そうでないものも含めた。

F類 頸部で括れ、内湾しながら外反する口縁部のもの。

F₁類…やや内湾しながら開く口縁部の深いもの。肩部に稜をもつ。

F₂類…口縁部の比較的長いもので、口径の広がるもの。

F₃類…短い口縁部のもの。

G類 断面逆蒲鉾状の胴部で、頸部が括れて口縁部は直線的に大きく開くもの。

〈小型丸底土器〉

球胴で、頸部が括れ、緩く外反する口縁部のもの。

〈塊形土器〉

比較的浅い身で、口縁部の外反するもの。

〈飴型土器〉

鉢状の形態を呈し、底部に単孔があくもの。それぞれ刷毛目痕のあるものとないものがある。

A類 単純口縁で、鉢状の形態を呈するもの。

B類 折り返し口縁で、鉢状の形態を呈するもの。

B₁類…外側に折り返される口縁部のもの。

B₂類…内側に折り返され、凸帶風にめぐるもの。

C類 口縁部形態不明のもの。

〈蓋形土器〉

A類 「八」の字形狀に先端へ広がるもの。つまみ部が短く外反する。

B類 つまみ部が単純で、蓋部が「八」の字形狀に広がるもの。器高の低いもの、高いものがある。

C類 「八」の字形狀に広がる端部が折り返されるもの。

D類 つまみ部に小孔が穿たれるもの。

〈片口形土器〉

A類 壺形を呈するもの。

B類 鉢形を呈するもの。

〈小型手捏ね土器〉

手捏ねによってつくられる小型の土器。

(2) 各住居址の器種構成

住居址別器種構成一覧参照

(3) 土器変遷

比較的形態変化の追いややすいS字状口縁台付甕の変化を基軸に、土器群の時間的変遷をみてみよう。ここでは各器種にわたりまとまった土器資料を出土した住居址のものを、一つの組成としてとらえ、また、同類のS字状口縁台付甕を出土しているものを一群として考えることとした。

I期 57号住居址のものをあてる。

台付甕D₁・D₅類が出土しており、破片が大部分であるが、その他壺D類、甕B類、鉢D類、小型丸底土器、蓋などで構成される。

台付甕D₁類は、S字状口縁台付甕の中でも最も古い段階に位置づけられるものである。このD₁類は、県内では三珠町一城林遺跡、塩山市西田遺跡などで、僅かに確認されるのみで、本県における当該時期での煮沸形態の主体は、単純口縁乃至口縁部に刻目のめぐる刷毛目整形の台付甕で、まだS字状口縁台付甕は客体であったとされる。本遺跡の中でも、S字状口縁台付甕を併出せず、壺A・C₁・E₂類、台付甕A類、高坏A類、甑、片口土器などで構成される51号住居址のような方は、その例と考えられるので、大きな幅をもたせてI期の中に入れておくこととする。

II期 6・7・28・32・39・51・55号住居址のものをあてる。

壺A・C・D・E・F・H・J類、台付甕A・C・D・E類、甕A・B・C・D・G、高坏

B・D・E・F類、器台A・B・C・D類、鉢B・C・D類、小型鉢A・E・F・G類、甌、蓋、小型手捏ね土器などで構成され、I期と大きな較差がみられる。

本期では、台付甌A類は明瞭ではなくて減少～消滅傾向にあるといえ、S字状口縁台付甌のD₂・D₃類が出現し、甌の中でも主流を占めるようになる。D₂・D₃類は、肩部に横走する平行沈線がめぐるもので、頸部内面に刷毛目痕のあるものと、ないもので分類したが、通説的にはS字状口縁台付甌は、口縁端部が尖るもの（口縁部屈曲が鋭く内側に平坦面をつくりだす）と、丸味をもつもの（口縁部の屈曲がS字となる）とに分かたれ、前者から後者への時間的推移が考えられている。また、これに付随して、頸部内面の刷毛目痕の消滅、肩部の平行沈線の減少傾向がとらえられている。これによれば、本期D類の台付甌はそれぞれの特徴をあらわしているものがあり、新旧の二時期に分けることが可能と考えられる。甌A類は、胴部外面上半の頸部下は横位、中間は細かい斜位、下半は底部を中心に巴状に刷毛目整形が施されるもので、叩目と刷毛目の整形の差はあるが、畿内第5様式～庄内式の形態に似ており、何らかの影響のもとに（在地で？）つくられたものであろう。

壺は、新たにF類が加わる。A類は、I期では口縁部外側に棒状貼付文がみられたが、無文様化する。壺の胴部は、下半から中位にかけて最大径をもつものとなっている。

さらに、特徴的なことは、I期では断片的でしかなかった小型高坏・器台・小型鉢などの、いわゆる小型精製土器群が増加することがあげられ、小型手捏ね土器も出現する。新出現の高坏B類は、東海地方西部の欠山式にその系譜が求められるものである。

III期 10・13・35・41・44号住居址のものをあてる。

壺C・D・F類、台付甌B・C・D類、甌C・D類、小型壺C・D・E類、小型甌、高坏A・C・D・E類、器台A・B・D類、鉢C類、小型鉢A・B・C・F・G類、塊、甌、蓋、小型手捏ね土器などで構成される。

台付甌は、B・C類もみられるが、D₄類が多用される。D₅類は消滅し、本時期ではみられない。D₄類は、II期D₃類にみられる肩部の横走する平行沈線が消失したものである。なお、II期とした39号住居址出土のS字状口縁台付甌は、肩部の横走する平行沈線を斜位の刷毛目が横切り消すような手法がとられており、D₃類からD₄類への過渡的な状態ととらえられる。台付甌A類は完全にみられなくなり、甌類の中では口縁部に刻目のめぐるもののが消滅するようである。

壺は、新たにE₁類が出現する。壺の胴部最大径は、中位乃至中位近くにあり球形化がすむ。折り返し口縁のA類は認められない。C類は本時期まで残るようである。

高坏は、II期に特徴的なB類がなくなり、C類が出現する。小型鉢は、頸部に括れを有するものが盛行する。

(4) 年代的位置付け

I期に特徴的な、S字状口縁台付甌の中でも古相を呈するD₁類は、東海地方西部の欠山式後半期段階から型式変化するもので、元屋敷式期に定型化する形態であり、南関東の前の町式新

段階、畿内の纏向1～2式に併行する。

II期のS字状口縁台付甕と櫛描波状文の台付甕の共伴例は、県内では垂崎市坂井南遺跡第1次調査4号住居址（台付甕D₃類と共に）、長坂町柳坪遺跡A区3号住居址（柳坪遺跡の櫛描波状文のものは底部を欠くが）出土品にみられ、長野県では長野市四ツ屋遺跡30号住居址・上山町御屋敷遺跡Y4号住居址等の土器で構成される箱清水式終末段階に見いだすことができる。台付甕D₂・D₃類は、大和地方では庄内式・布留式古相の土器に併出し、纏向3～4式に、東海地方西部では元屋敷段階に併行する。その他、甕G類は埼玉県美里町日の森遺跡1溝に類似したものがみられる。壺D₁類は、千葉県野田市三ツ堀遺跡第1号住居址・埼玉県東松山市五領遺跡第1号住居址出土の壺などに類例が求められる。

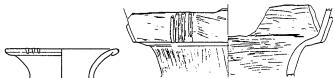
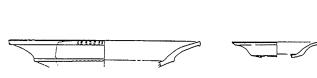
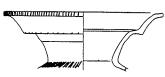
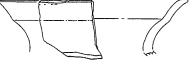
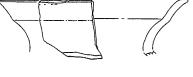
III期のS字状口縁台付甕D₄類は、大和地方の布留式新相、東海地方西部の元屋敷式の時期から石塚期に併行関係が求められよう。また、器台A類は、東海地方東部大廓式に比定される静岡県富士市三新田遺跡出土のものに類似したものがみられる。高坏A類の中でも脚部に三角形状の透孔を有する特徴的なものは、外反する口縁部に小突起が付く形態と合わせて、東・北信地方の赤色研磨される吉田・箱清水式の高坏に系譜が求められると考える。

さて、本県における古墳時代前期の土器様相の変化については、中山誠二氏の論考（「甲府盆地における古墳出現期の土器様相」『山梨考古学論集』I）があり、S字状口縁台付甕の変化を主体に、弥生時代後期後半から古墳時代前期をI～IV期に大別して住吉式・六科丘式・京原式・西田式の様式設定を行っている。様式の詳細は論文に譲り、ここで本遺跡の編年区分との併行関係を求めるに、I期は六科丘式の範疇、II期は京原式に、III期は西田I式におおむねあたるものと思われる。

2. 住居址について

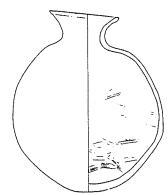
遺構としては58軒の竪穴式住居址2基の土壙が検出されたが、竪穴式住居址をみてみよう。58軒の各竪穴式住居址は、略小判形・隅円長方形・隅円方形の平面形態に大体分けられる。その規模は、最大は一辻9m前後のものから最小は一辻4m前後のものまであり、一辻5m前後のものが平均的である。炉は地床炉が主体で、中には土器埋設炉が何例かある。また、県内では他に類例のない特異なものとして、41号住居址に、粘土（？）を使用して片側に枕状のたかまりをもつ一種の皿状の炉の施設がみられる。柱穴は4本主柱穴を中心とする。他に内部施設として、土手状のたかまりをめぐらす穴をもつものは、5・6・17・18・27・33・36・40・45・47号住居址の10軒、単に貯蔵穴と思われる穴を有するものが、3・7・10・11・12・23・32・35・37・41号住居址の10軒がある。周溝をめぐらす竪穴式住居址も若干ある。主軸の方向もある程度まとまりがあるものと思われるが、上記の特徴及び前述の編年観に基づき各竪穴式住居址を詳細に検討し、住居址ごとのまとまりを明らかにし、集落址として考えていかねばならないが、編年試案を含め、時期別による住居址及び住居群のあり方、集落の構成・復原等の問題は、今後の課題としておこう。

坂井南遺跡土器編年試案図表（1-1）

器種	A	C	D
期	A	C	D
I 期			
II 期			
			
			

壺

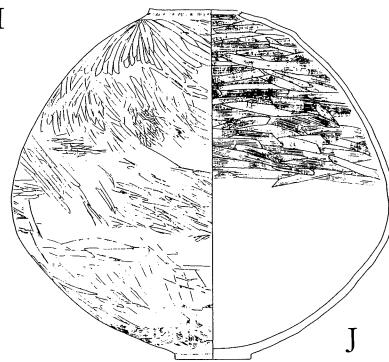
E



F

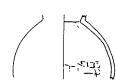
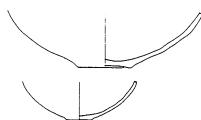
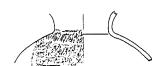
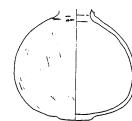
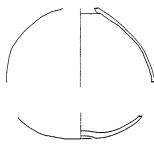
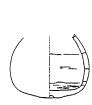
G

H

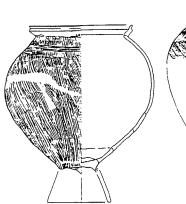
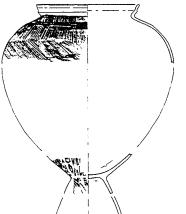
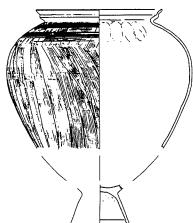


J

K



坂井南遺跡土器編年試案図表（1-2）

器種	台付 襲				
期	A	B	C	D	E
I 期					
					
II 期					
					
					
					
					
					
					

甕

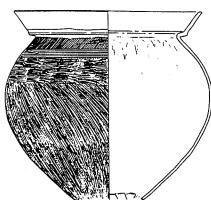
A

B

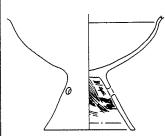
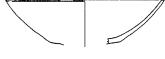
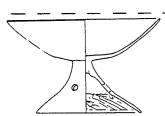
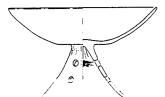
C

D

G



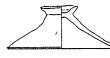
坂井南遺跡土器編年試案図表（1－3）

器種 期	小 型 壺	小 型 蓋	A	B	C	D	高 坏
I 期							
							
II 期							
							

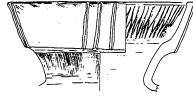
		器 台			
E	F	A	B	C	D
		△△			△△
		△△	△△		
	△△			△△	△△
	△△		△△	△△	△△
			△△	△△	
	△△				
		△△		△△	△△

坂井南遺跡土器編年試案図表（1－4）

器種 期	鉢			小 型 鉢				
	B	C	D	A	B	C	E	F
I 期								
II 期								

G	小 型 丸 底	塊	甑	蓋	片 口	小 型 手 捏
						
						
						

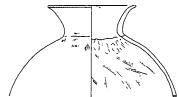
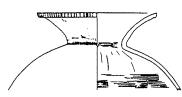
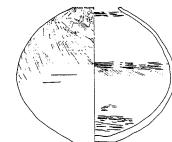
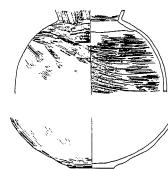
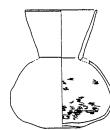
坂井南遺跡土器編年試案図表（2－1）

器種 期	A	C	D	
II 期				
III 期				
				

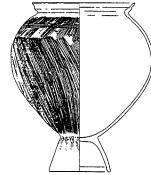
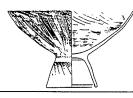
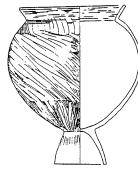
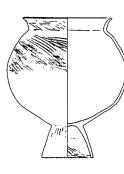
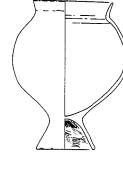
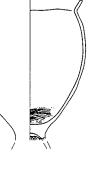
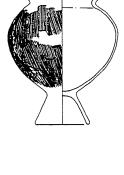
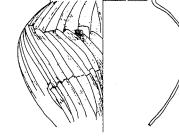
壺

E

F



坂井南遺跡土器編年試案図表（2－2）

器種	台付甕				
	A	B	C	D	E
II 期					
III 期					
					
					

甕

A

B

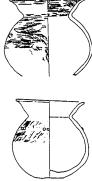
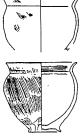
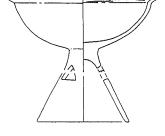
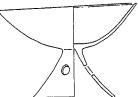
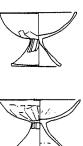
C

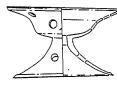
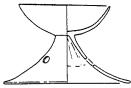
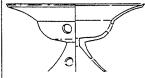
D

G



坂井南遺跡土器編年試案図表（2-3）

器種 期	小型壺			高環			
	C	D	E	A	B	C	D
II 期							
III 期							

		器台			
E	F	A	B	C	D
					
					
					
					
					
					

坂井南遺跡土器編年試案図表（2-4）

器種 期	鉢			小型鉢				
	B	C	D	A	B	C	E	F
II 期								
III 期								

G	小 型 丸 底	塊	甑	蓋	片 口	小 型 手 捏
						
						
						
						
						

3. 坂井南遺跡出土の編石について

(1) はじめに

石器の石材がどこで産したかを推定するには、その石器の特性と石材の産地の岩石の特性とを比較する方法があり、同じ性質を有する岩石の分布地域が産地として最も可能性が高いと推定される。この方法において岩石学的手法や化学的手法などが用いられている。岩石は露出地域ばかりに存在するのではなく、下流域の河川・扇状地・沖積平野などに堆積物として存在する場合があることから広がりをもった地域を考える必要がある。

坂井南遺跡は、韮崎岩屑流堆積物の厚い堆積で構成される韮崎台地上に位置する縄文～平安時代の遺跡である。本遺跡の古墳時代住居址から考古学上編石とされている柱状の石器が出土した。これらの編石の粒径・形状・岩石種組成について検討し、さらに河川堆積物および韮崎岩屑流堆積物中の礫との比較をおこない、編石の由来を考察した。

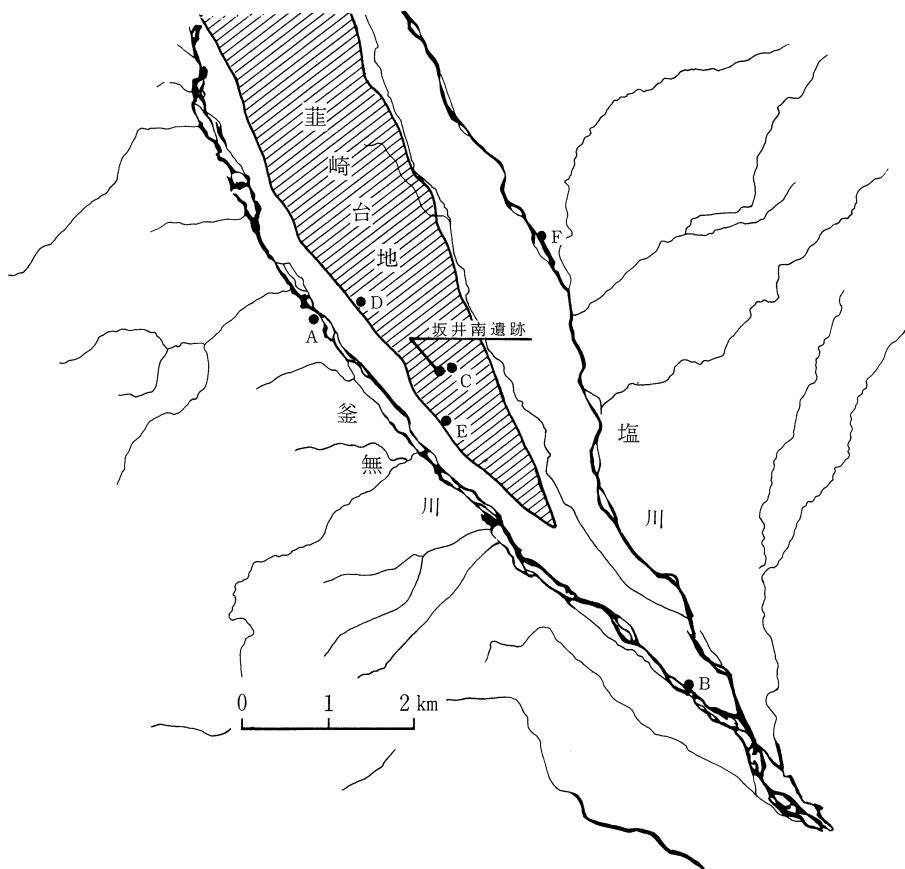
(2) 地質的・地形的環境の概要

坂井南遺跡の立地する韮崎台地は、東方の黒富士・茅ヶ岳と関東山地、および西方の赤石山地に囲まれた南北性の凹地に、釜無川と塩川とにはさまれて位置している。現河床から約70～150mの比高をもつ韮崎台地は、韮崎岩屑流(三村ほか、1982)の堆積物から構成され、その上位には砂礫層、さらに御岳第一軽石(Pm-1)を下部に挟在する褐色風化火山灰が堆積している(甲府盆地第四紀研究グループ、1969)。韮崎岩屑流は、中期更新世に八ヶ岳火山の山体崩壊によって流出した流れ山をともなった大規模の岩屑流である。韮崎岩屑流堆積物の構成岩石は安山岩・安山岩質火砕岩類を主体とし、そのほか流下時にまきこんだ河川堆積物を混入する。

釜無川流域には、第四紀の八ヶ岳火山岩類、第三紀の堆積岩および緑色化変質を受けた火山岩類からなる巨摩層群、鳳凰・甲斐駒ヶ岳カコウ岩類、糸魚川-静岡線の西側には四万十帯の堆積岩類が広く分布している。塩川流域では、八ヶ岳の火山岩類、鮮新世～更新世の安山岩質火山岩類、黒富士火山のデイサイト質火山噴出岩類、茅ヶ岳火山の安山岩類、金峰山・瑞牆山付近のカコウ岩類、須玉町斑山付近の砂岩・粘板岩などからなる四万十帯の堆積岩が分布している。

(3) 試料および分析方法

試料とした編石は、住居址内でまとまりをもって出土している28号住・29号住・47号住の遺物に限定した。これらの編石は未加工のものが多く、礫として自然に存在していた岩石がそのまま使用された可能性が高いと推定される。そこで対照試料として現在の河川堆積物および韮崎岩屑流堆積物中の礫を選んだ(第I図)。A・B・F地点は、河床において最大径が人頭大以下の礫が分布する任意の場所で縦50cm×横50cm×深さ約12cmの堆積物を掘りあげ試料とした。C地点は韮崎台地上の耕作地における表採試料で16mm以上と目測される礫を無作為に採取した。C・D地点は韮崎岩屑流堆積物が固結しているため礫をとりだすことは困難なので、露頭断面において1m×1mの正方形の領域を任意に設定し領域内に存在する16mm以上のすべての礫に



第 I 図 遺跡・試料採取地点

について岩石種構成を測定した。

岩石の観察は肉眼およびルーペによっておこなった。

粒度分析の測定には、それぞれ 256mm (-8ϕ) *¹、 128mm (-7ϕ)、 64mm (-6ϕ)、 32mm (-5ϕ)、 16mm (-4ϕ) の直径を有する円形孔のあいた篩をもちいた。形状を表わすのには、長径 a・中径 b・短径 c を計測し、ZINGG (1935) の方法(碎屑性堆積物研究会, 1983)で表示した。なお、長径 a は礫の最大を示す径、中径 b は長径 a に直交する方向の軸のうち最大のもの、および短径 c は長径 a・中径 b に直交する軸のうち最大のものである。

(4) 分析結果

各地点の礫種組成を第II図に示す。また一部の地点での粒度分布および礫の形状とをそれぞれ第III図、第IV図に示す。各地点ごとに礫の特徴について述べる。

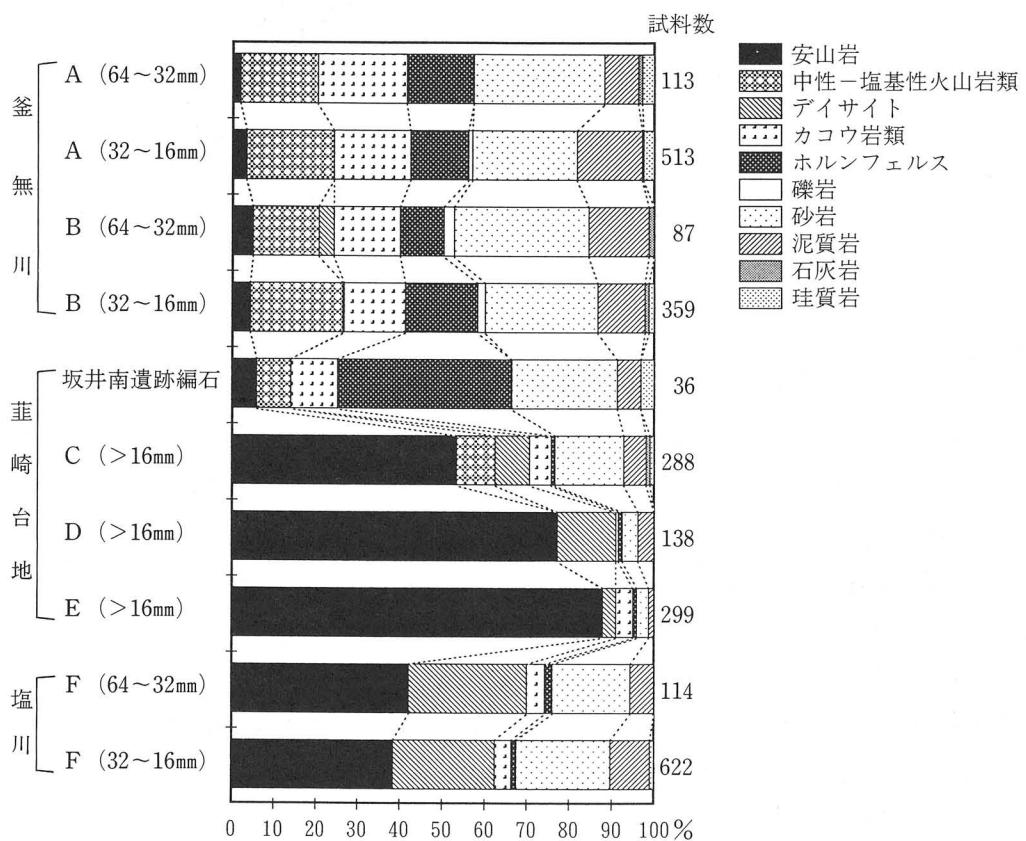
坂井南遺跡編石

粒度分布は $128\sim32\text{mm}$ ($-7\sim-5\phi$) に集中する。ただし長径は $93\sim203\text{mm}$ の範囲を示す。29

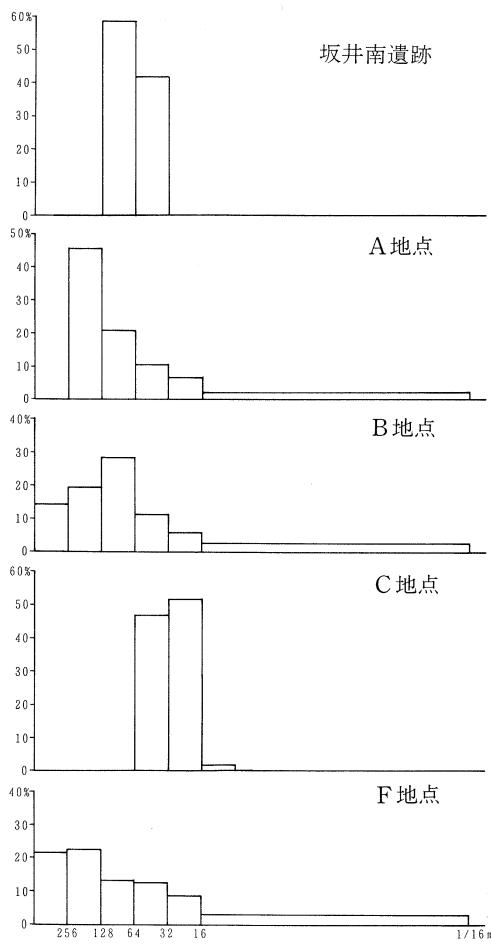
号住出土の編石は粒径および長径の長さにおいて28・47号住よりも小さい。形状は、c/aが0.50~1.00、b/aが0.33~0.58の棒状~小判状の限られた領域に集中がみられる。28号住の編石は棒状領域に多く、29号住の編石は小判状領域に多い傾向がみられる。全体に亜円礫程度の円磨度を示す。礫種組成は砂岩泥岩互層起源の暗赤紫~赤黒色ホルンフェルスが42%と優占し、次いで砂岩(25%)・カコウ岩類(11%)・綠色化した中性~塩基性火山岩類(8%)・安山岩(6%)が続く。ほかにデイサイト・泥質岩・珪質岩がわずかに検出された。すべての住居址でホルンフェルスの占める割合が高い。そのほかでは、29号住で砂岩が多く、28号住では綠色化した中性~塩基性火山岩類とカコウ岩が多い傾向がみられる。

A 地点

韮崎市桐沢橋下流約50m、右岸より約50mの地点で採取した釜無川の河川堆積物である。採取地点から約400m上流において第三紀層を流域に持つ桐沢川が釜無川に合流する。試料の粒径分布は256~128mm(-8~-7φ)にモードをもつ。形状は、球状・円盤状・棒状・小判状と広範囲に分散する。32~16mmにおける礫種組成は、砂岩(25%)・綠色化した中性~塩基性火山岩類(21%)・カコウ岩類(18%)・泥質岩(15%)・ホルンフェルス(14%)からおもに構成されるほか、安山岩・デイサイト・礫岩・石灰岩・珪質岩などがわずかに検出される。



第II図 磫種組成



第III図 粒径分布図

B地点

坂井南遺跡 茅崎市栄2丁目茅崎バイパス塩川大橋西端から約200m西方の釜無川河床の河川堆積物である。採取地点より約300~500m下流で塩川と釜無川とが合流する。粒径分布は128~64mm (-7~-6φ) にモードをもつ。形状はA地点と同様に、球状・円盤状・棒状・小判状の広範囲に分散する。32~16mmにおける礫種組成は、緑色化した中性一塩基性火山岩類(22%)・ホルンフェルス(17%)・カコウ岩類(15%)・泥質岩(11%)などからおもに構成される。そのほか安山岩・デイサイト・礫岩・石灰岩・珪質岩をわずかに含む。

C地点

茅崎市坂井地内で、坂井南遺跡の東側に隣接する台地上の桑畠として現在耕作されている部分で表採した。礫の粒径は64~32mm (-6~-4φ) に集中する。最大粒径は70mmである。礫種組成は、安山岩が54%と半分以上を占め、砂岩(16%)・緑色化した中性一塩基性火山岩類(9%)・デイサイト(8%)・カコウ岩類(5%)などがこれに続き、ホルンフェルス・石灰岩・珪質岩がわずかに検出される。

れる。

D地点

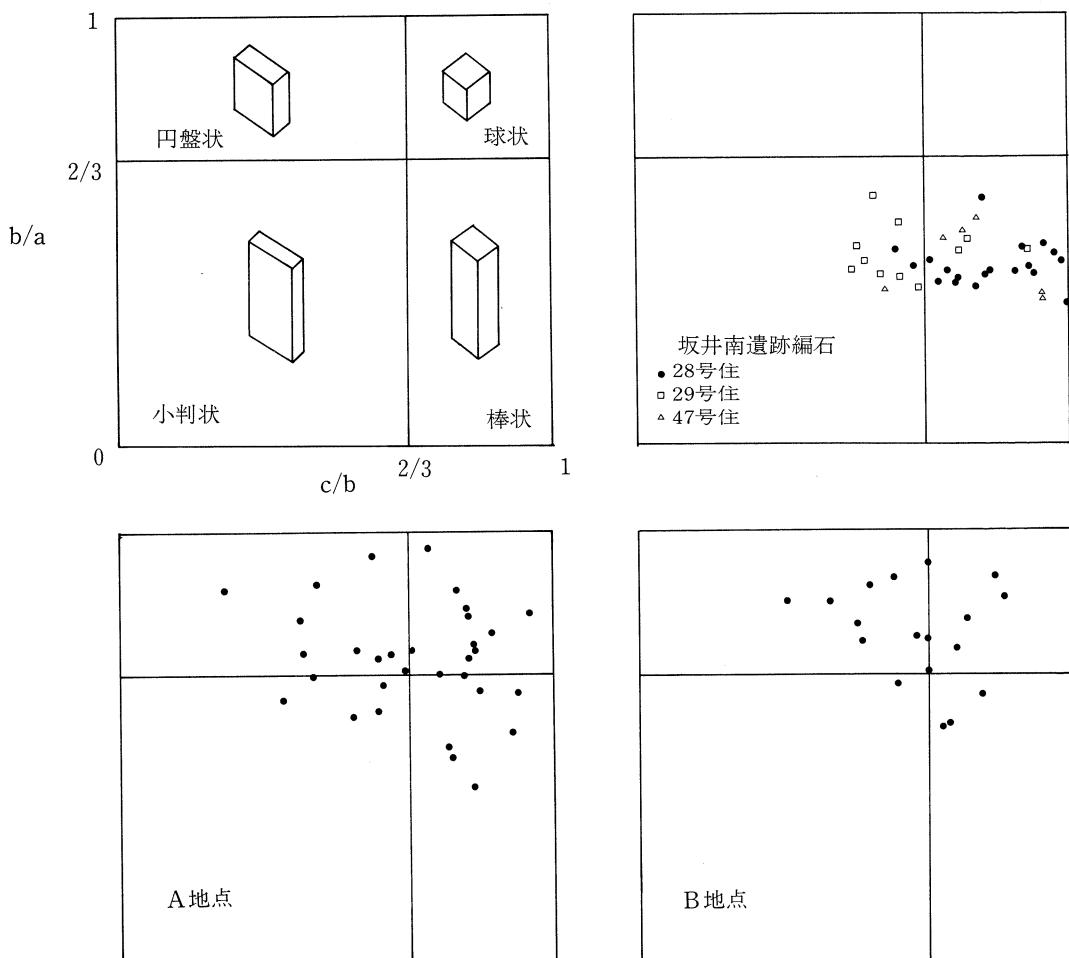
茅崎市祖母石から台地上の坂井にむかう崖線沿い切通し露頭断面での茅崎岩屑流堆積物である。分級中~不良、中礫ないし拳大の礫が多い。礫種組成は安山岩が78%と大部分を占め、デイサイト(14%)がこれに続き、砂岩(14%)・泥質岩(4%)・カコウ岩類・ホルンフェルスなどがわずかに検出された。

E地点

茅崎市一つ谷公民館東方から台地上に通じる道路の切通し露頭での茅崎岩屑流堆積物。最大粒径400mm、分級中~不良、中礫ないし拳大の礫が多い。角礫・亜角礫・亜円礫がみられる。礫種組成は安山岩が88%ときわめて多い。カコウ岩類・デイサイト・砂岩・泥質岩・ホルンフェルスなどがわずかに検出された。

F地点

茅崎市藤井町駒井にかかる駒井橋の上流約250m付近の塩川の河原で採取した。粒径分布は



第IV図 磯の形状分類 (ZINGG, 1935). a・b・cはそれぞれ長径・中径・短径を示す

256～128mm ($-8 \sim -7\phi$)にモードをもちながらかなピークを示す。32～16mmの磯種組成は安山岩(38%)、デイサイト(24%)、砂岩(22%)、および泥質岩(9%)から主としてなる。ほかにカコウ岩類・ホルンフェルス・磯岩・珪質岩がわずかに検出された。デイサイトが多く、ホルンフェルスが少なくかつ緑色化した中性一塩基性火山岩類が検出されないことが特徴である。

(5) 考 察

自然堆積物中の磯の形状および磯種組成から比較してみた本遺跡の編石の性格について以下に述べる。

自然の河川堆積物の磯の形状は球状・円盤状・棒状・小判状の領域に広く分布するのにたいし、遺物の編石は、小判状～棒状の限定された領域に集中する傾向が顕著に認められる。河川堆積物は1mを超えるような巨磯を含む複雑な粒径分布を示すので、今回サンプリングした局所的な河川堆積物試料と編石との粒径についての比較は意味をなさない。しかし編石の粒径分

布には集中が認められる。以上のことから編石が形状および大きさの点で選択的に採取された可能性が考えられる。

編石の礫種構成は、ホルンフェルス・砂岩の占有率が高いこと、カコウ岩類・綠色化した中性一塩基性火山岩類の共伴で特徴づけられる。垂崎台地を構成する垂崎岩屑流堆積物中にはC・D・E地点で見られるように八ヶ岳火山起源の安山岩類がきわめて多く含まれているが、遺物中には安山岩はまれであった。また垂崎岩屑流堆積物中にもホルンフェルス・砂岩・カコウ岩類・綠色化した中性一塩基性火山岩類などが存在する。これらの岩石は、垂崎岩屑流中に取りこまれた当時の谷の河川堆積物と考えられる。C地点の表採試料では、周辺に舗装道路・建築物などが存在することから表採された試料が必ずしも現地性の自然礫ばかりとはいえない。安山岩が多いことを除外した場合C地点の組成と編石の組成との間に類似性も存在するので、当時の人々が台地上で礫を收拾した可能性がないわけではないが、遺物中に最も占有率の高いホルンフェルスが台地上に少ないことからその可能性は低いと考えられる。

編石の石材の主な産地としては、礫種組成の類似性からみて釜無川の河川堆積物が可能性として最も高いと考えられる。釜無川のホルンフェルスは大武川上流などに広く分布する四万十帶の砂岩泥岩が甲斐駒ヶ岳・鳳凰山を形成している新第三紀カコウ岩類によって接触変成作用を受けたものである。源岩である砂岩・泥岩の組織を残している緻密で硬質な岩石である。河川堆積物中において柱状の形態を示すものが少なくない。また釜無川でみられる綠色化した中性一塩基性火山岩類は、新第三系の櫛形山層に由来する。

従って以上のことから、台地上に居住していた当時の人々が台地の下までおりて釜無川の河原で編石に適した自然石を選択して台地上に持ち上げ使用していたという彼らの生活行動の一部を想定することが可能であろう。

* 1 ϕ 値 = $-\log_2 d$ (d は粒子の大きさ mm)

(河西 学)

文 献

- 三村弘二・河内晋平・藤本丑雄・種市瑞穂・日向忠彦・市川重徳・小泉光昭 (1982) 自然残留磁気からみた垂崎岩屑流と流れ山. 地質学雑誌, 88, 653-663.
- 甲府盆地第四紀研究グループ (1969) 八ヶ岳南麓の地質. 地質学雑誌, 75, 401-416.
- 碎屑性堆積物研究会編 (1983) 堆積物の研究法—礫岩・砂岩・泥岩—. 地学団体研究会, 地学双書,

第2節 中世以降

中世以降の遺構は、集石土壙2基・溝状遺構1基となっている。溝状遺構については、仮に古墳時代の住居群を画する溝とも考えられるが、出土遺物は中世～近世の陶磁器の小破片ばかりであり、その性格等については不明としておく。

集石土壙からの出土遺物は、水滴・硯破片・五輪塔水輪と極僅かであるが、水滴からおよそ16世紀前半の年代観が得られる。この1号集石土壙から出土した水滴と硯の共伴例は、北巨摩郡長坂町小和田遺跡にみられ、小和田遺跡の場合硯に「木原新七郎」と刻銘があり、天目茶碗の伴出と合わせ、その所有がある程度権力を持った階層に限られる点から、概報中では天文元年(1532)の逸見勢が総領今井信元のもとに決起し武田信虎に抵抗しようとするがすぐに鎮圧されてしまう事件に関係のある豪族の可能性を示唆している。このことからすれば、本集石土壙は当時の豪族層と関わりのある墓の可能性が推察される。本遺跡周辺は逸見筋の一部にあたり、中世の頃には現在では知る由もない幻の豪族がいたのであろうか。



第136図 坂井南遺跡第I～III次調査全体図 (1/5000)

おわりに

今回の坂井南遺跡発掘調査では、58軒の古墳時代前期の竪穴式住居址が発見され、本地域には大集落が営まれていたことが明白となった。これら竪穴式住居址は、それぞれ時間的差を有し、いくつかの群をなすものと考えられるが、前述したように住居址の形態的特徴等の分析、編年試案の再考とともに今後の検討課題としておこう。また、第1・2次と今回の調査を合わせると、当該地域は方形周溝墓と住居址群を含む大規模な遺跡といえ、古墳時代前期社会の墓域と集落構造を理解する上で良好な史料となり得るものであると考える。(第136図 坂井南遺跡第I～III次調査全体図参照) しかしながら、今回の調査の成果については、限られた整理作業で、しかもまとめは少人数——ほぼひとりだけでの仕事であったため、遺構・遺物については十分な資料分析と検討が行えず、本報告書は発掘調査資料の掲載・提示に重点をおいてまとめたものとなっており、その点では不十分なものとなってしまった。反省すること頻りではあるが、本報告書が今後の調査・研究の一助となり、活用されれば望外の喜びである。

なお、昭和60年3月～8月の約半年間の発掘調査と、足かけ3年にわたる整理作業に際して、積極的に参加協力して下さった方々に厚くお礼を申し上げたい。特に、調査終了間際に不慮の事故に遭い2週間程休むことがあり、調査員の榎本勝氏をはじめ関係各位には大変御迷惑をおかけしたが、おかげ様で無事調査を終了することが出来た。心から感謝したい。また、調査及び整理作業の円滑な推進に当たり、東京エレクトロン株式会社山梨事業所秋山正氏の御理解と御協力に、衷心より謝意を表しお礼申し上げる次第である。

本報告書「まとめ」作成に当たり、文献・助言等でお世話になった中山誠二氏に、文末ではあるが記して感謝を申し上げたい。

参考文献

- 安達厚三・木下正史 「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌』60-4 日本考古学会 1974
- 上野純司 「南関東における古式土師式土器編年試論」『史館』第9号 史館同人 1977
- 大沢和夫他 『恒川遺跡群』 飯田市教育委員会 1986
- 大參義一 「弥生土器から土師器へ—東海西部の場合—」『名古屋大学文学部研究論集』47 名古屋大学文学部 1968
- 小出輝義 「弥生時代末期から古墳時代前期にかかる土器群の検討」『土曜考古』第11号 土曜考古研究会 1986
- 末木 健 「柳坪遺跡A地区」『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—北巨摩郡長坂・明野・韋崎地内—』 山梨県教育委員会 1975
- 末木 健・坂本美夫 「山梨県」『古墳時代土器の研究』 古墳時代土器研究会 1984
- 関根孝夫他 『六科丘遺跡』 櫛形町教育委員会・六科丘遺跡調査団 1985
- 中山誠二 「甲府盆地における古墳出現期の土器様相」『山梨考古学論集』I 山梨県考古学協会 1986
- 花岡 弘 「信濃の古式土師器—東海系土器群からみた弥生土器から土師器への変遷を中心として—」『信濃』31-4
- 比田井克仁 「古墳時代前期高坏考—南関東地方を理解するために—」『古代』74号 早稲田大学考古学会 1983
- 平林将信・志村 博 『三新田遺跡発掘調査報告書』 富士市教育委員会 1983
- 山崎金夫 『山梨県塩山市西田遺跡—第1次発掘調査報告書—』 山梨県教育委員会 1978
- 山下孝司他 『山梨県韋崎市坂井南遺跡』 韋崎市教育委員会 1984
- 米田明訓・保坂康夫 『山梨県韋崎市久保屋敷遺跡発掘調査報告書』 山梨県教育委員会 1984
- 静岡県考古学会シンポジウム6 『古墳時代の土師器』 静岡県考古学会 1985
- 第5回三県シンポジウム 『古墳出現期の地域性』 北武藏古代文化研究会・群馬県考古学談話会・千曲川水系古代文化研究所 1984
- 第3回東海埋蔵文化財研究会 『欠山式土器とその前後』 愛知考古学談話会 1986
" 『「欠山式土器とその前後」研究・報告編』 愛知考古学談話会 1987
- 岡本範之 『小和田遺跡発掘調査概報』 長坂町教育委員会 1984

図 版



坂井南遺跡遠景（上空より）



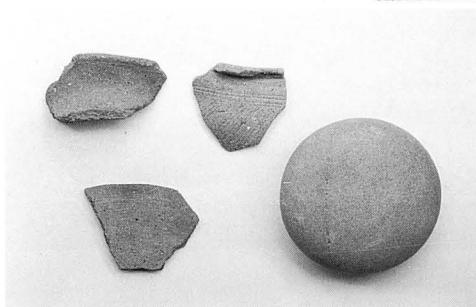
遺構近景



遺構検出状況（上空より）



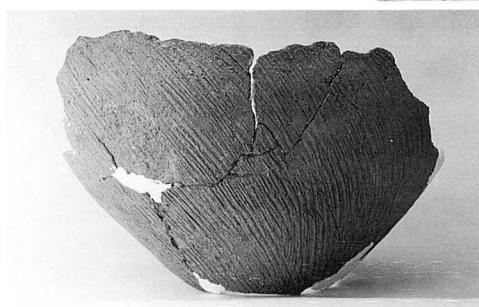
1号住居址



1号住居址出土遺物



2号住居址



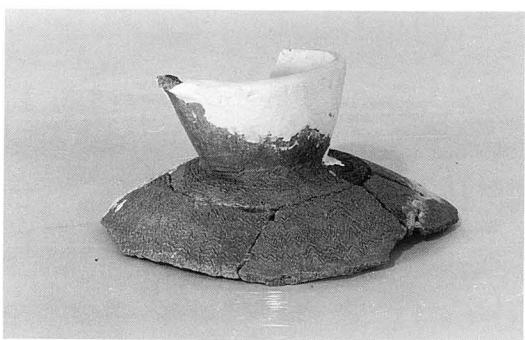
2号住居址出土遺物



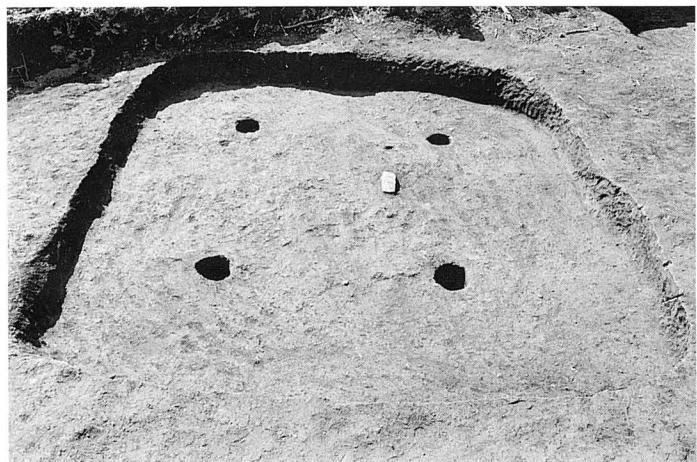
3号住居址



3号住居址出土遺物



4号住居址
及び
出土遺物



5号住居址
及び出土遺物

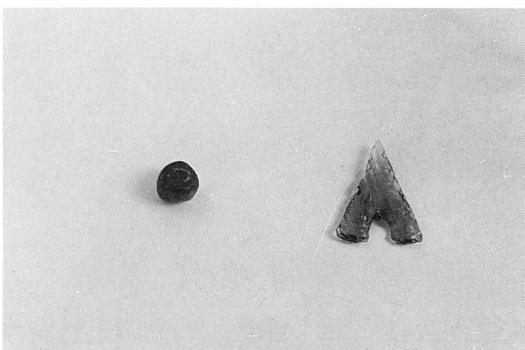
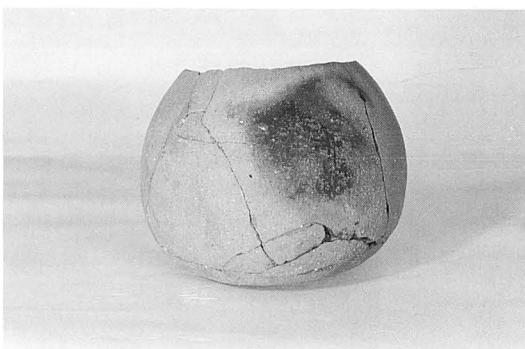
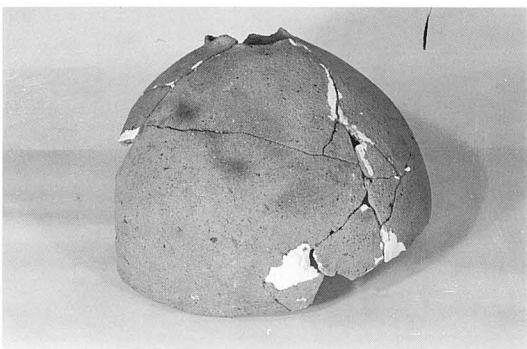
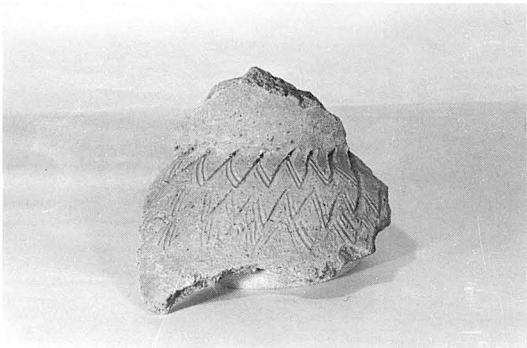




6号住居址

6号住居址出土遺物(1)





6號住居址出土遺物(2)

7号住居址

及び

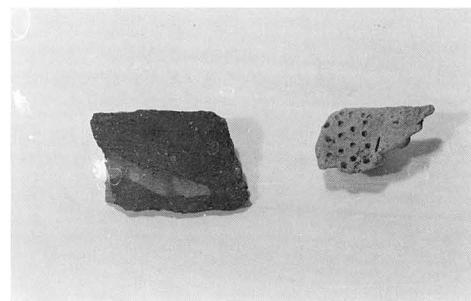
出土遺物



8号住居址

及び

出土遺物



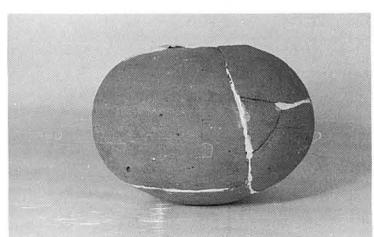
12号住居址



10号住居址

及び

出土遺物

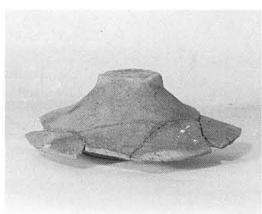




11号住居址及び出土遺物



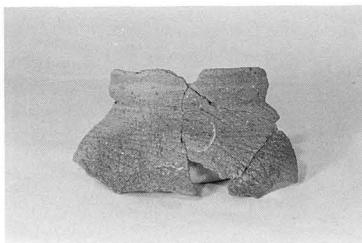
13号住居址及び出土遺物



14号住居址及び出土遺物



15号住居址及び出土遺物

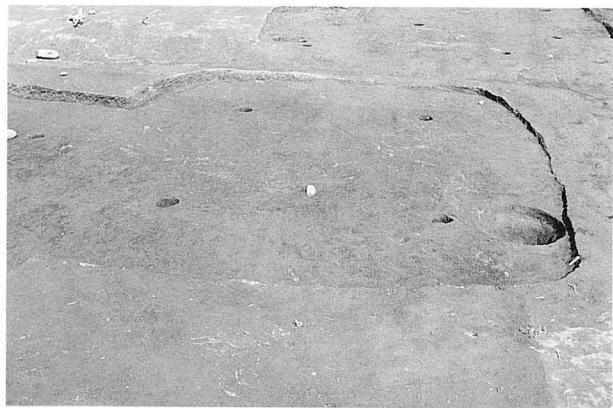


16号住居址及び出土遺物





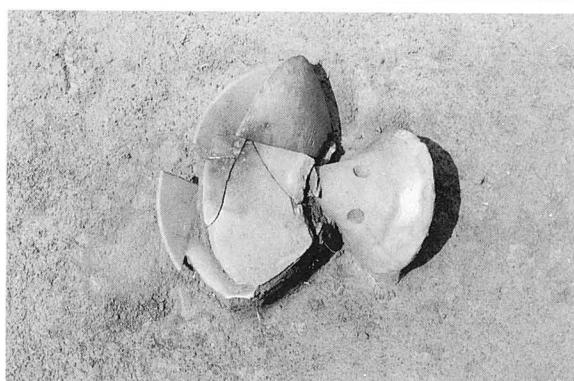
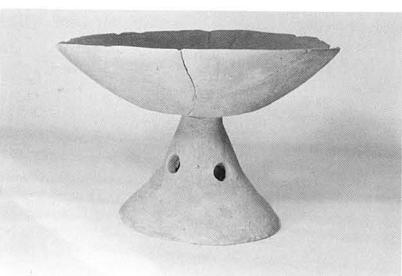
17号住居址及び出土遺物



18号住居址及び出土遺物



19号住居址及び出土遺物

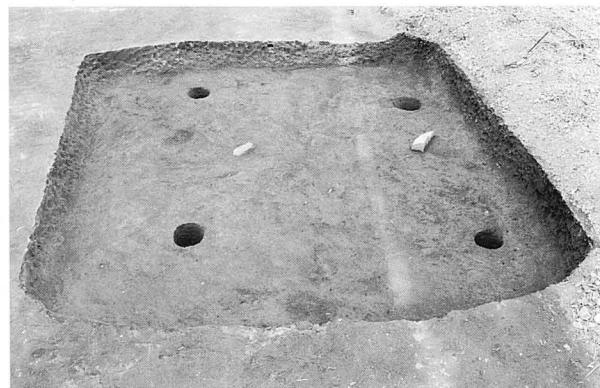




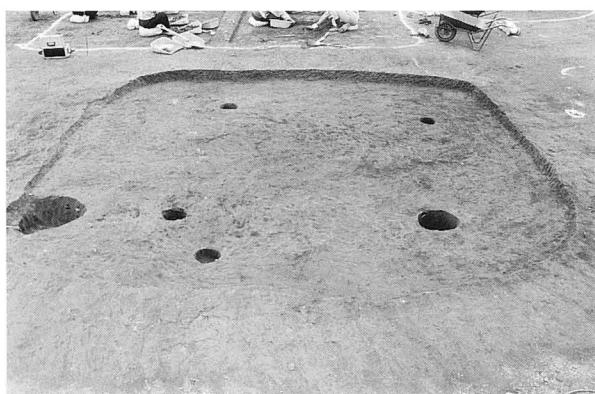
20号住居址
及び
出土遺物

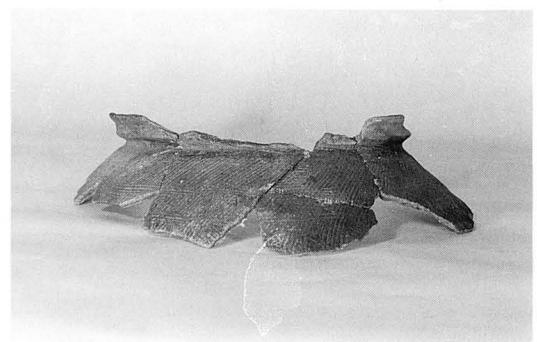


23号住居址



21号住居址

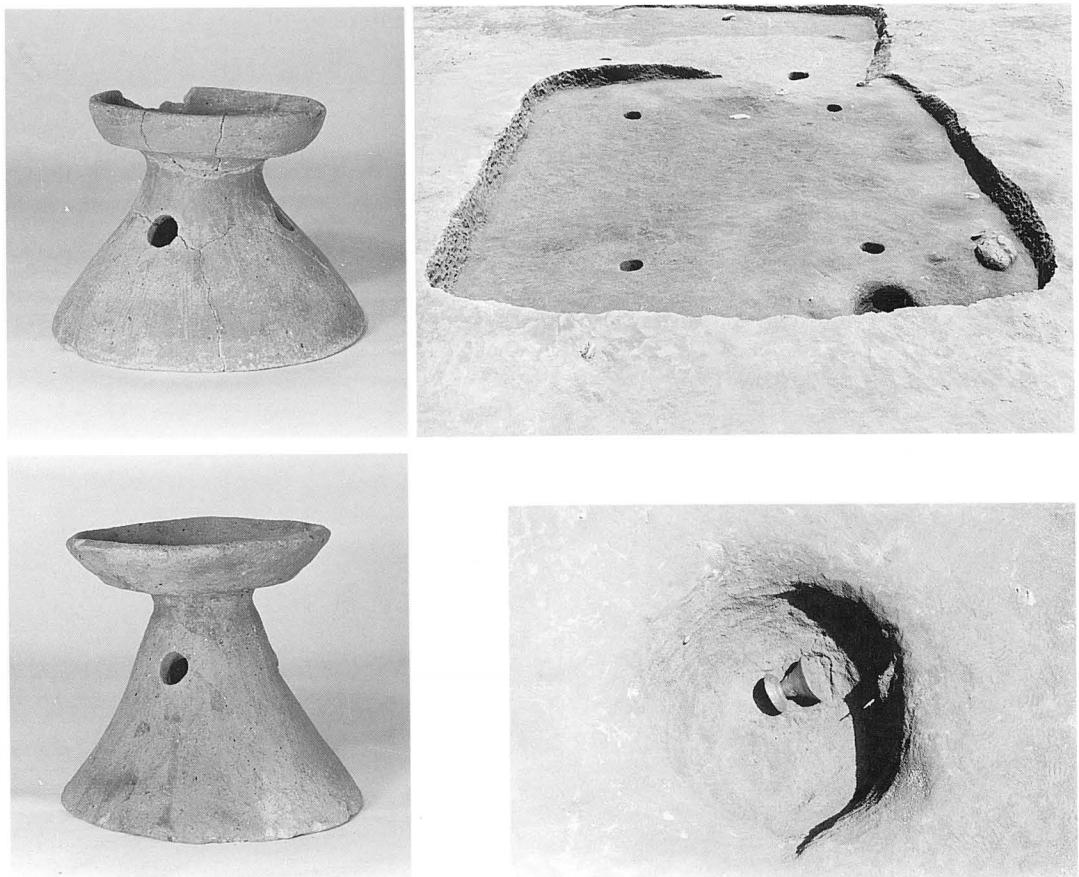




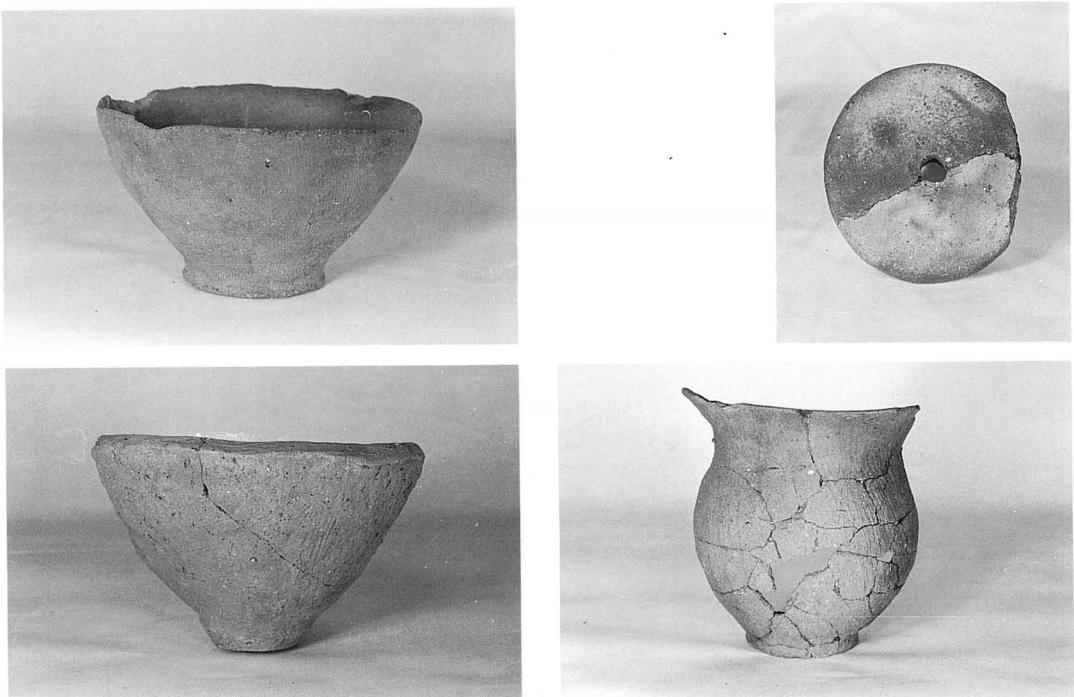
22号住居址出土遺物



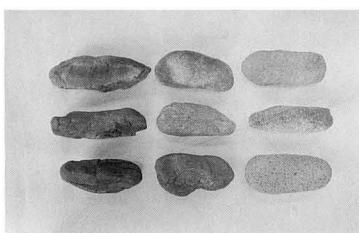
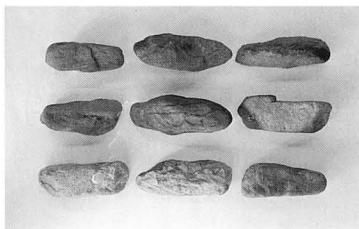
26号住居址
及び出土遺物



27号住居址及び出土遺物

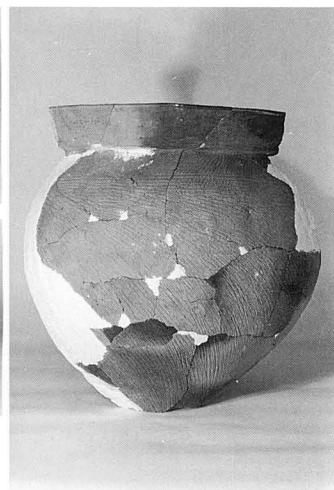
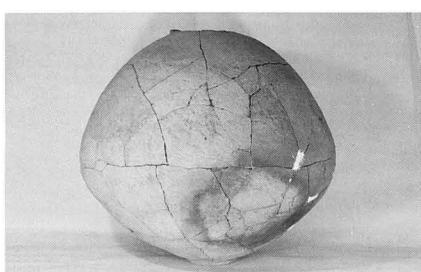


28号住居址



石器出土狀態

28号住居址出土遺物

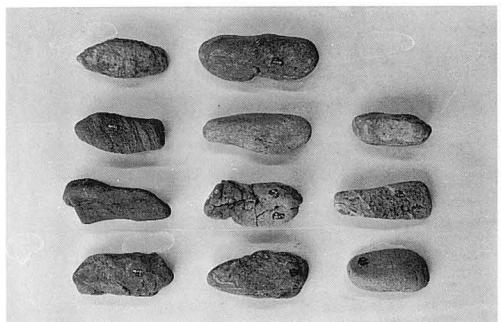




29号住居址

及び

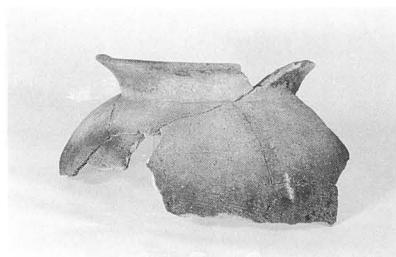
出土遺物



30号住居址



31号住居址及び出土遺物



32号住居址及び出土遺物

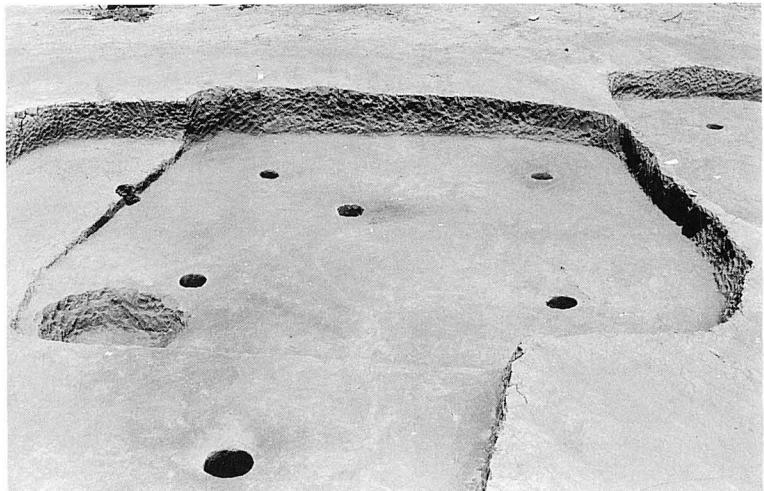




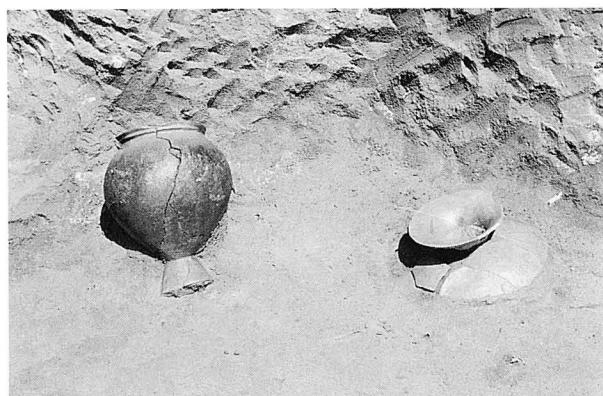
33号住居址及び出土遺物

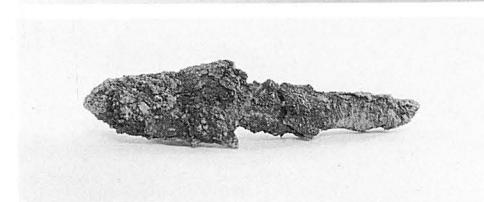
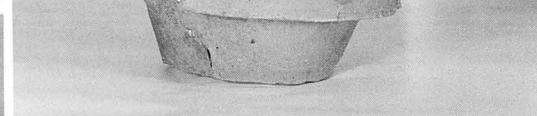
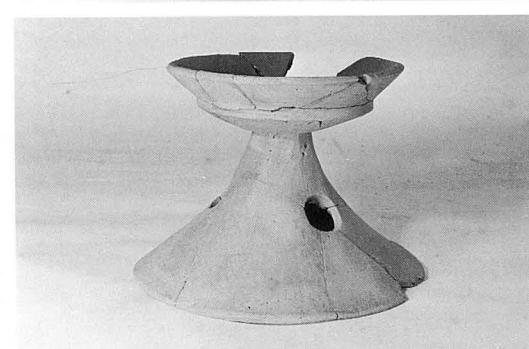
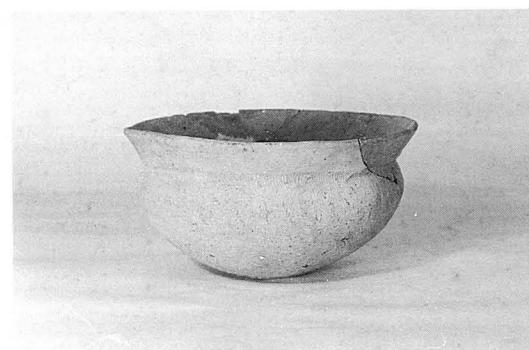
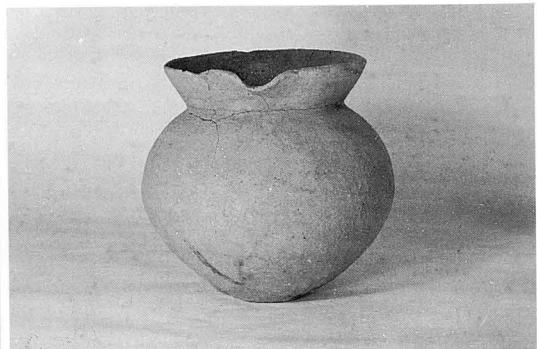


34号住居址



35号住居址及び出土遺物(1)





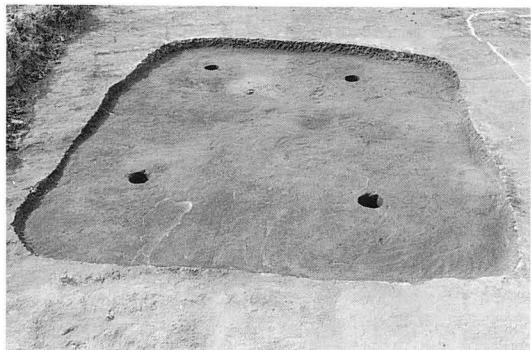
35号住居址出土遺物(2)



36号住居址



37号住居址及び出土遺物



38号住居址

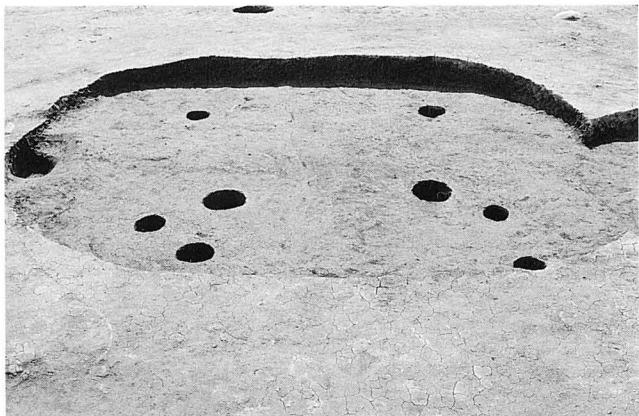


39号住居址及び出土遺物

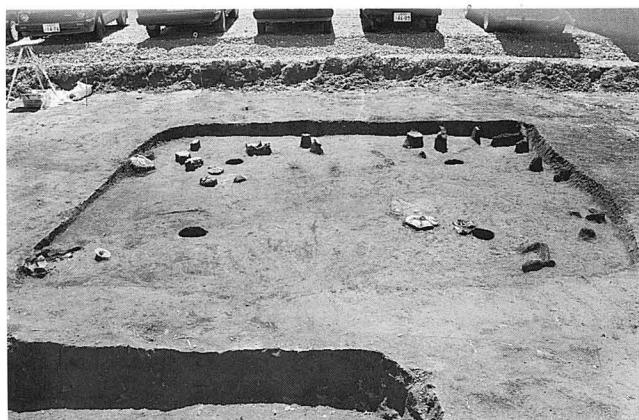


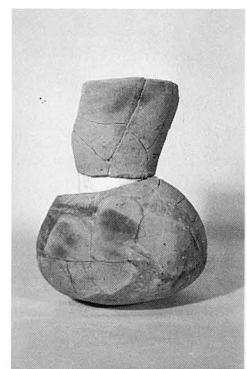


40号住居址及び出土遺物



41号住居址及び出土遺物(1)





41号住居址

出土遺物(2)



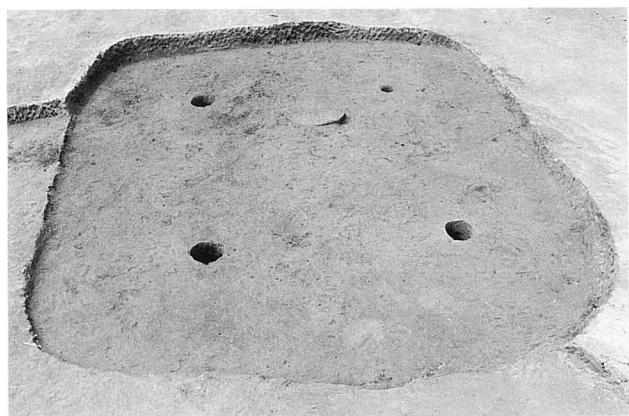


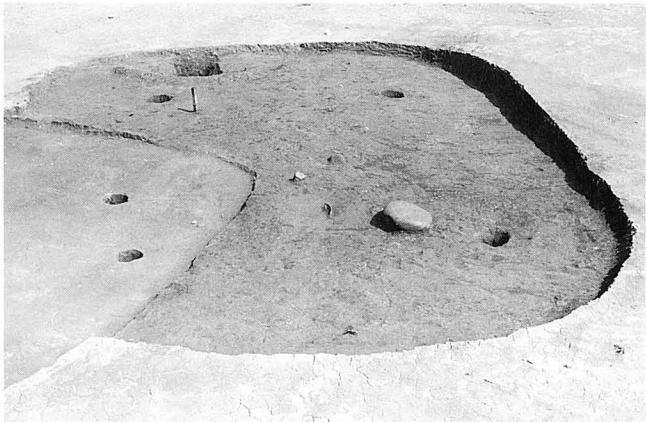
43号住居址



42号住居址

44号住居址及び
出土遺物

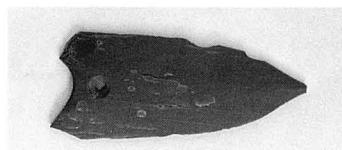




45号住居址及び出土遺物



46号住居址及び出土遺物

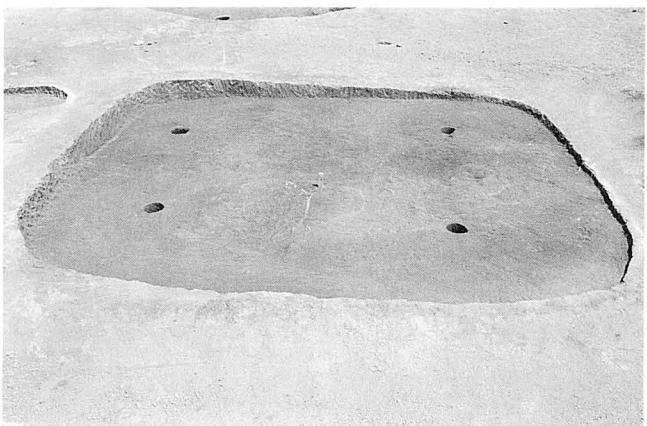


47号住居址及び出土遺物

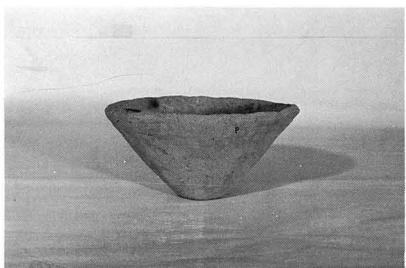




48号住居址及び出土遺物

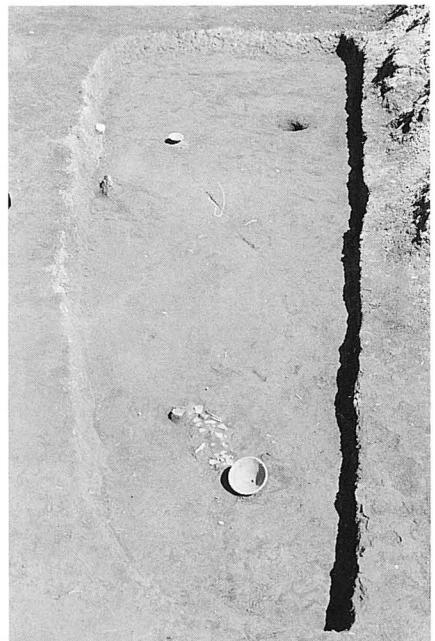
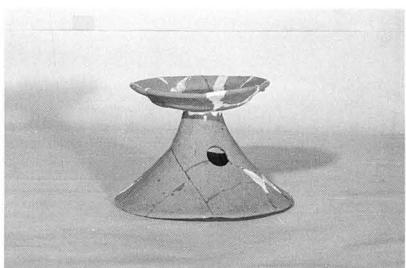


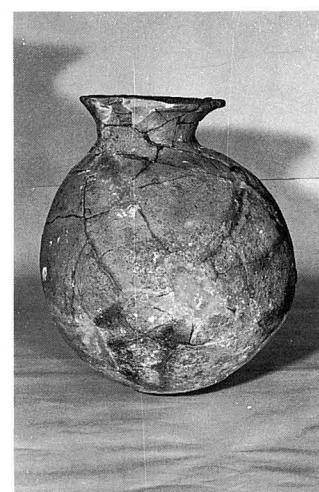
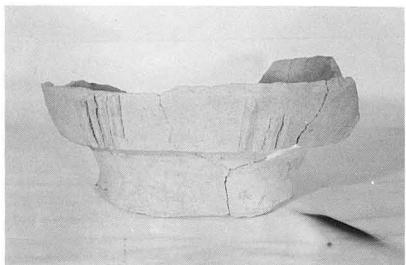
49号住居址



50号住居址

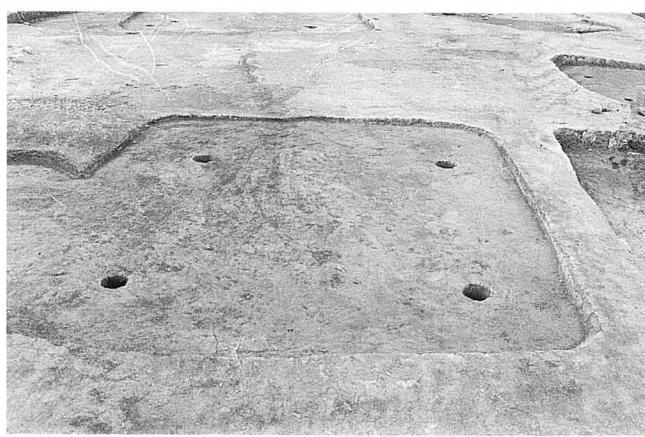
及び
出土遺物



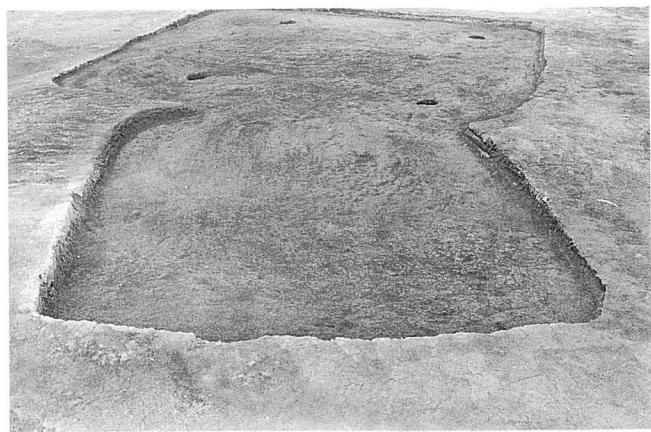


51号住居址

及び出土遺物



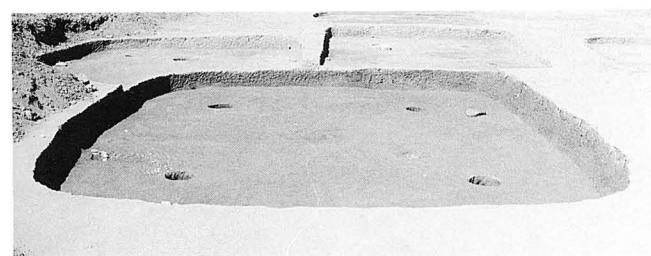
52号住居址



53号住居址



54号住居址



55号住居址

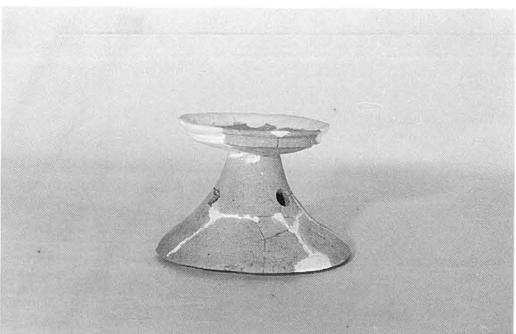
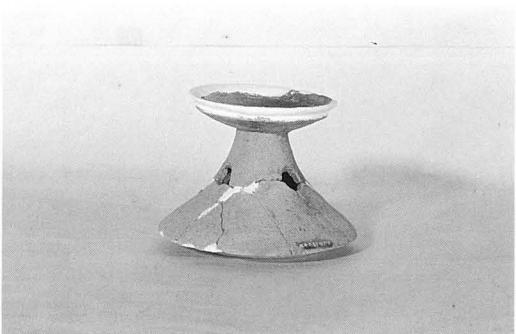


55号住居址遺物出土状態





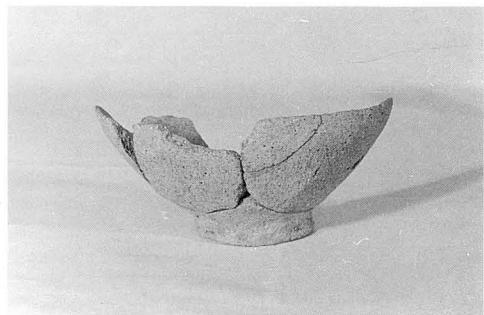
55号住居址出土遺物



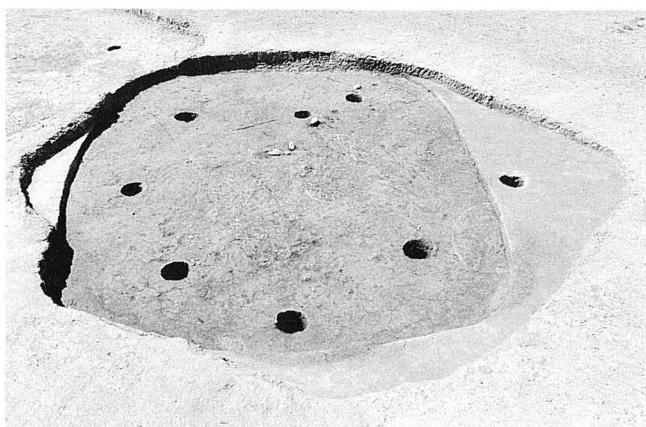
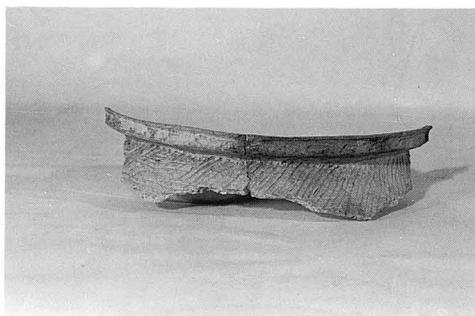


56号住居址及び出土遺物



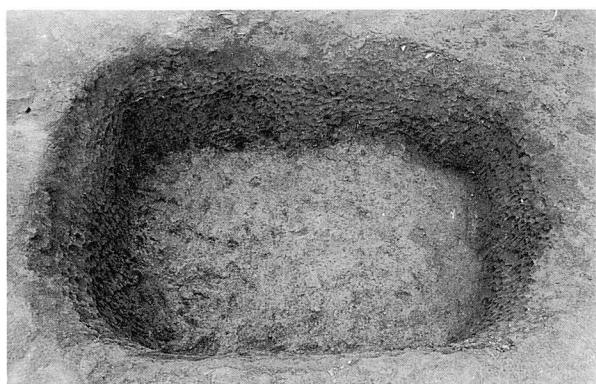
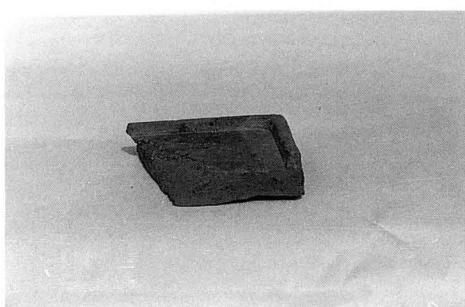


57号住居址及び出土遺物

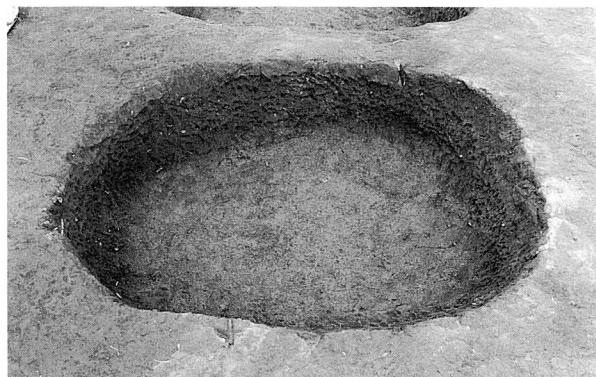


58号住居址

1号集石土壙及び出土遺物



2号集石土壙及び出土遺物



1号溝
検出状況



1号溝

附 章

坂井南遺跡試料 花粉分析 材同定 重鉱物分析 粒度分布及び種子同定報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

昭和61年4月1日

1 花粉分析

1-1 試料

試料は、坂井南遺跡の28号住（No.1）と、41号住南東部土壌内出土の土器（第92図7）内土壤試料（No.18）の2点である。前者は黄灰色粘土、後者は暗褐色砂質シルトと共に風化火山灰土である。（ ）内のNo.は、当方で便宜上付けた番号である。

1-2 分析方法

花粉分析の方法は、下記の手順で行った。

試料約20g秤量-HF処理-重液分離-アセトリシス処理-KOH処理-封入-検鏡。

1-3 分析結果及び考察

花粉分析の結果は、各分類群の個体数で表示し、表1-2にまとめた。また主な花粉・胞子化石と顕微鏡下の状況写真を図版1に載せた。

表1-2にみられるように、花粉化石の産出は、2試料ともに非常に少なかった。一般に風化火山灰土のように酸化的条件下における堆積物では、花粉や胞子の化石が分解されやすく、保存され難い。今回の試料も風化火山灰土の中に入るものと考えられるので、花粉化石の産出が少なかったものと考えられる。従って、古環境の解析は行い難い。

表 1-2 坂井南遺跡試料 花粉分析結果

Sample No.	28号住	41号住
	No. 1	No. 18
Abies (モミ属)	1	—
Tsuga (ツガ属)	2	—
Quercus subgen. Lepidobalanus (コナラ亜属)	—	2
Aesculus (トチノキ属)	—	1
Gramineae (イネ科)	6	2
Artemisia (ヨモギ属)	2	1
Carduoideae (キク亜科)	1	—
Cichorioideae (タンポポ亜科)	—	1
Unknown	—	1
Pteridophyta	34	3
Pseudoschizaea	—	1
Arboreal pollen	3	3
Nonarboreal pollen	9	4
Unknown	0	1
Fern spores	34	3
TOTAL	46	11

表 1 — 1 花粉・鉱物分析試料表

試料番号※	住居址(他)	採取地点等	
1	28号住	粘土	85.5.28
2	"	"	"
3	"	"	"
4	3号住	"	
5	40号住	"	85.7.22
6	28号住	"	85.5.28
7	"	"	"
8	"	"	"
9	"	"	"
10	"	"	"
11	"	"	"
12	"	"	"
13	"	"	"
14	1号集石土壤	炭化物(下層部)	85.8.6
15	41号住	第92図13(土器内の土)	85.7.13
16	46号住	第103図3(土器内の土)	85.7.17
17	19号住	粘土	85.4.17
18	41号住	南東部土壤内出土土器(第92図7)内土壤試料	
19	39号住	第87図1(土器内の土)	85.7.9
20	"	"	"
21	35号住	第79図9(土器内の土)	85.6.5
22	"	"(土器内の砂)	"
23	"	第80図19(土器内の土)	85.6.4
24	32号住	粘土	85.5.28
25	54号住	"	85.7.2
26	27号住	床直 軽石	85.5.10
27	"	粘土	85.5.11
28	"	"	"
29	"	"	"
30	"	"	"
31	"	"	"
32	38号住	"	
33	"	"	85.7.22
34	"	炉の構成部	85.8.9
35	33号住	第75図1(土器内の土)	85.6.5
36	38号住	粘土	
37	"	"	85.7.22
38	"	炉の構成部	85.8.9
39	33号住	第75図2(土器内の土)	85.6.5
40	27号住	床直	85.5.10
41	"	"	"
42	"	"	"
43	28号住	炉址内出土	85.6.14
44	35号住	土壤内	85.6.5
45	"	第80図18(土器内の土)	85.6.5
46	45号住	粘土	85.7.22
47	55号住		85.7.2
48	57号住	埋没土	85.8.7
49	2号土壤	"	85.7.8
50	1号溝		85.4.19

※・当方にて便宜上付けた通し番号。

2 重鉱物分析・粒度分布

2-1 試料及び分析の目的

試料は、本遺跡の複数の住居址内より採取された粘土及び土壤である。本分析は、これらの試料の重鉱物組成及び砂分の粒径組成を調べることにより、住居址内のグループ分けを目的とする。試料表を表2-1に示す。試料番号は当方で便宜上に付けた番号である（表1-1参照）。

表2-1 試料表

住居址番号	試料番号	採取地点その他	色調	岩質
3	4		黄褐	粘土質砂
19	17		にぶい黄褐	"
27	40	床直	暗褐	粘土質シルト質砂
"	27		にぶい黄	砂質シルト質粘土
28	1		"	"
"	9		"	"
32	24		黄褐	砂質粘土質シルト
33	39	第75図2 (土器内の土)	"	粘土質シルト
35	22	第79図9 (土器内の土)	暗褐	粘土質砂質シルト
"	21	" (土器内の砂)	"	中粒～細粒砂
38	32		にぶい黄	シルト質粘土
"	33		"	"
"	34	炉の構成部	赤褐	砂質粘土質シルト
39	19	第87図1 (土器内の土)	褐	"
40	5		灰オリーブ	シルト質粘土
41	15	第92図13 (土器内の土)	褐	砂質粘土質シルト
"	18	南東部土壤内出土土器土壤	"	"
46	16	第103図3 (土器内の土)	"	"
54	25		にぶい黄褐	砂質シルト質粘土
1号集石土壤	14	炭化物下層部	褐	粘土質シルト

2-2 分析方法

試料約70g(湿重)秤量、水を加え超音波装置により粒を分散(乾燥固結した粘土は鉄乳鉢で適当に粉碎の後水を加えた)、#250の分析篩を用いて水洗いし径1/16mm以下の泥分を除去する。乾燥の後、分析篩(#60・#115)を用いて砂分を1/4mm<・1/4~1/8mm・1/8~1/16mmの3段階に篩別(試料により、1/4mm<の中には2mm以下の礫を含む)、秤量の後、1/4~1/8mmの砂分をテトラブロモエタン(比重約2.96)により重液分離、重鉱物のプレパラート作製、偏光顕微鏡下にて同定し

た。不透明鉱物は、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するものをA、それ以外をBとした。風化変質物などの不明粒は「その他」とした。また、軽鉱物については双眼実体鏡による観察を行った。

別途同一試料の湿重量と乾重量測定より得た試料の乾燥減量比から上記分析試料の乾重量を算出、これを基数として砂分の粒径による重量比を算出した。

2-3 分析結果及び考察

試料の重鉱物組成を表2-2・図2-1に、砂分の粒径による重量比を表2-3に、砂分重量を基数とした粒径による重量比を図2-2の三角ダイアグラムに示す。重鉱物組成は、試料の特徴を比較的よく表わしていると考えられるのでグループ分けは重鉱物試料を中心に考察した。

重鉱物組成図と軽鉱物の概査より試料は、次の4つのグループに分けることができる。

I グループ：33号住No.39・39号住No.19・41号住No.18・1号集石No.14

II グループ：19号住No.17・38号住No.34・40号住No.5・46号住No.25・32号住No.24

III グループ：27号住No.40・35号住No.22, 21

IV グループ：3号住No.4・27号住No.27・28号住No.1, 9・38号住No.32, 33

各グループの特徴を以下に述べる。

I グループ：重鉱物組成は、斜方輝石・单斜輝石の両輝石を主体とし、他にカンラン石・角閃石を含む。軽鉱物は比較的多量のバブル・ウォール (bubble wall) 型火山ガラスを含む。

II グループ：I グループ同様両輝石を主体とするが、角閃石が单斜輝石よりも多い。軽鉱物は、ほとんど長石と石英のみで微量のバブル・ウォール型火山ガラスを含む。

III グループ：单斜輝石の斜方輝石に対する割合が I・II グループのそれと比較して多く、また黒雲母も多い。軽鉱物は、安山岩などの暗灰色岩片を多く含む。

IV グループ：角閃石が両輝石よりも多い。軽鉱物はII グループ同様ほとんど長石と石英のみであるが、火山ガラスは含まない。

次に、上記グループ分けと砂分の粒径組成の傾向を三角ダイアグラムにより比較すると、I・II グループはやや極細砂が多い傾向を示し、III グループは3点の内2点まで極細砂が少なく、IV グループはダイアグラムの中心付近にあるものが多く中粒砂・細砂・極細砂がほぼ同量の傾向を示す。ただしIV グループの3号住No.4とII グループの32号住No.24は中粒砂が多く、グループの中で例外的な存在である。

以上砂分の粒径組成も、重鉱物によるがグループ分けと大体の傾向においてほぼ調和的であると考えられる。

表2—2 坂井南遺跡試料重鉱物組成

試 料 番 号	重鉱物組成										その他			
	カソラン石		斜方輝石		單斜輝石		角閃石		黒雲母		ジルコン	ザクロ石	電氣石	不透明鉱物
	無色	赤色	無色	無色	緑色	褐色	青緑色	褐色	緑色	褐色	A	B	同定鉱物粒数	
3	4	15	2	74	28	135	19	6	11	24	1	1	97	24
19	17	11	7	83	29	51	5	3	1	13			52	7
27	40	8	3	52	62	33	1	2	134	1			16	13
	27	6	45		8	101	18		15	3	2	2	109	4
28	1	3	4	59	24	136	18	9	9	16			77	16
	28	9	8	7	58	9	159	21	7	11	1	1	57	9
32	24	12		61	33	51	6		2	2			37	153
33	39	54	10	211	38	27	1		1	6			52	6
	33	22	14	11	103	1	68	35	1	3	25	1	25	8
35		21	5	70	91	35			1	6	62	1	7	11
	32	32	12	5	79	21	114	19	6	2	2	1	74	20
38	33	8	2	71	18	103	16	9	5			1	58	6
	38	34	4	1	138	6	74	4		4			57	34
39	19	31	7	183	47	27	5	1	2	3			48	14
40	5	21	8	131	22	67	8		1	4			74	8
	40	41	15	26	7	168	46	18	3	1	4		69	16
41		18	28	11	169		28	20	3		3		39	8
46		16	29	6	175	35	33	4		4			62	10
54		25	24	5	170	30	41	7		4			65	11
1号集石土壤	14	24	13	182	36	15	6			4			63	2
													9	354

(※ 住居址番号。※※ 値は粒数)

表2-3 坂井南遺跡試料
砂分の粒径による重量による量比

住居址番号	試料番号	試料乾重	※		1/4 <	1/4	1/8	~1/8 ~1/16	100%
			3	4					
3	4	55.7	15.3	4.7	4.0	9	17	19	17
19	17	64.7	8.2	5.9	4.9	27	40	27	40
27	40	37.1	49.8	18.9	5.4	32	24	33	39
"	27	53.6	4.3	3.4	3.7	35	22	35	22
28	1	51.9	5.3	3.2	3.5	21	21	38	32
"	9	53.2	2.6	3.0	3.8	33	33	38	32
32	24	38.6	12.7	4.2	4.4	34	34	39	19
33	39	54.6	1.2	2.8	4.8	40	5	41	15
35	22	50.0	9.2	9.9	6.9	18	18	46	16
"	21	55.2	33.6	36.9	6.4	54	25	54	25
38	32	62.9	3.3	3.1	4.1	1	14	1	14
"	33	60.5	3.1	3.2	4.0				
"	34	48.8	7.0	8.9	6.9				
39	19	44.0	2.6	4.5	5.8				
40	5	54.4	1.0	2.0	2.7				
41	15	53.2	1.6	3.7	6.5				
"	18	63.1	3.6	2.9	4.9				
46	16	5.1	1.0	2.2	4.1				
54	25	56.0	1.5	2.3	3.1				
1号集石土壤	14	40.8	7.0	3.7	5.5				

※・試料乾重の単位はg. 各粒径の数値は重量%



図2-1 坂井南遺跡試料重鉱物組成

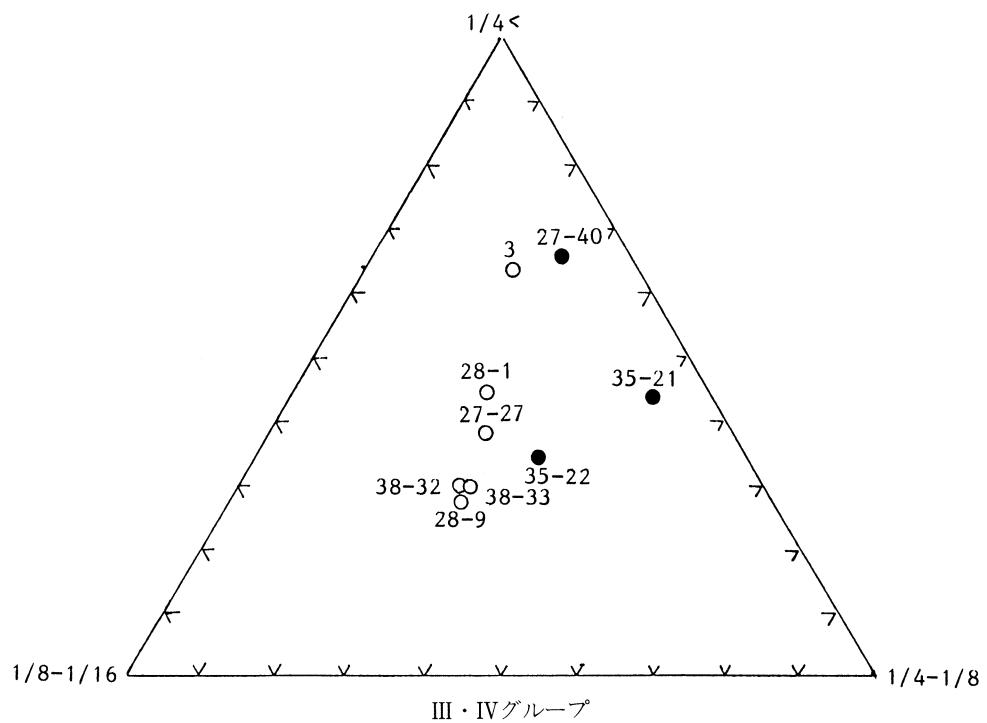
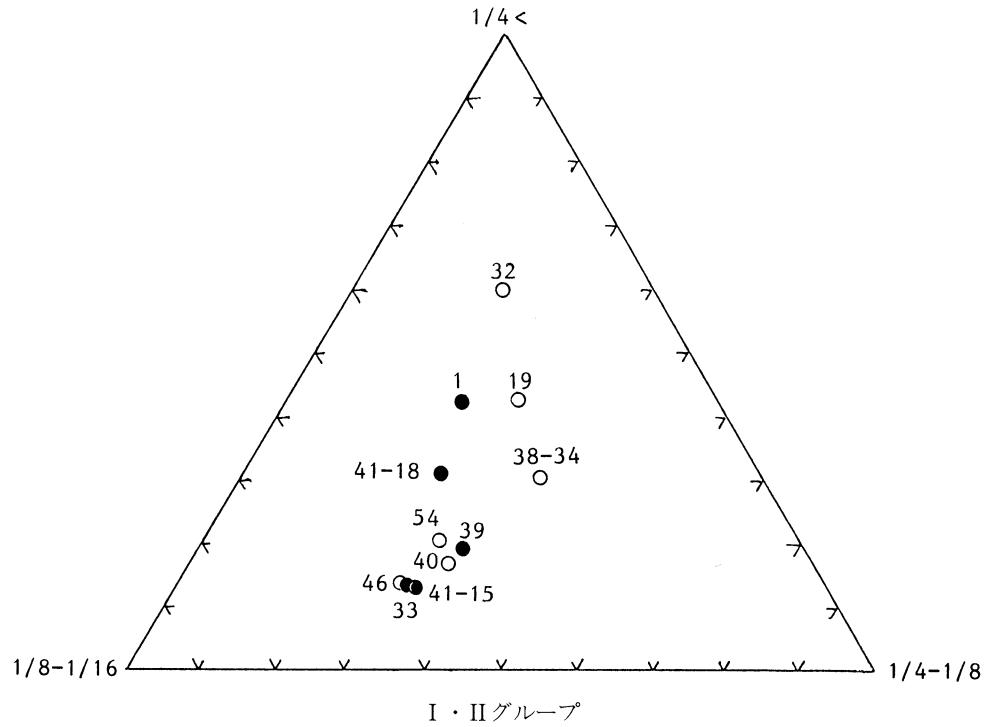


図 2-2 坂井南遺跡試料砂分粒径三角ダイアグラム

3 炭化材同定

3-1 試料

試料は、計20遺構(30袋)から検出された多数の炭化材片である。それらの中から、以下のようにして同定試料100点を選択した。

- 1) 試料に水を加えて放置し、炭化材と土を分離する。
- 2) 水に浮いた炭化材を篩にとり、4mm以上の残渣を集め十分乾燥させる。
- 3) 遺構ごと(同一遺構であっても試料袋が異なる場合は、a, b, …の記号を付し別遺構として扱った)に、比較的大きめの材片から順次双眼実体鏡下で観察し、別種と思われるものを選び同定試料とする。こうして48点が選択された。
- 4) さらに、各遺構から大きめの材片2・3点を任意に選び、合計100点とした。

試料は、古墳時代の住居址および溝から検出されたもので、1号溝を除き建築材と考えられている。試料番号は当方で付けた通しNoである。

3-2 方法

木口・柱目・板目三断面を作成、走査型電子顕微鏡で観察・同定した。同時に、顕微鏡写真図版(図版 3-1 ~ 3-8)も作成した。

3-3 結果

同定結果を一覧表で示す(表 3-1)。

表 3-1 同定結果

試料番号	遺構	種名
1	2号住	<i>Ostrya japonica</i> (アサダ)
2	7号住	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>) sp. 〔コナラ属(コナラ亜属クヌギ節)の一種〕
3	13号住	<i>Gramineae</i> (subfamilia <i>Bambusoideae</i>) sp. 〔イネ科(タケ亜科)の一種〕
4	16号住 a	<i>Acer</i> sp. (カエデ属の一種)
5	16号住 b	<i>Zelkova serrata</i> (ケヤキ)
6	17号住	<i>Hovenia dulcis</i> (ケンボナシ)
7	"	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>) sp.
8	19号住 a	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>) sp.
9	19号住 b	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>) sp.
10	20号住	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>) sp.
11	23号住	<i>Abies</i> sp. (モミ属の一種)
12	"	<i>Pinus</i> (subgen. <i>Diploxylon</i>) sp. [マツ属(複維管東亜属)の一種]
13	27号住 a	<i>Morus bombycis</i> (ヤマグワ)
14	"	<i>Camellia japonica</i> (ヤブツバキ)
15	27号住 b	<i>M. bombycis</i>

16	30号住	<i>Torreya nucifera</i> (カヤ)
17	31号住	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>)sp.
18	"	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Prinus</i>)sp. 〔コナラ属(コナラ亜属コナラ節)の一種〕
19	33号住 a	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>)sp.
20	"	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>)sp.
21	"	<i>Betula</i> sp. (カバノキ属の一種)
22	33号住 b	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>)sp.
23	"	<i>Betula</i> sp.
24	33号住 c	<i>Betula</i> sp.
25	"	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>)sp.
26	33号住 d	<i>Abies</i> sp.
27	33号住 e	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>)sp.
28	35号住 a	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Prinus</i>)sp.
29	35号住 b	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Prinus</i>)sp.
30	"	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>)sp.
31	37号住	<i>M. bombycis</i>
32	"	<i>Chamaecyparis</i> sp. (ヒノキ属の一種)
33	"	<i>Castanea crenata</i> (クリ)
34	41号住 a	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>)sp.
35	"	<i>Betula</i> sp.
36	41号住 b	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>)sp.
37	"	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>)sp.
38	44号住	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>)sp.
39	51号住	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>)sp.
40	52号住	<i>Prunus</i> sp. (サクラ属の一種)
41	"	<i>Abies</i> sp.
42	54号住	<i>M. bombycis</i>
43	1号溝	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>)sp.
44	16号住 b	<i>Chamaecyparis</i> sp.
45	33号住 d	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>)sp.
46	33号住 c	<i>Betula</i> sp.
47	"	<i>Prunus</i> sp.
48	41号住 c	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>)sp.
49	7号住	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>)sp.
50	16号住 a	<i>Acer</i> sp.
51	17号住	<i>H. dulcis</i>
52	"	<i>H. dulcis</i>
53	19号住 a	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>)sp.

54	19号住 a	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>)sp.
55	19号住 b	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>)sp.
56	"	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>)sp.
57	"	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>)sp.
58	20号住	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>)sp.
59	"	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>)sp.
60	"	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>)sp.
61	23号住	<i>Pinus</i> (subgen. <i>Diploxyylon</i>)sp.
62	27号住 a	<i>M. bombycis</i>
63	27号住 b	<i>M. bombycis</i>
64	"	<i>M. bombycis</i>
65	30号住	<i>T. nucifera</i>
66	"	<i>T. nucifera</i>
67	"	<i>T. nucifera</i>
68	"	<i>T. nucifera</i>
69	31号住	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>)sp.
70	"	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Prinus</i>)sp.
71	"	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>)sp.
72	33号住 a	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>)sp.
73	"	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>)sp.
74	"	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>)sp.
75	33号住 b	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>)sp.
76	"	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>)sp.
77	33号住 c	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>)sp.
78	"	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>)sp.
79	33号住 d	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>)sp.
80	"	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>)sp.
81	33号住 e	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>)sp.
82	"	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>)sp.
83	35号住 b	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Prinus</i>)sp.
84	"	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Prinus</i>)sp.
85	37号住	<i>M. bombycis</i>
86	"	<i>Chamaecyparis</i> sp.
87	41号 a	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Prinus</i>)sp.
88	"	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>)sp.
89	41号住 b	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>)sp.
90	"	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>)sp.
91	41号住 c	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>)sp.
92	44号住	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>)sp.

93	44号住	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>)sp.
94	"	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>)sp.
95	51号住	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>)sp.
96	52号住	<i>Abies</i> sp.
97	"	<i>Abies</i> sp.
98	54号住	<i>M. bombycina</i>
99	1号溝	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>)sp.
100	"	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>)sp.

次に、各試料の主な解剖学的特徴や一般性質などについて種類ごとに述べる。

● カヤ (*Torreya nucifera*) イチイ科 No.16, 65, 66, 67, 68

早材部から晩材部への移行は緩やかで、年輪界は明瞭。樹脂細胞、樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はヒノキ型 (Cupressoid)。放射組織は単列、1～10細胞高。仮道管内壁には対をなしたせん肥厚が認められる。

カヤは、本州（岩手・山形県以南）・四国・九州の常緑広葉樹林中に点生する常緑高木で、樹高25～30mにもなるが生長は極めて遅い。庭木として植栽されることも多く、いくつかの変・品種がある。その材は針葉樹としては重い方で、強度は中程度、割裂性は大きく、加工は容易、保存性特に耐水性に優れる。建築・各種桶類・木地・器具・家具材など各種の用途が知られ、基盤としては最高級品とされる。種子は食用となるほか、搾油（食用・燈用・頭髪用）されたり驅虫薬としても使われた。

● モミ属の一種 (*Abies* sp.) マツ科 No.11, 26, 41, 96, 97

早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭く、年輪界は明瞭。樹脂細胞はないが、傷害樹脂道が認められることがある。放射仮道管はなく、放射柔細胞の末端壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型 (Taxodoid)～ヒノキ型で1～4個。放射組織は単列、1～20細胞高。

モミ属には、モミ (*Abies firma*)、ウラジロモミ (*A. homolepis*)、アオモリトドマツ (*A. mariesii*)、シラベ (*A. veitchii*)、アカトドマツ (*A. sachalinensis*) の5種があり、アカトドマツを除く4種はいずれも日本特産種である。モミは本州(秋田・岩手県以南)・四国・九州の低地～山地に、ウラジロモミは本州中部(福島県以南)・紀伊半島・四国の山地～亜高山帯に、アオモリトドマツは本州(福島県以北)の亜高山～高山帯に、シラベは本州中部(福島県以南)・奈良県・四国に、アカトドマツは北海道に分布する常緑高木である。モミを除いては山地～高山・寒冷地

に生育する。材の解剖学的特徴のみでは区別できないが、試料はモミである可能性が高い。モミの材はやや軽軟で、強度は小さく、割裂性は大きい。加工は容易で、保存性は低い。棺や卒塔婆など葬祭具に用いられるほか、建具・器具・家具・建築材など各種の用途が知られている。

●マツ属（複維管束亜属）の一種 [*Pinus* (subgen. *Diploxyylon*) sp.] マツ科

早材部から晩材部への移行はやや緩やかで、晩材部の幅は広く、年輪界は明瞭。樹脂細胞はなく、樹脂道が認められる。放射組織は仮道管、柔細胞とエピセリウム細胞よりなり、仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。分野壁孔は窓状、単列、1～15細胞高。

複維管束亜属いわゆる二葉松類には、アカマツ (*Pinus densiflora*)、クロマツ (*P. thunbergii*)、リュウキュウマツ (*P. luchuensis*) の3種がある。アカマツとクロマツは本州・四国・九州に分布するが、クロマツは暖地の海沿いに多く生育し、また古くから砂防林として植栽してきた。リュウキュウマツは琉球列島特産である。材は重硬で強度が大きく、保存性は中程度であるが耐水性に優れる。建築・土木・建具・器具・家具材など広い用途が知られている。

●ヒノキ属の一種 (*Chamaecyparis* sp.) ヒノキ科 No.32, 44, 86

早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭く、年輪界は明瞭、樹脂細胞は晩材部に限って認められ、樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はヒノキ型で1～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

ヒノキ属には、ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa*) とサワラ (*C. pisifera*) の2種がある。ヒノキは本州(福島県以南)・四国・九州に分布し、また各地で植栽される常緑高木で、国内ではスギに次ぐ植林面積を持つ重要樹種である。材はやや軽軟で加工は容易、割裂性は大きいが、強度・保存性は高い。建築・器具材など各種の用途が知られている。サワラは本州(岩手県以南)・九州に自生し、また植栽される高木で多くの園芸品種がある。材は軽軟で割裂性は大きく、加工も容易、強度的にはヒノキに劣るが耐水性が高いため、樽や桶にするほか各種の用途がある。

●アサダ (*Ostrya japonica*) カバノキ科 No.1

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2～4個が複合、横断面では楕円形、管壁は薄い。道管は单穿孔を有し、内壁にらせん肥厚が認められる。放射組織は同性～異性III型、1～4細胞幅、1～30(50)細胞高。

アサダは北海道(中南部)・本州・四国・九州に分布する落葉高木である。材は重硬で、割裂性は小さく、加工は困難である。器具・家具・機械・建築材などに用いられ、強度を必要とする用途に適している。またサクラの模擬材として市場に出されることもある。

● カバノキ属の一種 (Betula sp.) カバノキ科 No.21, 23, 24, 35, 46

散孔材で、管孔は放射方向に 2 ~ 4 個が複合、横断面では橢円形、管壁は薄い。道管は階段穿孔を有し、段 (bar) 数は 10 前後、壁孔は密に配列する。放射組織は同性、1 ~ 4 細胞幅、1 ~ 30 細胞高。年輪界はやや不明瞭。

カバノキ属は、シラカンバ (*Betula platyphylla* var. *japonica*)、ダケカンバ (*B. ermanii*) など 11 種が自生し、主として本州中北部・北海道の山地・高山・寒冷地などに生育する落葉高木～低木である。このうちミズメ (*B. grossa*) は日本固有種で、本州（岩手県以南）・四国・九州の山地に生育する。ミズメの材は重硬・強靭で、加工は困難ではなく、各種の道具・器具材、木地・家具材などに用いられる。梓弓に使われるアズサを本種とする見解もある。

● コナラ属 (コナラ亜属コナラ節) の一種 [Quercus (subgen. Lepidobalanus sect. Prinus) sp.] ブナ科 No.18, 28, 29, 70, 83, 87

環孔材で孔圈部は 1 ~ 2 例、孔圈外で急激に管径を減じのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は管壁は厚く、横断面では円形～橢円形、小道管は管壁は中庸～薄く、横断面では多角形、ともに単独。単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性、單列、1 ~ 20 細胞高のものと複合組織よりなる。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

コナラ節は、コナラ亜属（落葉ナラ類）の中で、果実（いわゆるドングリ）が 1 年目に熟するグループで、モンゴリナラ (*Quercus mongolica*) とその変種ミズナラ (*Q. mongolica* var. *grosseserrata*)、コナラ (*Q. serrata*)、ナラガシワ (*Q. aliena*)、カシワ (*Q. dentata*) といいくつかの変・品種を含む。モンゴリナラは北海道・本州（丹波地方以北）に、ミズナラ・カシワは北海道・本州・四国・九州に、コナラは北海道（南西部）・本州・四国・九州に、ナラガシワは本州（岩手・秋田県以南）・四国・九州に分布する。このうち平野部で普通に見られるのはコナラであり、本試料もコナラである可能性が高い。コナラは樹高 20m になる高木で、古くから薪炭材として利用され、植栽されることも多かった。材は重硬で、加工は困難、器具・機械・樽材などの用途が知られ、薪炭材としてはクヌギ (*Q. acutissima*) に次ぐ優良材である。枝葉を緑肥としたり、虫えいを染料とすることもある。

● コナラ属 (コナラ亜属クヌギ節) の一種 [Quercus (subgen. Lepidobalanus sect. Cerris) sp.] ブナ科 No.2, 7, 8, 9, 10, 17, 19, 20, 22, 25, 27, 30, 34, 36, 37, 38, 39, 43, 45, 48, 49, 53, 54, 55, 56, 57, 58, 59, 60, 69, 71, 72, 73, 74, 75, 76, 77, 78, 79, 80, 81, 82, 88, 89, 90, 91, 92, 93, 94, 95, 99, 100

環孔材で孔圈部は 1 ~ 3 例、孔圈外で急激に管径を減じのち漸減しながら放射状に配列する。大道管は管壁は厚く、横断面では円形、小道管は管壁は中庸～厚く、横断面では角張った円形、

ともに単独。単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状となる。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものと複合組織よりなる。しばしば結晶を含む。年輪界は明瞭。

クヌギ節は、コナラ亜属の中で、果実が2年目に熟するグループで、クヌギとアベマキ (*Q. variabilis*) の2種がある。クヌギは本州(岩手・山形県以南)・四国・九州に、アベマキは本州(山形・静岡県以西)・四国・九州(北部)に分布するが、中国地方に多い。材の解剖学的特徴のみで両者を区別することはできないが、試料はクヌギである可能性が高い。クヌギは樹高15mになる高木で、材は重硬である。古くから薪炭材として利用され、人里近くに萌芽林として造林されることも多かった。黒炭で知られる佐倉炭・池田炭も本種で作られ、薪炭材としては国産材中第一の重要材である。このほかに器具・杭材・橋木などの用途が知られる。樹皮・果実はタンニン原料となり、果実は染料・飼料ともなった。

●クリ (*Castanea crenata*) ブナ科 No.33

環孔材で孔圈部は1~3列、孔圏外で急激に管径を減じのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、小道管は単独および2~3個が斜(放射)方向に複合、横断面では角張った楕円形~多角形、ともに管壁は薄い。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状~網目状となる。放射組織は同性、単列、1~15細胞高。年輪界は明瞭。

クリは北海道南西部・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、加工はやや困難であるが耐久性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材・橋木や海苔粗朶などの用途が知られている。樹皮からはタンニンが採られ、果実は食用となる。各地の遺跡からの出土例の多い樹種の一つである。

●ケヤキ (*Zelkova serrata*) ニレ科 No.5

環孔材で孔圏部は1列、孔圏外で急激に管径を減じのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。大道管は管壁は厚く、横断面では円形~楕円形、単独、小道管は管壁厚は中庸~薄く、横断面では多角形で複合管孔をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性III型、1~10細胞幅、1~30細胞高であるが、時に60細胞高を超える。しばしば結晶を含む。柔組織は周囲状。年輪界はやや不明瞭。

ケヤキは本州・四国・九州の谷沿いの肥沃地などに自生し、また屋敷林や並木として植栽される落葉高木で、時に樹高50mにも達する。材はやや重硬で、強度は大きいが、加工は困難でなく、耐朽性が高く、木理が美しい。建築・造作・器具・機械・彫刻・薪炭材など各種の用途が知られ、国産広葉樹材の中で最良のものの一つに上げられる。

●ヤマグワ (*Morus bombycina*) クワ科 No.13, 15, 31, 42, 62, 63, 64, 85, 98

環孔材で孔圏部は1~5列、晩材部へ向かって管径を漸減させ、のち塊状に複合する。大道

管は管壁は厚く、横断面では橢円形、単独または2～3個が複合、小道管は管壁厚は中庸、横断面では多角形で複合管孔をなす。道管は單穿孔を有し、壁孔は密に交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性III型、1～6細胞幅、1～50細胞高で、しばしば結晶を含む。柔組織は周囲状～翼状および散在状。年輪界は明瞭。

ヤマグワは北海道・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木で、中国原産のカラグワ（マグワ）（*Morus alba*）・ロウソ（*M. alba* var. *multicaulis*）とともに多くの園芸品種があり、養蚕に利用されている。材の解剖学的特徴のみで、これらを区別することはできない。ヤマグワの材はやや重硬で強靭、加工はやや困難で、保存性は高い。装飾材や器具・家具材として用いられ、樹皮は和紙の原料や染料となり、果実は食用となる。

● サクラ属の一種 (*Prunus* sp.) バラ科 No.40, 47

散孔材で管壁厚は中庸、横断面では角張った橢円形、単独または2～4個が複合、晚材部へ向かって管径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性III型、1～5細胞幅、1～30細胞高。年輪界はやや不明瞭。

サクラ属には、ヤマザクラ（*Prunus jamasakura*）やウワミズザクラ（*P. grayana*）など15種が自生し、多くの変・品種がある。また、モモ（*P. persica*）やスモモ（*P. salicina*）など古い時代に伝えられ栽培されているものもある。多くは落葉性の高木～低木であるが、バクチノキ（*P. zippeliana*）、リンボク（*P. spinulosa*）の常緑樹も含まれる。このうちヤマザクラは、本州（宮城・新潟県以南）・四国・九州の山野に分布する落葉高木で、材は中程度～やや重硬・強靭で、加工は容易、保存性は高い。各種器具材をはじめ、機械・家具・楽器・建築・薪炭材など様々な用途が知られている。また樹皮は樺皮細工に用いられる。

● カエデ属の一種 (*Acer* sp.) カエデ科 No.4, 50

散孔材で管壁は薄く、横断面では角張った橢円形、単独および2～3個が複合、晚材部へ向かって管径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は対列～交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～8細胞幅、1～30細胞高で時に100細胞高を超える。年輪界はやや不明瞭。

カエデ属には、イタヤカエデ（*Acer mono*）やイロハモミジ（*A. palmatum*）など約25種が自生し、また多くの品種があり植栽されることも多い。属としては琉球を除くほぼ全土に分布する落葉高木～低木である。一般に材はやや重硬・強靭で、加工はやや困難、保存性は中程度である。器具・家具・建築・装飾・旋作・薪炭材などに用いられる。

● ケンボナシ (*Hovenia dulcis*) クロウメモドキ科 No.6, 51, 52

環孔材で孔圈部は1～3列、孔圈外で急激に管径を減じのち漸減する。大道管は管壁厚は中

庸、横断面では橢円形、単独、小道管は管壁は厚く、横断面では円形～橢円形、単独および放射方向に2～3個が複合する。道管は单穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性III～II型、1～5細胞幅、1～50細胞高。年輪界はやや明瞭。

ケンポナシは北海道（奥尻島）・本州・四国・九州に自生する落葉高木で、時に植栽される。材の重さ・硬さは中程度で、加工は容易、材質は良好である。このため建築装飾材・家具材として賞用され、器具・楽器・旋作・薪炭材などにも用いられる。また、果時に果序軸上部が肥大し、これは甘味があって食べられる。

●ヤブツバキ (*Camellia japonica*) ツバキ科 No.14

散孔材で管壁は薄く、横断面では多角形～角張った橢円形、単独および2～3個が複合する。道管は階段穿孔を有し、段数は30前後。放射組織は異性II型、1～4細胞幅、1～40細胞高。年輪界は不明瞭。

ヤブツバキは、本州・四国・九州・琉球の主として沿海地に自生する。ツバキ属には、ヤブツバキと四国・九州・琉球の山地に自生するサザンカ (*C. sasangua*) があり、ともに多くの変・品種があり植栽される。ヤブツバキの材は重硬・強靭で割れにくく、加工はやや困難、耐朽性は高い。器具・旋作・機械・薪炭材などに用いられる。種子からは油が搾られ、頭髪・食用・機械・燈・薬などに利用される。またサポニン原料ともなり魚毒・農薬として用いられた。木灰は媒染剤ともなる。

●イネ科 (タケ亜科) の一種 [Gramineae (subfamilia Bambusoideae) sp.] No.3

維管束が基本組織中に散在する不齊中心柱をもつ。

タケ亜科にはタケ・ササ類があるが、解剖学的特徴では区別できない。

3－4 考察

試料の選択方法からみて、No.37, 49～100の53点は、No.1～36, 38～48試料の中の同一遺構・同一種 (Taxa) と同じ個体である可能性が極めて大きいものと考える。したがってここでは、1号溝試料 (No.43) を除く46点について、建築材の用材など考えることにする。

タケ亜科を含め16種類が同定された。全体を通じて、クヌギ節 (クヌギと考える) の使用例が多いようにみえる(表 3-2)。このように、焼失住居址から検出された炭化材の組成では、クヌギ節やコナラ節の割合が高くなることが知られている〔例えば、埼玉県庄和町尾ヶ崎遺跡 (パリノ・サーヴェイ株式会社 1984) や群馬県渋川市中村遺跡 (パリノ・サーヴェイ株式会社 印刷中) など〕。しかし、上記のようにクスギは炭に適した材であることから、他の樹種より炭化材として残りやすいものと考えられる。重硬な材であるから、柱などに利用されたものかもしれないが、その使用頻度は、同定結果にみられるほど高くはないものと考える。住居の建築にあたっては、

同定された種を含め様々な材が用いられたものと思う。そして、強度・加工の難易・耐久性など、それぞれの材の特長を生かせるような部位に用いられたものであろう。後年の発掘調査で検出されるのは、使用された材の極く一部にすぎず、多くの材は燃え尽きてしまったものと考える。

表 3-2 建築材の使用樹種

種名※	試料数
カヤ	1
モミ属	3
ニヨウマツ	1
ヒノキ属	2
アサダ	1
カバノキ属	5
コナラ節	3
クヌギ節	18
クリ	1
ケヤキ	1
ヤマグワ	4
サクラ属	2
カエデ属	1
ケンボナシ	1
ヤブツバキ	1
タケ亜科	1
合計	46

※・省略・通称名を用いたものもある。

3-5 引用文献

パリノ・サーヴェイ株式会社 (1984) 古墳時代の樹種鑑定、「尾ヶ崎遺跡—縄文・古墳時代集落跡の調査ー」, 埼玉県庄和町・尾ヶ崎遺跡調査会, pp.159-162.

(印刷中) 材同定, 「中村遺跡」, 渋川市教育委員会.

4 種子同定

4-1 試料

試料は8遺構から検出されたもので、炭化しているものとそうでないものがあった。同定作業の便宜のため、試料にはNo.1～8の番号を付した(表 4参照)。本報文中では、試料は全てこの試料番号で表すこととする。試料は、炭化材と同じく古墳時代のものと考えられている。

4-2 方法

試料は、肉眼および双眼実体鏡で観察・同定した。No.5試料は篩別し、0.5mm以上の残渣を双眼実体鏡で観察し、同定・計数した。同時に同定種実の拡大写真図版(図版4)も作成した。

4-3 結果

同定結果を一覧表(表 4-1, 4-2)で示した。

4-4 考察

炭化種子はNo.2, 4, 6, 7, 8であり、モモまたはクリであった。両者とも食用となり、また炭化していることから当時の人々に利用されたものと考える。

一方、No.1, 3, 5試料は炭化しておらず、いずれも小型である(図版 4参照)。特にNo.5試料にはメヒシバのようにその微細な構造まで残っているものもある。したがって、これらの種子は住居の焼失の前または後に埋土したものであろう。また、これらの植物はいずれも、人里・路傍植物・耕地雑草など人間との関係が深い種または種を含む種群であり、空き地などで普通にみられるものである。発掘調査時に混入した現生のものとも考えられる。

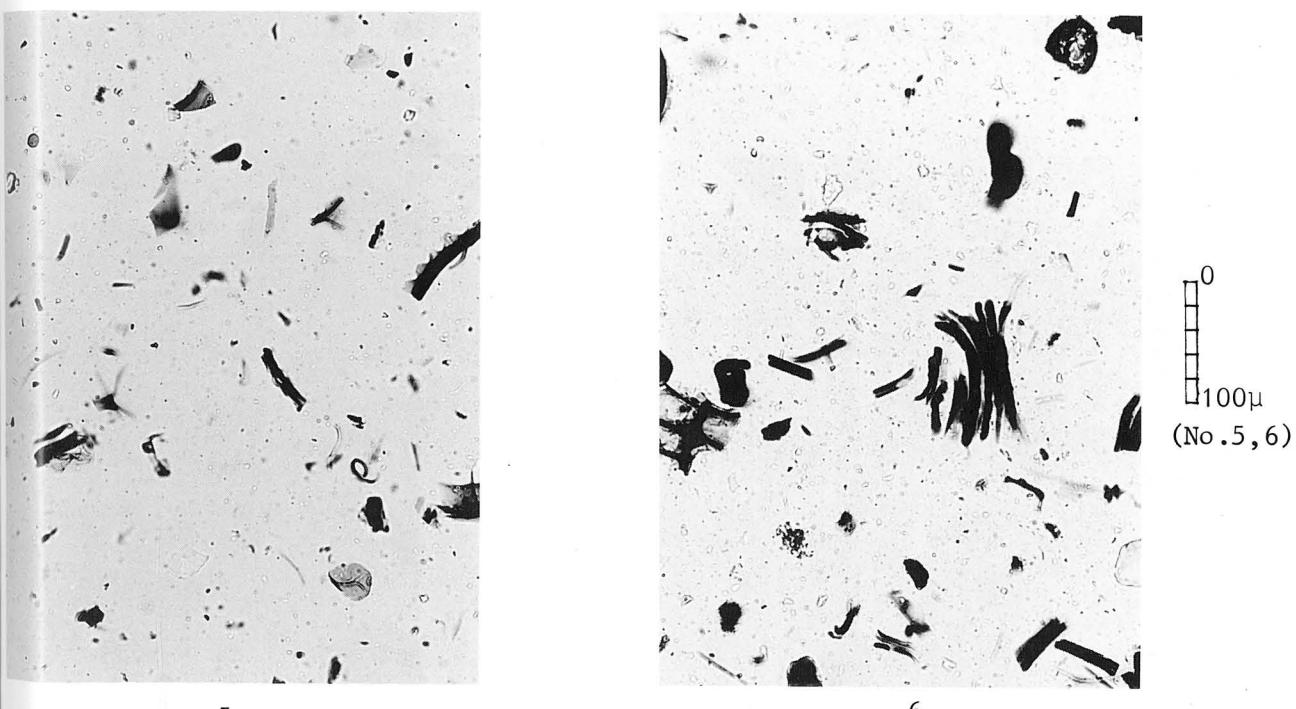
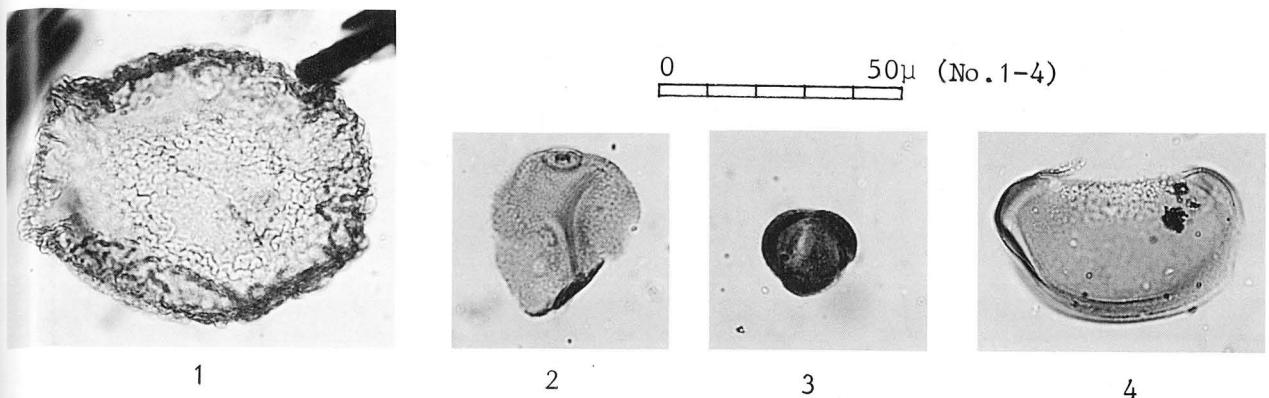
表 4-1 種子同定結果

試料番号	採取地點など	種名
1	6号住 床直	<i>Polygonum perfoliatum</i> (イシミカワ)
2	9号住 一括	<i>Prunus persica</i> (モモ)
3	10号住 床直	<i>P. perfoliatum</i>
4	28号住 炉址内	<i>Castanea crenata</i> (クリ)
6	55号住	<i>P. persica</i>
7	57号住 埋没土	<i>P. persica</i>
8	2号土壤 埋没土	<i>P. persica</i>

表 4-2 №5 (35号住土壤内) 試料同定結果

種名	個体数
<i>Digitaria adscendens</i> (メヒシバ)	63
<i>Cyperus</i> sp. (カヤツリグサ属の一種)	4
<i>Chenopodium album</i> (シロザ)	2
<i>Portulaca oleacea</i> (スペリヒュ)	10
<i>Oxalis corniculata</i> (カタバミ)	4
<i>Euphorbia</i> sp. (トウダイグサ属の一種)	2
合計	85

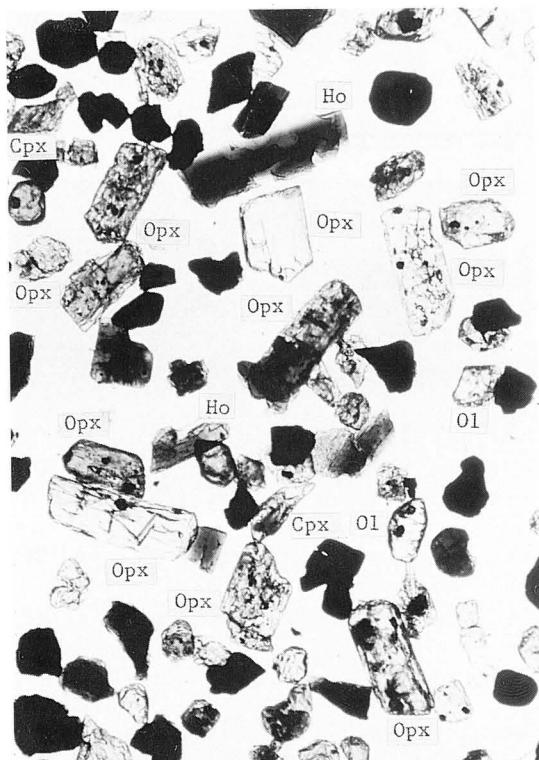
図 版



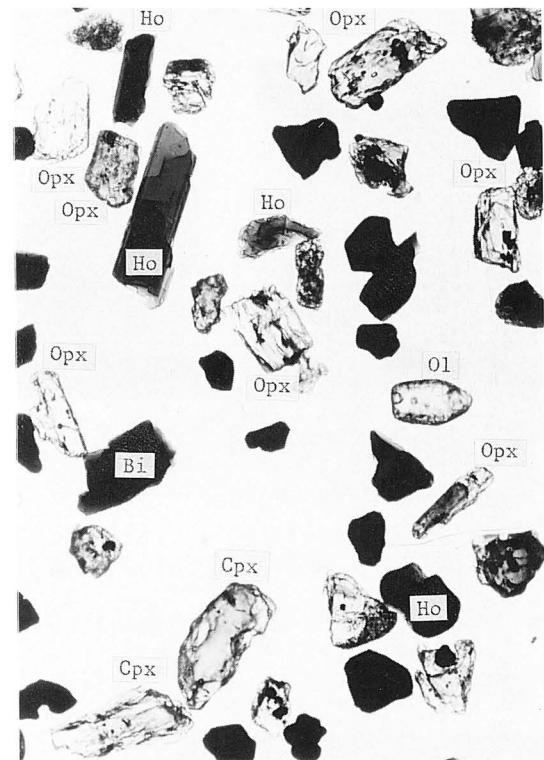
1 *Tsuga* (28号住-1). 2 *Gramineae* (28号住-1). 3 *Artemisia* (28号住-1).

4 Monolet spore (28号住-1).

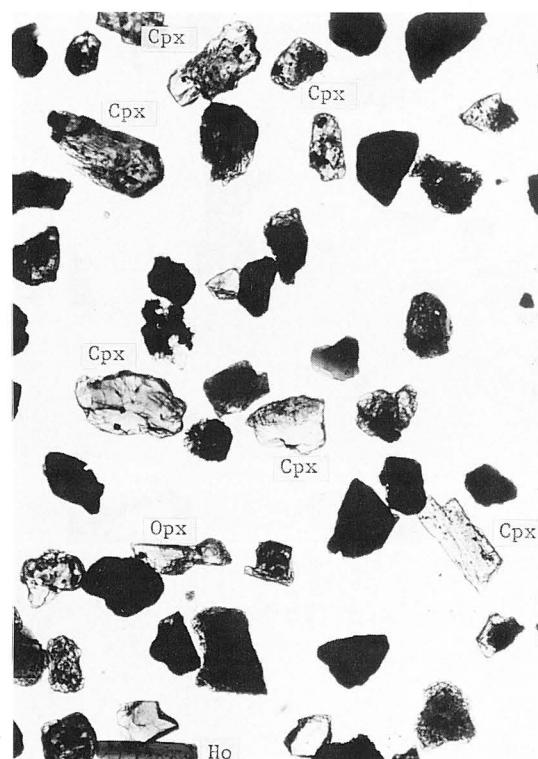
5 状況写真 (28号住-1). 6 状況写真 (41号住 -18).



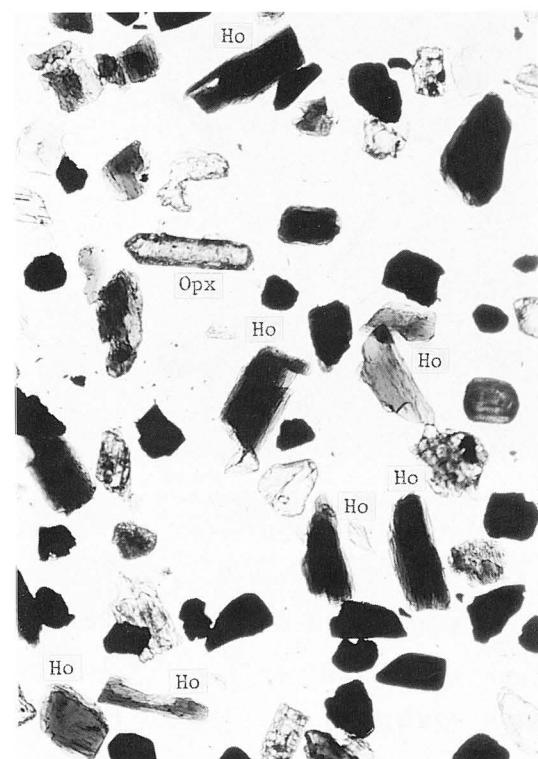
I グループ(41号住 No.15)



II グループ(19号住 No.17)



III グループ(35号住 No.21)

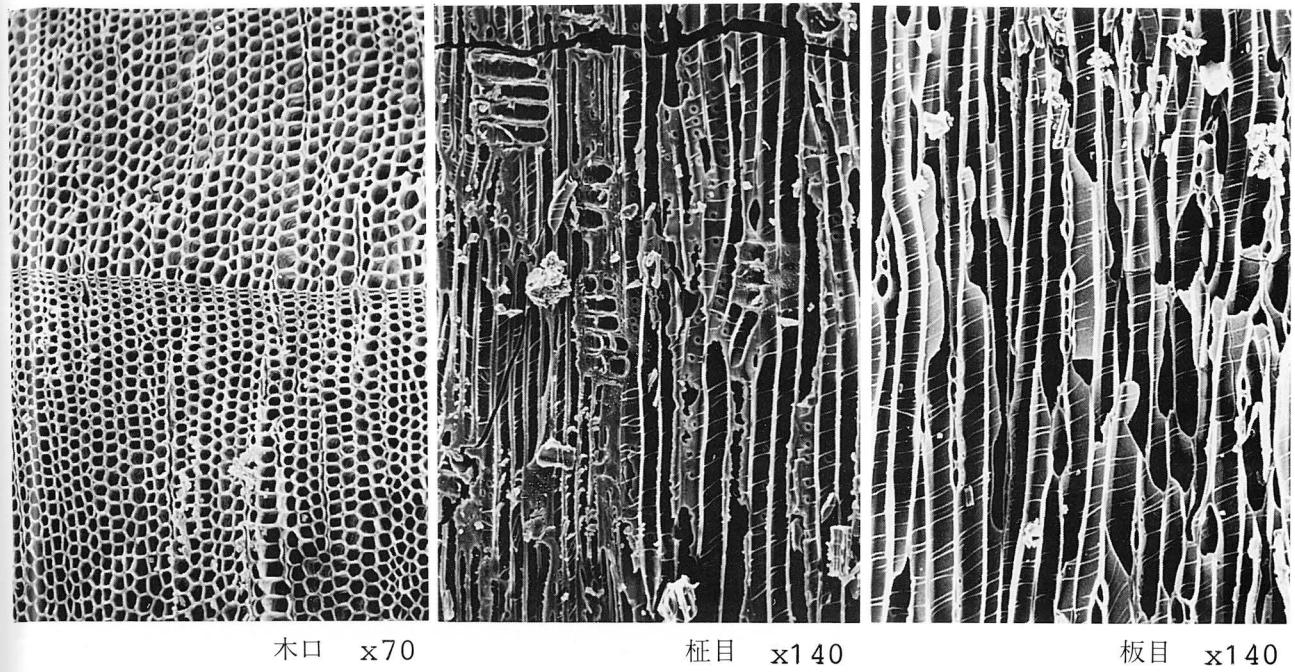


IV グループ(28号住 No.9)

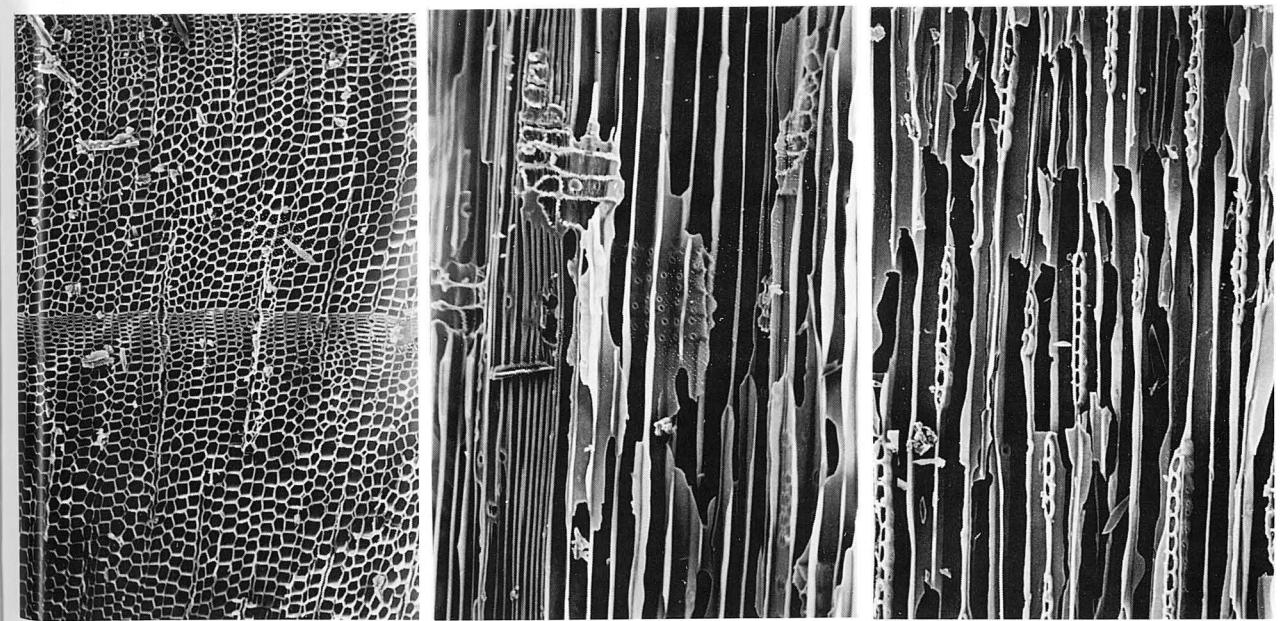
0.5mm

OI: カンラン石, Opx: 斜方輝石, Cpx: 单斜輝石, Ho: 角閃石, Bi: 黒雲母

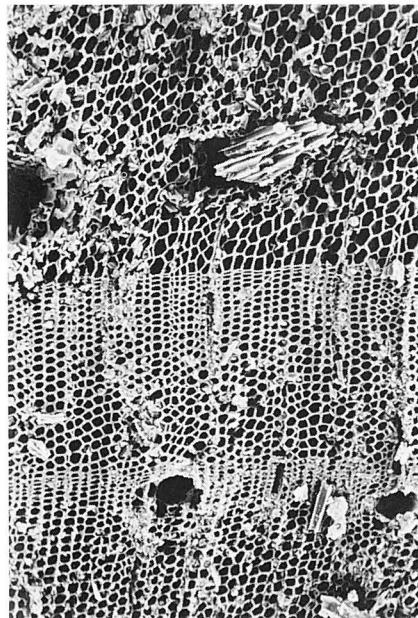
下方ポーラーのみ。



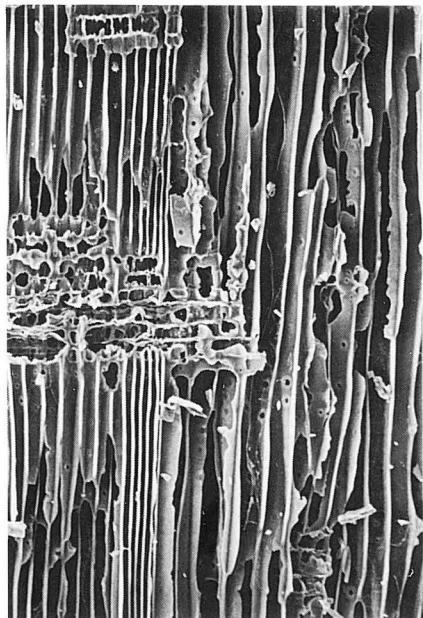
Torreya nucifera No. 16



Abies sp. No. 11



木口 x70

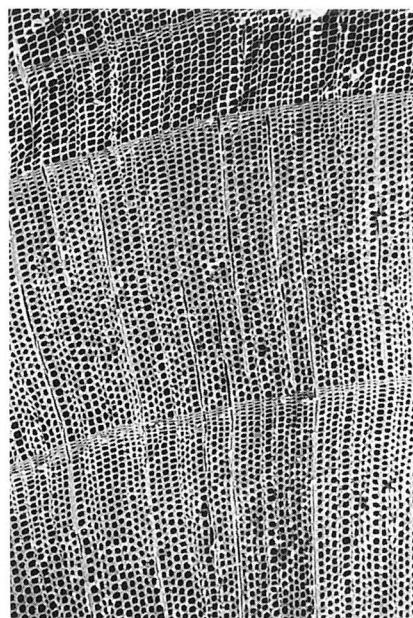


柾目 x140

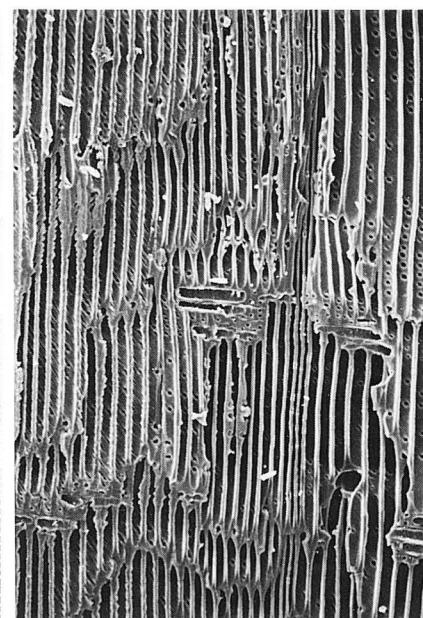


板目 x140

Pinus (subgen. *Diploxylon*) sp. No. 12



木口 x70

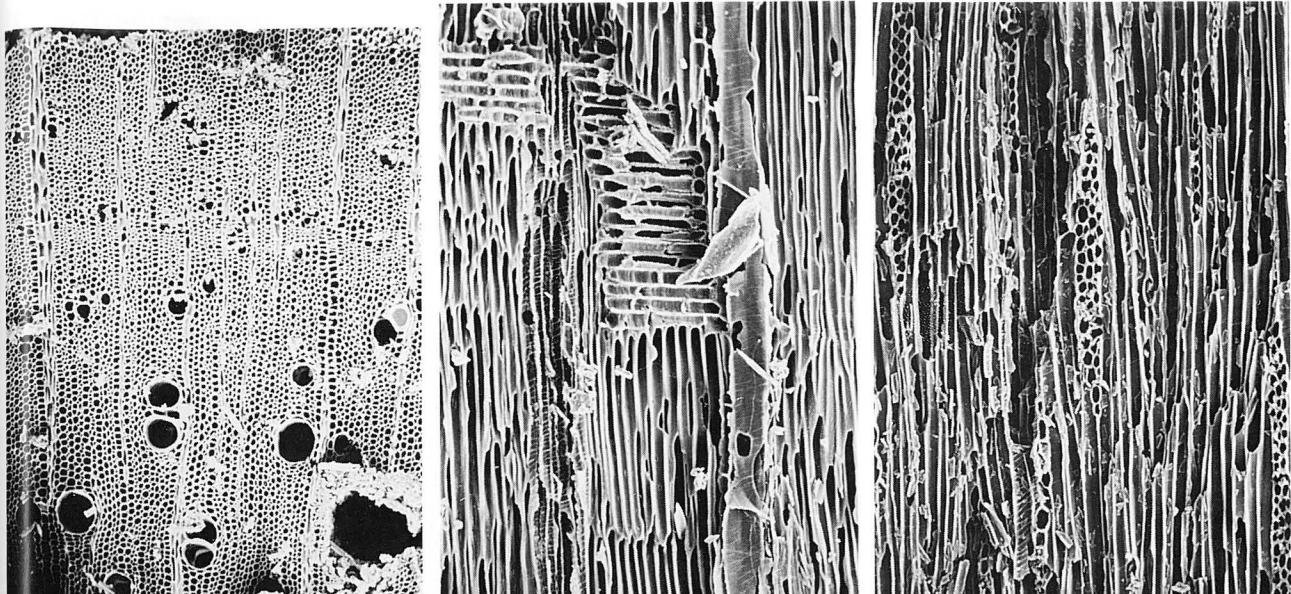


柾目 x140



板目 x140

Chamaecyparis sp. No. 32

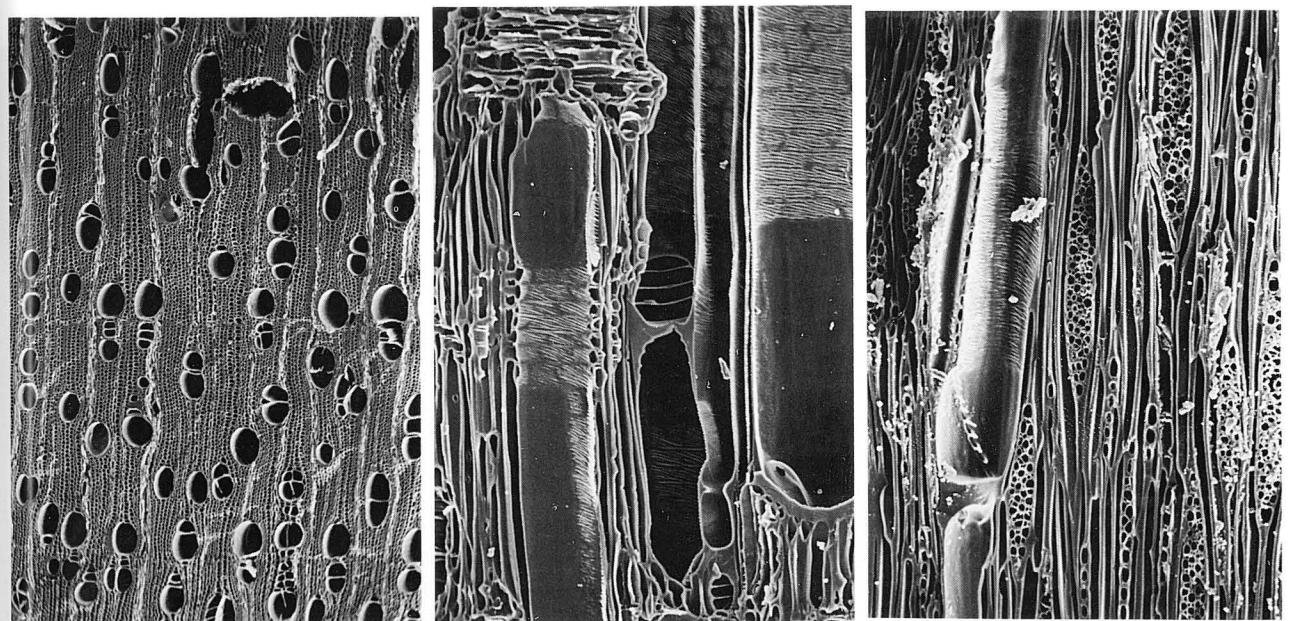


木口 x70

柾目 x140

板目 x140

Ostrya japonica No. 1

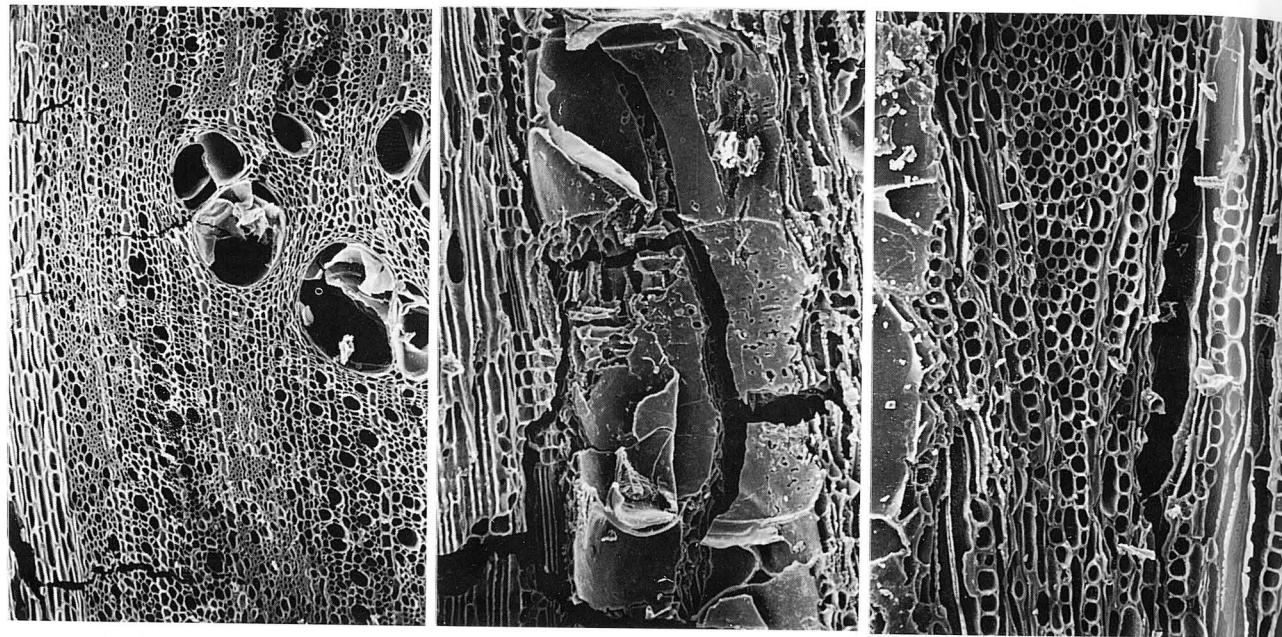


木口 x35

柾目 x140

板目 x140

Betula sp. No. 23

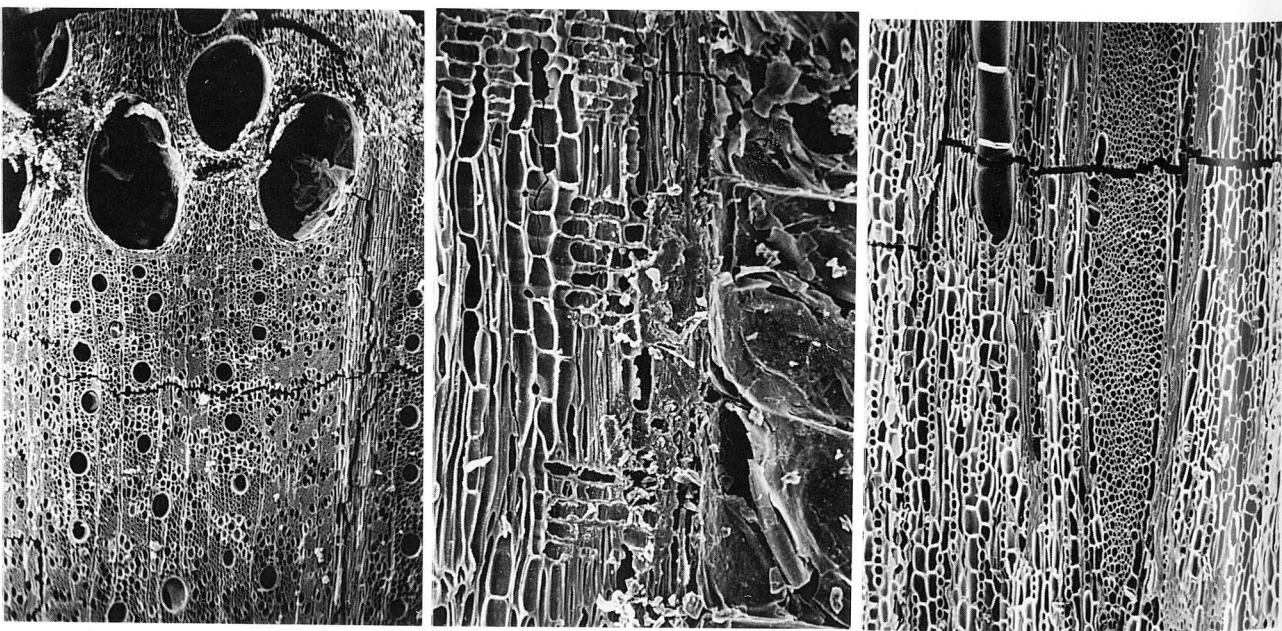


木口 x70

柾目 x140

板目 x140

Quercus (subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*) sp. No. 28

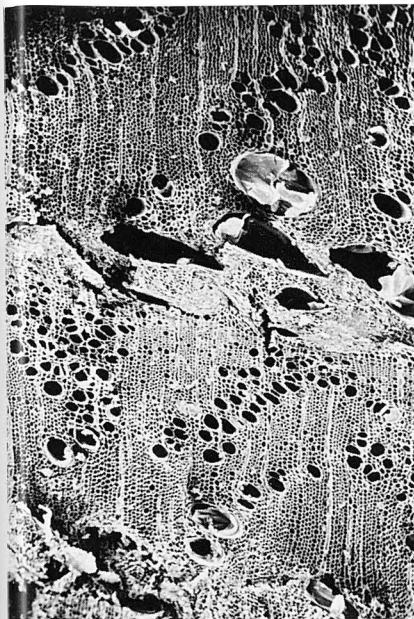


木口 x35

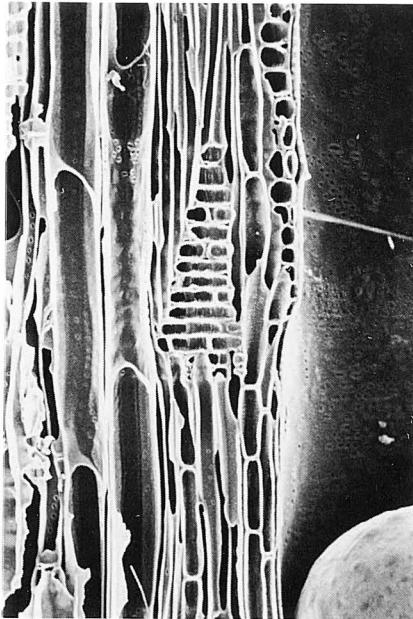
柾目 x140

板目 x140

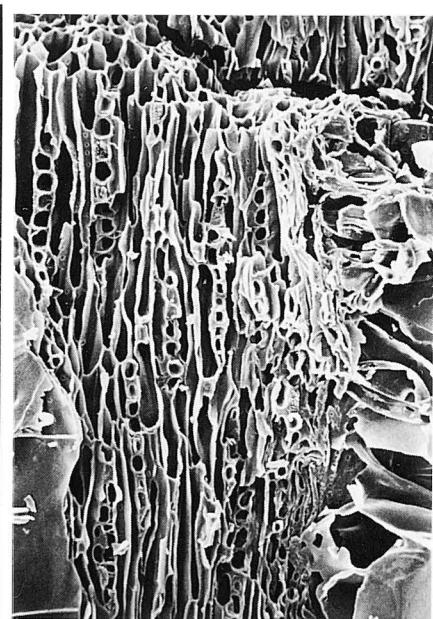
Quercus (subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) sp. No. 8



木口 x35



柾目 x140



板目 x140

Castanea crenata No. 33



木口 x70

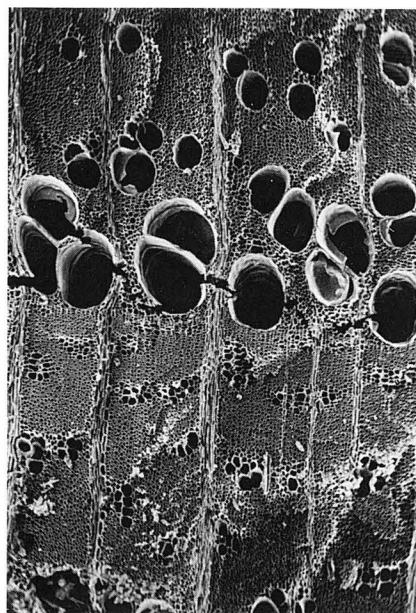


柾目 x140



板目 x140

Zelkova serrata No. 5



木口 $\times 70$

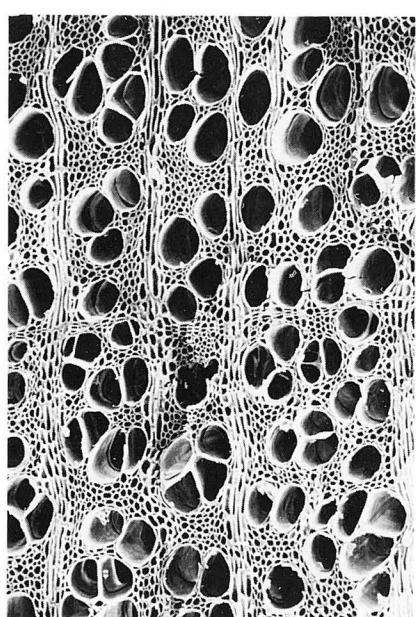


柾目 $\times 140$

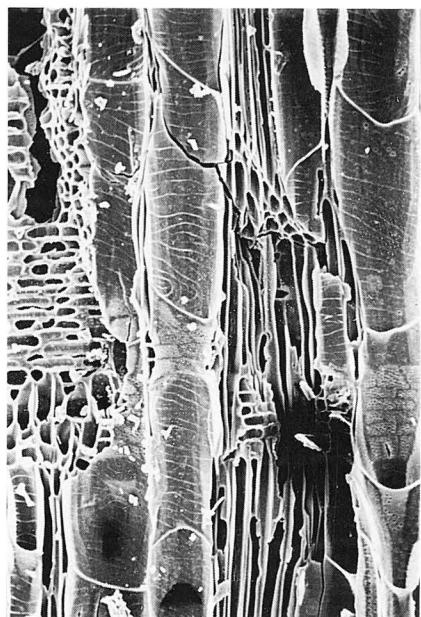


板目 $\times 140$

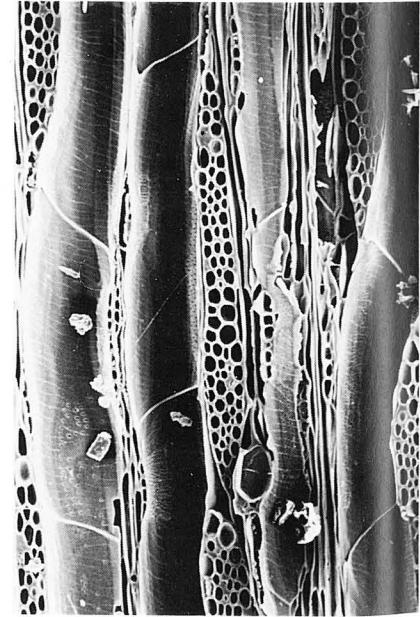
Morus bombycis No. 13



木口 $\times 70$

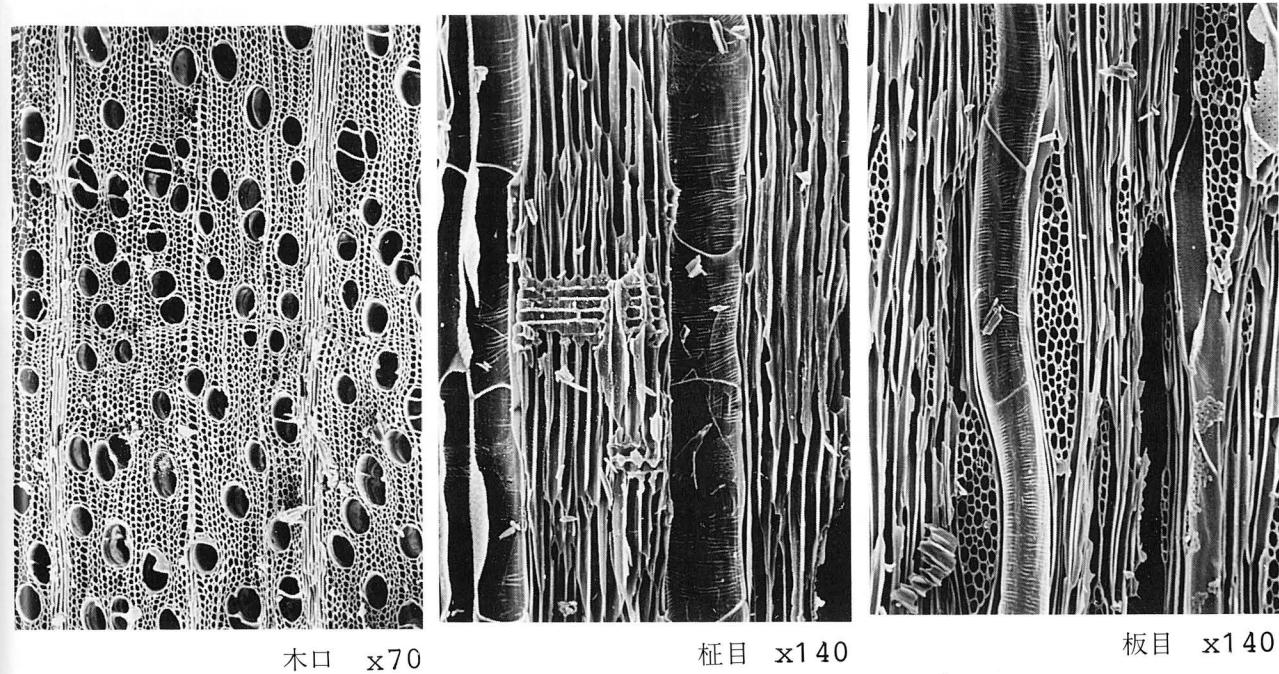


柾目 $\times 140$

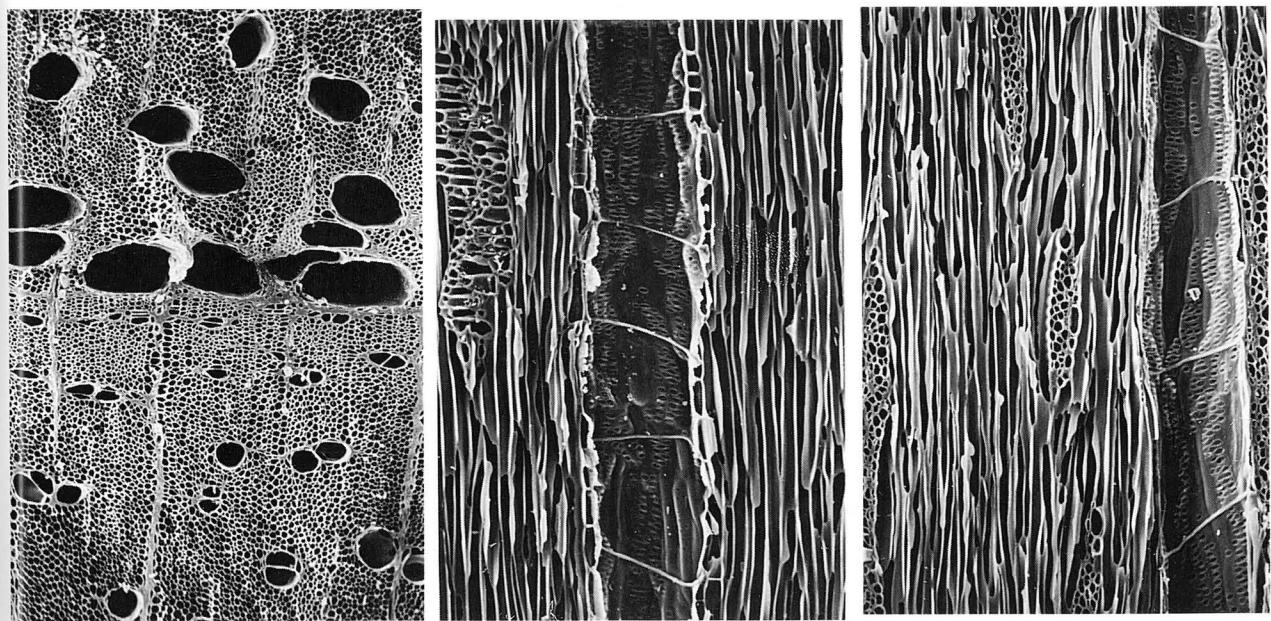


板目 $\times 140$

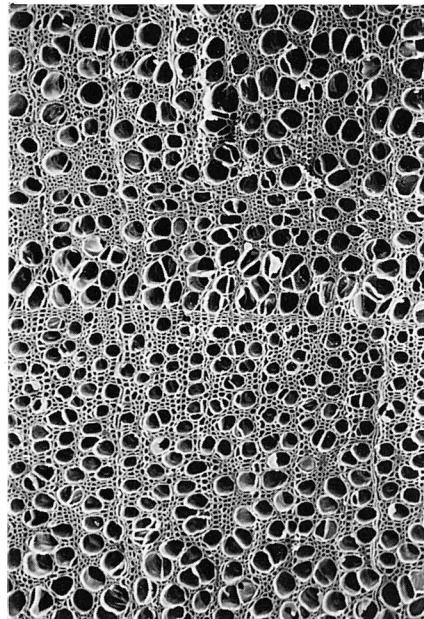
Prunus sp. No. 40



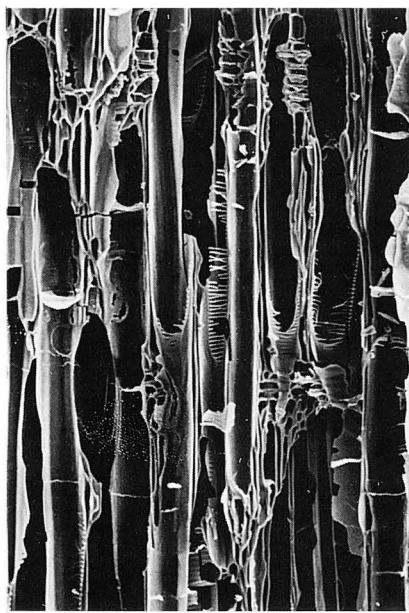
Acer sp. No. 4



Hovenia dulcis No. 6



木口 x70



柾目 x140



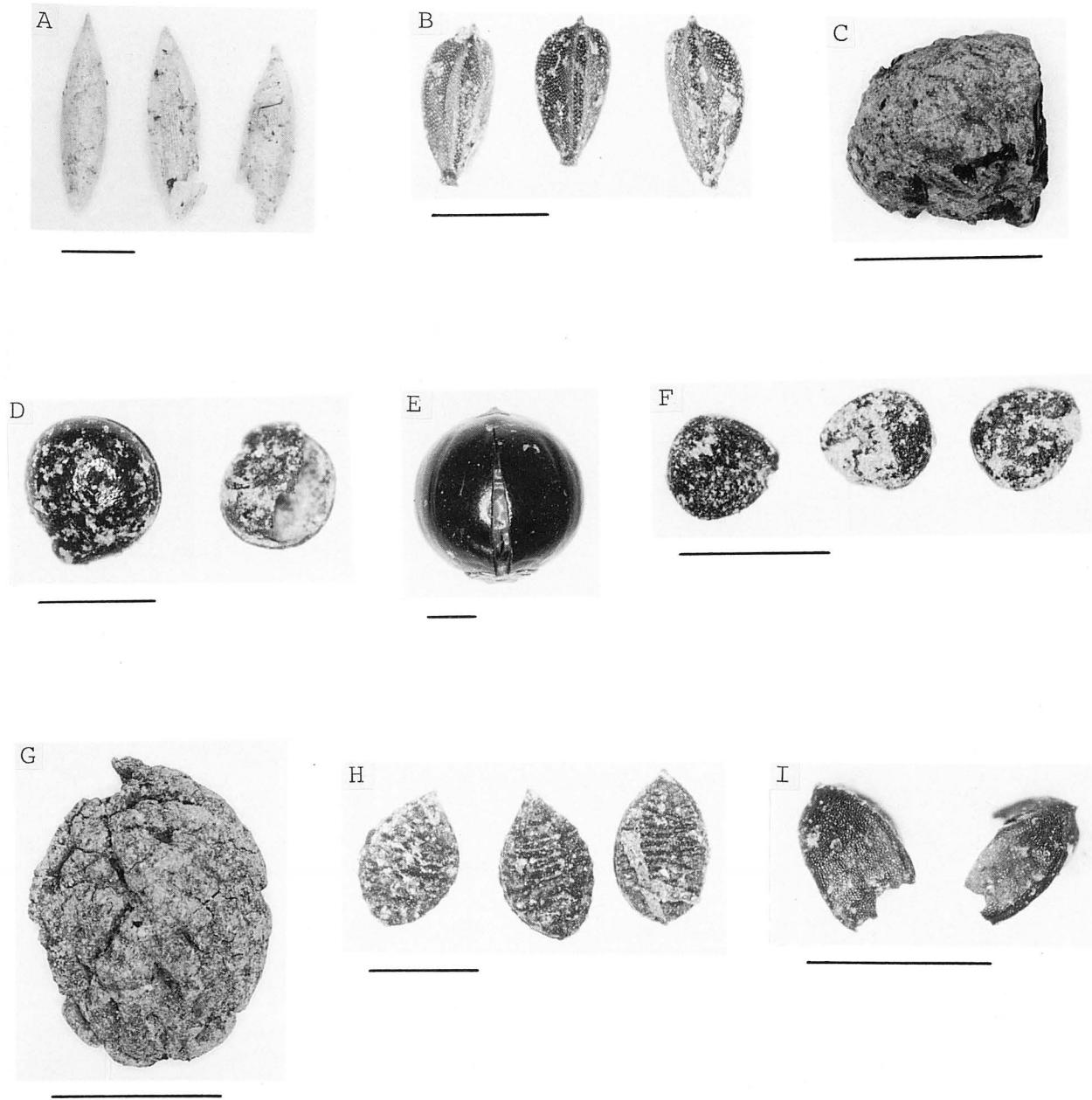
板目 x140

Camellia japonica No. 14



木口 x70

Gramineae (subfamilia Bambusoideae) sp. No. 3



図版 4

- A: *Digitaria adscendens* No. 5 B: *Cyperus* sp. No. 5
 C: *Castanea crenata* No. 4 D: *Chenopodium album* No. 5
 E: *Polygonum perifoliatum* No. 1 F: *Portulaca oleacea*
 No. 5 G: *Prunus persica* No. 6 H: *Oxalis corniculata*
 No. 5 I: *Euphorbia* sp. No. 5

スケール: C, Dは1cm, その他は1mm.

坂 井 南

—山梨県韮崎市坂井南遺跡発掘調査報告書—

昭和63年3月25日 印刷

昭和63年3月31日 発行

発行 韮崎市教育委員会

東京エレクトロン株式会社

印刷 ほおづき書籍株式会社
